

# 三寺地内遺跡群発掘調査報告

～岩瀬遺跡・金森遺跡・嶋ノ前遺跡・地蔵前遺跡～

2006（平成18）年3月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

三重県亀山市には、現在周知されている遺跡が約350箇所あります。このことは、古代から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠だと思います。

今回発掘調査しました岩瀬遺跡、金森遺跡、嶋ノ前遺跡、地蔵前遺跡は、中ノ川右岸の河岸段丘上に広がっている遺跡です。中ノ川中流域は、なかなか発掘調査の機会に恵まれず調査例の少ない地域がありました。今回は、経営体育成基盤整備事業に伴って発掘調査しました。その結果、縄文時代から室町時代にかけての人々が暮らした足跡の一端を解明できました。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

経営体育成基盤整備事業に伴い、遺跡の一部が現状変更されることになり、記録保存を図ることになりましたが、これを契機に本書が亀山市における地域史並びに三重県の歴史研究の一助となるとともに、文化財保護にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました三寺町内の皆様方をはじめ地元の関係者、及び三重県農水商工部、北勢県民局四日市農政商工部、亀山市教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成18年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



# 例　　言

1 本書は、三重県亀山市三寺町に所在する岩瀬（いわせ）遺跡・金森（かなもり）遺跡・嶋ノ前（しまのまえ）遺跡・地蔵前（じぞうまえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は、下記体制により実施した。

報告書遺跡名	調査時遺跡名+地区名	面積	調査期間	調査担当	受託者
岩瀬遺跡	岩瀬遺跡第1次調査C地区（岩瀬古墳含む）・G地区	1,407 m <sup>2</sup>	H14.7.10 ～H14.12.9	萩原義彦、五十嵐孝子 水谷隆広、瀬野弥知世	安西工業株式会社
	金森遺跡第2次調査D地区				
	岩瀬地蔵古墳F地区	225 m <sup>2</sup>	H14.7.18 ～H14.8.28	萩原義彦、五十嵐孝子 水谷隆広、瀬野弥知世	安西工業株式会社
	岩瀬遺跡第2次調査	420 m <sup>2</sup>	H15.7.22 ～H15.9.16	山口聰嗣、酒井巳紀子	技建 志登茂 (L. C.)
金森遺跡	金森遺跡第1次調査	440 m <sup>2</sup>	H14.1.10 ～H14.3.14	奥野 実、酒井巳紀子	財団法人 三重県農林水産支援センター
	金森遺跡第2次調査A・B地区	1,084 m <sup>2</sup>	H14.7.31 ～H14.12.9	萩原義彦、五十嵐孝子 水谷隆広、瀬野弥知世	安西工業株式会社
嶋ノ前遺跡	金森西遺跡E地区	1,032 m <sup>2</sup>	H14.8.29 ～H14.11.13	萩原義彦、五十嵐孝子 水谷隆広、瀬野弥知世	安西工業株式会社
	嶋ノ前遺跡第2次調査	330 m <sup>2</sup>	H15.7.22 ～H15.9.15	山口聰嗣、酒井巳紀子	技建 志登茂 (L. C.)
地蔵前遺跡	地蔵前遺跡第1次調査北・南地区	729 m <sup>2</sup>	H16.5.21 ～H16.7.23	山口聰嗣、穂積裕昌	技建 志登茂 (L. C.)
合　　計		5,667 m <sup>2</sup>		調査面積は第2表の本調査面積に対応する。	

3 本書の編集は、酒井巳紀子が、執筆は、五十嵐孝子・酒井巳紀子・竹田憲治・萩原義彦・穂積裕昌・水谷隆広・山口聰嗣が行った。遺構写真は、各調査担当者が、遺物写真は酒井が行った。文責は目次と文末にも表記した。

4 自然科学的調査として、下記の分析を行い、その成果を各一覧表などに反映させた。

金森遺跡の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ(株) 北脇達也 (第8章)

地蔵前遺跡出土木製品樹種同定 (株)パレオ・ラボ 植田弥生 (第9章)

5 図版における方位は、国土調査法による第VI系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は、西偏6°20'、真北方位は、西偏0°18'である。

6 本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。

S A : 柱列、S B : 掘立柱建物、S D : 溝、S E : 井戸、S K : 土坑、S Z : 不明遺構、

Pit : 柱穴、小穴

7 発掘調査及び本書の作成に際しては、地元亀山市教育委員会のほかに下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。

笠井賢治（伊賀市）、亀山隆（亀山市教育委員会）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、

藤澤良祐（愛知学院大学）、堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）

8 発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農水商工部より執行委任を受けて、経営体育成基盤整備事業（三寺地区）に伴って実施した。

9 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

# 本文目次

第1章 前言 .....	(萩原・竹田・酒井) .....	1
第1節 調査契機 .....	(萩原・竹田) .....	1
第2節 調査の経過 .....	(酒井) .....	1
第3節 文化財保護法等にかかる諸通知 .....	(酒井) .....	1
第2章 位置と環境 .....	(五十棲・水谷・萩原) .....	7
第1節 地理的環境 .....	7	
第2節 歴史的環境 .....	7	
第3章 岩瀬遺跡 .....	(山口・酒井) .....	10
第1節 立地 .....	(酒井) .....	10
第2節 調査の方法 .....	(酒井) .....	10
第3節 第1次調査 .....	(酒井) .....	10
第4節 第2次調査 .....	(山口・酒井) .....	36
第5節 まとめ .....	(酒井) .....	42
第4章 金森遺跡 .....	(酒井) .....	50
第1節 立地 .....	50	
第2節 調査の方法 .....	50	
第3節 第1次調査 .....	50	
第4節 第2次調査 .....	58	
第5節 まとめ .....	73	
第5章 嶋ノ前遺跡 .....	(山口・酒井) .....	78
第1節 立地 .....	(酒井) .....	78
第2節 調査の方法 .....	(酒井) .....	78
第3節 第1次調査 .....	(酒井) .....	78
第4節 第2次調査 .....	(山口・酒井) .....	82
第5節 まとめ .....	(酒井) .....	87
第6章 地蔵前遺跡 .....	(穂積・酒井) .....	90
第1節 立地 .....	(穂積) .....	90
第2節 調査の方法 .....	(穂積) .....	90
第3節 遺構 .....	(穂積・酒井) .....	91
第4節 遺物 .....	(穂積) .....	97
第5節 まとめ .....	(穂積) .....	100
第7章 範囲確認調査出土遺物 .....	(酒井) .....	106
第8章 金森遺跡の自然科学分析 .....	(北脇達也) .....	107
第9章 地蔵前遺跡出土木製品の樹種同定 .....	(植田弥生) .....	109
第10章 結語 .....	(酒井) .....	112
第1節 遺構について .....	112	
第2節 遺物について .....	112	
第3節 総括 .....	116	

## 插 図 目 次

第1図 櫛田遺跡位置図・範囲確認坑配置図	2
第2図 岩瀬・金森遺跡位置図・ 範囲確認坑配置図	3
第3図 嶋ノ前・地蔵前遺跡位置図・ 範囲確認坑配置図	4
第4図 遺跡位置図	8
第5図 G地区遺構平面図	11
第6図 G地区土層断面図	12
第7図 掘立柱建物実測図①	14
第8図 掘立柱建物実測図②	15
第9図 掘立柱建物・柱列実測図③	16
第10図 S K 4 実測図	17
第11図 出土遺物実測図①	17
第12図 出土遺物実測図②	18
第13図 F地区遺構平面図・土層断面図	20
第14図 掘立柱建物実測図	21
第15図 出土遺物実測図	21
第16図 C地区遺構平面図・土層断面図	23・24
第17図 掘立柱建物実測図	25
第18図 出土遺物実測図	25
第19図 D地区遺構平面図	28
第20図 D地区土層断面図	29
第21図 S K 73 実測図	30
第22図 掘立柱建物実測図①	30
第23図 掘立柱建物・柱列実測図②	31
第24図 掘立柱建物・柱列実測図③	32
第25図 掘立柱建物・柱列実測図④	33
第26図 出土遺物実測図①	34
第27図 出土遺物実測図②	35
第28図 2次調査区遺構平面図・土層断面図	37
第29図 掘立柱建物実測図①	38
第30図 掘立柱建物実測図②	39
第31図 S E 105 実測図	40
第32図 出土遺物実測図①	40
第33図 出土遺物実測図②	41
第34図 1次調査区・B地区遺構平面図	51
第35図 1次調査区・B地区土層断面図	52
第36図 土坑実測図	53
第37図 掘立柱建物実測図①	54
第38図 掘立柱建物実測図②	55
第39図 掘立柱建物実測図③	56
第40図 出土遺物実測図	58
第41図 掘立柱建物実測図	59
第42図 柱列実測図	60
第43図 出土遺物実測図	60
第44図 A地区遺構平面図・土層断面図	61・62
第45図 掘立柱建物実測図①	64
第46図 掘立柱建物実測図②	65
第47図 掘立柱建物実測図③	66
第48図 掘立柱建物実測図④	67
第49図 掘立柱建物実測図⑤	68
第50図 S K 103・S D 115 実測図	69
第51図 出土遺物実測図①	69
第52図 出土遺物実測図②	70
第53図 出土遺物実測図③	72
第54図 1次調査区遺構平面図・土層断面図	79・80
第55図 掘立柱建物実測図	81
第56図 2次調査区遺構平面図	83
第57図 2次調査区土層断面図	84
第58図 掘立柱建物・柱列・土坑・溝実測図	85
第59図 出土遺物実測図	86
第60図 北地区遺構平面図	91
第61図 掘立柱建物・柱列実測図	92
第62図 S E 3 実測図	92
第63図 南地区遺構平面図	94
第64図 掘立柱建物実測図①	95
第65図 掘立柱建物実測図②	96
第66図 掘立柱建物・柱列実測図③	97
第67図 出土遺物実測図①	98
第68図 出土遺物実測図②	99
第69図 出土遺物実測図③	101
第70図 出土遺物実測図	106
第71図 補正年代値の分布	108
第72図 三寺地内遺跡群中世遺構モデル図	113
第73図 三寺地内遺跡群中世存続期間	114
第74図 出土遺物グラフ	114

## 表 目 次

第1表 文化財保護法等にかかる諸通知一覧表	1	第14表 出土遺物観察表①	75
第2表 範囲確認調査経過表	5	第15表 出土遺物観察表②	76
第3表 範囲確認調査結果一覧表①	5	第16表 出土遺物観察表③	77
第4表 範囲確認調査結果一覧表②	6	第17表 遺構一覧表	88
第5表 遺構一覧表①	43	第18表 出土遺物観察表①	88
第6表 遺構一覧表②	44	第19表 出土遺物観察表②	89
第7表 出土遺物観察表①	45	第20表 遺構一覧表	103
第8表 出土遺物観察表②	46	第21表 出土遺物観察表①	103
第9表 出土遺物観察表③	47	第22表 出土遺物観察表②	104
第10表 出土遺物観察表④	48	第23表 出土遺物観察表③	105
第11表 出土遺物観察表⑤	49	第24表 出土遺物観察表	105
第12表 遺構一覧表①	73	第25表 放射性炭素年代測定結果一覧表	108
第13表 遺構一覧表②	74	第26表 樹種同定結果一覧表	110

## 写真図版目次

図版1 G地区全景(S B 24、S A 25)/ S B 12・14・19・22完掘状況	図版12 S B 154完掘状況/ S E 123/S D 115出土状況
図版2 S K 4出土状況/F地区全景(S B 45)	図版13 1次調査区全景/ S B 9・10・11・12・13完掘状況
図版3 C地区全景/S B 52 完掘状況	図版14 2次調査区上層全景(S A 113・115、S B 116)/ 2次調査区下層全景
図版4 D地区全景(S B 74・80)/ D地区全景(S A 93、S B 94)	図版15 北地区全景/北地区全景/ ほ場整備完成後 金森・岩瀬遺跡を望む/ ほ場整備完成後 地蔵前遺跡を望む
図版5 S B 84・85・87、S A 86完掘状況/ S A 93、S B 94完掘状況	図版16 南地区全景(S B 17・18・19)/ S B 20・22・25完掘状況
図版6 2次調査区全景/ S B 106・109・110完掘状況	図版17 S K 4出土遺物/ S E 105出土遺物
図版7 1次調査区全景/ S K 2 完掘状況/S K 4 完掘状況 / S K 16完掘状況/ S B 17・29完掘状況	図版18 岩瀬遺跡出土遺物
図版8 S B 26・27完掘状況/ S B 20・25完掘状況	図版19 岩瀬遺跡出土遺物
図版9 B地区全景/S B 132・133・135、S A 134完掘状況	図版20 岩瀬・金森遺跡出土遺物
図版10 A地区全景/A地区全景	図版21 金森・嶋ノ前・地蔵前遺跡出土遺物
図版11 S B 140完掘状況/ S B 150、S K 111完掘状況	図版22 地蔵前遺跡出土遺物

# 第1章 前 言

## 第1節 調査契機

今回の調査対象地は、亀山市三寺町の経営体育成基盤整備事業に伴うものである。この事業地域は、広範囲に及び岩瀬遺跡（亀山市遺跡番号130）・岩瀬古墳（同185）・岩瀬地蔵古墳（同186）・金森遺跡（同184）・嶋ノ前遺跡（新発見）・地蔵前遺跡（同312）・櫛田遺跡（同311）と複数の遺跡にかかる。そのため、平成12年度に約250箇所において試掘坑とトレンチを掘削し、それぞれの遺跡の範囲確認調査を行った。

その結果、金森遺跡では溝・柱穴・土坑等を、岩

瀬遺跡や金森西（嶋ノ前）遺跡においても同様の遺構を確認した。また、岩瀬古墳の各トレンチでは柱穴を、岩瀬地蔵古墳の各トレンチでは溝を確認した。

その結果を受けて、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センターでは、三重県農水商工部と事業地内にある埋蔵文化財保存のための協議を行った。その結果、保存が不可能となる部分について記録保存のための発掘調査を平成13年度から16年度に行うことになった。各年度での発掘調査遺跡および調査面積、体制は例言を参照されたい。（萩原・竹田）

## 第2節 調査の経過

### （1）調査経過概要

調査経過概要については、例言の調査体制一覧表及び第2表を参照されたい。

### （2）発掘調査の方法

発掘調査の方法については、各章の第2節に記述しているので、そちらを参照されたい。（酒井）

## 第3節 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法にかかる諸通知は、以下第1表によっ

て行っている。

（酒井）

文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項 (三重県教育長宛)	文化財保護法第58条の2第1項 (三重県教育長宛)	遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (亀山警察署長宛)
平成13年8月8日付北農第6143号	平成14年1月15日付教理第301号	平成14年3月28日付教ス生第8-26号 (三重県教育長宛) 平成14年3月28日付教ス生第8-27号 (三重県埋蔵文化財センター所長宛)
平成14年5月29日付農商第13-173-1号	平成14年7月1日付教理第98号	平成14年12月27日付教理第8-6号 (三重県教育長宛) 平成15年1月6日付教委第12-6-7号 (三重県埋蔵文化財センター所長宛)
平成15年6月12日付農商第13-220号	平成15年7月23日付教理第121号	平成15年10月28日付教理第7-2号 (三重県教育長宛) 平成15年10月28日付教委第12-9-1号 (三重県埋蔵文化財センター所長宛)
平成16年5月24日付教理第82号		平成16年8月16日付教理第4-2号 (三重県教育長宛) 平成16年8月30日付教委第12-4-17号 (三重県埋蔵文化財センター所長宛)

第1表 文化財保護法等にかかる諸通知一覧表



第1図 櫛田遺跡位置図・範囲確認坑配置図 (1:2,500)



第2図 岩瀬・金森遺跡位置図・範囲確認坑配置図（1:2,500）



第3図 嶋ノ前・地蔵前遺跡位置図・範囲確認坑配置図 (1:2,500)

報告書遺跡名	調査時遺跡名	範囲確認		要本調査		調査期間	調査担当	文書番号
		対象面積	調査	保存	本調査			
櫛田遺跡	櫛田遺跡	67,500 m <sup>2</sup>	365 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	H12.12.13 ～H12.12.15	中川 明	H12.12.27付 第309号
岩瀬遺跡	岩瀬遺跡	255,000 m <sup>2</sup>	1,548 m <sup>2</sup>	97,483 m <sup>2</sup>	5,667 m <sup>2</sup>	H13.1.29 ～H13.2.28  H15.2.26 H15.3.3	宮田勝功  野原宏司	H13.3.22付 第397号  H15.3.11付 第381号
	岩瀬古墳							
	岩瀬地蔵古墳							
金森遺跡	金森遺跡							
嶋ノ前遺跡	(仮) 金森西遺跡							
地蔵前遺跡	地蔵前遺跡							

第2表 範囲確認調査経過表

平成12年度 櫛田遺跡範囲確認調査結果一覧表

範囲確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺構	遺物	備考
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18	60	流路？	山茶椀片		
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25		溝？	陶器片		
26					
27					
28					
29					
30					
31					
32					
33					
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40					
41					
42					
43					
44					
45					
46					
47					
48		30	溝、ピット		
49					
50					
51	20	40	溝	山茶椀	
52					
53					
54					
55	35	70	ピット	須恵器	
56		25	ピット	山茶椀	
57					
58	30	55	溝、ピット	土師器、山茶椀	
59	30	50	溝、ピット		
60	25	40	ピット	土師器皿	
61					
62		25	土坑、溝		
63		25	ピット	土師器皿	
64					
65				土師器皿	
66		25	ピット		
67					
68					
69					
70					
71					
72					
73					
74					
75					
76					
77					

平成12年度 岩瀬・地蔵前・金森遺跡範囲確認調査結果一覧表

範囲確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺構	遺物	備考
1		20	ピット		
2					
3					
4					
5	25	ピット			
6					
7	20	ピット	土師器		
8	20	ピット	土師器甕、須恵器甕		
9					
10	25	45	ピット	土師器、山茶椀	
11		20	ピット		
12					
13					
14	45	落ち込み			
15	25	55	土坑	土師器鍋、山茶椀	
16					
17					

第3表 範囲確認調査結果一覧表①

範囲 確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺構	遺 物	備 考
78					
79					
80					
81					
82					
83				土師器、天目茶碗	
84					
85					
86					
87					
88					
89		25	ビット	土師器鍋	
90		22	ビット		
91					
92					
93				須恵器	
94					
95					
96					
97					
98					
99					
100					
101					
102		25	溝、ビット		
103					
104		25	ビット		
105	40	60	溝	土師器	
106					
107					
108					
109					
110					
111					
112					
113					
114					
115					
116		20	落ち込み	土師器、山茶碗	
117	18	60	落ち込み	土師器	
118	25			土師器甕	
119	18			土師器	
120					
121		30	溝	土師器、山茶碗	
122					
123	35	60	ビット	土師器、山皿、山茶碗	
124					
125		37	土坑	土師器鍋	
126					
127					
128		30	土坑、溝		
129					
130					
131					
132					
133					
134		27	溝		
135		25	ビット	山茶碗	
136					
137		40	落ち込み	土師器、山茶碗	
138					
139					
140					
141					
142				山茶碗	
143					
144					
145					
146					
147					
148					
149					
150					
151	50	60	土坑	山茶碗	
152	55	90	礫溝	清郷型鍋	
153		20	礫溝		
154					
155					
156					
157					
158	27	45	ビット	土師器	
159					
160					
161					
162					
163					
164					
165					
166					

範囲 確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺 構	遺 物	備 考
167					
168					
169				山茶碗	
170					
171					
172					
173					
174					
175					
176					
177					
178					
179					
180					
181					
182					
183					
184					
185				土師器皿	
186					
187	25	28	溝	土師器皿	
188					
189	20	35	ビット		
190					
191		30	土坑、溝		
192					
193	25	40	溝	土師器鍋、山皿	
194		15	溝、ビット		
195	15	40	ビット	須恵器、山茶碗	
196					
197					
198					
199				山茶碗	
200	25	45	溝	土師器	
201		20	土坑、溝、ビット		
202	25	50	溝	土師器小皿	
203					
204		25	溝		耕作溝か
205		55	落ち込み		
206		30	溝	土師器鍋	
207		20	溝、ビット		
208		15	溝、ビット	土師器、須恵器	
209		15	溝、ビット		
210		20	溝		
211		15	土坑		
212					
213		15	溝、ビット	磁器	

平成12年度 岩瀬古墳範囲確認調査結果一覧表

範囲 確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺 構	遺 物	備 考
Aトレンチ				土師器皿、山茶碗、常滑鉢	
Bトレンチ				山茶碗、磁器	
Cトレンチ		20	溝、ビット	土師器皿、山茶碗	
Dトレンチ				土師器、山茶碗	

平成12年度 岩瀬地蔵古墳範囲確認調査結果一覧表

範囲 確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺 構	遺 物	備 考
Aトレンチ		22	溝		
Bトレンチ		25	溝		
Cトレンチ		28	溝	山茶碗、常滑鉢	
Dトレンチ				山茶碗	

平成15年度 岩瀬・地蔵前・金森遺跡範囲確認調査結果一覧表

範囲 確認坑 No.	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の 深さ(cm)	遺 構	遺 物	備 考
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7	18~20	35~50		土師器、山皿、山茶碗	
8		18		土師器、山皿、山茶碗	
9	23	36	溝	土師器、山茶碗	
10					
11					
12		40	溝、ビット	土師器、須恵器杯	
13		20	溝	土師器	
14		10~44	溝	土師器	

第4表 範囲確認調査結果一覧表②

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

岩瀬遺跡(1)・岩瀬古墳(2)・岩瀬地蔵古墳(3)・金森遺跡(4)・嶋ノ前遺跡(5)・地蔵前遺跡(6)は、三重県亀山市三寺町に所在する。

三重県は、西日本の東端に位置し、東海地方とも近畿地方とも呼ばれている。当県は、紀伊半島の東部にあって南北に長く、旧国名では伊賀国と伊勢国・志摩国さらに紀伊国の一一部を含んでいる。旧伊勢国は、風土的に南北3地域に分かれ、それぞれ北勢・中勢・南勢と呼ばれている。対象地の所在する亀山市は北勢地方の南端に位置し、行政区区分でみると東側は鈴鹿市に南側は津市に北側と西側は鈴鹿山脈を挟んで滋賀県と接している。

亀山市の自然環境は、西北境に伊吹山地や鈴鹿山脈と西南境に布引山地が連なり、この両山系の湾曲した両辺の延長線上に囲まれている。また、これら両山系の合一する地点の土地が最も高く、東南に至るにしたがい次第に低下している。この傾斜にしたがって流下するのが鈴鹿川である。本流は両山系の合一地点より発し、南の崖に沿って流れている。流下する間に原地盤を浸食して渓谷を作り、その出口には各扇状地を形成している。その扇端部は、沿岸

に沖積層を作り海岸地帯に続いている。当市は、この鈴鹿川の中流域にあり河岸段丘が発達している。

もう一方の加太川・鈴鹿川以南は錫杖岳(標高677m)から急落下する山岳地帯が低下して亀山市(旧関町)萩原、津市(旧芸濃町)楠原・椋本より台地状を呈している。亀山市木下・山下・楠平尾・阿野田・管内・田茂・安知本・三寺・中の庄・下の庄を経て洪積層が深く椋本あたりまで侵入する。中ノ川はこの台地を縦断し、ほぼ亀山市と津市を分っている。この台地群は、第三紀層に属してその上を赤土層が覆っている。そのうち河川によって浸食をうけた谷間は基盤である水性粘板岩の分解により生じた粘土質の土壤で覆われている。

中ノ川そのものは錫杖岳の加太谷より発し、南麓に沿って流下する。南部を浸食して昼生谷の一地域を作っている。さらには諸町(昼生庄)を通り鈴鹿市磯山の南において伊勢湾に注いでいる。

発掘調査地のある三寺町は、亀山市のほぼ南側に位置し、中ノ川の上流域から中流域にかけての右岸に所在する。東側は田茂町の東に接し、昼生谷はこの辺りから東方に向けて扇状に広がる。

### 第2節 歴史的環境

調査対象遺跡の所在する地域は昼生地区と呼ばれる。地名の由来は、蛭が多い土地であったことから、ひびる(蛭谷)谷から昼生(ひるお)になったといわれている。

亀山市域内の遺跡分布は、鈴鹿川水系に多数の遺跡が集中している。それに対して中ノ川水系はやや遺跡が少ない。やはり鈴鹿川に沿う東海道は、古代より東西を結ぶ幹線として大きな役割を果たし、交通の要地として発展してきた鈴鹿川流域に対し、中ノ川流域が主要道を持たず河川間際まで段丘が迫り、ほとんど平野部を持たないという地理的条件がこの地域の歴史や発展に大きな影響を与えてきたと考えられる。さらに、中ノ川水系における発掘調査例は少なく、とりわけ上流域は不明な点も多い。

しかしながら、今後の調査によっては新たな発見、成果及び展開が期待される地域もある。以下、中ノ川水系に沿って各時代の遺跡を概観していきたい。

旧石器・縄文・弥生時代についてみてみると調査地周辺域では、ほとんど確認されていない。現在、弥生時代とみられる合生遺跡(7)がある。工場建設時に多数の土器が出土したと言われているが、その大半は失われており遺跡の性格など不明な点を多く残している。

古墳時代になると、いくつかの遺跡が確認されるようになる。調査地域の南側の丘陵上に鹿丸古墳(8)、中ノ川右岸の丘陵上に東藏瀬古古墳群(9)、隨京古墳(10)、志田尾古墳(11)があり、径約10mを越える程度の円墳である。いずれも小規模なもの



1 岩瀬遺跡	4 金森遺跡	7 合生遺跡	10 隨京古墳	13 光於堂遺跡	16 下之庄B遺跡
2 岩瀬古墳	5 鳴ノ前遺跡	8 鹿丸古墳	11 志田尾古墳	14 北山遺跡	17 田茂遺跡
3 岩瀬地藏古墳	6 地蔵前遺跡	9 東藏瀬古古墳群	12 櫛田遺跡	15 下之庄A遺跡	

第4図 遺跡位置図 (1:25,000) [国土地理院地形図「亀山」「椋本」]

のばかりである。

また、集落跡と判断できそうな遺跡についてみてみると中ノ川中流から櫛田遺跡（12）、光於堂遺跡（13）、北山遺跡（14）、下之庄A遺跡（15）、下之庄B遺跡（16）などが点在している。北山遺跡は、すでに消滅しているが『下之庄考古誌考』にこの遺跡についての記録があり、優良な資料をとどめている。

奈良・平安時代において、この地域は鈴鹿郡あるいは奄芸郡のいずれかに属していたと考えられる。亀山市域で官衙に関連する遺跡は、やや不明瞭である。この時代の周辺遺跡には、田茂遺跡（17）、櫛田遺跡、光於堂遺跡、下之庄A遺跡、下之庄B遺跡などがある。特に田茂遺跡からは円面硯が出土している。日常的に文字を使用する有力な階層の存在が想像される。奈良時代から平安時代にかけて私有地である荘園が増加し、律令制度は次第に崩壊していく。『吾妻鏡』文治3年（1188）の条に昼生庄が平氏与党没官領であったと記されており、少なくともこれ以前は平氏一門の支配地であったようである。また、伊勢神宮領でもあり、この時期の荘園によく見られるように、荘官である在地勢力と寄進を受けた荘園領主である伊勢神宮による重層的な支配が行われていたとも考えられる。

鎌倉・室町時代の周辺遺跡には、櫛田遺跡、下之庄A遺跡、下之庄B遺跡、光於堂遺跡などがある。光於堂遺跡では、昭和63年に発掘調査が行われ、掘立柱建物が確認されており、緑釉陶器・白磁・青磁

#### [参考文献]

- ・『亀山地方郷土史』第1集～第3集（三重県郷土資料刊行会、1970年）
- ・『三重県史』資料編 近世1 別冊 天保郷帳（三重県教育委員会、1993年）
- ・『亀山のあゆみ』（亀山市、1995年）
- ・『田茂遺跡調査概要』（亀山市・三重大学歴史研究会、1978年）
- ・鈴木敏雄「三重縣鈴鹿郡晝生村大字下之庄字北山考古誌」

などが出土している。

また、安知本上田遺跡では、平成9年に発掘調査が行われ、遺構・遺物が確認されている。

当遺跡群の周辺に存在したとみられる昼生庄は、当初西園寺家が有していたが、文永年間（1264～75）に中御門家に譲られる。正長元年（1428）7月、皇位継承にかかる対立から伊勢国司北畠満雅が挙兵し、これに関氏も加わったが、翌年3月の戦に敗れ、昼生庄も没収されたとある。このことから、これより以前、昼生庄は関氏の支配する領域であったと考えられる。この後、再び関氏の支配域に復し、元亀4年（1573）に関盛信が織田信長により近江日野に追放されるまで、その支配が続いたようである。また、本来の荘園領主である中御門家との関係やその後の経緯なども不明である。

江戸時代において当地は元和元年（1615）に津藩領（藤堂氏）となる。寛永9年（1632）に久居藩が成立すると久居藩領となり、明治維新までその支配が続くこととなる。

天保5年（1834）の「天保郷帳」には、当地にかかる村別石高として、以下のように記されている。江戸期を通じて典型的な純農村であったようである。

- 一、高武百壱拾四石壱八升三合 田茂村
- 一、高千百五拾壹石弐斗壱升壱合 三寺村
- 一、高千九百三石二斗六升七合 下ノ庄村
- 一、高百參拾八石四斗七升 下ノ庄無里

（五十棲・水谷・萩原）

（『三重県考古誌考』鈴鹿郡亀山町26巻、1927年）

- ・『光於堂遺跡』（亀山市教育委員会、1989年）
- ・山田猛・森川幸雄・岸田早苗『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）
- ・清水政之・坂倉一光『北条畠田遺跡・安知本上田遺跡・曾原堀之内遺跡・花ノ木遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）
- ・『国史大系第32巻吾妻鏡前篇』（吉川弘文館、1964年）

# 第3章 岩瀬遺跡

## 第1節 立地

岩瀬遺跡は、三寺町向井から瀬田にかけて東西560m、南北370m<sup>①</sup>の範囲に広がる遺跡である。平成12年度の範囲確認調査で、遺跡の範囲がさらに西へ広がることが確認されている（第2図参照）。調

査前の標高は約32.2～36.7mで、西に向かって低くなり、現況は水田である。河岸段丘にあたり、開墾及び用水池造成の際に土取りを受けて旧地形を逸している。

（酒井）

## 第2節 調査の方法

**調査区の設定** 今回の調査では、各調査区の地区名を任意で付けた。また、各調査区を4m四方の枠目で区切ることによって小地区を設定した。1次調査G地区では、西からアルファベット、南から数字を付け、枠目の南西隅の交点をその地区の符号とした。C・F地区では、東から数字、北からアルファベットを付け、枠目の北東隅の交点をその地区の符号とした。D地区では、西から数字を付け、北からアルファベットを付け、北西隅の交点をその地区の符号とした。2次調査では、西からアルファベット、北から数字を付け、枠目の北西隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は、調査区ごとに行い、国土座標軸とは無関係である。

**表土除去** 包含層より上位は、重機（バックホー）を用い、表土除去を行った。

**検出・掘削** 包含層及び遺構の検出・掘削は人力で行った。1次調査では、すべての柱穴を断ち割りしている。

**遺構カード** 小地区を単位として1/40を作成し、

略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物が出土した場合には、付与した遺構番号も記録した。

**遺構番号の付与** 遺構番号は、溝などの遺構は調査区ごとに1から、柱穴については小地区ごとに通し番号を付与した。今回の報告にあたっては、1次調査では1から、2次調査では101から遺構番号を付与した。遺構番号の詳細なデータは、遺構一覧表（第5～6表）を参照されたい。

**実測** 調査区全体の遺構実測は、手描きにより1/20で平面図を作成した。また、遺物出土状況図については個別に1/10の実測図を作成した。

**遺構写真** 遺構写真は基本的に4×5インチ判もしくは6×9判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助的に、35mm判白黒ネガ及びカラーリバーサルフィルムも使用した。

**遺物写真** 報告書掲載遺物から任意に選択し、4×5インチ判、プロニー版白黒ネガで撮影した。

（酒井）

## 第3節 第1次調査

### 第1次調査

報告にあたって、調査時の地区名が順不同であったため、アルファベット順ではなく、あらたに東側から順に遺構番号を付与した。以下、調査時の地区名を残したままで報告する。

#### 1 G地区

##### （1）遺構

G地区では、鎌倉～室町時代を中心とした掘立柱建物・土坑・井戸・溝などを検出した。基本層序は、第6図の第1層耕作土、第7層灰色シルト細砂、第

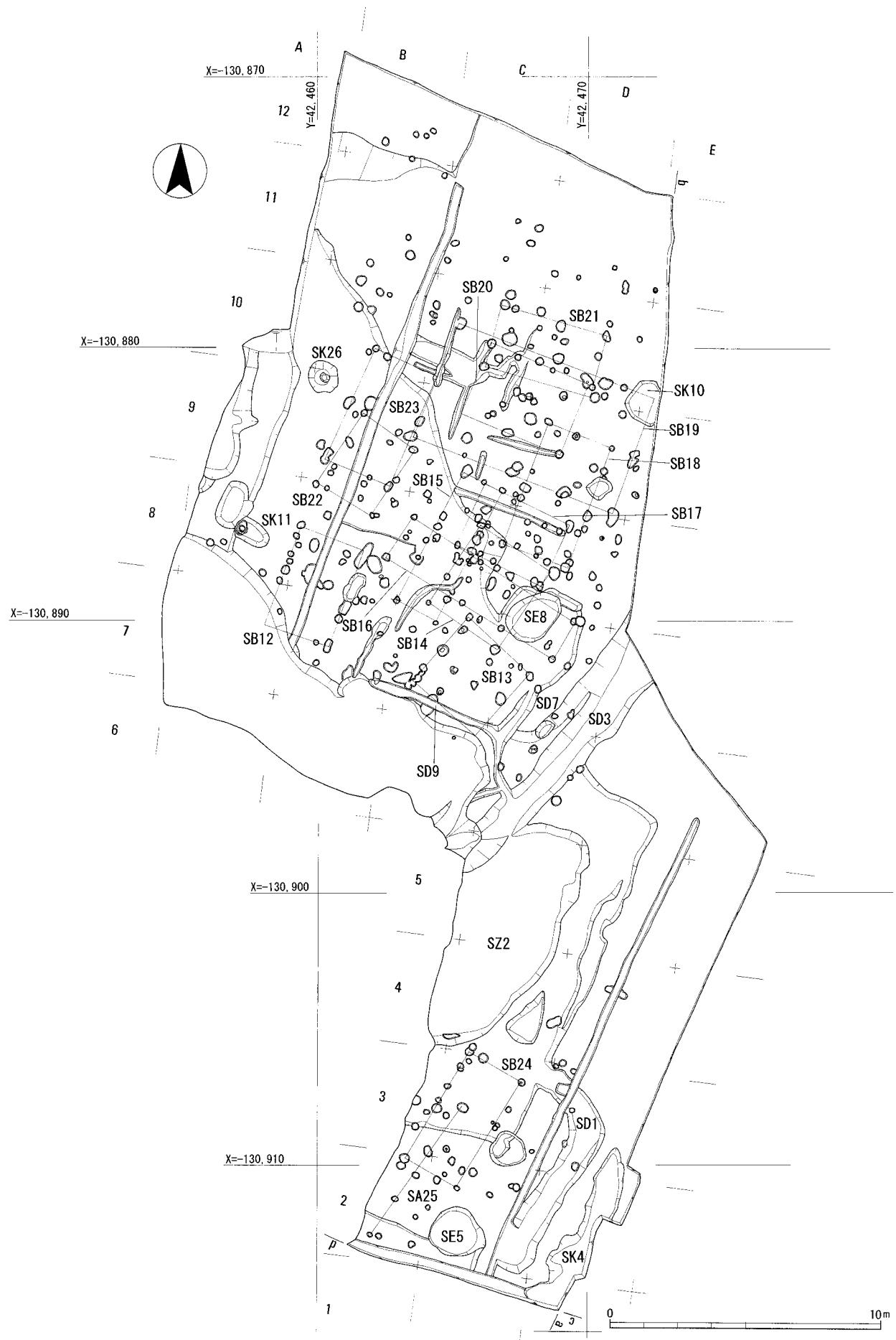
16層紫灰色シルト細砂（検出面）である。

##### 鎌倉～室町時代の遺構

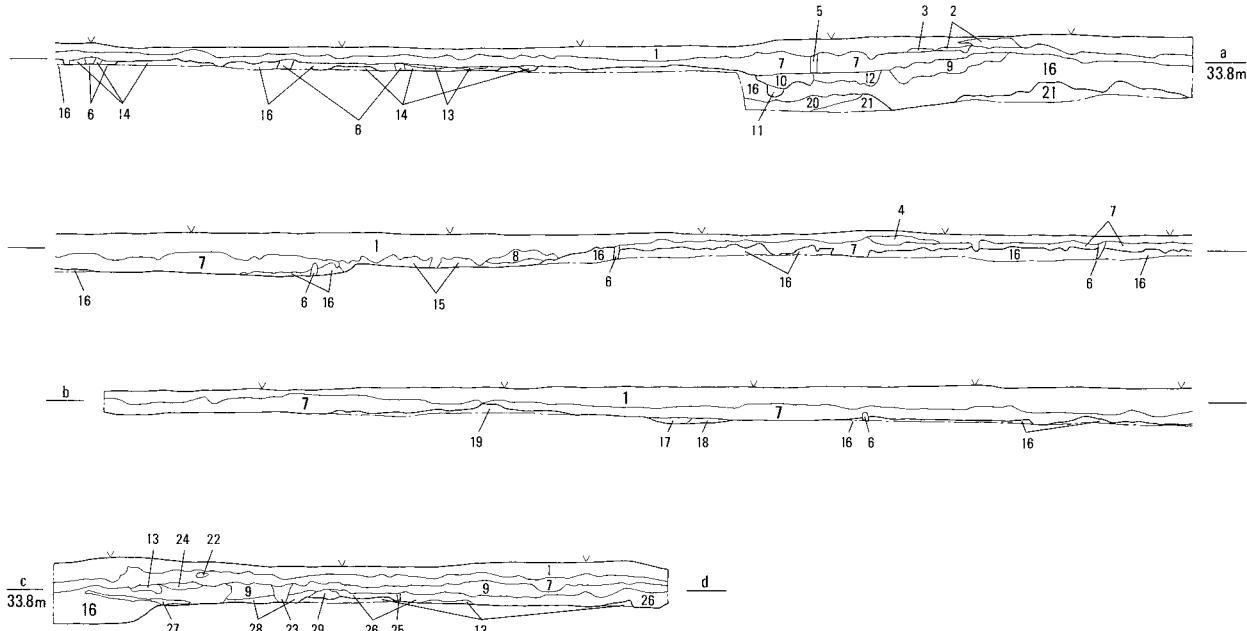
###### a 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物は、2箇所にまとまり、それぞれに井戸を確認し、北側と南側に区画が存在したと考えられる。また、掘立柱建物には①主屋と考えられる建物、②3×1間の建物、③小規模な建物の3種類がある。以下、その順で記述する。なお、掘立柱建物の柱穴で切り合いが確認できる建物は存在しない。

S B 19（第7図） 調査区北側で検出した桁行4間



第5図 G地区遺構平面図（1:200）



1 7.5Y4/1 灰色シルト細砂	11 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質細砂	21 5G7/1 明緑灰色シルト細砂
2 7.5Y4/1 灰色シルト細砂	12 7.5Y5/1 灰色シルト細砂	22 10YR7/6 明黄褐色砂質細砂
2.5Y8/3 淡黄色土砂質混じる	5Y7/2 灰白色土 (1~2 cm粒混じる)	23 5Y5/1 灰色シルト細砂
3 5Y7/2 灰白色シルト細砂	7.5YR5/6 明褐色土斑状混じる	7.5YR5/6 明褐色土混じる
4 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質細砂	13 5Y7/3 浅黄色シルト細砂	24 10Y6/1 灰色シルト細砂
5 2.5Y6/2 灰黄色シルト細砂	7.5YR5/6 明褐色土混じる	25 10YR6/2 灰黄褐色シルト細砂
6 10YR5/2 灰黄褐色シルト細砂	14 7.5YR5/6 明褐色砂質粗砂	26 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト細砂
7 7.5Y5/1 灰色シルト細砂	15 7.5YR7/2 明褐灰色砂質粗砂	10YR6/2 灰黄褐色土混じる
7.5YR5/6 明褐色土わずかに斑状に混じる	5Y7/2 灰白色土 (1~3 cm粘土粒多く混じる)	10YR4/4 褐色土斑土あり
8 2.5Y5/1 褐灰色シルト細砂	16 5P6/1 紫灰色シルト細砂	27 10Y6/6 明褐色シルト細砂
5Y7/2 灰白色土 (~3 cm粘土粒多く混じる)	7.5YR5/6 明褐色土混じる	28 7.5YR5/4 にぶい褐色やや砂質細砂
9 7.5YR5/6 明褐色シルト細砂	17 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト細砂	29 10YR5/6 黄褐色シルト細砂
2.5Y7/1 灰白色土少し混じる	7.5YR5/6 明褐色土混じる	10YR7/2 にぶい黄橙色土混じる
10 10YR6/2 灰黄褐色シルト細砂	18 10Y5/1 灰色シルト細砂	
5Y7/2 灰白色土 (1~3 cm粘土粒多く混じる)	7.5YR5/6 明褐色土混じる	
7.5YR5/6 明褐色土斑土混じる	19 7.5Y7/2 灰白色粘質極細砂	
	20 5P6/1 紫灰色砂質細砂	

0 4m

第6図 G地区土層断面図 (1:100)

×梁行2間の建物である。G地区内で最も大きな建物で、面積が35.1m<sup>2</sup>、主屋と考えられる。建物方向はN20°Eで、柱間は桁行が1.95mの等間、梁行は2.4+2.1mである。柱穴の2箇所で径10~15cmの柱材が残存し、掘形の埋土は灰色砂層、褐灰色砂質土である。柱穴から山茶椀小片が出土している。

**S B16（第7図）** 調査区北側で検出した桁行3間×梁行1間の建物である。建物方向はN27°Eで、柱間は桁行が2.7+2.25+2.1m、梁行は1.8mである。S D7より新しい。遺物は出土していないが、S B15と方向が同じであるため同時期と考えられる。

**S B15（第7図）** 調査区北側で検出した桁行3間×梁行1間の建物である。建物方向はN27°Eで、柱間は桁行が1.8mの等間、梁行は1.65m、S B16と方向が同じである。柱穴からは、藤澤編年古瀬戸後Ⅲ期の直縁大皿が出土している。

**S B18（第8図）** 調査区北側で検出した。柱間は、桁行が2.1+2.7mと2.25+2.55mでやや不揃い、梁行は1.35+1.2mであるが、一応桁行2間×梁行2間の建物とした。建物方向はN20°Eで、柱穴からは土師器片が出土し、S B19と方向が同じである。

**S B23（第8図）** 調査区北側で検出した。柱間は、桁行が2.25mの等間と2.55+1.95mと不揃い、梁行は2.55mであるが、S B12と同じ方向のため、一応桁行2間×梁行1間の建物とした。建物方向は、N21°Wで、柱穴から土師器小片が出土している。

**S B24（第8図）** 調査区南側で検出した。柱間は桁行が2.4+2.1mと2.6+1.9mでやや不揃い、梁行は2.25mである。南側には他に建物もなく、一応桁行2間×梁行1間の建物とした。建物方向はN31°Wで、柱穴から遺物は出土していない。

**S B21（第8図）** 調査区北側で検出した。柱間は桁行が2.25+1.8m、梁行は2.4mで、桁行の南側は柱穴が不足しているが、建物とした。桁行2間×梁行1間で、建物方向はN14°W、柱穴から遺物は出土していない。

**S B14（第8図）** 調査区北側で検出した桁行2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN33°E、柱間は桁行が1.65+1.8m、梁行は1.5mの等間である。柱穴から南伊勢系土師器小皿が出土している。

**S B20（第8図）** 調査区北側で検出した桁行2間

×梁行1間の建物である。建物方向はN23°Eで、柱間は桁行が1.95mの等間、梁行は2.85mである。しかし、桁行中央列沿いの柱穴をS B20の柱穴と考えるならば、桁行2間×梁行2間（1.5+1.35m）の建物になる可能性がある。柱穴から遺物は出土していない。S B17と方向がほぼ同じため同時期と考えられる。

**S B12（第9図）** 調査区北側で検出した。柱穴は浅いが、S B23と同じ方向のため、一応桁行2間×梁行1間の建物とした。建物方向はN21°Wで、柱間は桁行が1.8mの等間、梁行は2.55mである。柱穴から山茶椀小片が出土している。

**S B17（第9図）** 調査区北側で検出した桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN24°Wで、柱間は桁行が1.5+1.95m、梁行は2.55mである。柱穴の掘形の埋土は褐灰色～にぶい黄褐色砂質土で、出土遺物はない。S B20とほぼ方向が同じため、同時期と思われる。

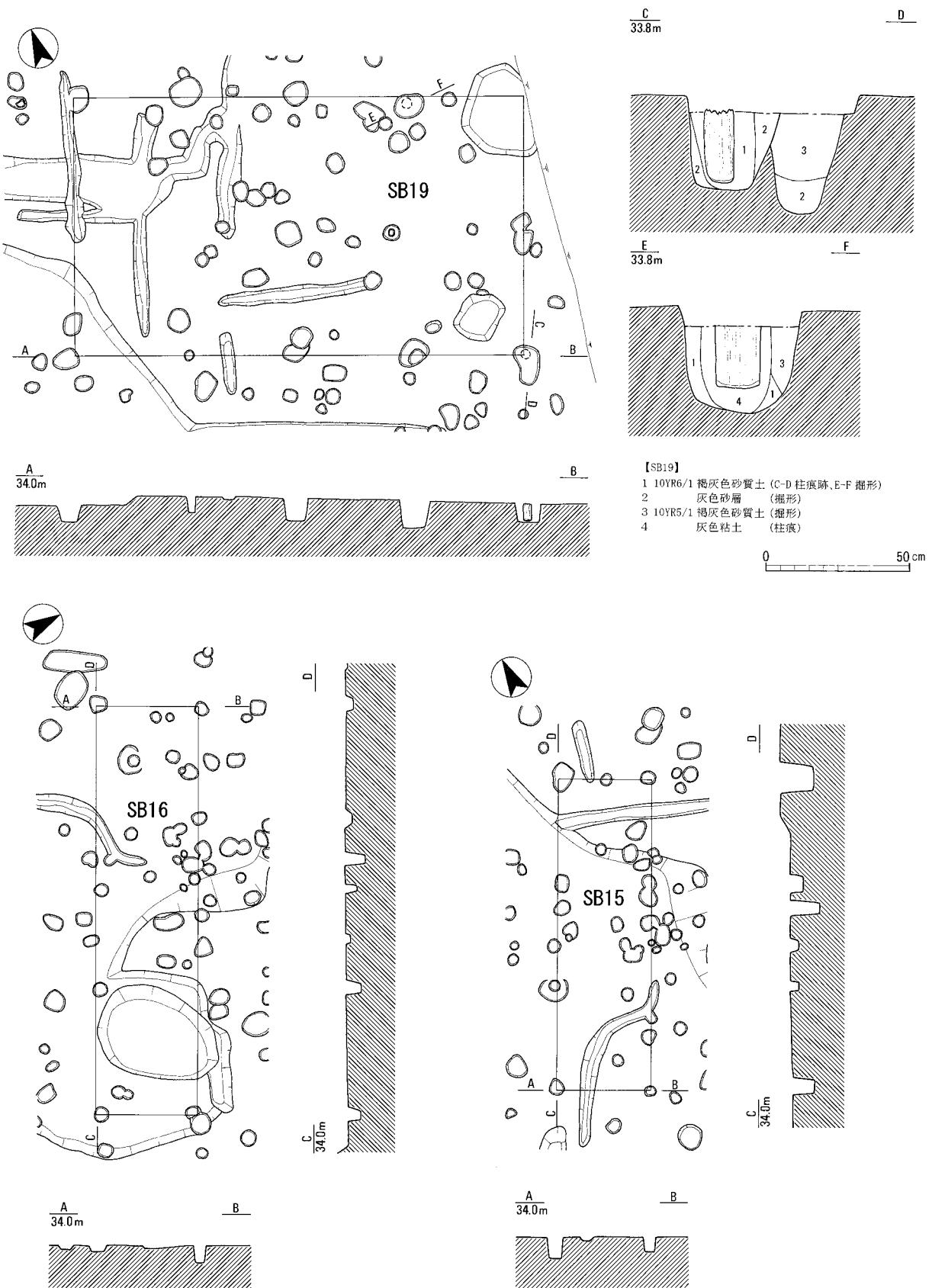
**S B13（第9図）** 調査区北側で検出した桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN41°Wで、柱間は桁行が1.5mの等間、梁行は3.0mである。柱穴の掘形の埋土は褐灰色砂質土である。柱穴内には径20cm程の石が存在し、S B13の柱穴として利用した後、埋めてから礎石建物が存在した可能性も考えられる。柱穴からの出土遺物は、須恵器小片を確認しているが混入遺物と思われ、建物の規模を考慮すると中世の建物と考えられる。

**S B22（第9図）** 調査区北側で検出した。柱間は桁行が1.5+1.35m、梁行は2.4mで、桁行2間×梁行1間の建物とした。しかし、桁行2.85mの1間×1間の建物になるのかもしれない。建物方向はN29°Eで、柱穴から遺物は出土していない。

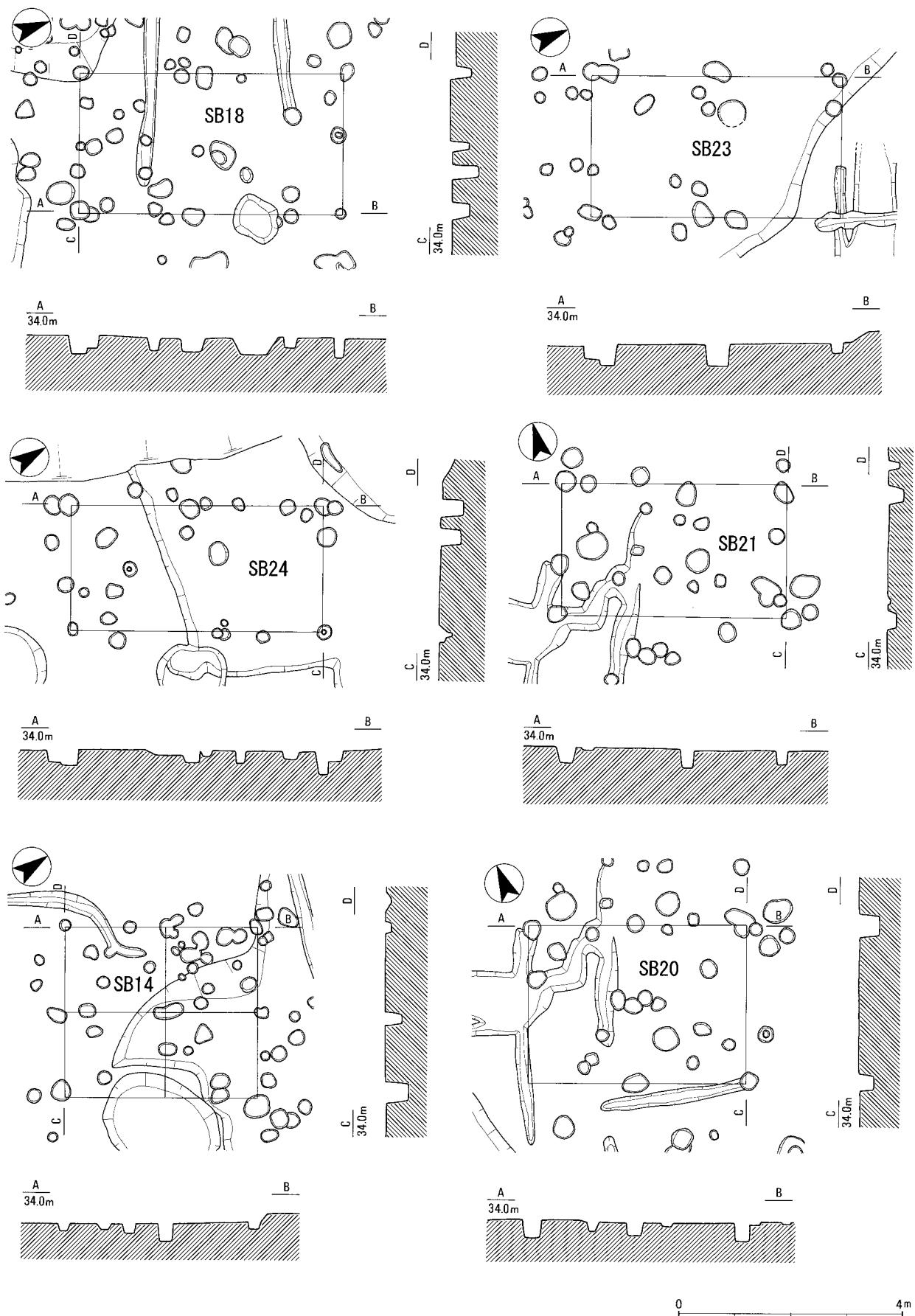
**S A25（第9図）** 調査区南側で3間分検出した1.65+2.1+2.1mの柱列である。柱穴から遺物は出土していない。

## b 土坑

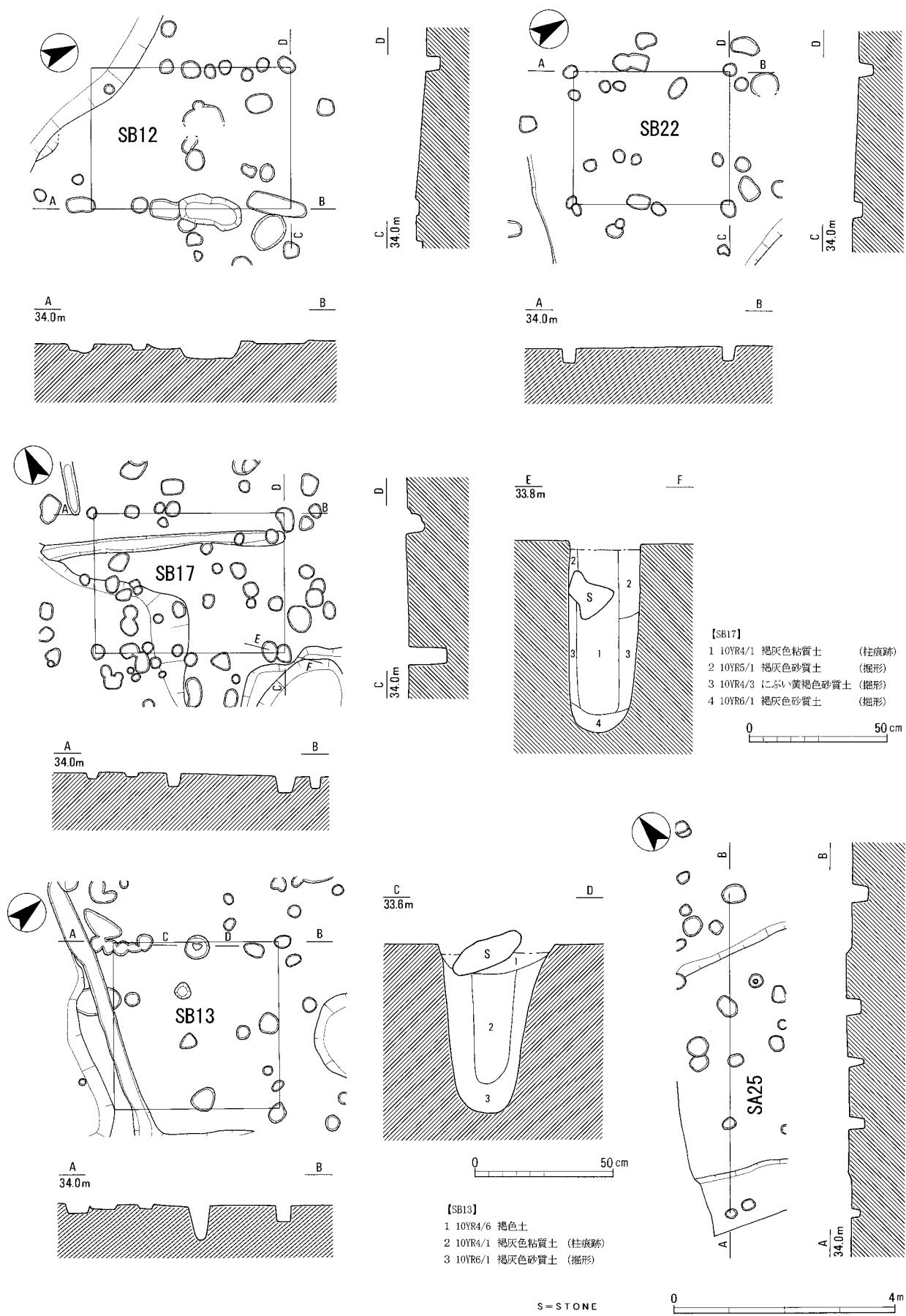
**S K4（第10図）** 調査区南東隅で検出した土坑である。規模は、長径約6.2m以上、短径約1.1m、深さ約0.3mである。<sup>③</sup>伊藤編年第4段階併行期の南伊勢系土師器羽釜（4～6）、<sup>④</sup>中野編年10型式の常滑製品片口鉢が出土している。



第7図 掘立柱建物実測図① (1:20、1:100)



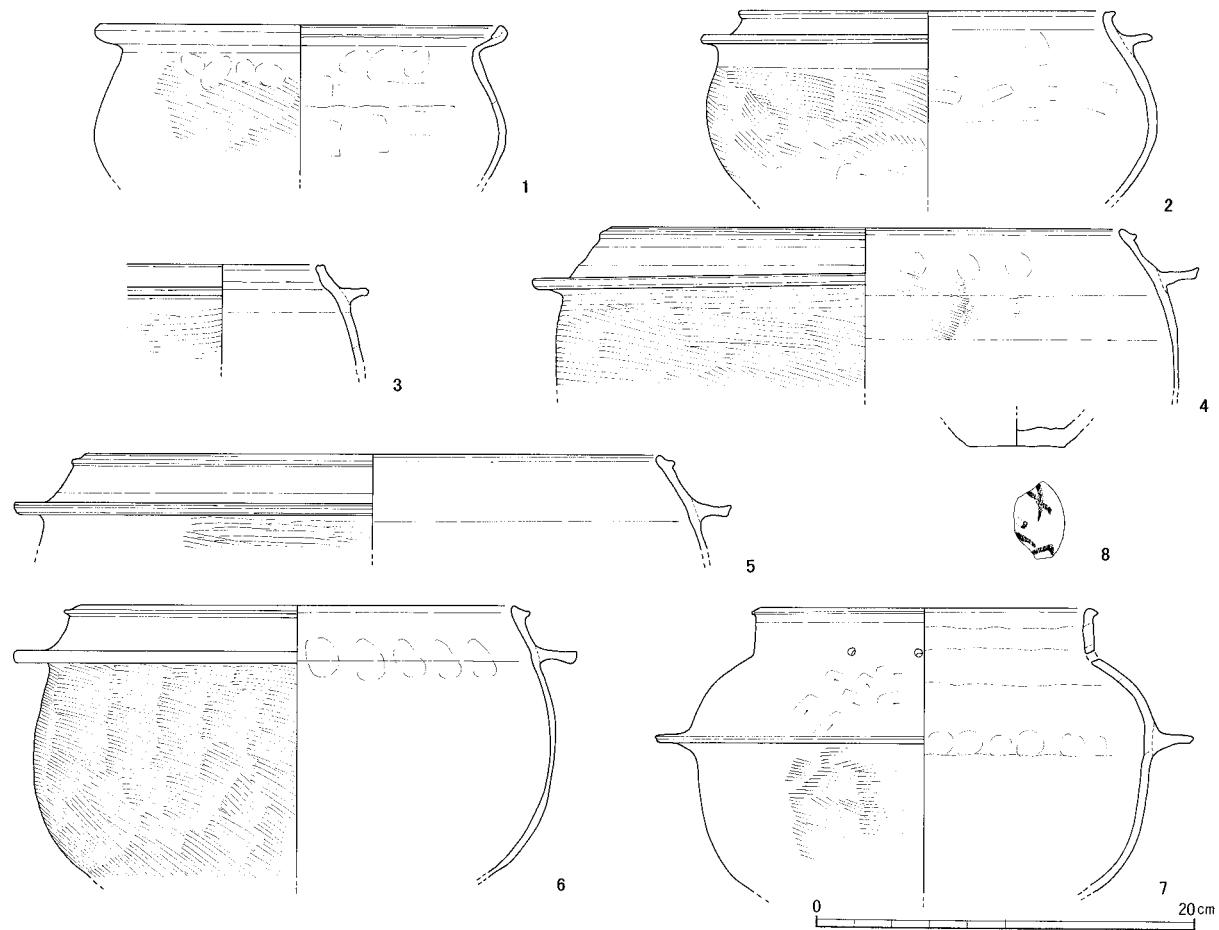
第8図 挖立柱建物実測図② (1:100)



第9図 掘立柱建物・柱列実測図③ (1:20、1:100)



第10図 SK 4 実測図 (1 : 20)



第11図 出土遺物実測図① (1 : 4)

**S K10** 調査区東端において検出した土坑である。規模は、長径約1.7m、短径約1.2m以上、深さ約0.2mである。埋土から藤澤編年第7型式の山茶椀（13～14）が出土している。

**S K26** 調査区北側で検出した土坑である。規模は、径約1.1m、深さ約0.4m（底の柱穴は深さ0.4m）で、遺物は出土していない。形状から、縄文時代の陥し穴の可能性もある。

### c 井戸

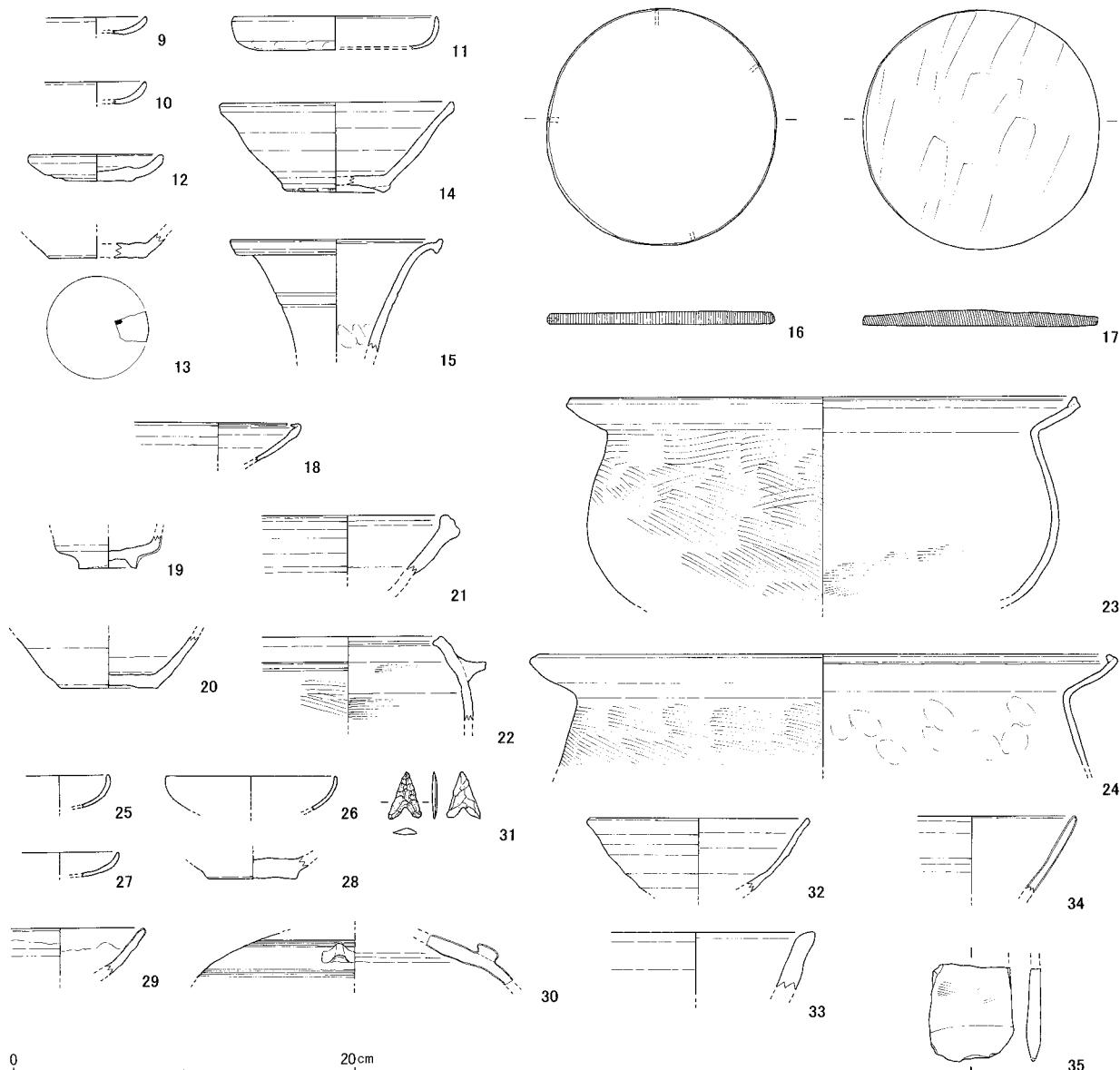
**S E 5** 調査区の南端で検出した素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出面で径約1.9m、底部で径約0.6m、深さ約2.9mである。埋土から第3段階の南伊勢系の土師器鍋片が出土している。

**S E 8** 調査区の中程で検出した素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出面で径1.6～2m、底部で径0.6m、深さ約2.3mである。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。

### d 溝

**S D 1** 調査区南側で検出した溝で、S Z 2との切り合いは不明である。溝の規模は、幅約1.2m、深さ約0.25mである。埋土から第4段階の南伊勢系の土師器鍋（18）が出土している。

**S D 3** 調査区中程で検出した溝で、S Z 2より新しい遺構である。溝の規模は、幅約1.5m、深さ約0.2mである。埋土から藤澤編年登窯第10か11小期の瀬戸美濃製品播鉢（21）が出土している。



第12図 出土遺物実測図② (1 : 4)

### e 不明遺構

S Z 2 調査区南側で検出した落ち込みである。規模は、幅4.3m以上、深さ約0.3mで、S D 3 より古い。近世陶器椀が出土している。

S Z 2 について、地元の方の話によると、2次調査区南にある貯水池を造成する際に、S Z 2周辺、S D 9 より南付近から土取りをおこなったという。

## (2) 遺物

### S K 4 出土遺物（1～8）

遺物は、土師器が大半で、南伊勢系と中北勢系の土師器羽釜がまとまって出土している。遺物の時期は、第4段階併行期のものである。

1は南伊勢系土師器小型鍋の第4段階のもので、b型式までの範疇である。2～6は羽釜で、2～3は中北勢系である。4～6は南伊勢系で第4段階併行期であろう。7は中北勢系の茶釜形で、口縁部を外側へつまみ出し、弱いヨコナデを施し、頸部に2ヶ所焼成前穿孔がある。8は第8型式の山茶椀で、底部に墨書がある。

### S K 10 出土遺物（9～14）

9～11は南伊勢系土師器皿である。12は第6型式の山皿、13～14は第7型式の山茶椀である。13は、高台が剥離し、底部に墨書が見られる。

### S K 11 出土遺物（15）

15は灰釉陶器壺の頸部で、2条の沈線がある。

### S E 8 出土遺物（16～17）

16～17は曲物の底板、16は4箇所の木釘孔がある。

### S D 1 出土遺物（18）

18は南伊勢系土師器鍋の口縁で、第4段階aかb型式のものである。

### S D 3 出土遺物（19～22）

19は青磁の香炉であろうか。内面が露胎である。20は高台が剥離している山茶椀で第7型式、21は登窯第10か11小期の瀬戸美濃製品擂鉢である。22は中北勢系の土師器羽釜で15世紀後半頃のものである。

### S Z 2 出土遺物（23～24）

23～24は南伊勢系の土師器鍋で、23は第3段階b型式～第4段階b型式、24は第4段階b型式である。

### 掘立柱建物出土遺物（25～26）

25はS B 23柱穴出土の南伊勢系土師器皿である。

26はS B 19柱穴出土の南伊勢系土師器皿である。

### ピット出土遺物（27～31）

27は南伊勢系の土師器皿で、28は山茶椀第8型式である。29～30は瀬戸美濃製品で、29は古瀬戸後II期の縁釉小皿、30は古瀬戸後IかII期の四耳壺である。31はサヌカイト<sup>⑦</sup>製の石鏃で、風化が著しいものの、縄文時代草創期～中期までのものである。

### 包含層出土遺物（32～35）

32は山茶椀で、東濃産大畑大洞新頃、33は信楽産擂鉢で山田編年<sup>⑨</sup> II a型式頃と思われる。34は青磁碗で、2次加工をしているのか、割れ口を打ち欠いている。35は凝灰岩製の砥石である。

## 2 F 地区

F地区では、中世の掘立柱建物、溝等を確認した。第13図第2層耕作土直下が検出面になる。

### (1) 遺構

#### 鎌倉～室町時代の遺構

##### a 掘立柱建物

S B 45（第14図） 調査区北東隅で検出した。柱間は、桁行北側で柱穴が未検出であるものの、南側は1.5mの等間で、梁行は1.8mの等間であり、桁行2間以上×梁行2間の建物とした。建物方向はN 22°Eである。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

柱穴（第14図） 当調査区では、掘立柱建物を1棟確認し、他にも良好な柱穴が存在している。I 8 Pit 2では、柱穴内に柱材が残存し、I 8 Pit 6では埋土が良好に観察できた。

##### b 土坑

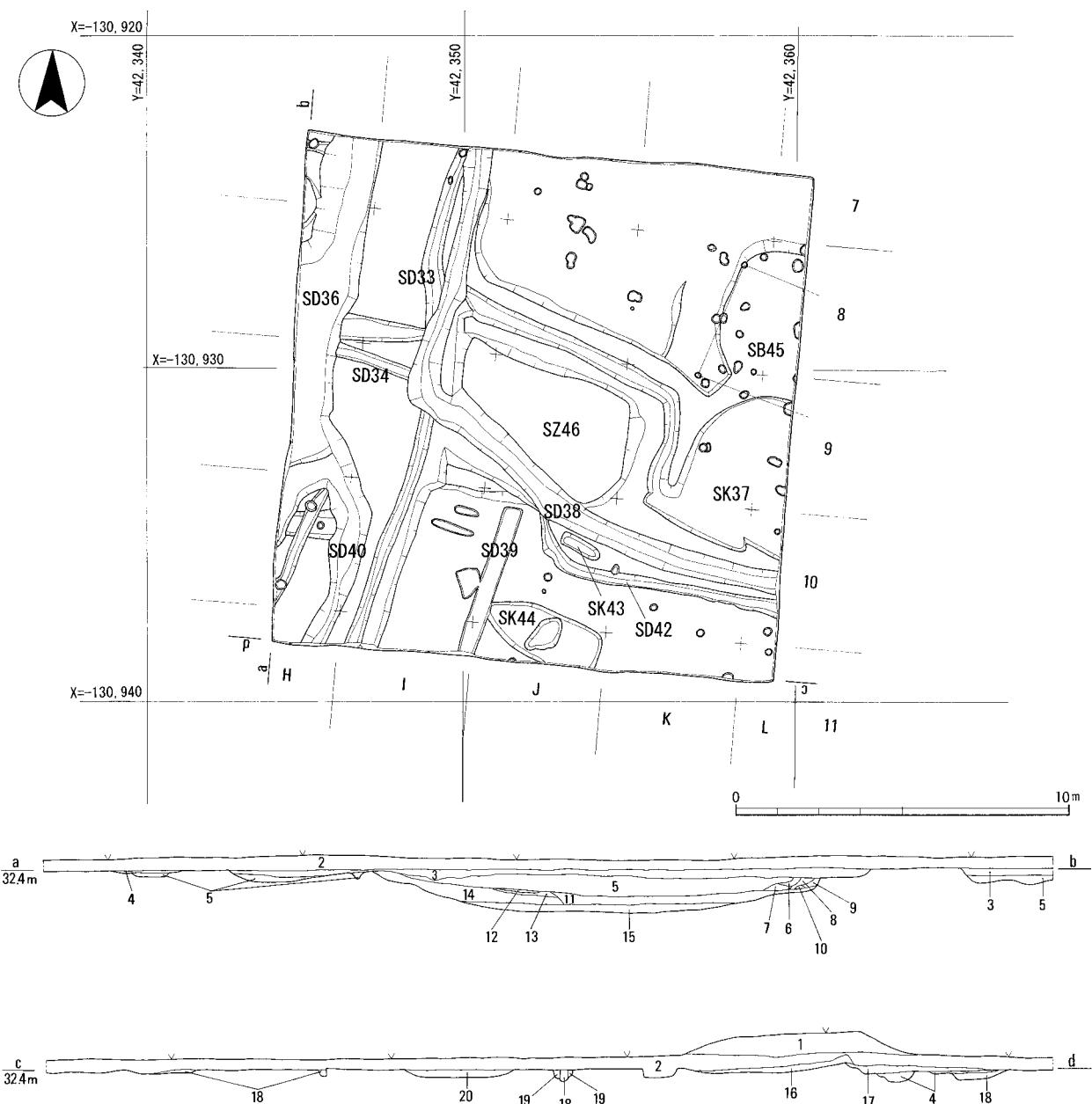
S K 37 調査区東端で検出した土坑で、幅3.2m以上、深さが5cm程と非常に浅い。埋土から第5型式の山茶椀（37）が出土している。

S K 43 調査区中央部よりやや南で検出した土坑で、長さ約1.3m、幅約0.4m、深さ約10cmである。埋土から南伊勢系の土師器鍋小片が出土した。

S K 44 調査区南端で検出した土坑で、長さ約3.5m以上、幅約1.6m、深さ約8cm程である。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。

##### c 溝

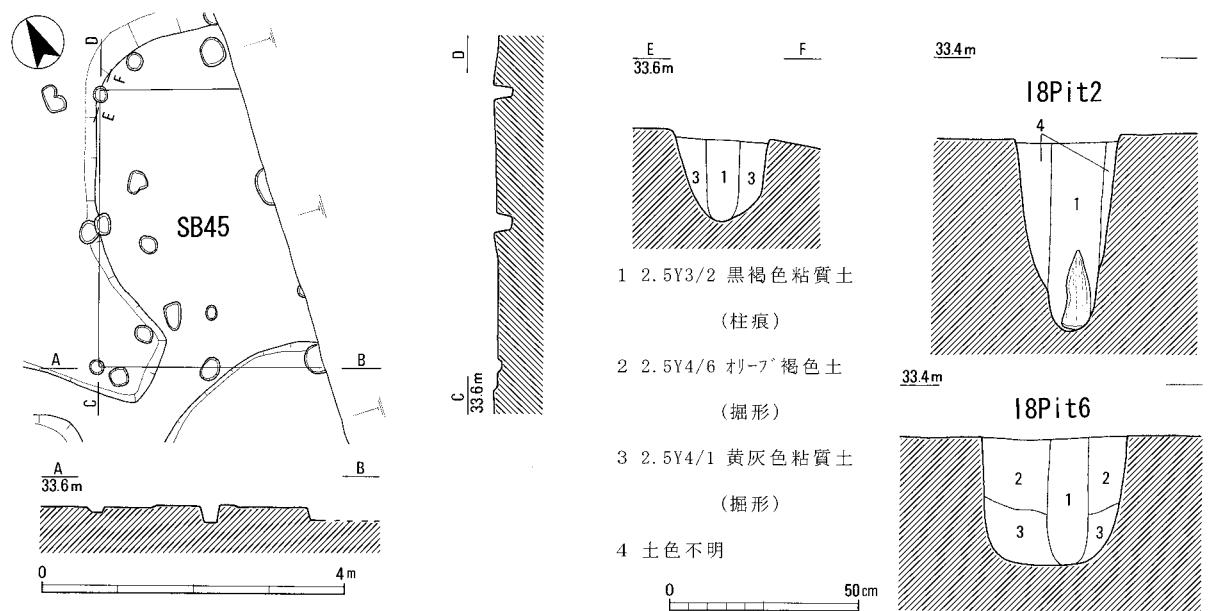
S D 33 調査区西側で検出した南北に延びる溝で、幅約0.8m、深さ5cm程である。S D 38を切る遺構



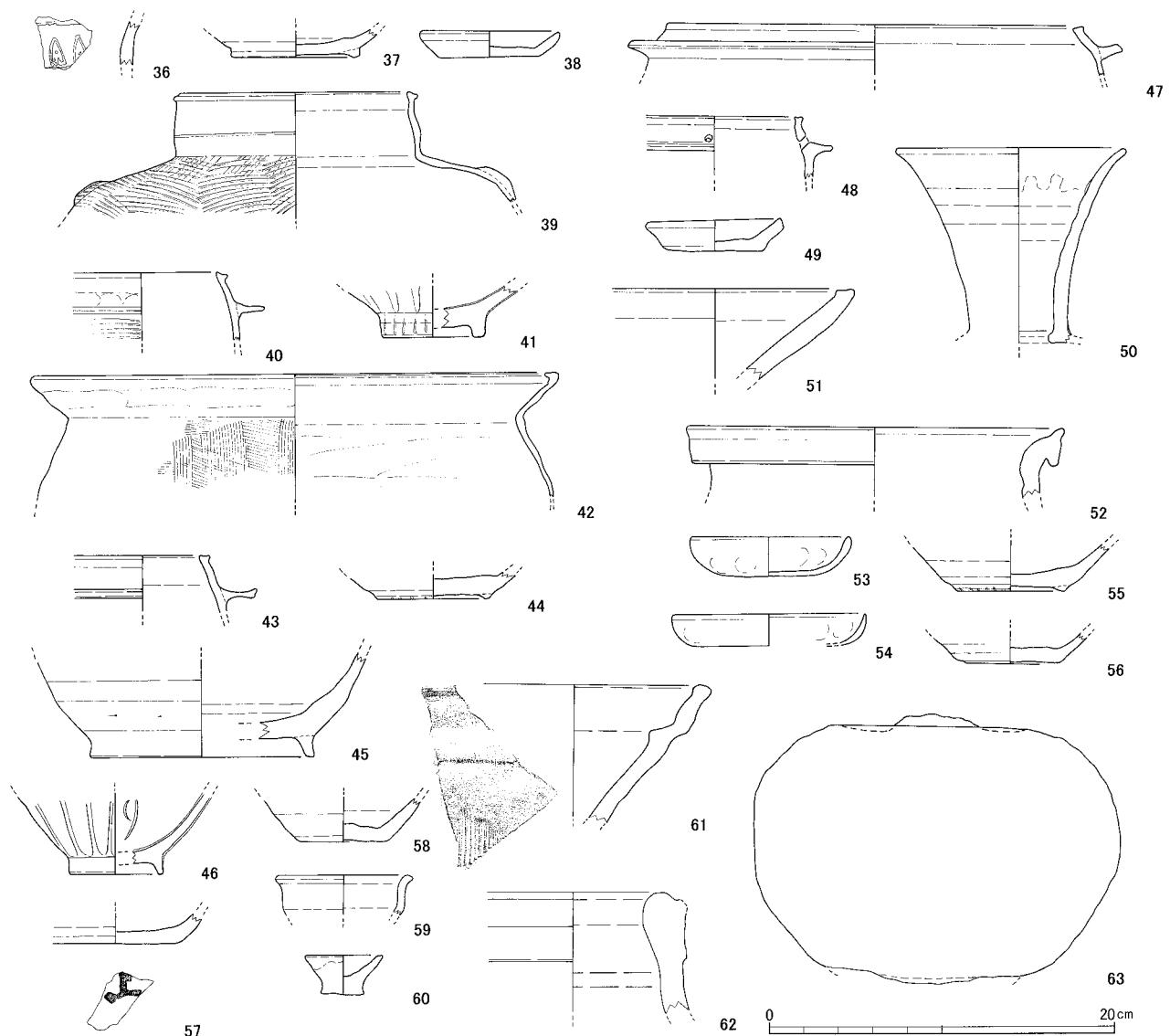
- |                            |                    |
|----------------------------|--------------------|
| 1 7.5YR7/8 黄橙色砂質土（明褐色砂質土混） | 12 7.5YR5/8 明褐色粘質土 |
| 2 7.5YR7/1 明褐灰色砂質土         | 13 7.5YR6/1 褐灰色砂層  |
| 3 7.5YR4/2 灰褐色土            | 14 耕作土             |
| 4 7.5YR4/2 灰褐色粘質土          | 15 盛土              |
| 5 7.5YR5/1 褐灰色粘土（暗褐色粘質土）   | 16 7.5YR5/2 灰褐色砂層  |
| 6 7.5YR4/1 褐灰色粘土           | 17 7.5YR3/4 暗褐色土   |
| 7 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土（褐灰色粘土混） | 18 7.5YR6/8 橙色砂質土  |
| 8 7.5YR5/1 褐灰色粘質土（黑褐色粘土混）  | 19 7.5YR3/4 暗褐色土   |
| 9 7.5YR5/8 明褐色土            | 20 7.5YR5/8 明褐色土   |
| 10 7.5YR4/2 灰褐色粘質土         | 21 7.5YR7/2 明褐色粘質土 |
| 11 7.5YR5/8 明褐色砂質土         |                    |

0 4m

第13図 F地区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



第14図 掘立柱建物実測図（1：20、1：100）



第15図 出土遺物実測図（1：4）

である。埋土から10型式の常滑製品片口鉢が出土している。

S D 34 調査区西側で検出した溝である。幅0.4m、深さ5cm程で、S D 36より新しい。埋土から土師器茶釜形（39）や羽釜（40）が出土している。ただし、調査時の所見では溝であるが、範囲確認調査Aトレチの一部かもしれない。

S D 36 調査区西側で検出した溝で、幅1.6m、深さ約40cmで、S D 40より新しい。埋土から9型式の常滑製品片口鉢が出土している。

S D 38 調査区北端で検出した溝で、幅0.7m、深さ約20cmで、S D 33より古い。埋土から11型式の常滑製品甕が出土している。

S D 42 調査区東端から西へ延びる溝で、幅0.4m、深さ約15cmである。S D 38との切り合いは不明である。埋土から第7型式の山茶椀（56）が出土している。

#### d 不明遺構

S Z 46 岩瀬地蔵古墳<sup>⑩</sup>は、径6m、高さ1mで半壊状態と報告されているが、古墳の存在は確認できなかった。ジャゴジ塚<sup>⑪</sup>や磐城山遺跡<sup>⑫</sup>に見られるような塚状遺構の可能性がある。なお、SZ46に溝は伴っていない。

#### (2) 遺物

##### S K 35出土遺物（36）

36は瀬戸美濃製品香炉で、古瀬戸中IかII期である。

##### S K 37出土遺物（37）

37は第5型式の山茶椀である。

##### S D 33出土遺物（38）

38は第6型式頃の山皿である。

##### S D 34出土遺物（39～41）

39～40は南伊勢系の土師器である。39は茶釜形で、40は羽釜である。41は青磁椀で、連弁文があり、口縁部に雷文が付く可能性がある。

##### S D 36出土遺物（42～46）

42～43は南伊勢系の土師器である。42は鍋で第4段階b型式、43は羽釜で第4段階併行期である。44は山茶椀で第7型式、45は片口鉢で第6型式、46は青磁椀である。

##### S D 38出土遺物（47～53）

47～48は、中北勢系の土師器羽釜である。48は焼成前穿孔が1ヶ所残る。49は山皿で第6型式、50は瀬戸美濃製品尊式花瓶で古瀬戸後II期である。51～52は常滑製品で、51は9型式の片口鉢、52は6b型式の広口壺である。53は中北勢系土師器皿で、口縁部が丸みを帯び、南伊勢系を模倣して作られている。

##### S D 42出土遺物（54～56）

54は南伊勢系の土師器皿である。55は第6型式、56は第7型式の山茶椀である。

##### 包含層出土遺物（57～63）

57～58は山茶椀で、57は第6型式頃で、底部に墨書があり、「上」であろうか。58は第8型式である。59は瀬戸美濃製品香炉で、古瀬戸後IかII期、60は信楽産秉燭で幕末頃のものであろう。61は瀬戸美濃製品擂鉢で登窯第8小期である。62は常滑製品甕で10型式、63は五輪塔の水輪で花崗岩製である。

## 3 C地区

### (1) 遺構

C地区内には、径10m、高さ1mで半壊状態の岩瀬古墳<sup>⑩</sup>が存在すると報告されていた。しかし、調査の結果、古墳の存在を実証できるような遺構・遺物は確認できなかった。ただし、SZ46のような塚状遺構の可能性は残る。検出した遺構はいずれも中世の掘立柱建物・溝である。基本層序は、第16図第1層耕作土、第2・3層黄橙色土である。ほぼ耕作土直下が検出面となる。

#### 鎌倉～室町時代の遺構

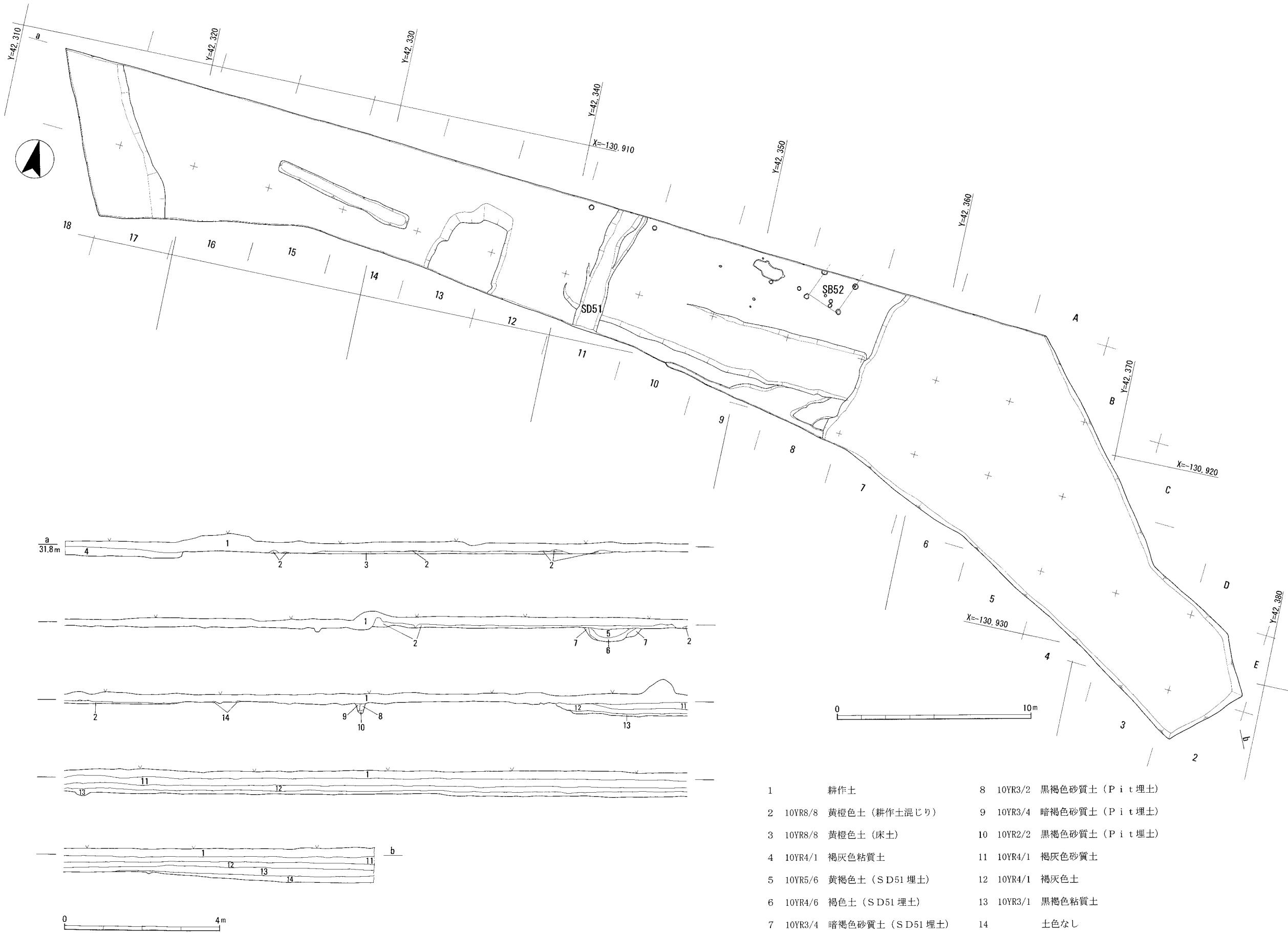
##### a 掘立柱建物

S B 52（第17図） 調査区中央部の北壁際で検出した桁行1間以上×梁行1間の建物である。西側の土坑を建物の柱穴の一部と考えるならば梁行2間と考えられる。建物方向はN20°Eで、柱間は桁行が1.65m、梁行は1.8mである。柱穴は径10cm程で、掘形の埋土は黒褐色～暗褐色土である。柱穴からは、山茶椀第6型式頃と思われる小片が出土している。

##### b 溝

S D 51 調査区中央部で検出した溝である。幅約1.2m、深さ約20cmである。埋土から、第5型式の山皿（64）が出土している。

#### (2) 遺物



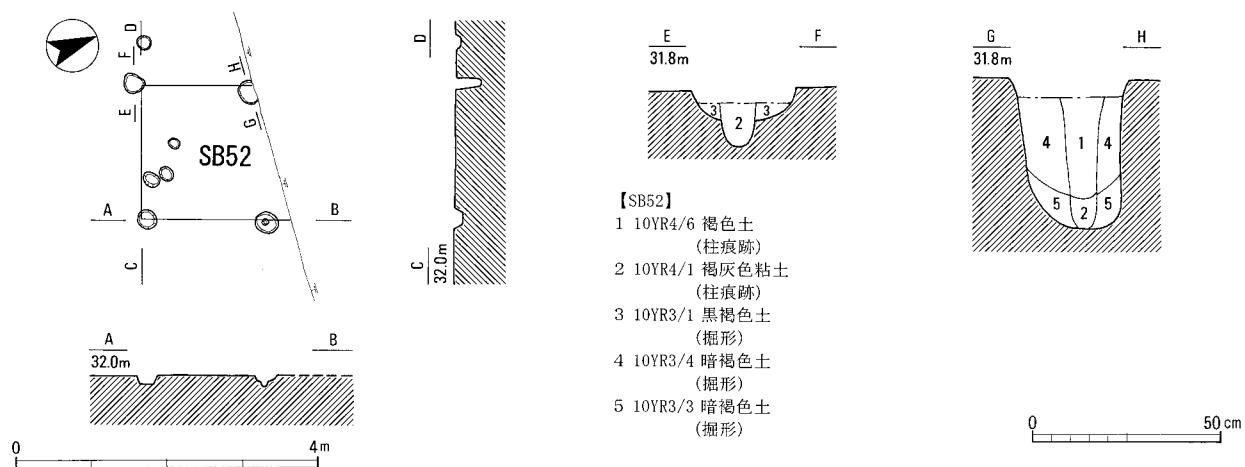
第16図 C地区遺構平面図 (1:200)・土層断面図 (1:100)

### S D51出土遺物 (64)

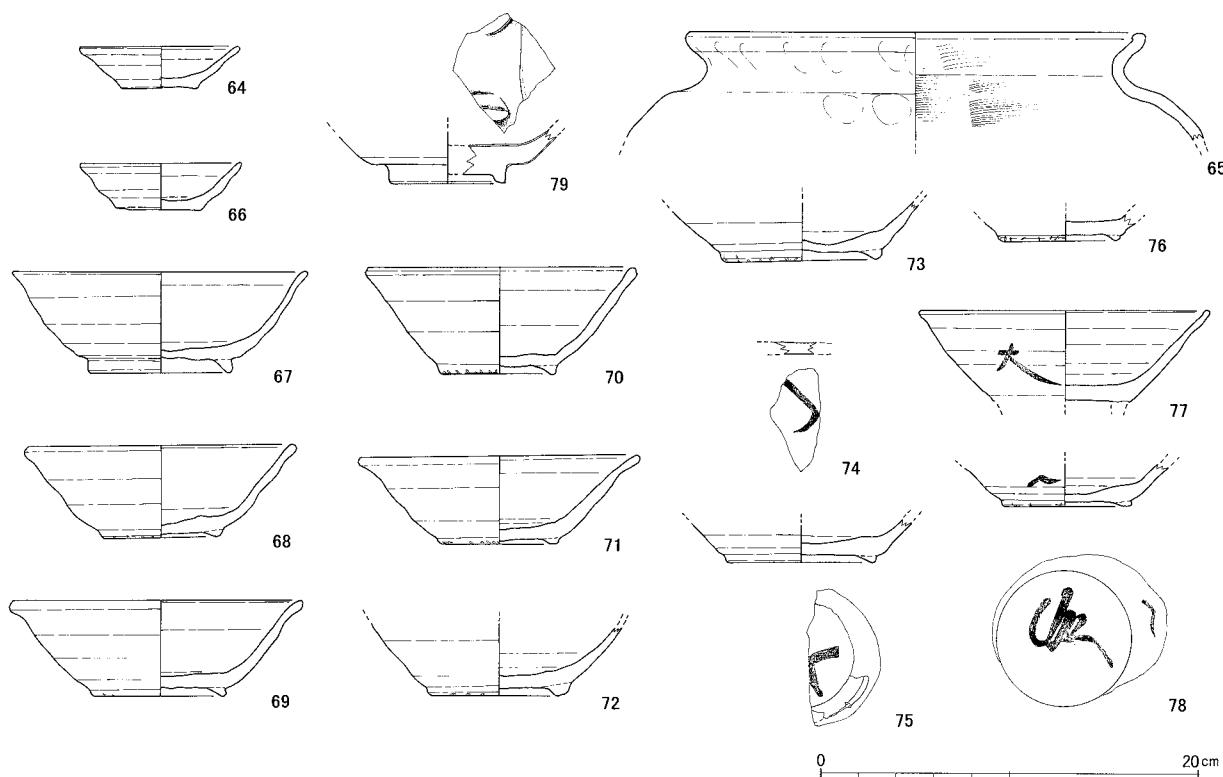
64は山皿で、第5型式のものである。

### 包含層出土遺物 (65~79)

65は、南伊勢系の土師器甕（仮）A段階である。66は第5型式の山皿である。67~78は山茶椀である。67は第4型式、68~69・72~73・75・77は第6型式、70~71・76・78は第7型式である。70は内面にススが付着している。74~75は底部に墨書がある。77は体部に「大」と書かれている。78は体部と底部に墨書がある。79は青磁碗である。



第17図 掘立柱建物実測図 (1 : 20、1 : 100)



第18図 出土遺物実測図 (1 : 4)

## 4 D地区

### (1) 遺構

D地区では、縄文時代の土坑、中世の掘立柱建物、井戸等を検出した。基本層序は、第20図東壁で第1層耕作土（褐灰色粘土）、第2層橙色粘土、第5層褐灰色細砂（検出面）である。

#### ①縄文時代の遺構

S K73（第21図） 調査区西部分で検出した埋設土器と思われる。深鉢（80）の体部下半が正立の状態

で出土した。

## ②鎌倉～室町時代の遺構

掘立柱建物は4箇所にまとまりが見られる。さらに、15世紀代の遺物が出土しているS D64、S D67の溝内々の距離が約36m前後で、区画を分ける溝になると考えられる。以下、4箇所にわかれ区画ごとに報告する。

また、調査区幅が2mと狭いため全体がわかりにくく、報告の際に掘立柱建物の桁行、梁行と記述しているが、桁行と梁行が逆転している可能性がある。

### A 区画1

調査区西部分、S D95より西側を区画1とする。

#### a 掘立柱建物・柱列

S B74（第22図） 桁行2間以上×梁行2間と考えられる建物である。建物方向はN 7° Eで、柱間は桁行が1.65m、梁行は2.1mの等間である。柱穴からの出土遺物はなく、S B83・84とほぼ同じ方向を示すため、同時期の建物と思われる。

S B80（第22図） 桁行1間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 18° Eで、S B85と同じ。柱間は桁行が1.95m、梁行は1.5+1.8mである。柱穴の掘形は明黄褐色砂、褐色土である。柱穴の埋土から第6型式の山茶椀が出土地していいる。

S B79（第22図） 桁行1間以上×梁行2間の建物と思われる。建物方向はN 27° Eで、柱間は桁行が1.5m、梁行が1.65mの等間で、大半が調査区外に延びる。柱穴から遺物は出土していない。

S B82（第22図） 桁行1間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 6° Eで、S B74とほぼ同じ。柱間は桁行が1.95m、梁行は1.5mの等間である。柱穴から土師器小片が出土地していいる。

S B78（第22図） 桁行1間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 16° Eで、S B81と同じである。柱間は桁行が1.5m、梁行は1.5mの等間である。柱穴から第5型式の山茶椀が出土地していいる。検出時の切り合は、S D62を切る。

S B81（第23図） 桁行2間×梁行1間の小規模な建物と思われる。建物方向はN 15° Eで、柱間は桁行が1.5+1.65m、梁行は2.1mである。柱穴の掘形の埋土は褐色砂質土。山茶椀小片が出土地していいる。

S A75（第23図） 3間分検出した。柱間は1.8+

1.95+2.25mである。S B74と同じ方向を示し、南（調査区外）へ柱穴が延びれば掘立柱建物の可能性も考えられる。掘立柱建物ならば、主屋クラスの規模になると思われる。柱穴の埋土は、暗褐色粘質土、褐色土で、遺物は出土していない。

S A77（第23図） 3間分検出した。柱間は1.65+1.75+1.8mで柱穴から古代の土師器小片が出土地したが、方向を考慮するとS B78とほぼ同時期であろう。

S A76（第23図） 3間分検出した。柱間は1.65+1.35+1.65mである。柱穴からは古代の土師器小片が出土地したが、方向を考慮するとS B89とほぼ同時期であろう。

#### b 溝

S D61 幅約2~6m、深さ約0.3mの溝である。埋土から第5型式の山茶椀（103）が出土地している。S D62より古い。

S D95 報告にあたり番号を付与した溝である。幅約3.5m、深さ0.1m、溝から出土遺物はない。包含層からは古瀬戸後IV期新段階の御目付大皿、10型式の常滑製品玉縁口縁壺・片口鉢が出土地している。

### B 区画2

調査区中央部分、S D95からS D64までの範囲を区画2とする。

#### a 掘立柱建物・柱列

S B85（第23図） 桁行4間×梁行2間以上の建物である。桁行の規模から、主屋クラスの建物と思われる。建物方向はN 18° Eで、柱間は桁行が1.8+1.95+2.25+2.1m、梁行は1.8mである。柱穴の掘形の埋土は黒褐色土。山茶椀小片が出土地していいる。

S B84（第24図） 桁行1間以上×梁行2間と思われる建物である。建物方向はN 8° Eで、柱間は桁行が2.1m、梁行が2.25+1.8mである。桁行は調査区外に延びるとと思われる。柱穴の掘形の埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。S B83と同じ方向で、同時期のものと思われる。

S B83（第24図） 桁行1間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 8° Eで、柱間は桁行が1.8m、梁行が1.8mの等間で、北へ延びると考えられる。柱穴の掘形の埋土は黒褐色土である。柱穴から土師器鍋と思われる小片が出土地していいる。

**S B87** (第24図) 柱間は桁行が2.4mと2.3mのやや不揃い、梁行は2.1m、柱穴もやや浅いが、一応桁行1間以上×梁行1間の建物とした。建物方向はN 2° Wで、柱穴から山茶椀小片が出土している。

**S A86** (第24図) 2間分検出した。柱間は2.4+2.7mで、S B83・84とほぼ同じ方向である。柱穴からは第7型式の山茶椀が出土している。

### b 溝

**S D63** 幅約2m、深さ0.5mの溝で、埋土から古瀬戸後IV期新段階の平椀(105)が出土している。

**S D64** 幅約8.5m、深さ約0.3~0.5mの溝で、2条の溝の可能性もある。埋土から第10か11型式の常滑製品壺(109)が出土している。

### C 区画3

調査区中央部分、S D64からS D67までの範囲を区画3とする。

#### a 掘立柱建物・柱列

**S B90** (第25図) 桁行3間×梁行2間以上の総柱建物である。建物方向はN 2° E。柱間は桁行が2.1+2.25+2.4m、梁行は1.3+1.5mである。柱痕跡は径15cm程で、掘形の埋土は黒褐色土。柱穴から9型式の常滑製品片口鉢(119)が出土している。

**S B88** (第24図) 桁行2間×梁行1間の小規模な建物である。建物方向はN 4° Eで、柱間は桁行が1.8+2.1m、梁行は1.8mである。柱穴の埋土は、黒褐色~灰黄褐色土で、土師器小片が出土している。

**S B89** (第25図) 桁行2間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 3° Wで、柱間は桁行が1.35+1.8m、梁行が1.35mの等間で、北へ延びると考えられる。柱穴から山茶椀小片と南伊勢系の土師器鍋第1段階と思われる破片が出土している。

**S A91** (第25図) 2間分検出した。柱間は1.5mの等間で、南へ延びる可能性もある。柱穴から遺物は出土していない。

#### b 井戸

**S E65** 素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出面で径約1.6m、底径約0.4m、深さ約2.9mである。埋土から第5型式の山皿(82)が出土している。

#### c 溝

**S D68** 幅約1.2m、深さ約0.4mの溝で、埋土から10型式の常滑製品片口鉢(115)が出土している。

### D 区画4

調査区東部分、S D67より東側を区画4とする。

#### a 掘立柱建物・柱列

**S B94** (第25図) 桁行1間以上×梁行2間の建物である。建物方向はN 11° Eで、柱間は桁行が2.25m、梁行は1.8+2.4mである。柱穴の掘形の埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

**S A93** (第25図) 4間分検出した。柱間は1.2+1.5+1.5+1.5mである。柱穴が北へ延びれば掘立柱建物となり、主屋クラスの規模になると思われる。柱穴から山茶椀小片が出土している。

#### b 井戸

**S E71** 素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出面で径約2m、深さ約0.6mと思われる。埋土から古瀬戸後IV期古段階の平椀(83)が出土している。

#### c 溝

**S D67** 幅約2m、深さ約0.35mの溝で、埋土から第4段階の南伊勢系の土師器鍋が出土している。

**S D69** 深さ約0.35mの不定形の溝で、埋土から古瀬戸後IV期新段階の平椀(117)が出土している。

**S D70** 深さ約0.2mの不定形の溝である。埋土から第7型式の山茶椀が出土している。

**S D72** 深さ約0.2~0.6mの溝である。埋土から常滑製品甕が出土している。

## (2) 遺物

#### S K73出土遺物(80)

80は弱い沈線が縦方向に入り、胎土が粗く、縄文時代中期末~後期初頭の深鉢であろう。また、図示していないが、接点はないものの、口縁部に横方向の沈線が入る破片も出土している。

#### S E65出土遺物(81~82)

81は第4型式の小椀、82は第5型式の山皿である。

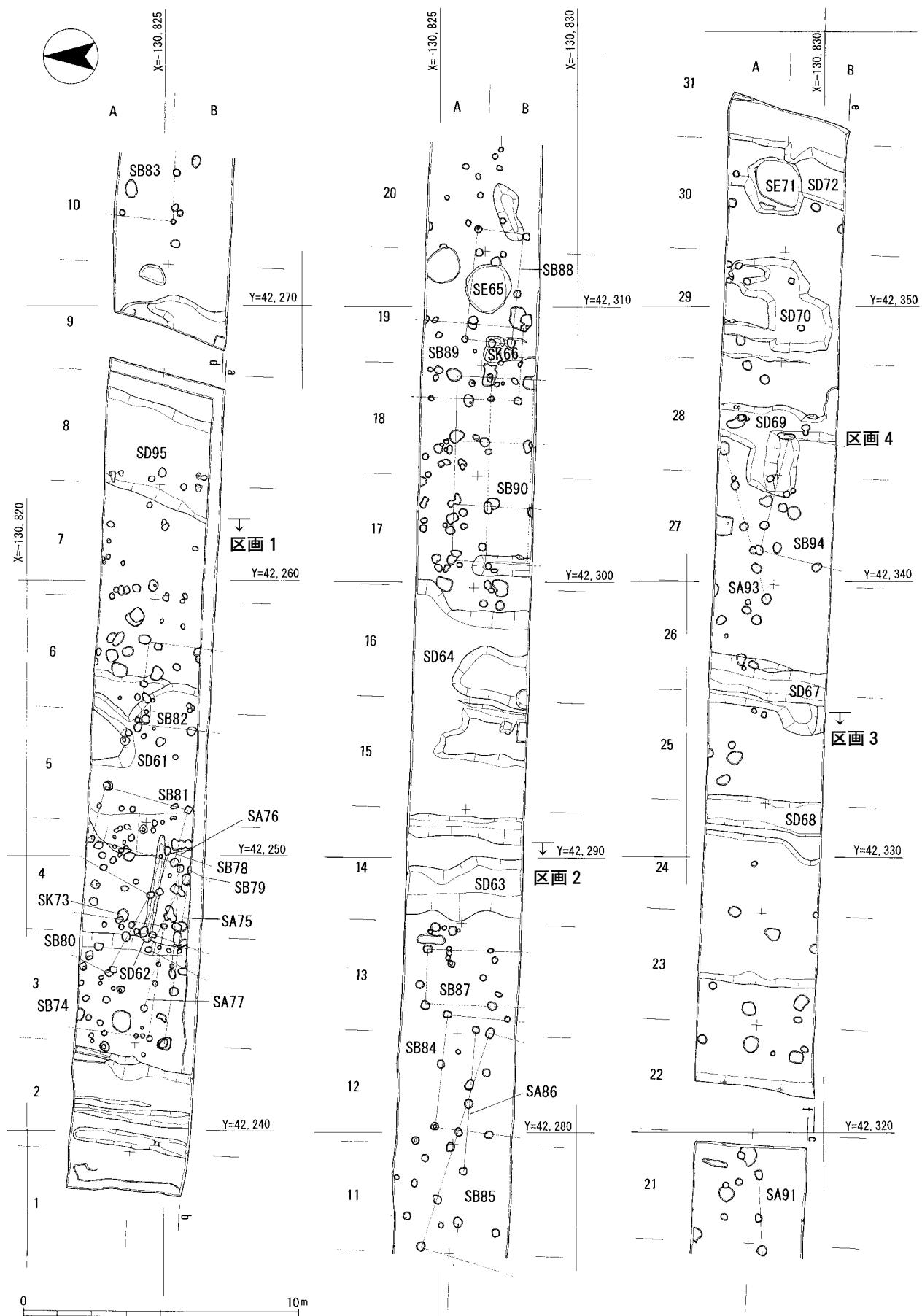
#### S E71出土遺物(83)

83は瀬戸美濃製品平椀で古瀬戸後IV期古段階である。

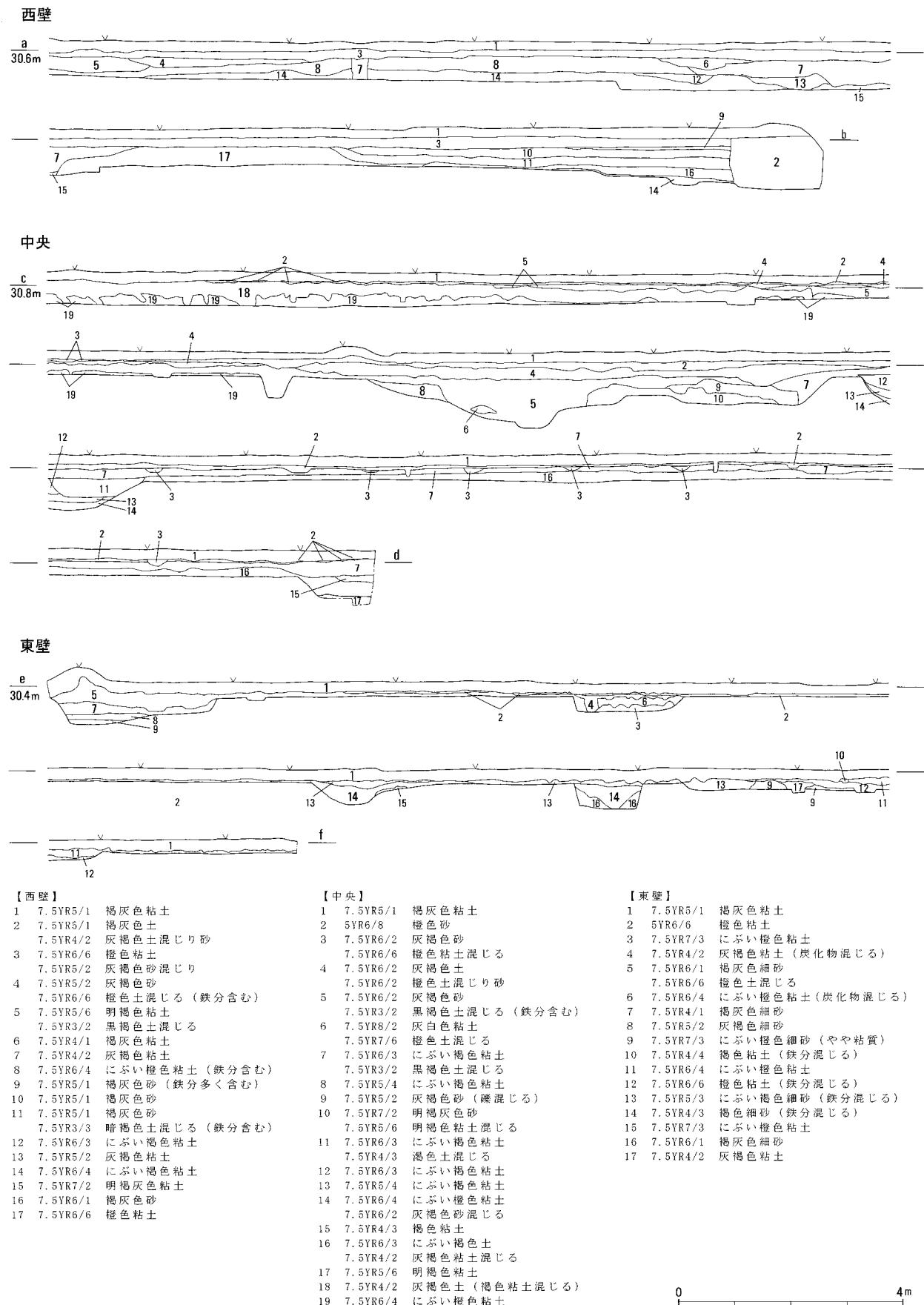
#### S D61出土遺物(84~96)

出土遺物は、南伊勢中世I b期の時期にあたる。84~86はロクロ成形の土師器皿である。87は土師器甕、(仮)A段階、表面の調整は不明瞭である。

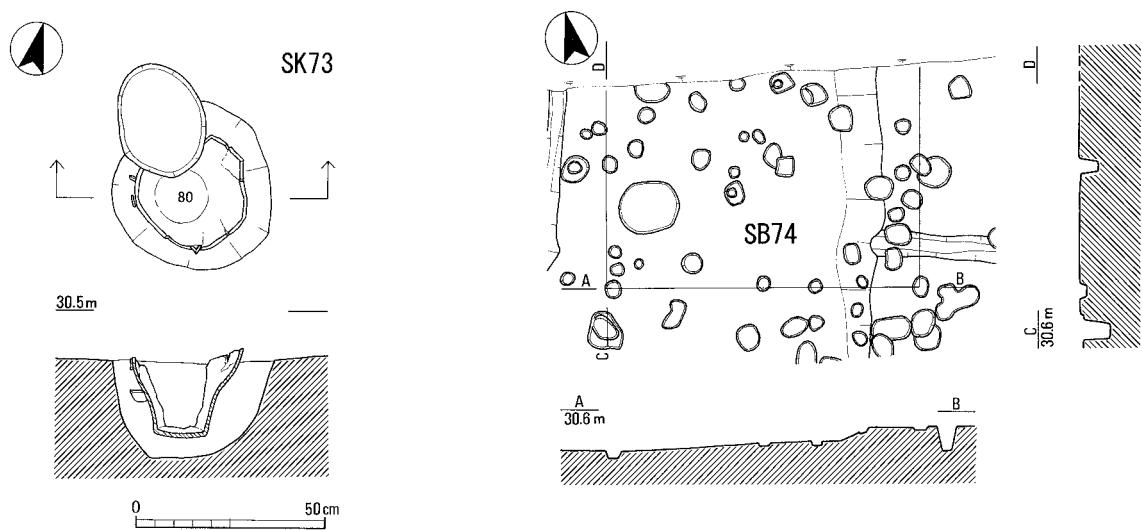
88~89は小椀で第4型式、90は灰釉陶器椀で、H-72の古い段階である。91~103は山茶椀である。92



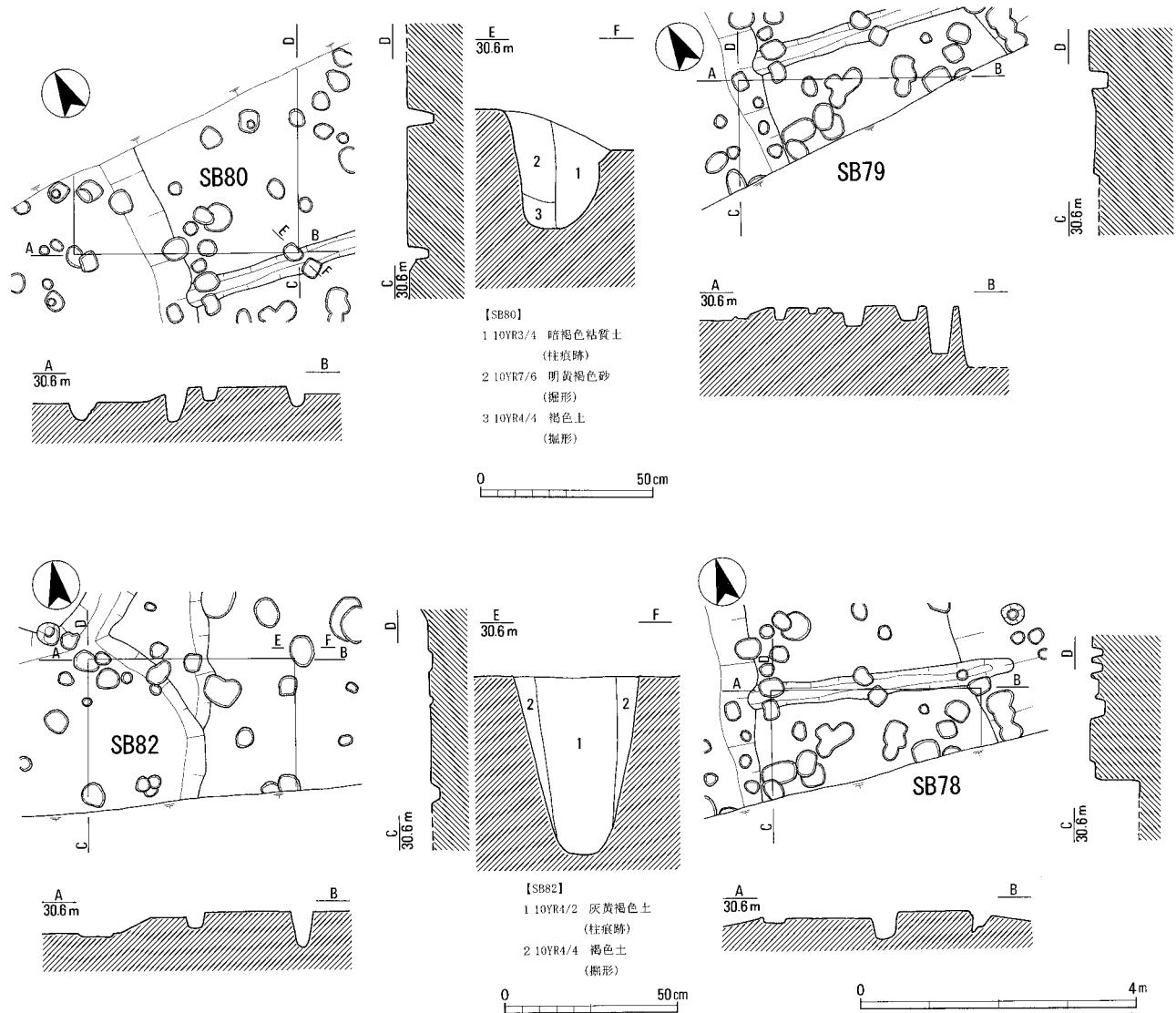
第19図 D地区遺構平面図 (1 : 200)



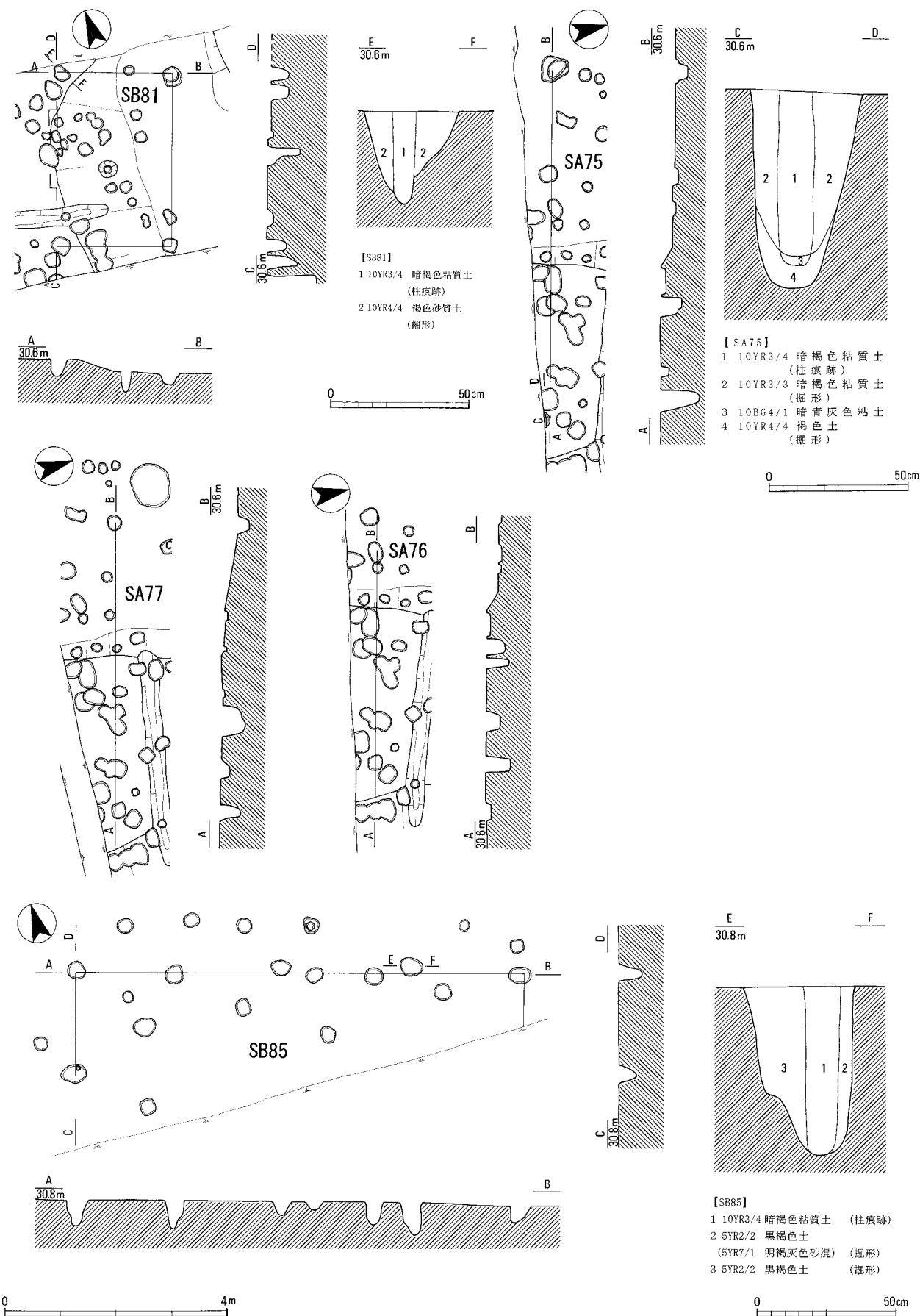
第20図 D地区土層断面図（1：100）



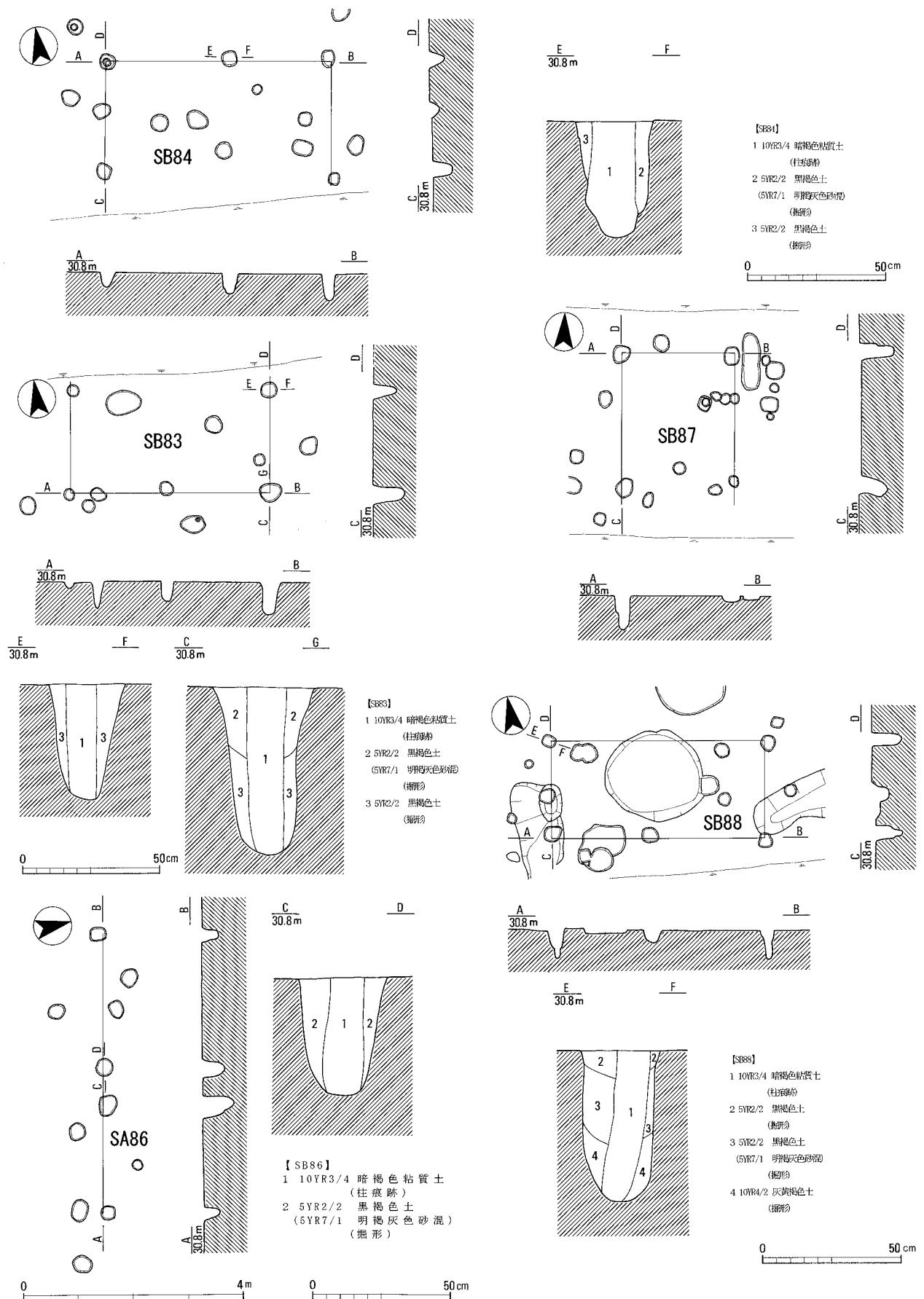
第21図 SK73実測図① (1 : 20)



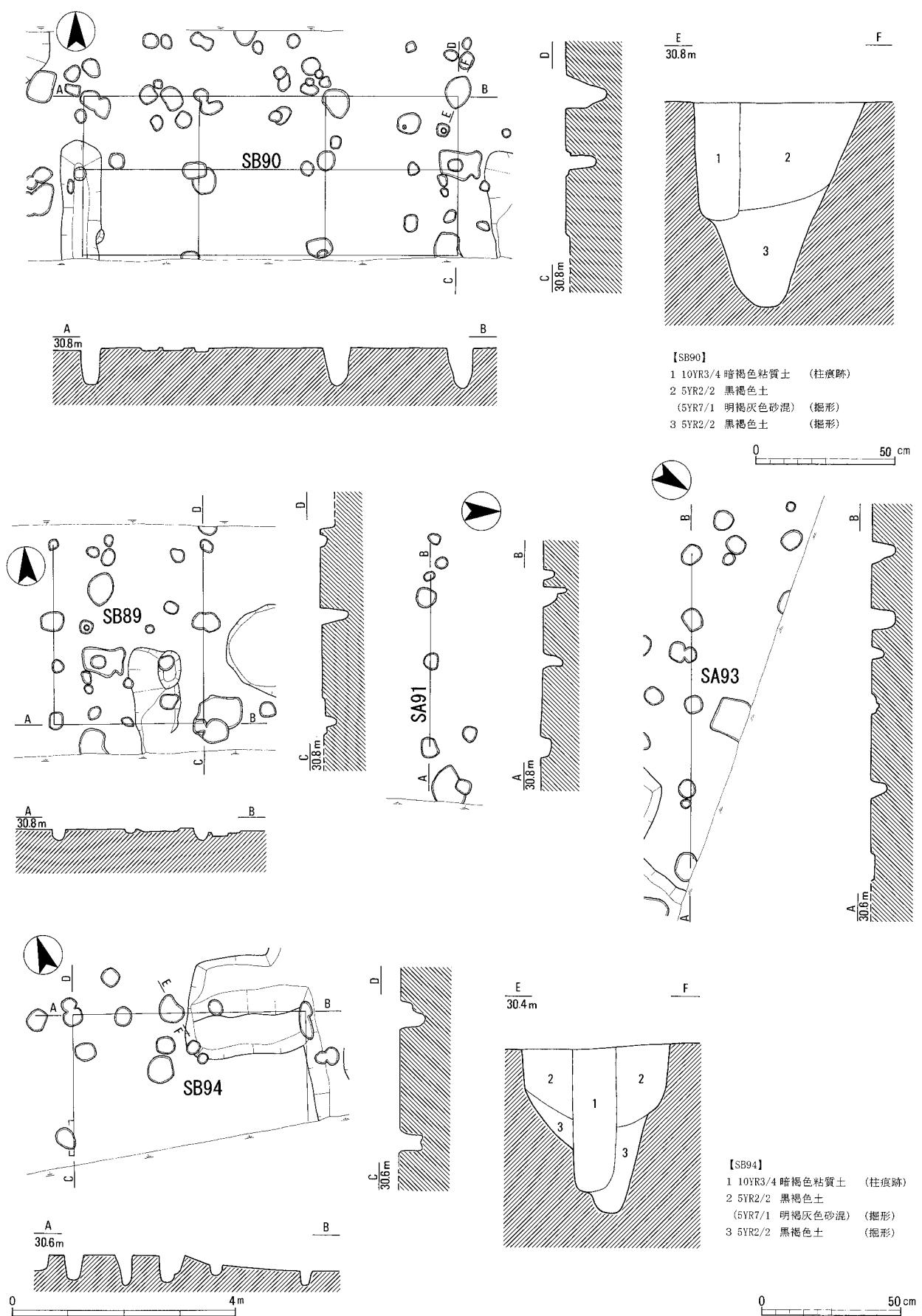
第22図 挖立柱建物実測図① (1 : 20、1 : 100)



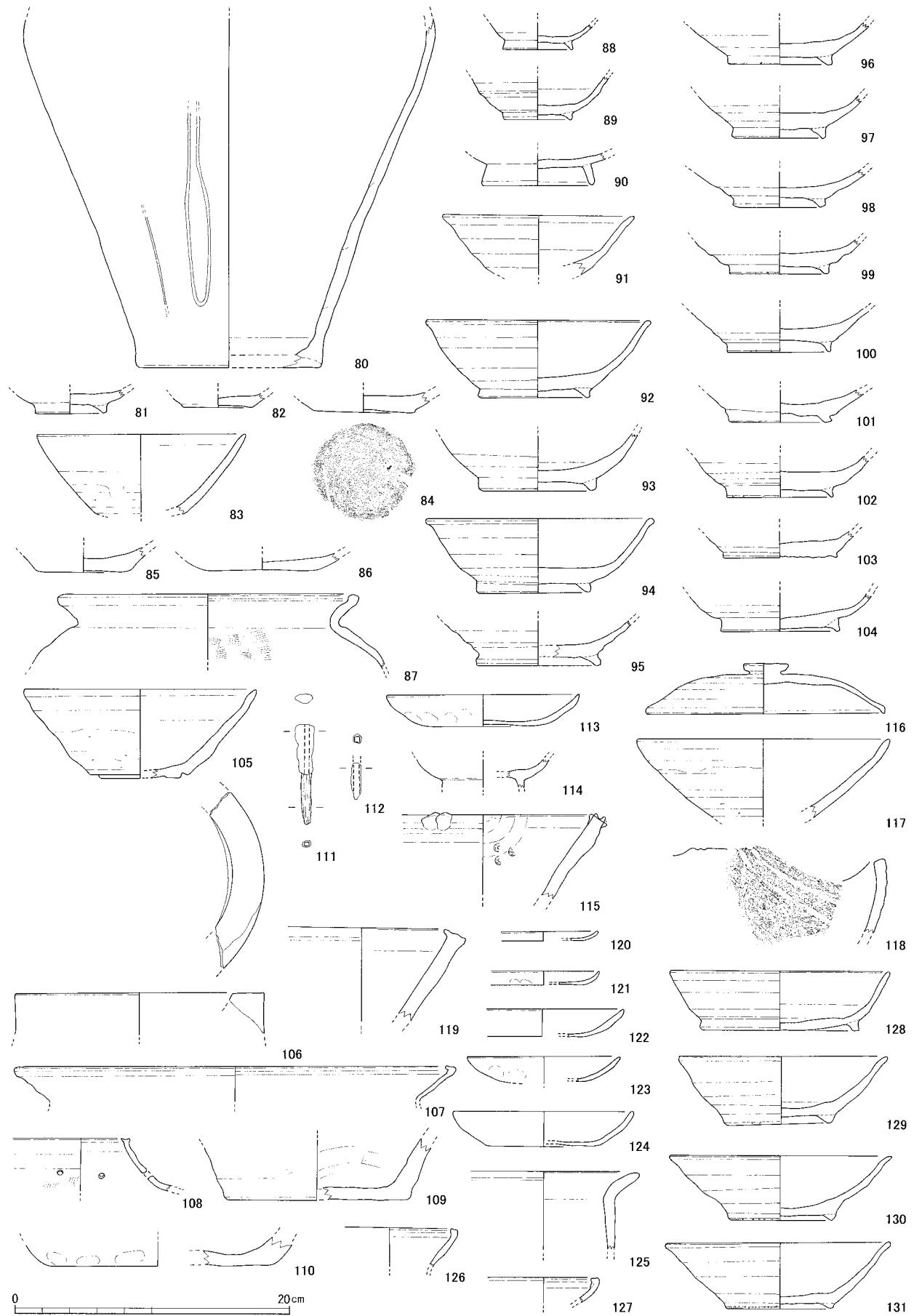
第23図 挖立柱建物・柱列実測図② (1 : 20、1 : 100)



第24図 掘立柱建物・柱列実測図③ (1 : 20、1 : 100)



第25図 掘立柱建物・柱列実測図④ (1 : 20、1 : 100)



第26図 出土遺物実測図① (1 : 4)

～98は第4型式、99～103は第5型式であろう。96は内面がよく使用され、炭化物が付着している。

#### S D62出土遺物 (104)

104は第6型式の山茶椀であろう。

#### S D63出土遺物 (105～106)

105は瀬戸美濃製品平椀で、古瀬戸後IV期新段階である。106は凝灰質砂岩製の茶臼である。

#### S D64出土遺物 (107～110)

107は南伊勢系の土師器鍋で、第4型式b段階である。108は南伊勢系の土師器茶釜形の口縁部で、焼成後穿孔がある。109～110は常滑製品で、109は壺の底部で10か11型式、110は鉢の底部で9～11型式頃のものである。

#### S D67出土遺物 (111～113)

111～112は鉄鏃と思われる。113は中北勢系の土師器皿で風化が著しい。

#### S D68出土遺物 (114～115)

114は緑釉陶器で混入遺物。115は10型式の常滑製品片口鉢で、竹管状工具による刺突が見られる。

#### S D62出土遺物 (116～117)

116は須恵器杯で、非常に軟質であり、混入遺物である。117は瀬戸美濃製品平椀で古瀬戸後IV期新段階、内面に2箇所トチン跡が残る。

#### S D70出土遺物 (118)

118は縄文時代中期後葉の鉢の波状口縁部で、混入遺物である。

#### S B90出土遺物 (119)

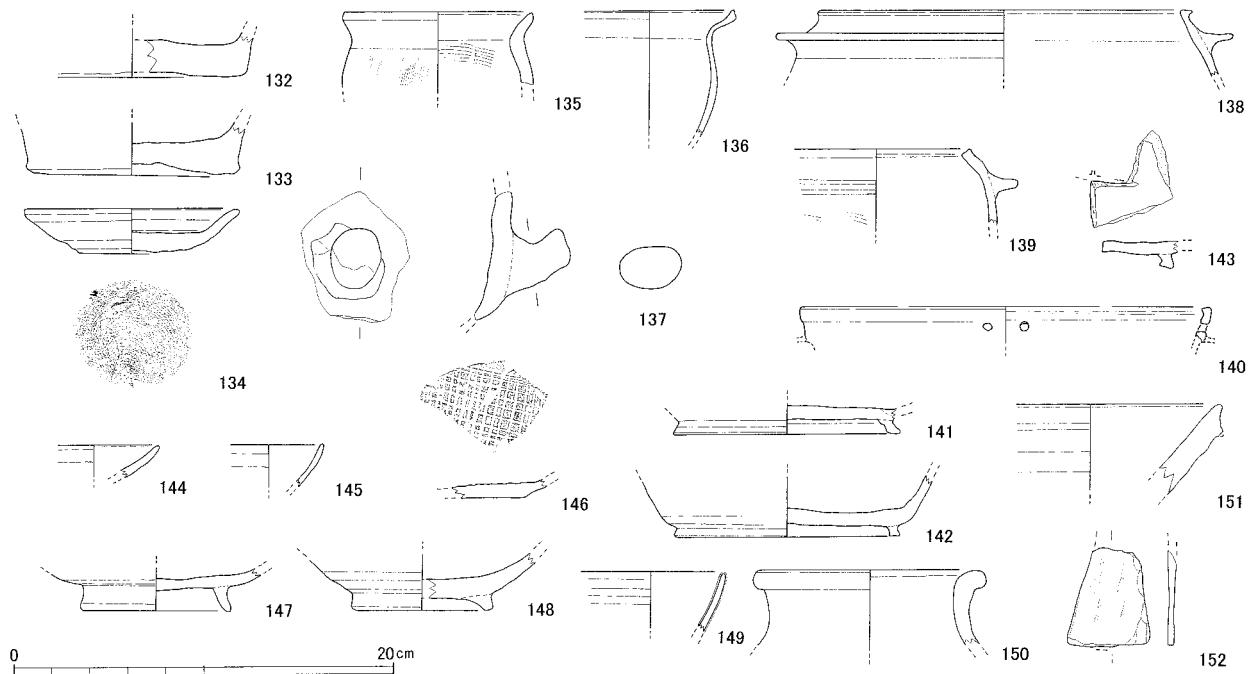
119は常滑製品片口鉢で9型式のものである。

#### ピット出土遺物 (120～131)

120～124は土師器皿で、120～121は南伊勢系、122～123は中北勢系である。122は2次的に火を受けている。125は土師器甕で古代のものである。126～127は南伊勢系の土師器鍋の口縁部で、126は第4段階b型式、127は第4段階a型式である。128は須恵器杯で、非常に軟質である。129～131は山茶椀で、129～130は第5型式、131は第7型式である。

#### 包含層出土遺物 (132～151)

132～133は縄文土器の鉢の底部である。134は口クロ成形の土師器皿、135～136は土師器甕で、136は9世紀代のものであろう。137は鍋の把手である。138～140は中北勢系の土師器羽釜である。140は口縁端部に面を持ち、口縁部外面に煤が付着し、焼成前穿孔が1箇所残存している。小片のため全体の器形はわからないが、おそらく近世の瓦質の焰焰（地蔵前遺跡出土遺物62参照）よりは前段階の土器と思われる。



第27図 出土遺物実測図② (1 : 4)

141～143は須恵器杯の底部、142はやや軟質、143は底部に焼成前に切り込みを入れている。144～145は白磁小皿でB群。146は瀬戸美濃製品卸皿で卸目にベンガラが付着し、古瀬戸後期のものである。147は灰釉陶器椀でH-72、148は山茶椀で第5型式

である。149は青磁椀である。150～151は常滑製品。150は玉縁口縁壺の口縁部で6b～7型式、151は片口鉢の口縁部で11～12型式のものである。152は凝灰質泥岩製の砥石である。

(酒井)

## 第4節 第2次調査

### 1 遺構

調査区の基本層序は、第28図北半部で、第1層表土、第2層褐灰色土、第8層にぶい褐色土、第9層褐灰色砂質土、第11①層にぶい黄褐色砂質土（検出面）である。また、南半部では砂層と岩盤の互層（第11②～⑦層）が、検出面となる。遺構は調査区北半部に密集し、S E 105を境に南では見られなくなる。

#### 鎌倉～室町時代の遺構

掘立柱建物はすべて調査区北半部に集中している。調査区西側は貯水池造成の際の土取りにより旧地形が改変されていると思われる。

##### a 掘立柱建物

S B 110（第29図） 柱間が1.55+1.8+2.8mと2.05+2.6m、梁行が2.7mである。柱間は不揃いであるが、一応柱間3間以上×梁行1間の建物とした。建物方向はN 7° Eで、柱穴から第8型式と思われる山茶椀底部片が出土している。

S B 111（第29図） 柱間3間×梁行1間の建物である。建物方向はN 4° Eで、S B 115と同じ方向である。柱間は、柱間が1.5+2.1+1.8mで、梁行は1.95mである。柱穴から土師器羽釜小片が出土している。

S B 106（第29図） 柱間は、柱間が0.9+1.25+1.35+1.3mと1.0+0.95+1.85+1.0m、梁行が1.1+1.2mである。S B 108と方向が同じため、柱間4間×梁行2間の建物とした。建物方向はN 11° Eで、柱穴から土師器鍋体部片が出土している。

S B 116（第29図） 柱間は、柱間が1.8mの等間と1.65+2.0mでやや不揃い、梁行が1.2mで、一応柱間2間以上×1間の建物とした。建物方向はN 34° Eで、柱穴から土師器小片が出土している。

S B 108（第29図） 柱間2間×梁行2間の建物で

ある。建物方向は、N 11° Eで、S B 107と同じである。柱間は柱間が1.65+2.55m、梁行は1.2+1.5mで柱穴から古瀬戸後II期の平椀（184）が出土している。

S B 115（第30図） 柱間2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN 4° Wで、S B 111と方向が同じである。柱間は柱間が2.25+2.4m、梁行は1.65+2.25mである。柱穴から第7型式の山茶椀が出土している。

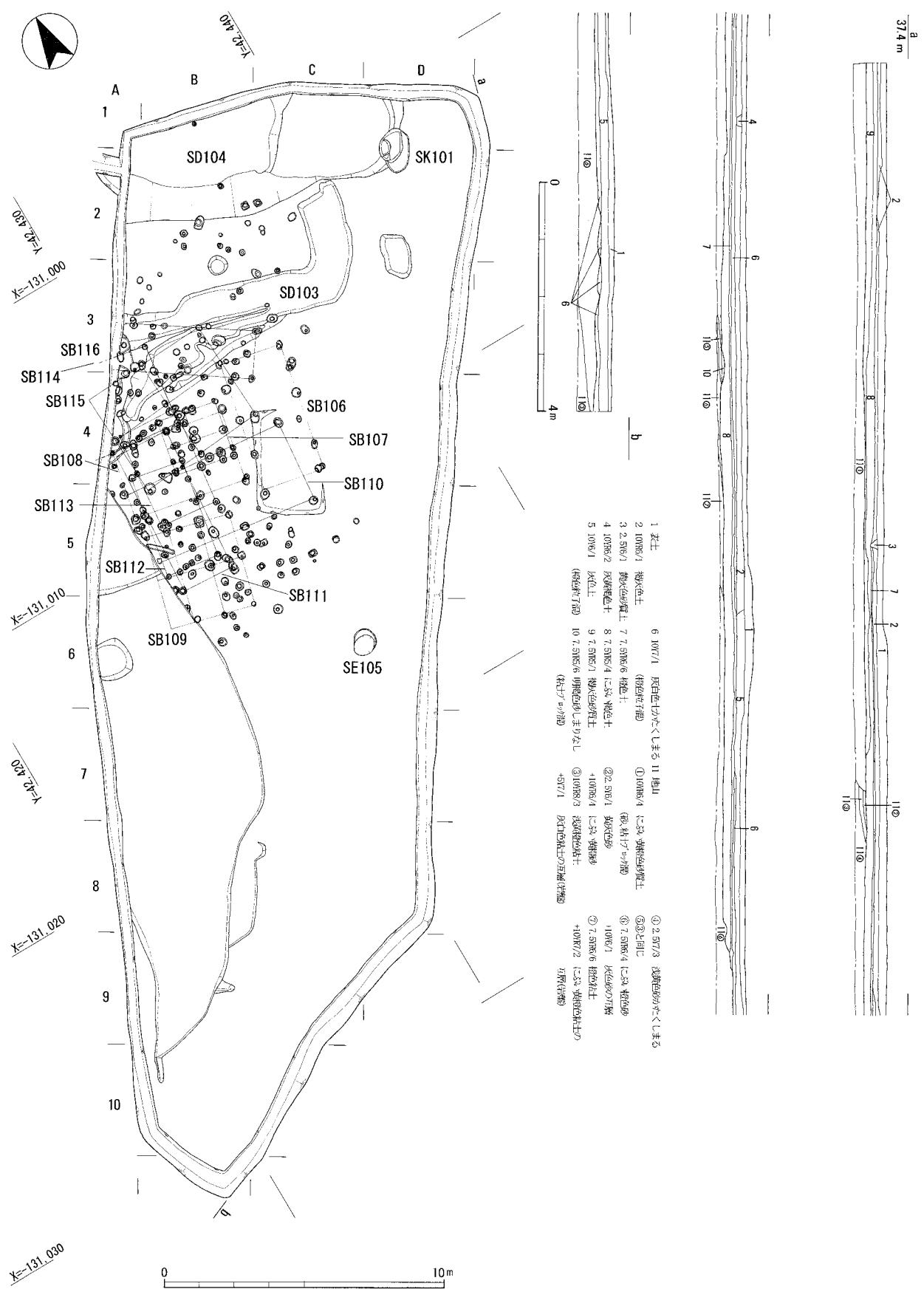
S B 109（第30図） 柱間3間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN 16° Wで、柱間は柱間が0.9+1.1+1.1m、梁行は1.5+1.8mで小規模な建物である。柱穴の底には根石と考えられる石を確認しているものもある。柱穴から第7型式の山茶碗（186）が出土している。

S B 107（第30図） 柱間2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向は、N 11° Wで、柱間は柱間が1.05+1.15m、梁行は1+1.05mと非常に小規模な建物である。S B 108と方向が同じである。柱穴から第7型式の山茶椀が出土している。

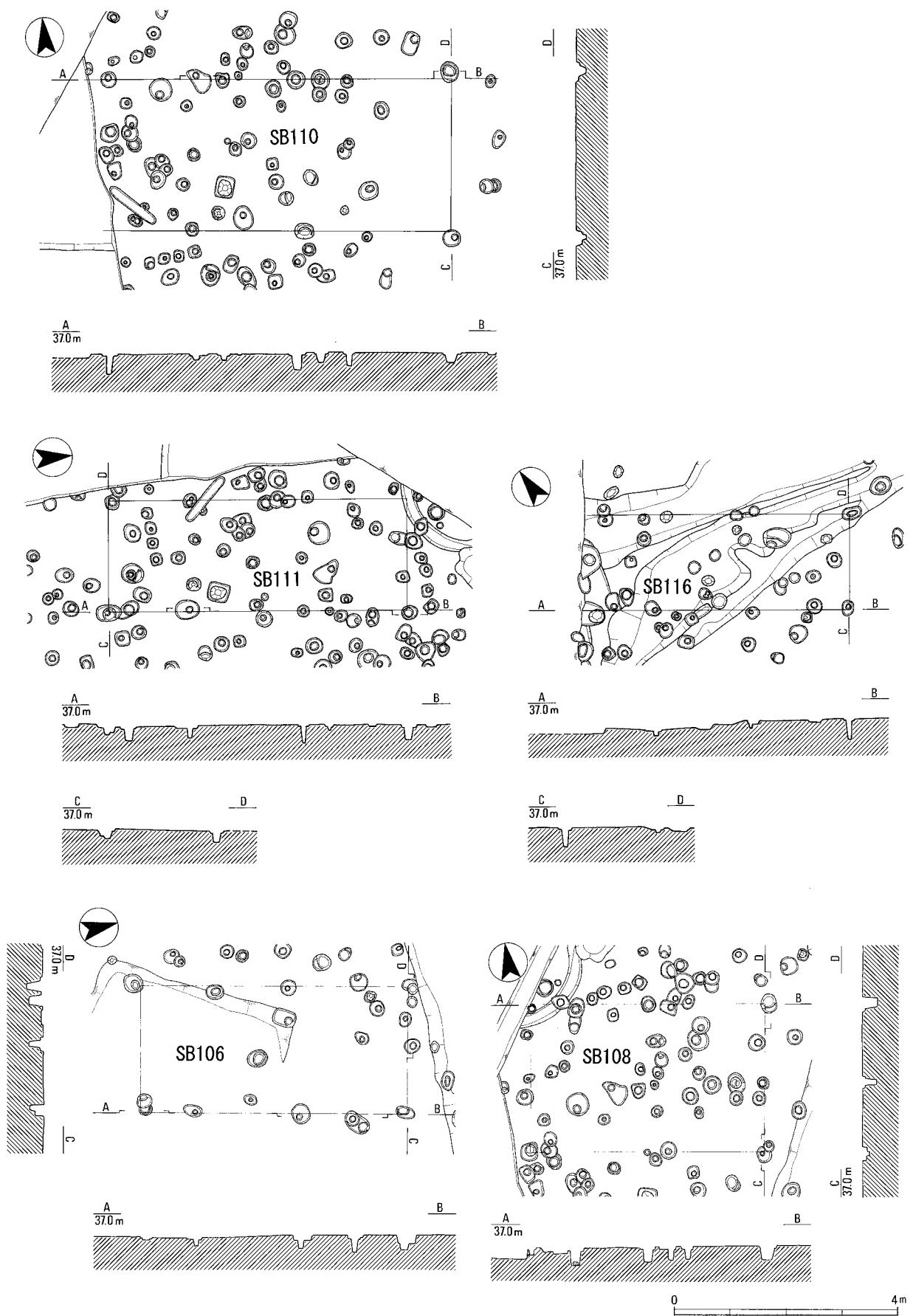
S B 114（第30図） 柱間1間以上×梁行2間の建物と考えられる。建物方向はN 8° Eで、S B 110とほぼ同じ方向である。柱間は、柱間が1.5m、梁行が1.55+1.65mである。柱穴から遺物は出土していないが、S B 110とほぼ同時期であろう。

S B 113（第30図） 柱間2間×梁行1間の建物で、建物方向はN 6° WでS B 110とほぼ同じ。柱間は、柱間が2.1+1.5m、梁行が2.25mである。柱穴から遺物は出土していないが、S B 110とほぼ同時期であろう。

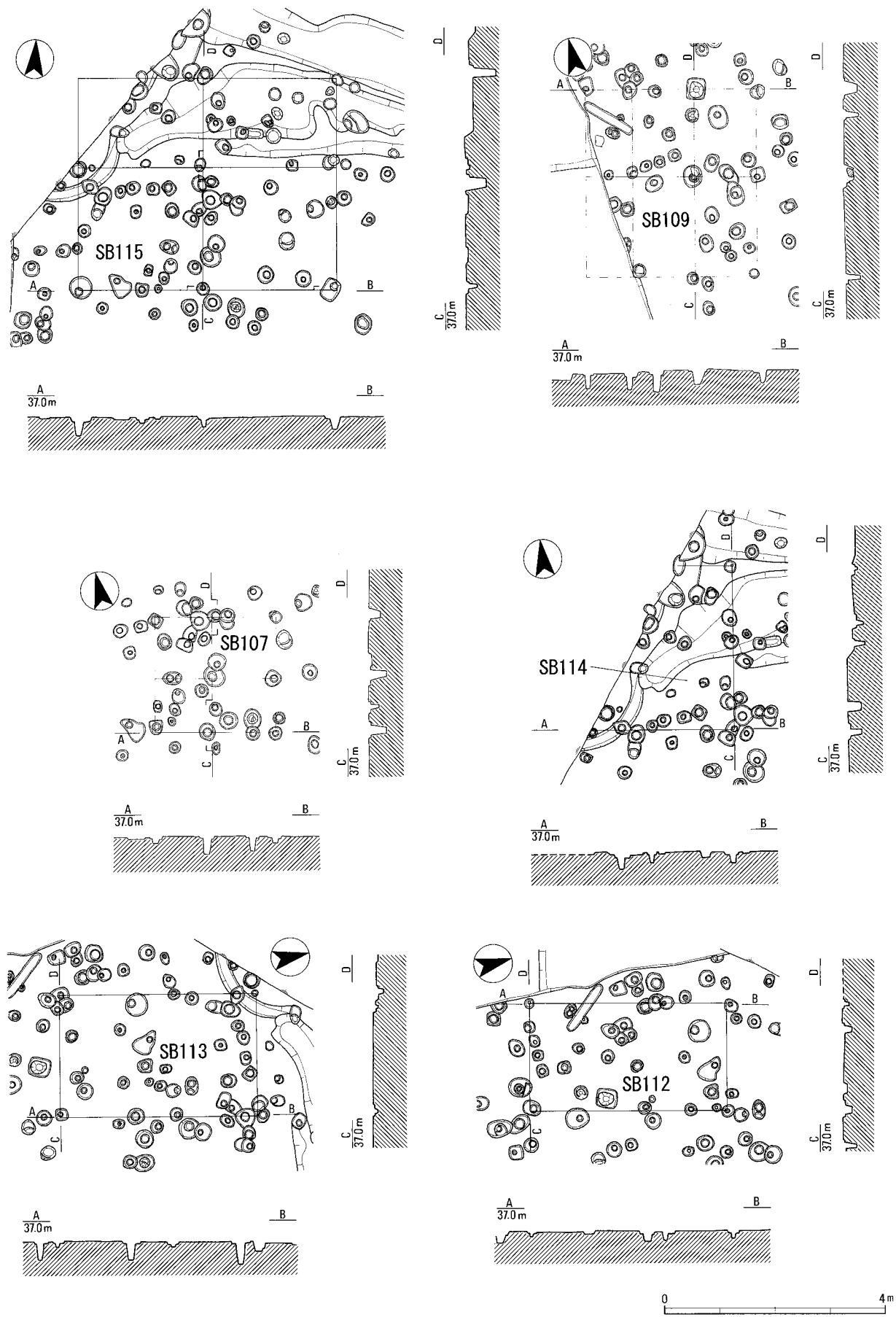
S B 112（第30図） 柱間2間×梁行1間の建物である。建物方向はN 10° Eで、柱間は柱間が2.1+1.5m、梁行は1.95mである。柱穴からは第2段階の南伊勢系の土師器鍋が出土している。（山口・酒井）



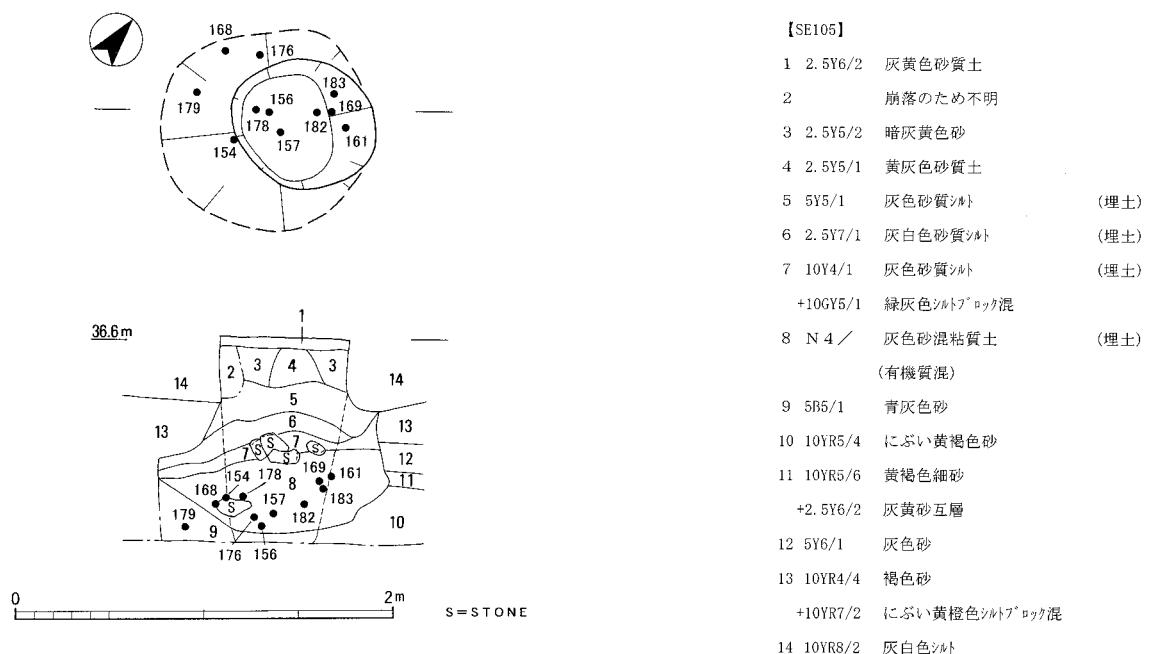
第28図 2次調査区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



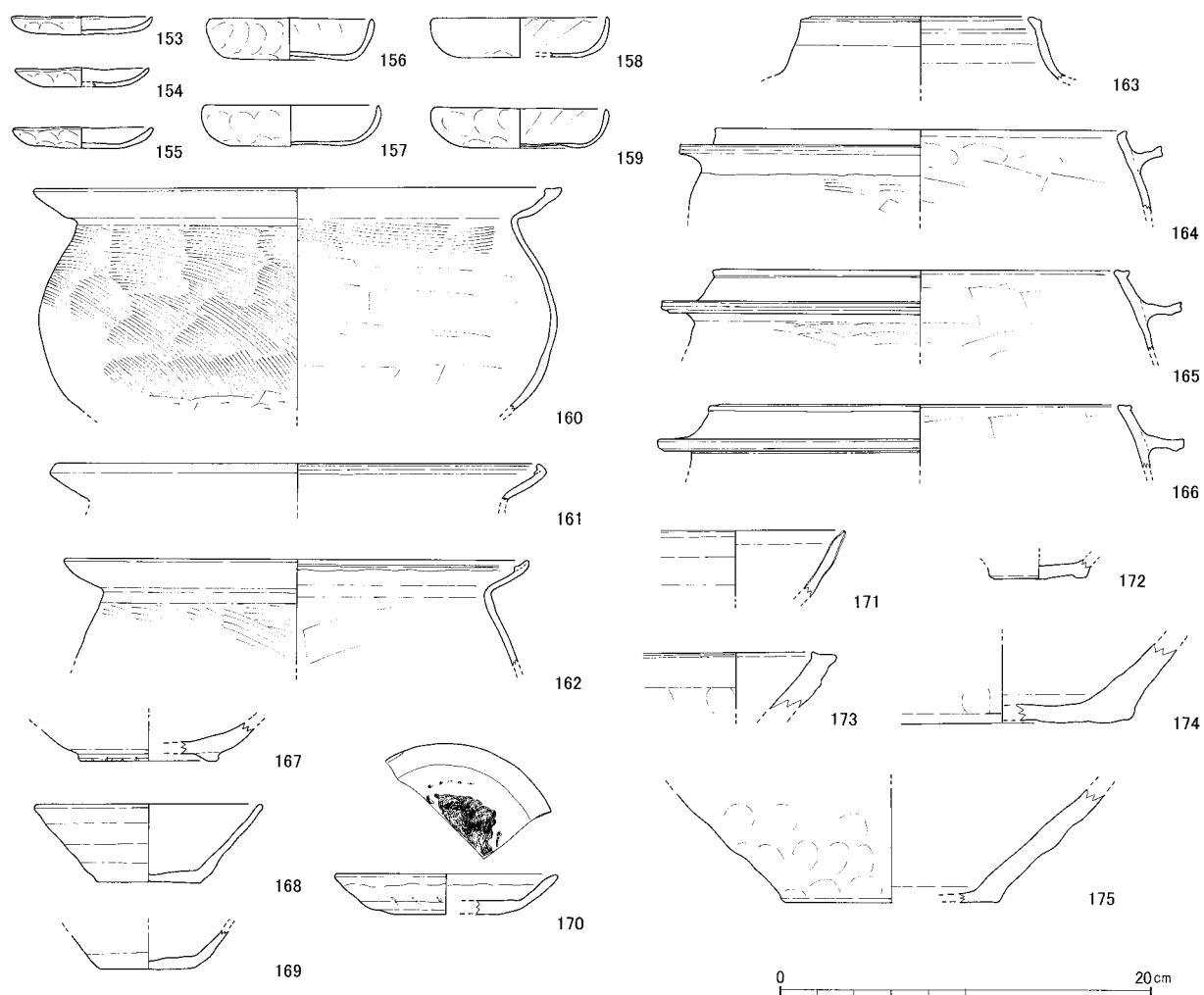
第29図 挖立柱建物実測図① (1 : 100)



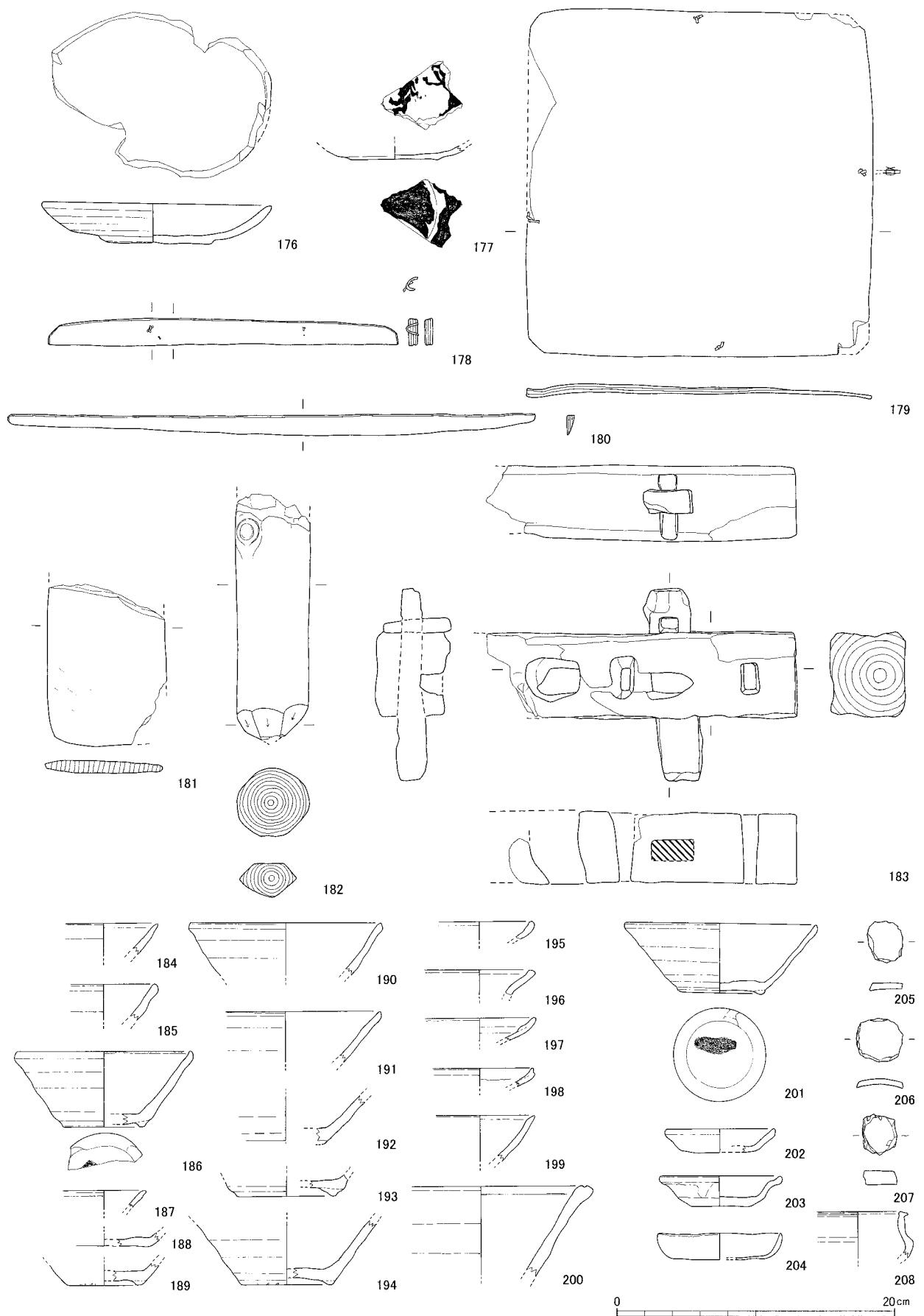
第30図 挖立柱建物実測図② (1 : 100)



第31図 S E 105実測図 (1 : 40)



第32図 出土遺物実測図① (1 : 4)



第33図 出土遺物実測図② (1 : 4)

## b 井戸

S E 105（第31図） 底径約0.7m、深さ約1mの素掘りの井戸である。岩盤を掘りぬいて掘削しており、岩盤層（第14層）下からは湧水を確認した。主な出土遺物は、土層図第8層から土師器皿（154・156）・鍋（161）、山茶椀（168）、常滑製品片口鉢（174）、漆椀（176）等と木製品が出土している。（酒井）

## 2 遺物

### S E 105出土遺物（153～183）

S E 105からは、中北勢系・南伊勢系の土師器、瀬戸美濃製品、常滑製品が共伴して出土し、極めて良好な資料である。実測可能な遺物はすべて図示した。167は上層の混入遺物であり、他は南伊勢中世IV-a期の時期にあたる。

**土師器** 164以外は、すべて南伊勢系の土師器である。153～159は皿で、口径7～7.5cmの小型のもの（153～155）と口径8.6～9.4cmの大型のもの（156～159）がある。157・159は内面に工具ナデの痕跡が残る。

160～162は鍋で、160・162は第3段階b型式、161は第4段階b型式のものである。163は茶釜形の口縁部である。164～166は羽釜である。164は、口縁端部が内傾し、中北勢系である。165～166は同一個体で、鍔のナデ部分下半に段が入る。

**陶器** 167～169は山茶椀である。167は第5型式、168～169は第10型式のものである。167は上層出土遺物（土層図1～4層）で、混入遺物である。170は瀬戸美濃製品縁釉小皿で古瀬戸後I期、内面に漆が付着している。171は瀬戸美濃製品平椀の口縁部で後IV期古段階、172は平椀の底部で後IV期である。

173～175は常滑製品である。173は片口鉢の口縁部で、口縁端部に平坦面を持ち10型式の古い様相を持つ。外面には、焼成前のひび割れが見られる。174～175は片口鉢の底部で、9か10型式である。

**木製品** 176～177は漆椀である。176は内外面を黒漆、177は内面に朱漆と黒漆、外面を黒漆が施され

ている。

178～180は折敷の底板であろう。178は2箇所皮紐綴じが、179は四方に1箇所ずつ皮紐綴じが残る。

181は農具か、182は杭である。183は馬鍬と思われ、大きい個体は二葉松類<sup>①</sup>、小さい個体はアカガシ亜属である。（酒井）

### 掘立柱建物出土遺物（184～186）

184～185は、S B 108の柱穴出土遺物である。184は瀬戸美濃製品灰釉平椀で、古瀬戸後II期、185は山茶椀で第6型式頃である。186はS B 109の柱穴から出土した山茶椀で第7型式。底部内面に墨痕、外面上に墨書が認められる。

### ピット出土遺物（187～200）

187は灰釉陶器の口縁部である。188～194は山茶椀である。188は無高台で、底部内面中央に指圧痕が認められることから第8か9型式のものと考えられる。189～192・194は第7型式で、192は高台が剥離している。193は第6型式と考えられる。

195・197～198は南伊勢系の土師器鍋である。195は胎土の小石粒の含み具合から第3段階併行、196は南伊勢系を模倣した鍋と思われる。197は口縁を内面に折り返し、第3段階a型式、198は第2段階のものである。199は瀬戸美濃製品灰釉平椀で、古瀬戸後III期である。200は第8型式の片口鉢である。口縁部上面に沈線が施されている。

### 包含層出土遺物（201～208）

201は山茶椀第6型式、底部外面に「一」のような墨書がある。202は山皿で、口縁端部が尖る特徴から第8型式のものと考えられる。203は瀬戸美濃製品折縁小皿で、古瀬戸後II期である。204は南伊勢系の土師器皿で、体部は丸く内彎し、口縁端部は尖る。205～207は加工円盤である。205は肥前産、206は美濃産徳利を、207は瀬戸美濃製品擂鉢を加工している。大きさは径2.5～3.3cm程である。208瀬戸美濃製品袴腰形香炉で古瀬戸後III期である。（山口）

## 第5節　まとめ

岩瀬遺跡では、縄文時代、古代、鎌倉～室町時代の遺構を確認した。主体を占めるのは、鎌倉～室町

時代の遺構である。

縄文時代の遺構は、中期末～後期初頭の土坑1基、

古代の遺構は、土坑1基を確認した。

鎌倉～室町時代の遺構は、掘立柱建物40棟、土坑

[註]

- ①『亀山市埋蔵文化財分布地図』(亀山市教育委員会、1993年)
- ②以下古瀬戸製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下古瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)
- ③以下土師器については、伊藤裕偉氏に実見の上ご教示を得た。以下、南伊勢系土師器鍋・羽釜は伊藤裕偉氏の編年により記述する。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年)
- ④以下常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。以下常滑製品は中野晴久氏の編年により記述する。中野晴久「常滑・渥美」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)
- ⑤以下山皿・山茶椀は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ⑥以下登窯製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下登窯製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』(瀬戸市歴史民俗資料館、1987年)、藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研

6基、井戸5基、溝18条からなる区画を9箇所確認した。

(酒井)

- 究紀要VII』(瀬戸市歴史民俗資料館、1988年)、藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』(瀬戸市歴史民俗資料館、1989年)
- ⑦石材については、愛知県埋蔵文化財センター堀木真美子氏のご教示を得た。
- ⑧奥義次氏にご教示を得た。
- ⑨山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年)
- ⑩前掲①に同じ。
- ⑪服部芳人「藤原東部・員弁地区内遺跡」(『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県教育委員会、1989年)
- ⑫森川常厚『磐城山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ⑬愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。
- ⑭前掲①に同じ
- ⑮伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」(『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』2004年)
- ⑯奥義次氏のご教示を得た。
- ⑰(財)元興寺文化財研究所による樹種鑑定報告書による。

遺構番号	調査時遺構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地区	時期	規模				建物方向	備考(切り合い:古い→新しい)
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )		
SD1	SD1	H14	1	G地区		D2～D3・E2～E3	室町						SZ2との切り合い不明
SZ 2	SK 2	H14	1	G地区		C4～C5・D4～D6・E5～E6							SZ2→SD3 搅乱の可能性高い
SD3	SD3	H14	1	G地区		C5・D5～D7・E6～E8							SZ2→SD3
SK4	SK4	H14	1	G地区	第10図	E1～E3	室町						
SE 5	SK 5	H14	1	G地区		D2	室町						
6	SK 6	H14	1	G地区									SK4と同一遺構。欠番
SD7	SD7	H14	1	G地区		D7							SD7→SD9。遺物なし
SE 8	SK 8	H14	1	G地区		D7～D8	鎌倉						
SD9	SD9	H14	1	G地区		B7・C6～C7	鎌倉						SD7→SD9
SK 10	SK 10	H14	1	G地区		D9～D10・E9～E10	鎌倉						
SK 11	SK 11	H14	1	G地区		A8	平安						
SB 12		H14	1	G地区	第9図	A7～A8・B7～B8	鎌倉	2×1	3.60	2.55	9.18	21	
SB 13		H14	1	G地区	第9図	C6～C7・D7	中世?	2×1	3.00	3.00	9.00	41	
SB 14		H14	1	G地区	第8図	C7～C8・D7～D8	鎌倉	2×2	3.45	3.00	10.35	33	
SB 15		H14	1	G地区	第7図	C7～C9	室町	3×1	5.40	1.65	8.91	27	
SB 16		H14	1	G地区	第7図	B8・C7～C8・D7～D8	室町?	3×1	7.05	1.80	12.69	27	SD7→SB16 SB15と方向が同じ
SB 17		H14	1	G地区	第9図	C8～C9・D8～D9	鎌倉?	2×1	3.45	2.55	8.80	24	SB20とほぼ方向が同じ
SB 18		H14	1	G地区	第8図	C8・D8～D9	鎌倉?	2×2	4.80	2.55	12.24	20	SB19と方向が同じ
SB 19		H14	1	G地区	第7図	B9・C9～C10・D9～D10・E9～E10	鎌倉	4×2	7.80	4.50	35.10	20	
SB 20		H14	1	G地区	第8図	C9～C10・D9～D10	鎌倉?	2×1	3.90	2.85	11.12	23	SB17とほぼ方向が同じ
SB 21		H14	1	G地区	第8図	C10・D10	中世?	2×1	4.05	2.40	9.72	14	
SB 22		H14	1	G地区	第9図	B8～B9	中世?	2×1	2.85	2.40	6.84	29	
SB 23		H14	1	G地区	第8図	B9～B10・C9～C10	鎌倉	2×1	4.50	2.55	11.48	21	SB12と方向が同じ
SB 24		H14	1	G地区	第8図	C2～C3・D2～D3	中世?	2×1	4.50	2.25	10.13	31	
SA 25		H14	1	G地区	第9図	C2～C3・D3	中世?		5.85				
SK 26		H14	1	G地区		A9～A10・B9～B10	縄文?						
31	1	H14	1	F地区									欠番
32	2	H14	1	F地区									欠番
SD33	SD3	H14	1	F地区		I7～I11	室町						SD38→SD33

第5表 遺構一覧表①

遺構番号	調査時遺構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地 区	時期	規 模				建物方向	備 考 (切り合い:古い→新しい)
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )		
SD34	SD4	H14	1	F地区		H9・19	室町						SD40→SD36→SD34。 範囲確認Aトレンチの可能性あり。
SK35	SK5	H14	1	F地区		I7～I8・J7～J8・K7 ～K8・L7～L8	室町						畦畔の可能性あり。
SD36	SD6	H14	1	F地区		H7～H10	室町						SD40→SD36→SD34
SK37	SK7	H14	1	F地区		K9～K10・L9～L10	鎌倉						南西隅が範囲確認 C トレンチの可能性あり。
SD38	SD8	H14	1	F地区		I7～I9・J9～J10・ K10・L10	室町						SD38→SD33
SD39	SD9	H14	1	F地区		I10～I11・J10～J11	鎌倉						SD39→SK44。範囲確認 D トレンチの可能性あり。
SD40	SD10	H14	1	F地区		H10～H11・I10	室町						SD40→SD36→SD34
41	SD11	H14	1	F地区			室町						SD38と同一遺構。欠番
SD42	SD12	H14	1	F地区		J10・K10・L10	鎌倉						
SK43	SK13	H14	1	F地区		J10	中世						
SK44	SK14	H14	1	F地区		J10～J11	鎌倉						SD39→SK44
SB45		H14	1	F地区	第14図	K8～K9・L8～L9	鎌倉	2×2≤	3.00	3.6≤	10.8≤	22	
SZ46				F地区		I8～I9・J8～J10・K9							SD38→SZ46
SD51	SD1	H14	1	C地区		B11・C11	鎌倉						
SB52		H14	1	C地区	第17図	B8	鎌倉	1≤×1	1.65≤	1.80	2.97≤	20	
SD61	SD1	H14	2	D地区		A4～A6・B4～B6	鎌倉						SD61→SD62
SD62	SD2	H14	2	D地区		B3～B4	鎌倉						SD61→SD62→SB78→SB80
SD63	SD3	H14	2	D地区		A14・B14	室町						
SD64	SD4	H14	2	D地区		A14～A16・B14～ B16	室町						
SE65	SK5	H14	2	D地区		A19・B19	鎌倉						
SK66	SK6	H14	2	D地区		B19	鎌倉?						
SD67	SD7	H14	2	D地区		A25～A26・B25～ B26	室町						
SD68	SD8	H14	2	D地区		A24～A25・B24～ B25	室町						
SD69	SD9	H14	2	D地区		A27～A28・B27～ B28	室町						
SD70	SD10	H14	2	D地区		A29・B29	室町						最終埋没は近世
SE71	SK11	H14	2	D地区		A30・B30	室町						
SD72	SD12	H14	2	D地区		A30～A31・B30	室町						最終埋没は近世
SK73	SK13	H14	2	D地区	第21図	A4	繩文						
SB74		H14	2	D地区	第22図	A3～A4・B3～B4	中世?	2≤×2	1.65≤	4.20	6.93≤	7	SB83と方向が同じ
SA75		H14	2	D地区	第23図	B3～B4	中世?		6.00				SB74と方向が同じ
SA76		H14	2	D地区	第23図	B3～B4	鎌倉?		4.65				
SA77		H14	2	D地区	第23図	B3～B4	鎌倉?		5.20				SB78と方向が同じ
SB78		H14	2	D地区	第22図	B3～B4	鎌倉	1≤×2	1.50≤	3.00	4.50≤	16	SA77と方向が同じ。 SD61→SD62→SB78
SB79		H14	2	D地区	第22図	B3～B4	中世?	1≤×2	1.50≤	3.30	4.95≤	27	
SB80		H14	2	D地区	第22図	A3～A4・B4	鎌倉	1≤×2	1.95≤	3.30	6.44≤	18	SD62→SB80
SB81		H14	2	D地区	第23図	A4～A5・B4～B5	鎌倉	2×1	3.15	2.10	6.62	15	
SB82		H14	2	D地区	第22図	A5～A6・B5～B6	鎌倉?	1≤×2	1.95≤	3.00	5.85≤	6	
SB83		H14	2	D地区	第24図	A10・B10・A11	中世	1≤×2	1.80≤	3.60	6.48≤	8	
SB84		H14	2	D地区	第24図	A12～A13・B12～B13	中世?	1≤×2	2.10≤	4.05	8.51≤	8	SB83と方向が同じ
SB85		H14	2	D地区	第23図	A11～A12・B10～B13	鎌倉	4×2≤	8.10	1.8≤	14.58≤	18	
SA86		H14	2	D地区	第24図	B11～B13	鎌倉		5.10				
SB87		H14	2	D地区	第24図	A13・B13	鎌倉	1≤×1	2.10≤	2.40	5.04≤	2	
SB88		H14	2	D地区	第24図	A19～A20・B19～B20	室町?	2×1	3.90	1.80	7.02	4	
SB89		H14	2	D地区	第25図	A18～A19・B18～B19	鎌倉	2≤×2	3.15≤	2.70	8.51≤	3	
SB90		H14	2	D地区	第25図	A17～A18・B17～B18	室町	3×2≤	6.75	2.8≤	18.90≤	2	
SA91		H14	2	D地区	第25図	B20～B21	中世?		3.00				欠番
92													
SA93		H14	2	D地区	第25図	A26～A28	鎌倉		5.70				
SB94		H14	2	D地区	第25図	A27・B27～B28	中世?	1≤×2	2.25≤	4.20	9.45≤	11	
SD95		H14	2	D地区		A7～A8・B7～B8	室町?						
SK101	SK1	H15	2			D1～D2	室町						SD104→SK101
102	SK2	H15	2				室町						SD104と同一遺構。欠番
SD103	SD3	H15	2			A3・B3・C2～C3	時期不明						
SD104	SD4	H15	2			A1～A2・B1～B2・ C1～C2・D1～D2	室町						SD104→SK101 SK102と同一遺構
SE105	SK5	H15	2		第31図	C6・D6	室町						
SB106		H15	2		第29図	B3～B4・C3～C5	室町?	4×2	4.80	2.30	11.04	11	SB108と方向が同じ
SB107		H15	2		第30図	B4	鎌倉	2×2	2.20	2.05	4.51	11	
SB108		H15	2		第29図	A4～A5・B4～B5	室町	2×2	4.20	2.70	11.34	11	SB107と方向が同じ
SB109		H15	2		第30図	B5～B6・C6	鎌倉	3×2	3.10	3.40	10.54	16	
SB110		H15	2		第29図	A5・B4～B5・C4～ C5	鎌倉	3≤×1	6.15≤	2.70	16.61≤	7	
SB111		H15	2		第29図	A4～A5・B4～B5	室町	3×1	5.40	1.95	10.53	4	
SB112		H15	2		第30図	A4・B4～B5	鎌倉	2×1	3.60	1.95	7.02	10	
SB113		H15	2		第30図	A4・B4～B5	鎌倉?	2×1	3.60	2.25	8.10	6	SB110とほぼ方向が同じ
SB114		H15	2		第30図	A3～A4・B3～B4	鎌倉?	1≤×2	1.50≤	3.00	4.50≤	8	SB110とほぼ方向が同じ
SB115		H15	2		第30図	A3～A4・B3～B5・ C4	鎌倉	2×2	4.65	3.90	18.14	4	SB111と方向が同じ
SB116		H15	2		第29図	A3・B3～B4・C3	中世	2≤×1	3.60≤	1.20	4.32≤	34	

第6表 遺構一覧表②

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時遺構番号	計測値(cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
1	003-01	土師器鍋	1	G地区	SK4	SK4⑤	口径21.2	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、オエナデ、ハケ内:工具ナデ、オエナデ、ヨコナデ	粗	並	にぶい黄橙	南伊勢系
2	003-02	土師器羽釜	1	G地区	SK4	SK4②	体部径23.8	体部 4/12	外:ヨコナデ、貼付後ナデ、ハケ内:工具ナデ、ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙 灰黄褐	中北勢系 煤付着
3	005-03	土師器羽釜	1	G地区	SK4	SK4 e2	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ハケ内:ヨコナデ	やや密	不良	灰白	中北勢系 煤付着
4	005-01	土師器羽釜	1	G地区	SK4	SK4④	口径27.0	口縁部 6/12	外:ヨコナデ、ハケ内:ヨコナデ	やや粗	不良	にぶい黄橙	南伊勢系
5	005-02	土師器羽釜	1	G地区	SK4	SK4 e2	口径30.2	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ハケ内:ヨコナデ	やや密	不良	にぶい黄橙	南伊勢系
6	001-01	土師器羽釜	1	G地区	SK4	SK4①	口径23.0	口縁部 9/12	外:ヨコナデ、貼付後ナデ、ハケ内:ナデ、オエ	やや密	良	灰白	南伊勢系 煤付着
7	007-01	土師器茶釜形	1	G地区	SK4	SK4③	受部径28.4	受部径 4/12	外:ヨコナデ、穿孔、ケヅリ、ヨコナデ、ハケ内:ナデ、オエ、ヨコナデ	やや粗	やや並	灰白	中北勢系 焼成前穿孔
8	002-01	陶器山茶椀	1	G地区	SK4	SK4①	底径5.2	底部 3/12	外:ナデ、糸切痕 内:ナデ	やや密	良	灰白	底部墨書有
9	006-02	土師器皿	1	G地区	SK10	SK10 e10	—	口縁部 小片	外:指ナデ、ヨコナデ内:ヨコナデ	やや粗	不良	浅黄橙	南伊勢系
10	006-01	土師器皿	1	G地区	SK10	SK10 e10	—	口縁部 小片	外:指ナデ、ヨコナデ内:ヨコナデ	やや粗	不良	にぶい黄橙	南伊勢系
11	007-02	土師器皿	1	G地区	SK10	SK10 e10	口径11.8	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オエ内:ナデ、ヨコナデ	やや密	並	灰白	南伊勢系
12	008-03	陶器山皿	1	G地区	SK10	SK10 e10	口径7.6 高さ1.5	完存	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白 内:自然釉	内:自然釉 外:自然釉
13	008-04	陶器山茶椀	1	G地区	SK10	SK10 e10	—	底部 小片	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白	底部墨書
14	008-01	陶器山茶椀	1	G地区	SK10	SK10 e10	口径13.4	口縁部 6/12	外:ロクロナデ、貼付高台後ナデ、ナデ 内:ロクロナデ	粗	並	灰白	モガラ痕
15	003-03	灰釉陶器壺	1	G地区	SK11	SK11 a8	頸部径6.5	頸部 6/12	外:ロクロナデ、沈線 内:ロクロナデ	密	良	灰赤 灰褐	外:内:施釉
16	009-01	木製品曲物底板	1	G地区	SE8	SK8	径13.4 最大厚0.8						目釘穴4箇所
17	009-02	木製品曲物底板	1	G地区	SE8	SK8	径13.8 最大厚1.0						
18	006-03	土師器鍋	1	G地区	SD1	SD1 e3	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、内:ヨコナデ	やや粗	やや不良	灰白 浅黄橙	南伊勢系
19	006-04	青磁香炉?	1	G地区	SD3	SD3 d7	底径3.4	底部 完存	外:ロクロナデ、削出高台 内:ロクロナデ	密	良	釉:灰けい-ア 素地:灰白	外:施釉
20	008-02	陶器山茶椀	1	G地区	SD3	SD3 e7	底径5.6	底部 8/12	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白	高台剥離
21	006-05	陶器擂鉢	1	G地区	SD3	SD3 d7	—	口縁部 小片	外:沈線、ロクロナデ 内:沈線、ロクロナデ	やや粗	やや不良	釉:褐 素地:灰白	登窯1か11小期
22	006-06	土師器羽釜	1	G地区	SD3	SD3 d7	—	口縁部 小片	外:ロクロナデ、ハケ内:ハケ、ヨコナデ	粗	不良	浅黄橙	中北勢系 煤付着
23	004-02	土師器鍋	1	G地区	SZ2	SK2	体部径27.5	体部 2/12	外:ヨコナデ、ハケ内:ハケ、ヨコナデ	やや密	並	浅黄橙	南伊勢系
24	004-01	土師器鍋	1	G地区	SZ2	SK2	口径33.2	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、ハケ内:オエナデ、ヨコナデ	やや密	並	にぶい橙・黄橙 褐灰	南伊勢系 少量煤付着
25	001-02	土師器皿	1	G地区	SB23	Pit2 c9	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、オエナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	良	浅黄橙	南伊勢系
26	002-03	土師器皿	1	G地区	SB19	Pit1 d9	口径10.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ内:ナデ、ヨコナデ	密	良	灰白 灰色	南伊勢系
27	001-03	土師器皿	1	G地区	Pit1 b10		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ内:ナデ、ヨコナデ	密	良	浅黄橙	南伊勢系
28	002-02	陶器山茶椀	1	G地区	Pit1 3d		底径5.1	底部 6/12	外:糸切痕 内:ロクロナデ	やや密	良	灰白	
29	002-04	陶器綠釉小皿	1	G地区	Pit2 d7		—	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰けい-ア 灰白	瀬戸美濃 古瀬戸後II期 外:内:施釉
30	002-05	陶器四耳壺	1	G地区	Pit5 b9		—	肩部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	オレ-ア 黄	瀬戸美濃 古瀬戸後IかII期 外:施釉
31	008-06	石製品石鑓	1	G地区	Pit2 b9		長さ2.8 幅2.1 最大厚0.3 重さ1.1g	完存					風化大 サヌカイト
32	010-01	山茶椀	1	G地区	包含層 c8	試掘坑	口径13.0	口縁部 2/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白	東濃 大畠大洞新ぐらい 煤付着
33	010-02	擂鉢	1	G地区	包含層 c6		—	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	良	灰褐	信楽
34	007-03	青磁碗	1	G地区	包含層		—	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	釉:灰	外:内:施釉
35	008-05	石製品砥石	1	G地区	包含層 d7		残存長5.7 最大厚0.9	残存幅4.9					凝灰岩
36	001-07	陶器香炉?	1	F地区	SK35	SK5 H9 F1-6	—	小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	釉:黑褐 素地:灰白	外:施釉、 古瀬戸中IかII期
37	003-01	陶器山茶椀	1	F地区	SK37	SK7 j8	底径7.2	底部 3/12	外:ロクロナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白	
38	002-05	陶器山皿	1	F地区	SD33	SD3 i10	口径8.0	口縁部 6/12	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや密	並	灰白	
39	005-01	土師器茶釜形	1	F地区	SD34	SD4 i11	口径13.2	口縁部 8/12	外:ヨコナデ、沈線、ハケ内:ナデ、ヨコナデ	やや密	並	外:にぶい黄橙 内:黒褐	南伊勢系
40	001-03	土師器羽釜	1	F地区	SD34	SD4 i11	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、オエ、ハケ内:ナデ	やや粗	並	外:にぶい黄褐 内:にぶい橙	南伊勢系 煤付着
41	003-04	青磁碗	1	F地区	SD34	SD4 i11	底径5.8	底部 3/12	外:ロクロナデ、削出高台 内:ロクロナデ	密	並	釉:オレ-ア 灰	外:内:施釉

第7表 出土遺物観察表①

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
42 001-01		土師器 鍋	1	F地区 h11	SD36	SD6	口径30.2	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、オエ、ハ 内:工具ナデ、オエ、ヨコナデ	密	不良	外:にぶい黄橙 内:灰白	南伊勢系
43 001-02		土師器 羽釜	1	F地区 h11	SD36	SD6	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい橙	南伊勢系、煤付着 磨耗激しい
44 002-03		陶器 山茶椀	1	F地区 j11	SD36	SD6	底径6.4 9/12	底部 外:ヨコナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	モガラ痕		
45 002-01		陶器 鉢	1	F地区 h11	SD36	SD6	底径12.8 2/12	底部 外:ヨコナデ、ヨコナデ、貼付高台後打 内:ロクロナデ	粗 並	灰白	内:自然釉、 重ね焼痕有		
46 003-05		青磁 椀	1	F地区 h11	SD36	SD6	底径5.3 3/12	底部 外:ヨコナデ、削出高台 内:ロクロナデ	密 並	釉:オーブ 灰	外:施釉、模様有 内:模様有		
47 005-02		土師器 羽釜	1	F地区 j10	SD38	SD8	口径24.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、貼付後打 内:ヨコナデ	やや密 並	浅黄橙	中北勢系 風化	
48 001-04		土師器 羽釜	1	F地区 h9	SD38	SD8	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、穿孔、ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	並	外:灰白、灰黃褐 内:灰白	中北勢系 焼成前穿孔
49 002-07		陶器 山皿	1	F地区 j10	SD38	SD8	底径5.3 ほぼ完存	底部 外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白			
50 005-05		陶器 尊式花瓶	1	F地区 h9	SD38	SD8	口径13.0	口縁部 2/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	釉:緑灰黄 素地:灰白	瀬戸美濃 古瀬戸後II期 外・内:施釉
51 005-04		陶器 片口鉢	1	F地区 j10	SD38	SD8	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ	やや密 良	赤橙	常滑製品 9型式	
52 005-03		陶器 壺	1	F地区 h9	SD38	SD8	口径21.6	口縁部 1/12	外:ヨコナデ 内:ロクロナデ	やや粗 良	釉:灰黄褐 素地:灰白	常滑製品 6b型式	
53 003-02		土師器 皿	1	F地区 k9	SD38	SD11	口径9.0	口縁部 11/12	外:ナデ、オエ 内:オエ、ナデ	やや粗 並	灰白 浅黄橙	中北勢系	
54 003-03		土師器 皿	1	F地区 k9	SD42	SD12	口径11.0	口縁部 3/12	外:ナデ、オエ 内:ナデ	やや粗 不良	灰白 浅黄橙	南伊勢系 風化	
55 002-02		陶器 山茶椀	1	F地区 k9	SD42	SD12	底径6.2 6/12	底部 外:ヨコナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	モガラ痕		
56 002-06		陶器 山茶椀	1	F地区 k9	SD42	SD12	底径5.4 ほぼ完存	底部 外:ロクロナデ、糸切痕、糸切後打 内:ロクロナデ	やや密 並	灰白			
57 001-06		陶器 山茶椀	1	F地区 j10	包含層		—	底部 小片	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰黄褐 にぶい黄橙	底部墨書有	
58 002-04		陶器 山茶椀	1	F地区 j10	包含層		底径5.0	底部 9/12	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	外:灰黄 内:灰白		
59 003-07		陶器 香炉	1	F地区 j9	包含層		口径8.0	口縁部 1/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	並	釉:灰白 素地:灰白	瀬戸美濃、古瀬戸後 IかII期、外:施釉
60 005-07		陶器 秉燭	1	F地区 j10	表土		口径4.4 高さ2.2	完存	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	密	良	釉:灰白 素地:灰黄褐	信楽 外・内:施釉
61 005-06		陶器 擂鉢	1	F地区 j10	表土		—	口縁部 小片	内:櫛目	密	良	釉:にぶい赤褐	瀬戸美濃、登窯第8 小期、外・内:施釉
62 001-05		陶器 甕	1	F地区 i9	包含層		—	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗 並	外:赤灰 内:褐灰	常滑製品 10型式	
63 004-01		石製品 五輪塔	1	F地区 j10	表土		最大径22.2 最大厚15.6					水輪	
64 001-03		陶器 山皿	1	C地区 c12	SD51	SD1	底径4.0	底部 完存	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや密 並	灰白 自然釉:オーブ	内:自然釉	
65 002-01		土師器 鍋	1	C地区 d3	包含層		口径24.0	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オエ 内:ハク、ヨコナデ	粗 並	にぶい黄橙 灰褐	南伊勢系 剥離激しい	
66 001-04		陶器 山皿	1	C地区 d3	包含層		底径4.6	底部 完存	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	密 並	灰白	内:自然釉	
67 004-05		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		口径15.6	口縁部 6/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 良	灰白		
68 004-03		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		底径5.9	底部 完存	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	粗 良	灰	モガラ痕	
69 004-04		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		口径15.4	口縁部 9/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	粗 良	灰白	モガラ痕	
70 004-01		陶器 山茶碗	1	C地区 d3	包含層		口径14.0 高さ5.6	ほぼ 完形	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	やや密 良	灰白	モガラ痕 (特に内面)	
71 004-02		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		口径14.7	口縁部 6/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 良	灰白	モガラ痕	
72 004-06		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		底径7.0	底部 完存	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 良	灰白	モガラ痕	
73 001-02		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		底径8.0	底部 9/12	外:ヨコナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	モガラ痕 内:自然釉	
74 003-01		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		—	底部 小片	外:糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	底部墨書	
75 003-02		陶器 山茶椀	1	C地区	排土		底径8.0	底部 高台 僅か	外:ロクロナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	モガラ痕 底部墨書	
76 002-02		陶器 山茶椀	1	C地区 c5	包含層		底径6.1	底部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	灰白	モガラ痕	
77 001-01		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		口径15.3	口縁部 7/12	外:ヨコナデ、高台剥離、糸切痕 内:ロクロナデ	やや密 並	灰白	体部墨書有	
78 003-03		陶器 山茶椀	1	C地区 d3	包含層		底径6.8	底部 完存	外:ヨコナデ、貼付高台後打、糸切痕 内:ロクロナデ	やや粗 並	外:黄灰 内:灰白	モガラ痕 体部・底部墨書	
79 002-03		青磁 椀	1	C地区 c8	包含層		底径6.0	底部 2/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 並	灰白 釉:灰	外・内:施釉	
80 030-01		繩文土器 深鉢	2	D地区 a4	SK73	SK13 No.1	底径13.0	底部 4/12		粗	不良	にぶい橙	風化ひどく 調整不明
81 025-03		陶器 小碗	2	D地区 b19	SE65	SK5	底径4.9	底部 2/12	外:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナデ	密	良	灰白	内:自然釉 重ね焼痕有
82 025-04		陶器 山皿	2	D地区 b19	SE65	SK5	底径5.0	底部 完存	外:ロクロナデ、糸切痕 内:ロクロナデ	やや密 やや良	灰白		
83 025-02		陶器 平椀	2	D地区 a30	SE71	SK11	口径15.2	口縁部 1/12	外:ロクロナデ、ヨコナデ 内:ロクロナデ	密 やや良	釉:灰白 素地:にぶい橙	瀬戸美濃、古瀬戸後 IV期古、外・内:施釉	

第8表 出土遺物観察表②

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
84	022-02	土師器皿	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.3	底部 完存	外:ナデ、糸切後ナデ 内:ナデ	密	良	外:にぶい黄橙 内:浅黄橙	四口成形
85	022-03	土師器皿	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.0	底部 8/12	外:ナデ 内:ナデ	やや密	良	外:浅黄橙 内:灰黄褐	四口成形
86	032-05	土師器皿	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径8.4	底部 2/12	外:ナデ、糸切後ナデ 内:ナデ	密	並	にぶい橙	四口成形
87	022-01	土師器皿	2	D地区 a5	SD61	SD1	口径21.0	口縁部 1/12	内:ナデ	やや密	良	外:にぶい橙 内:にぶい黄橙	南伊勢系
88	021-01	陶器小椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径5.0	底部 8/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	
89	021-02	陶器小椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径4.7	底部 9/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	内:自然釉
90	021-08	灰釉陶器椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径8.0	底部 11/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	外:釉
91	032-04	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	口径13.8	口縁部 2/12	外:四口ナデ 内:四口ナデ	密	並	灰白	煤付着
92	024-02	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.7	底部 完存	外:四口ナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸 切痕 内:四口ナデ	やや密	良	灰白	内:自然釉
93	024-05	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.7	底部 完存	外:四口ナデ、四口ナズリ、貼付高台後ヨ コナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	内:自然釉
94	024-01	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	口径16.4	口縁部 1/12	外:四口ナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:四口ナデ	やや粗	良	灰白	
95	021-05	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径8.6	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	内:自然釉
96	028-04	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.5	底部 完存	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	やや密	良	灰白	煤付着(特に内面) モガラ痕
97	024-06	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径6.4	底部 完存	外:四口ナデ、貼付高台後ヨコナデ 内:四口ナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉
98	021-06	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径6.7	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	
99	021-03	陶器椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.0	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉、煤付着
100	021-04	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.4	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	モガラ痕
101	028-05	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.3	底部 完存	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	やや密	良	灰白	内:自然釉
102	024-03	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径7.6	底部 完存	外:四口ナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸 切痕 内:四口ナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕
103	021-07	陶器山茶椀	2	D地区 a5	SD61	SD1	底径8.3	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	内:自然釉
104	022-05	陶器山茶椀	2	D地区 b3	SD62	SD2	底径8.6	底部 6/12	外:四口ナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:四口ナデ	密	良	灰白	
105	022-06	陶器平碗	2	D地区 a14	SD63	SD3	口径17.0	口縁部 2/12	外:削出高台	密	良	釉:オレーブ 素地:淡黄	瀬戸美濃、古瀬戸後 IV期新、外・内:施釉
106	023-03	石製品茶臼	2	D地区 a14	SD63	SD3							凝灰岩質砂岩
107	023-01	土師器皿	2	D地区 a16	SD64	SD4	口径30.7	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	良	外:灰黄褐 内:にぶい橙	南伊勢系 煤付着
108	023-04	土師器茶釜形	2	D地区 a16	SD64	SD4	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、工具ナデ、ハメ 内:ナデ、ヨコナデ	密	良	浅黄橙	南伊勢系 焼成後穿孔
109	023-02	陶器壺	2	D地区 a16	SD64	SD4	底径12.8	底部 4/12	外:ナデ 内:ナデ、工具ナデ	やや密	良	にぶい赤褐	常滑製品 10か11型式
110	022-07	陶器片口鉢	2	D地区 a16	SD64	SD4	底径16.0	底部 3/12	外:オレーブ 内:ナデ	やや密	良	橙	常滑製品 9~11型式
111	032-01	鉄製品鏃	2	D地区 a26	SD67	SD7	0.30×0.35 四角		木質が丸状に貼付、縦状線				矢柄に装着する 部分
112	032-02	鉄製品鏃	2	D地区 a26	SD67	SD7	0.40×0.35 四角						
113	026-07	土師器皿	2	D地区 a26	SD67	SD7	口径13.9	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オレ 内:ナデ、ヨコナデ	やや粗	やや良	灰白 灰	中北勢系
114	025-07	綠釉陶器椀	2	D地区 a24	SD68	SD8	底径6.0	底部 1/12	外:四口ナデ、削出高台 内:四口ナデ	密	良	釉:緑 素地:灰	外・内:施釉
115	025-05	陶器片口鉢	2	D地区 a24	SD68	SD8	—	口縁部 小片	外:四口ナデ 内:四口ナデ、竹管工具刺突	やや粗	やや良	外:にぶい赤褐 内:灰	常滑製品 10型式
116	028-06	須恵器杯	2	D地区 b28	SD69	SD9	ツマ径3.3	ツマ部 完存	外:貼付後ナデ、四口ナズリ、四口ナデ 内:四口ナデ	やや密	やや不良	外:灰白 内:浅黄橙	
117	025-01	陶器平碗	2	D地区 b28	SD69	SD9	口径18.2	口縁部 3/12	外:四口ナデ、四口ナズリ 内:四口ナデ	密	良	灰白 浅黄	瀬戸美濃 古瀬戸後IV期新 外・内:施釉
118	026-01	繩文土器深鉢	2	D地区 a29	SD70	SD10	—	口縁部 小片	外:刺突、繩文 内:ナデ	粗	やや良	にぶい黄橙 褐灰	
119	025-06	陶器片口鉢	2	D地区 a18	SB90	Pit4	—	口縁部 小片	外:四口ナデ 内:四口ナデ	やや粗	やや良	橙	常滑製品 9型式
120	026-09	土師器皿	2	D地区 a7	Pit1		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	やや良	灰白	南伊勢系
121	026-03	土師器皿	2	D地区 a7	Pit3		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、オレ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	やや良	灰白	南伊勢系
122	026-10	土師器皿	2	D地区 a13	Pit3		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、オレ 内:ナデ、ヨコナデ	やや粗	やや良	淡赤橙 褐灰	中北勢系
123	026-08	土師器皿	2	D地区 a18	Pit2		口径11.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オレ 内:ナデ、ヨコナデ	やや粗	やや良	灰白 褐灰	中北勢系
124	026-06	土師器皿	2	D地区 a17	Pit2		口径13.0	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ、オレ 内:ナデ、ヨコナデ	やや粗	やや良	灰白 褐灰	
125	026-02	土師器皿	2	D地区 a10	Pit1		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	粗	やや良	浅黄橙	磨滅激しく 調整不明

第9表 出土遺物観察表③

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
126	026-05	土師器 鍋	2	D地区 b19	Pit2		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙	南伊勢系 煤付着
127	026-04	土師器 鍋	2	D地区 a28	Pit1		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	やや良	灰白	南伊勢系
128	029-03	須恵器 杯	2	D地区 b28	Pit1		口径16.0	口縁部 11/12	外:ナデ 内:ナデ	やや密	不良	灰白	風化著しい
129	028-03	陶器 山茶椀	2	D地区 a19	Pit		口径15.0	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	やや良	灰白	歪み大、モガラ痕 外・内:自然釉
130	028-01	陶器 山茶椀	2	D地区 a19	Pit1		底径7.2	底部 完存	外:ヨコナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕
131	028-02	陶器 山茶椀	2	D地区 a19	Pit1		底径7.7	底部 完存	外:ヨコナデ、貼付高台痕ナデ、糸切後ナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉
132	031-04	縄文土器 鉢	2	D地区 a18	包含層		—	底部 小片		粗	並	にぶい橙	磨滅激しく 調整不明
133	031-03	縄文土器 鉢	2	D地区 a12	包含層		底径10.5	底部 2/12		粗	並	外:にぶい黄橙 内:にぶい橙	磨滅激しく 調整不明
134	029-01	土師器 皿	2	D地区 b6	排水溝		口径11.3	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	粗	並	外:にぶい黄橙 内:灰黃	凹成形
135	029-04	土師器 甕	2	D地区 b10	包含層		口径10.0	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ、ヨコナデ	粗	並	浅黄橙	
136	029-05	土師器 甕	2	D地区 a21	調査区 北壁		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙	風化著しく 調整不明
137	027-05	土師器 鍋	2	D地区 b10	包含層		—	把手部 小片	内:ナデ	やや密	やや良	橙	
138	031-01	土師器 羽釜	2	D地区 a18	包含層		口径19.5	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ、ヨコナデ	やや粗	並	黄灰 にぶい橙	中北勢系
139	031-02	土師器 羽釜	2	D地区 a16	包含層		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ	やや粗	並	にぶい橙	中北勢系 煤付着
140	033-01	土師器 羽釜	2	D地区 b6	包含層		(口径22.0)	口縁部 1/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	並	にぶい橙	中北勢系、煤付着 焼成前穿孔
141	029-02	須恵器 杯	2	D地区 a10	調査区 北壁		底径11.9	底部 10/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰	
142	027-01	須恵器 杯	2	D地区 b10	包含層		底径11.6	底部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切後ナデ 内:ヨコナデ	やや密	やや良	灰 灰白	
143	027-02	須恵器 杯	2	D地区 b19	包含層		—	底部 小片	外:貼付高台、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	やや良	灰白	内:切り込み、 焼成前
144	029-09	陶器 白磁小皿	2	D地区 b10	包含層		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ	密	良	灰白	外・内:施釉
145	029-06	陶器 白磁小皿	2	D地区 b10	包含層		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ	密	良	灰白	外・内:施釉
146	027-03	陶器 卸皿	2	D地区 b10	包含層		—	底部 小片	外:ヨコナデ、糸切痕	密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸後期 外:施釉
147	031-07	灰釉陶器 椀	2	D地区 a21	包含層		底径7.9	底部 4/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	密	良	灰白	H-72 内:自然釉
148	031-06	陶器 山茶椀	2	D地区 a6	包含層		底径6.9	底部 4/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	内:自然釉
149	027-04	青磁 椀	2	D地区 a24	包含層		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	良	釉:ホーリー 素地:灰白	外・内:施釉
150	031-05	陶器 壺	2	D地区 b14	包含層		口径11.5	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	良	にぶい橙	常滑製品 6b~7型式
151	032-03	陶器 片口鉢	2	D地区 a18	包含層		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	にぶい橙	常滑製品 11(～12)型式
152	029-08	石製品 砥石	2	D地区 b10	包含層		長さ5.3 幅4.4 厚さ0.4						片面剥離 凝灰質泥岩
153	006-06	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 上層		口径7.5	口縁部 6/12	外:オエ 内:ナデ	密	並	にぶい黄橙	南伊勢系
154	006-07	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 P10		口径7.1	口縁部 3/12	外:オエ 内:ナデ	密	並	灰白	南伊勢系
155	006-05	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 P12		口径7.2~7.5 高さ1.1	口縁部 完存	外:オエ 内:ナデ	やや密	並	灰白	南伊勢系 歪み
156	007-07	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 P13		口径8.6	口縁部 8/12	外:オエ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	灰白	南伊勢系
157	007-05	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 P11		口径9.0~9.4 高さ2.2	口縁部 ほぼ完存	外:ナデ、オエ、一方向ナデ 内:工具痕、ナデ	粗	並	灰白	南伊勢系 歪み
158	008-01	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 最下層		口径9.4	口縁部 2/12	外:オエ、ナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰白	南伊勢系
159	007-06	土師器 皿	2	d6	SE105 SE5 最下層		口径9.2	口縁部 6/12	外:オエ、ナデ 内:工具痕、ナデ	やや粗	並	灰白	南伊勢系
160	006-01	土師器 鍋	2	d6	SE105 SE5 P1		口径28.4	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ハケメ、ケブリ 内:工具ナデ、ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	外:浅黄橙 内:褐灰	南伊勢系
161	006-03	土師器 鍋	2	d6	SE105 SE5 P8		口径26.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	並	外:にぶい黄橙 内:灰黃	南伊勢系
162	007-01	土師器 鍋	2	d6	SE105 SE5 土層8		口径24.7	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ハケメ 内:工具ナデ、ヨコナデ	やや密	並	外:灰黃 内:灰白	南伊勢系 外・内:煤付着
163	012-03	土師器 茶釜形	2	d6	SE105 SE5 土層8		口径13.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	不明	灰白	南伊勢系
164	007-03	土師器 羽釜	2	d6	SE105 SE5 土層7		口径22.0	鍔部径22.0	外:ヨコナデ、貼付後ナデ、ハケメ 内:工具ナデ、ヨコナデ	やや密	並	外:灰白 内:にぶい黄橙	中北勢系 煤付着
165	007-02	土師器 羽釜	2	d6	SE105 SE5 P5		口径20.8	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、貼付後ナデ、ハケメ 内:工具ナデ、ヨコナデ	密	並	灰白	南伊勢系 煤付着
166	007-04	土師器 羽釜	2	d6	SE105 SE5 最下層		口径28.3	鍔部径28.3	外:ヨコナデ、貼付後ナデ、ハケメ 内:工具ナデ、ヨコナデ	やや密	並	外:灰白 内:褐灰	南伊勢系 煤付着
167	008-04	陶器 山茶椀	2	d6	SE105 SE5 上層		底径7.0	底部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	

第10表 出土遺物観察表④

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
168	008-02	陶器 山茶椀	2	d6	SE105	SE5 P3 土層8	口径12.0	口縁部 小片	外:クロナデ、糸切痕 内:一方向ナデ、クロナデ	やや密	並	灰白	10型式
169	008-03	陶器 山茶椀	2	d6	SE105	SE5 P6	底径5.0	底部 完存	外:クロナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや密	並	灰白	10型式
170	001-02	陶器 縁軸小皿	2	d6	SE105	SE5 土層7	口径12.0	口縁部 3/12	外:クロナデ、糸切痕	密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸 後Ⅰ期、外:施釉 内:施釉、塗付着
171	012-02	陶器 平椀	2	d6	SE105	SE5 上層	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸後 IV期古、外:内:施釉 釉二度かけ
172	012-01	陶器 平椀	2	d6	SE105	SE5 最下層	底径5.0	底部 完存	外:削出高台 内:クロナデ	密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸後IV期、内:釉
173	008-06	陶器 片口鉢	2	d6	SE105	SE5 最下層	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	良	灰褐	常滑製品 10型式
174	008-07	陶器 片口鉢	2	d6	SE105	SE5 土層8	—	底部 小片	外:ナデ、オサエ 内:クロナデ	やや粗	並	外:明赤褐 内:にぶい橙	常滑製品 9か10型式
175	008-05	陶器 片口鉢	2	d6	SE105	SE5	底径10.8	底部 4/12	外:オサエ、ナデ 内:クロナデ	やや粗	並	外:にぶい橙 内:にぶい褐	常滑製品 9か10型式
176	001-01	木製品 漆椀	2	d6	SE105	SE5 W1	底径7.5	底部 完存	外:ケズリ				内・外:塗付着
177	005-01	木製品 漆椀	2	d5	SE105	SE5 最下層	底径6.0	底部 2/12					内・外:塗付着
178	005-03	木製品 折敷	2	d6	SE105	SE5 W3	長さ25.1 幅2.0 厚さ0.55						堅縛り
179	002-01	木製品 折敷	2	d6	SE105	SE5 W5	縦24.8 橫24.8 厚さ0.6						
180	005-04	木製品 折敷	2	d6	SE105	SE5	長さ37.9 幅1.4 厚さ0.5						
181	005-02	木製品 農具?	2	d6	SE105	SE5	長さ(11.6) 幅(8.6) 厚さ(0.9)						広葉樹
182	004-01	木製品 杭	2	d6	SE105	SE5 W4	長さ17.5 幅5.2						
183	003-01	木製品 馬鍔	2	d6	SE105	SE5 W2							二葉松類 アカガシ亞属
184	010-06	陶器 平椀	2	b4	SB108	Pit9 柱痕	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	密	良	釉:灰村-ア 素地:灰白	瀬戸美濃 古瀬戸後II期 外:内:施釉
185	009-05	陶器 山茶椀	2	a4	SB108	Pit4 柱痕	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	並	灰白	
186	010-08	陶器 山茶椀	2	b5	SB109	Pit 柱穴	底径5.8	底部 3/12	外:クロナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや粗	良	灰白	底部墨書 内:墨痕
187	010-10	灰釉陶器 椀	2	b5	Pit10		—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	良	灰白	
188	010-11	陶器 山茶椀	2	b5	Pit12	掘形	—	底部 小片	外:クロナデ、糸切痕 内:一方向ナデ、クロナデ	粗	並	灰白	
189	009-03	陶器 山茶椀	2	a4	Pit2	柱痕	底径5.3	底部 2/12	外:クロナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや密	良	灰白	
190	009-04	陶器 山茶椀	2	a4	Pit3		口径13.6	口縁部 2/12	外:クロナデ 内:クロナデ	やや粗	良	灰白	
191	009-08	陶器 山茶椀	2	a4	Pit5	柱痕	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	良	灰白	
192	009-07	陶器 山茶椀	2	a4	Pit5		—	底部小片	外:クロナデ、貼付後ナデ 内:クロナデ	やや密	並	灰白	内:自然釉
193	010-09	陶器 山茶椀	2	b5	Pit8	柱痕	底径2.0	底部 3/12	外:貼付高台後ナデ 内:クロナデ	やや密	良	灰白	
194	009-06	陶器 山茶椀	2	a4	Pit5	柱痕	底径 6.5	底部 小片	外:クロナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや粗	良	灰白	
195	010-05	土師器 鍋	2	b4	Pit5	柱穴	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	並	灰白	南伊勢系
196	010-03	土師器 鍋	2	b3	Pit5		—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙	
197	010-02	土師器 鍋	2	a4	Pit8	柱痕	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	並	黒褐	南伊勢系 煤付着
198	010-01	土師器 鍋	2	a4	Pit7	柱痕	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	並	にぶい黄橙	南伊勢系
199	010-07	陶器 平椀	2	b4	Pit11	柱痕	—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	密	良	釉:灰村-ア 素地:灰白	瀬戸美濃 古瀬戸後III期 外:内:施釉
200	010-04	陶器 鉢	2	b4	Pit5	柱穴	—	口縁部 小片	外:沈線、クロナデ 内:クロナデ	やや粗	良	灰白	外:自然釉
201	009-01	陶器 山茶椀	2	a3	Pit1		口径13.6	口縁部 6/12	外:クロナデ、貼付高台後ナデ、糸切痕 内:一方向ナデ	やや密	良	灰白	底部墨書 内:自然釉
202	009-02	陶器 山皿	2	a3	Pit1		口径7.8	口縁部 2/12	外:クロナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや密	良	灰白	
203	011-01	陶器 折縁小皿	2	b6	包含層		口径8.5	口縁部 6/12	外:クロナデ、糸切痕 内:クロナデ	やや密	並	釉:浅黄 素地:にぶい橙	瀬戸美濃 古瀬戸後II期 外:内:施釉
204	011-03	土師器 皿	2	i6	包含層	北壁 土層16	口径8.8	口縁部 4/12	外:ナデ 内:ナデ	やや密	良	外:灰白 内:浅黄橙	南伊勢系
205	011-04	土製品 加工円盤	2	b2	包含層		縦2.9 橫2.5 重さ6.0g			密	良	灰白	磁器
206	011-05	土製品 加工円盤	2	b4	包含層		縦2.1 橫3.3 重さ7.36g			密	良	褐 灰白	陶器
207	011-06	土製品 加工円盤	2	d3	包含層		縦2.8 橫2.4 重さ8.68g			密	良	にぶい赤褐	陶器、擂鉢
208	011-02	陶器 香炉	2	c6	包含層		—	口縁部 小片	外:クロナデ 内:クロナデ	やや密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸 後III期、外:施釉

第11表 出土遺物観察表⑤

# 第4章 金森遺跡

## 第1節 立地

金森遺跡は、三寺町瀬田に東西90m、南北80m<sup>①</sup>の範囲で広がる遺跡である。平成12年度の範囲確認調査で、遺跡の範囲がさらに南へ広がることが確認さ

れている（第2図参照）。遺跡内の標高は、30.93～34.88m、調査区内の標高は約32.6mで、現況は水田である。

## 第2節 調査の方法

**調査区の設定** 今回の調査では、各調査区の地区名を任意で付けた。また、各調査区を4m四方の枠目で区切ることによって小地区を設定した。1次調査では、北から数字、西からアルファベットを付け、枠目の北西隅の交点をその地区の符号とした。2次調査では、北からアルファベット、東から数字を付け、枠目の北東隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は、調査区ごとに行い、国土地標軸とは無関係である。

**表土除去** 包含層より上位は、重機（バックホー）を用い、表土除去を行った。

**検出・掘削** 包含層及び遺構の検出・掘削は人力で行った。2次調査では、すべて柱穴を断ち割りしている。

**遺構カード** 小地区を単位として1/40を作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物が出土

した場合には、付与した遺構番号も記録した。

**遺構番号の付与** 遺構番号は、溝などの遺構は調査区ごとに1から、ピットについては小地区ごとに通し番号を付与した。今回の本報告にあたっては、1次調査を1から、2次調査を101から遺構番号を付与した。遺構番号の詳細なデータは、遺構一覧表（第12～13表）を参照されたい。

**実測** 調査区全体の遺構実測は、手描きにより1/20で平面図を作成した。また、遺物出土状況図については個別に1/10の実測図を作成した。

**遺構写真** 遺構写真は基本的に4×5インチ判もしくは6×7判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助的に、35mm判白黒ネガ及びカラーリバーサルフィルムも使用した。

**遺物写真** 報告書掲載遺物から任意に選択し、ブロニーバー版白黒ネガで撮影した。

## 第3節 第1次調査

### 1 遺構

1次調査では、縄文時代中期末～後期の陥し穴と鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・井戸・溝などを検出した。基本層序は、第35図第1層耕作土、第3層床土、第9層灰白色細質シルト（検出面）である。

#### ①縄文時代の遺構

##### a 陥し穴

陥し穴を4基確認した。陥し穴は資料を採取し、放射性炭素年代測定法（AMS法）<sup>②</sup>を行っている。各資料採取地点は第36図の通りである。

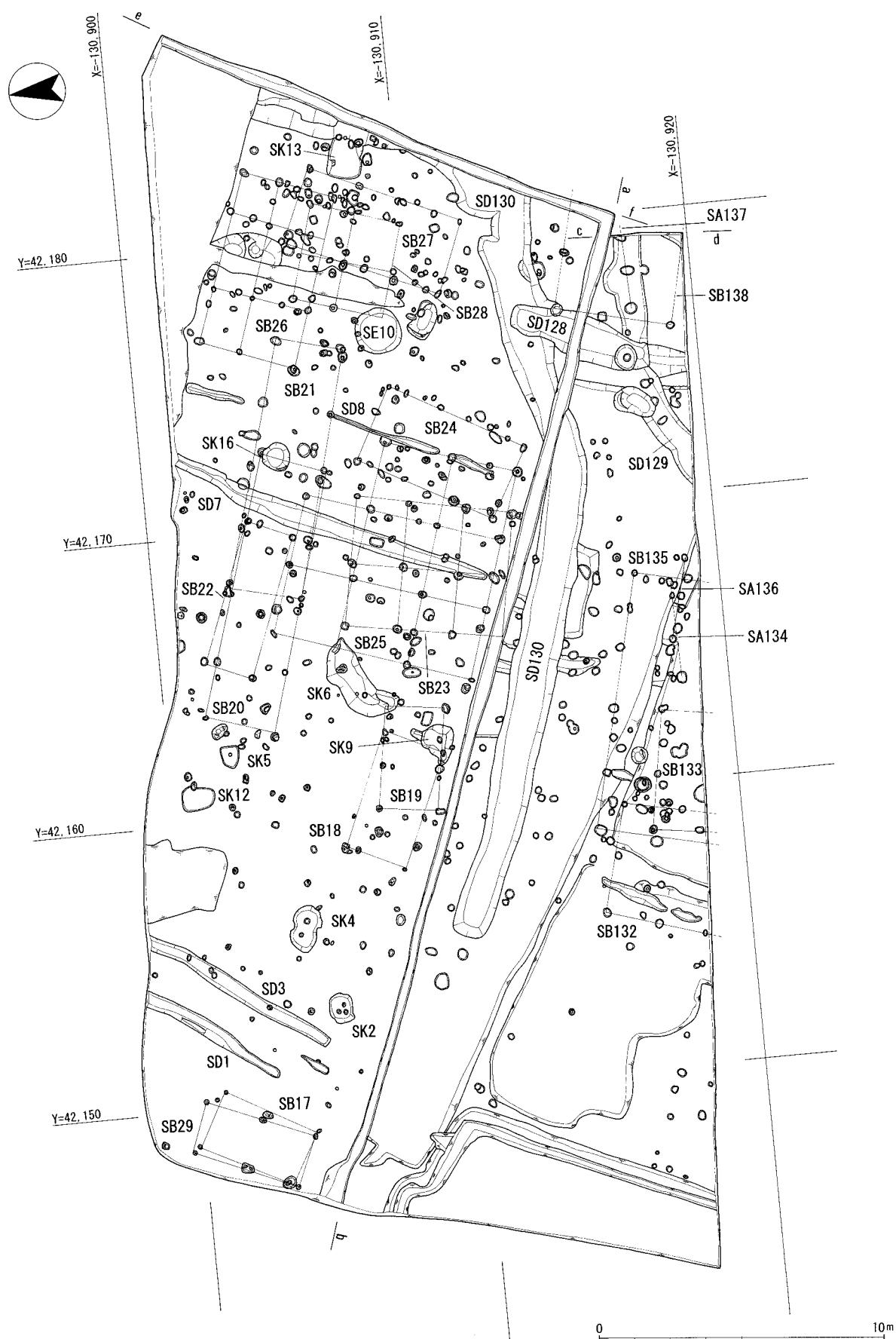
**SK2**（第36図） 南北約0.8m、東西約1.1m、深さ約0.5mの楕円形を呈している。底に3個の杭穴と思われる深さ約0.4mの小穴がある。埋土から縄

文土器小片、サヌカイト製の剥片が出土している。

**SK4**（第36図） 南北約0.8m、東西約1.6m、深さ約0.55mの不定形を呈している。底穴に2個の杭穴と思われる深さ約0.5mの小穴がある。埋土は黄褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルト。小穴の埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。埋土から北白川上層式1期の深鉢（1）、サヌカイト製の剥片が出土している。

**SK5**（第36図） 南北約0.6m、東西約0.8m、深さ約0.3mの楕円形を呈している。底に1個の杭穴と思われる深さ約0.25mの小穴がある。柱穴のような形状をしているが、SK2・4と埋土が同じため、陥し穴と考えた。埋土から遺物は出土していない。

**SK16**（第36図） 径約1m、深さ約0.9mの楕円形



第34図 1次調査区・B地区遺構平面図（1：200）

を呈している。底に1個の杭穴と思われる深さ約0.2mの小穴がある。埋土は褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト。小穴はにぶい黄褐色砂質混じり粘土質シルトである。埋土から縄文土器小片が出土している。

## b 不明遺構

遺構埋土は陥し穴と同じであるものの、形状や小穴の有無や深さを考慮すると、陥し穴とは考えられない遺構を不明遺構として報告する。不明遺構に關しても放射性炭素年代測定法を行っている。

S K 6 (第36図) 南北約2.9m、東西約1.2m、深さ約0.23~0.34mで、不定形を呈している。底に小穴を3個確認したが、いずれも深さ約0.05~0.1mと非常に浅い。埋土から縄文土器が出土している。

**S K 9** (第36図) 南北約1.1m、東西約約1.1m、深さ約0.3mで、不定形を呈している。底の小穴は深さ約0.1~0.2mと浅く、遺物は出土していない。

## ②鎌倉時代の遺構

調査区の大半が鎌倉時代の遺構である。S D 130を境にして北側の区画（1次調査区）と南側の区画（2次調査B地区）に分かれる。なお南側の区画及びS D 128・130に関しては、第4節にて報告する。

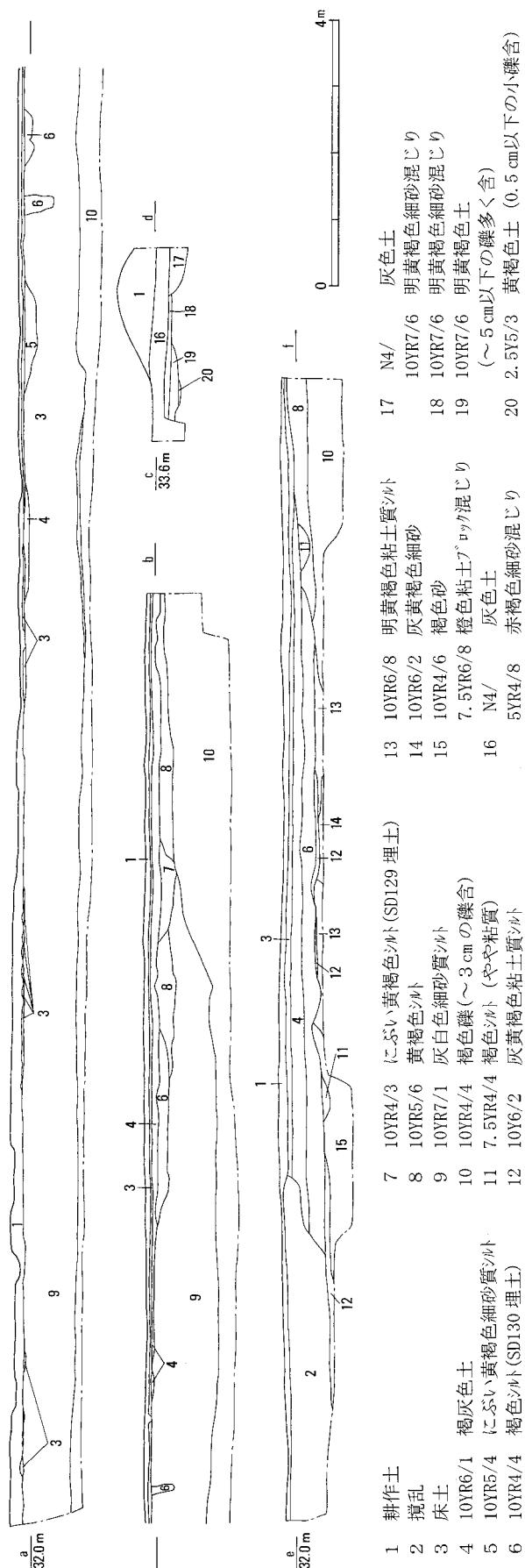
### a 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物は、主屋と考えられる建物、3～4間×1間の建物、小規模な建物に分かれる。SB17・29のみ他の掘立柱建物から離れた場所に存在する。もう1つ別の区画が存在するのかもしれない。

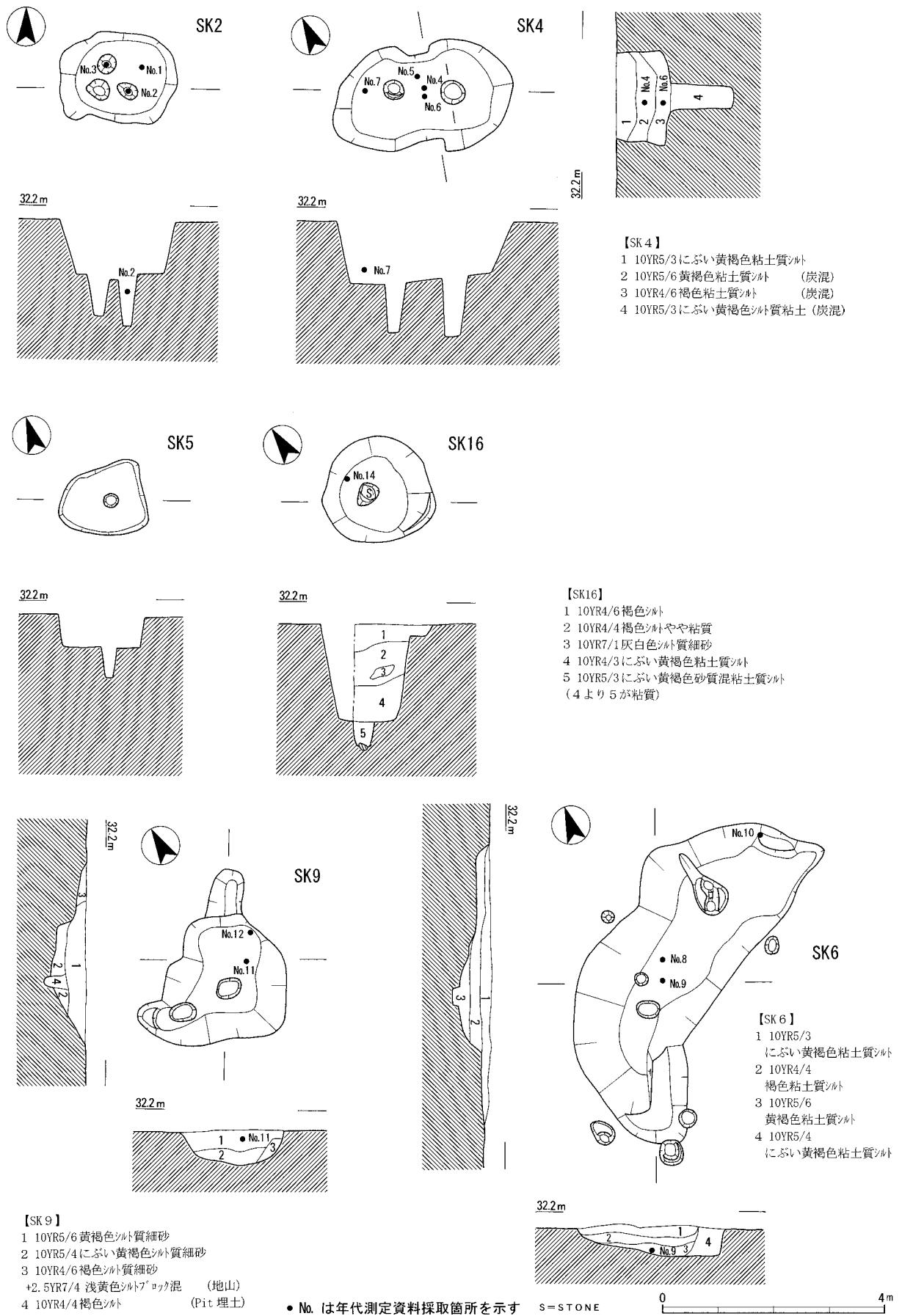
S B25（第37図） 調査区中央で検出した桁行3間×梁行2間の総柱建物で、北側に2×1間の庇がつく。1次調査区内で最も大きく、面積は43.6m<sup>2</sup>で主屋となる建物である。建物方向はN19°Eで、柱間は桁行が2.25+2.4+2.25m、梁行は2.55+2.4mである。柱穴からは藤澤編年第5型式の山茶椀が出土している。

S B23（第37図） 調査区南壁際で検出した桁行3間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN11°Eで、柱間は桁行が $1.95 + 1.95 + 1.65$ m、梁行は2.25mの等間である。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。S D 7より古い。

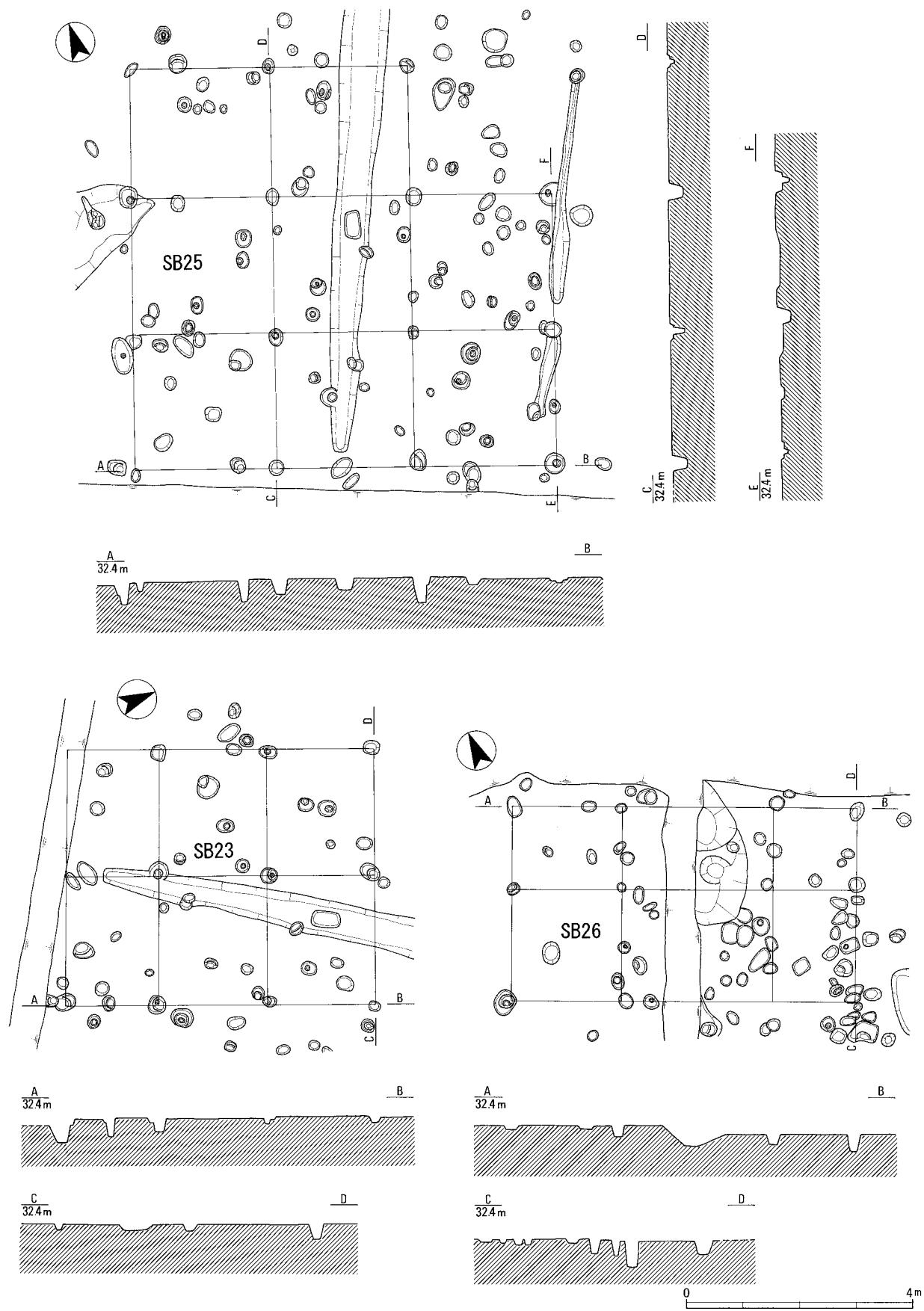
S B26 (第37図) 調査区北側で検出した桁行3間  
×梁行2間の継柱建物である。建物方向はN21° E



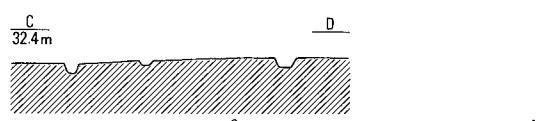
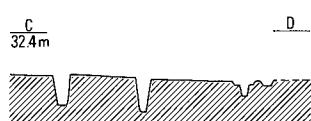
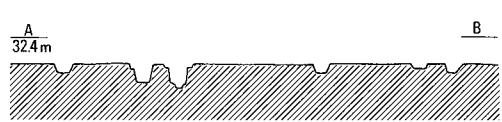
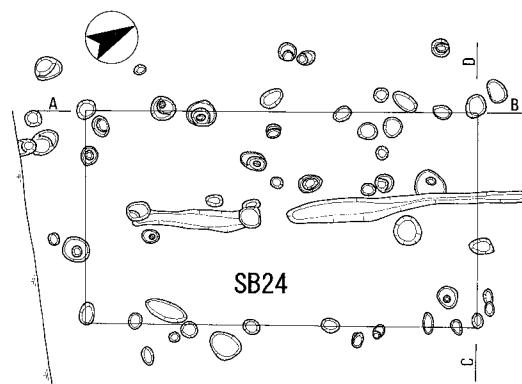
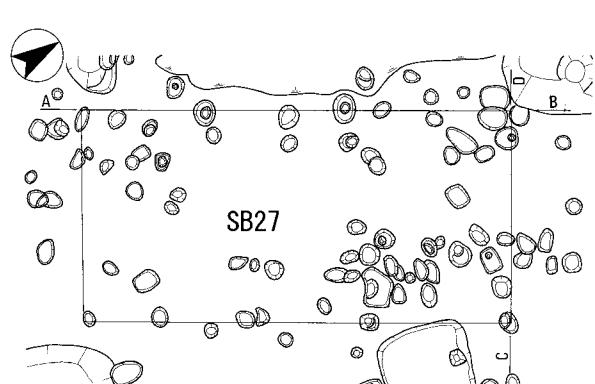
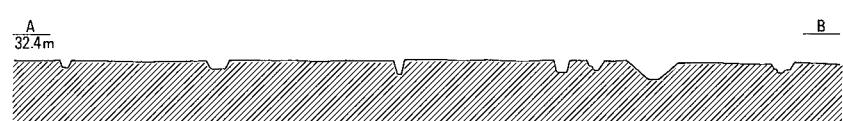
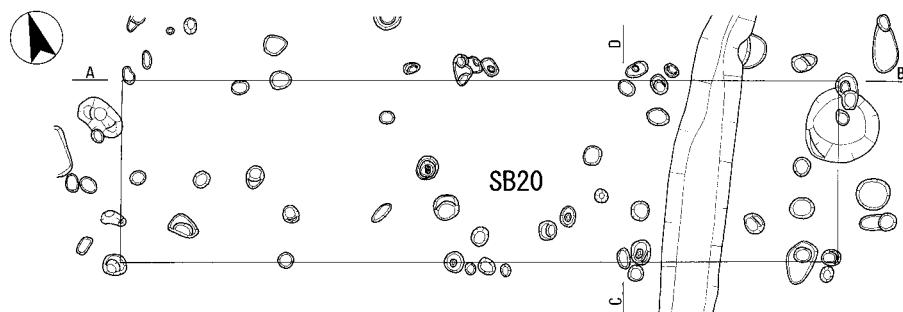
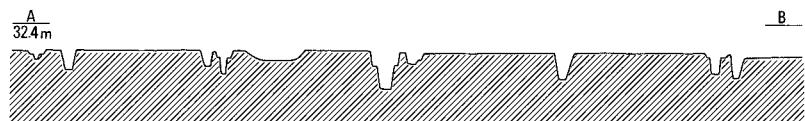
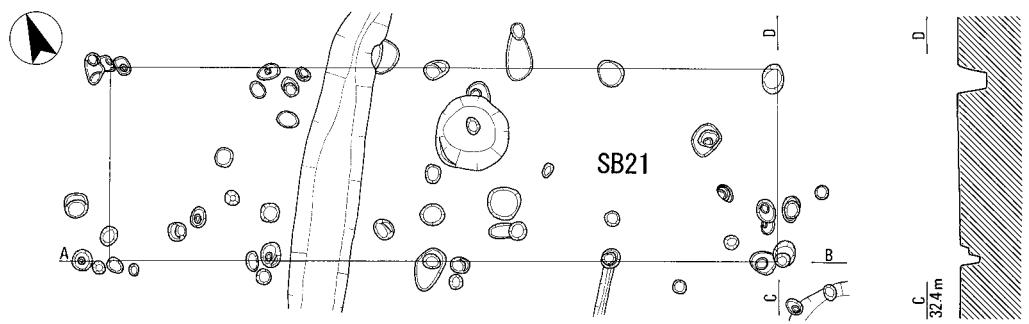
第35図 1次調査区・B地区土層断面図 (1 : 100)



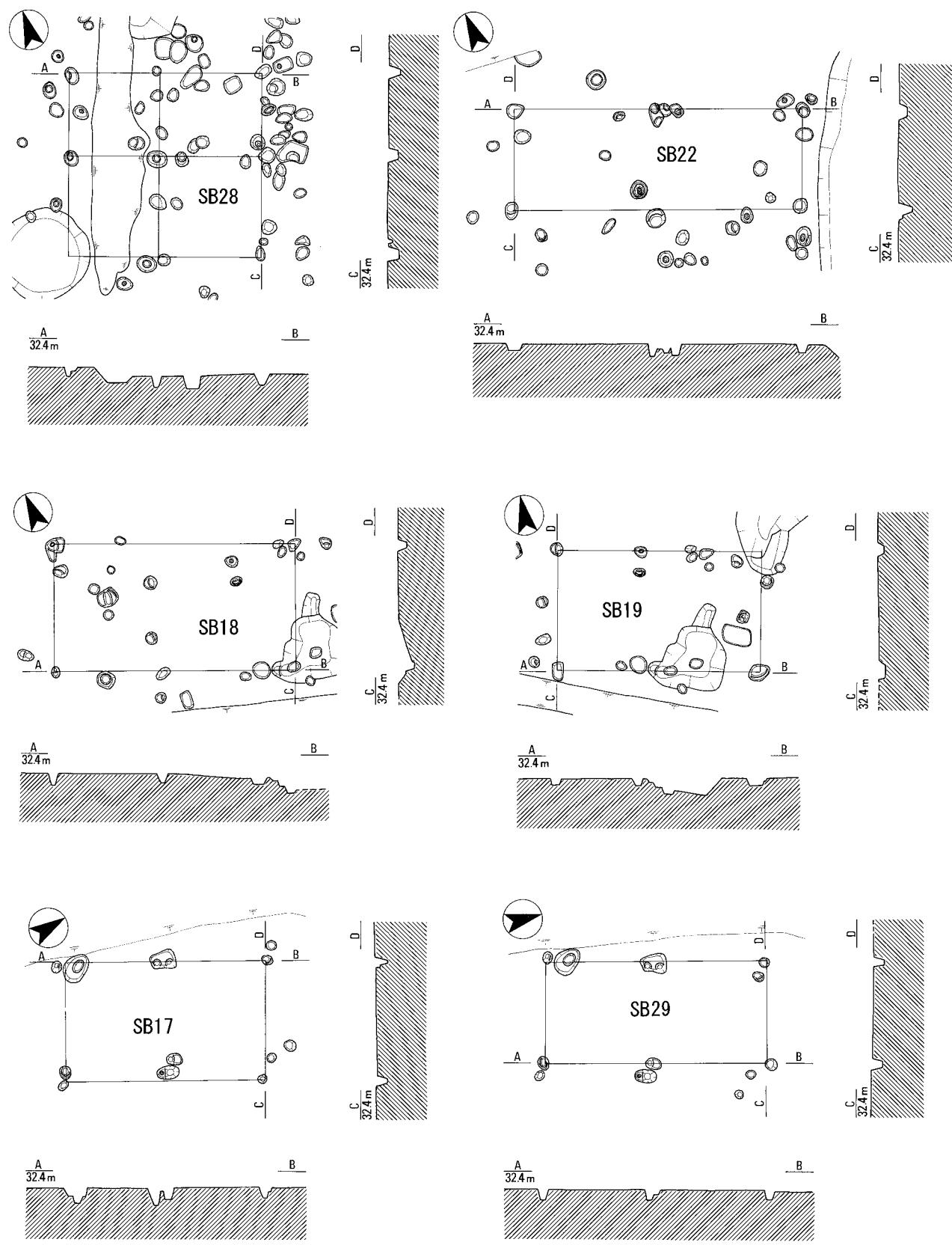
第36図 土坑実測図 (1 : 50)



第37図 挖立柱建物実測図① (1 : 100)



第38図 挖立柱建物実測図② (1 : 100)



第39図 挖立柱建物実測図③ (1 : 100)

で、柱間は桁行が $1.95+2.7+1.5$ m、梁行が $1.5+1.95$ mである。柱穴から山茶椀小片が出土している。

**S B21** (第38図) 調査区北側で検出した桁行4間×梁行1間の建物である。建物方向はN $16^{\circ}$  Eで、柱間は桁行 $2.1+2.1+2.4+2.25$ m、梁行は $2.55$ mである。柱穴から山茶椀、土師器鍋の小片が出土している。

**S B20** (第38図) 調査区北側で検出した。柱間は梁行が $2.4$ mで、桁行は $2.1+2.25+2.25+2.8$ mと $2.1+2.4+2.1+2.8$ mでやや不揃いであるが、一応桁行4間×梁行1間の建物とした。建物方向はN $17^{\circ}$  E。SK16より新しい。柱穴から土師器小片が出土している。

**S B27** (第38図) 調査区東側で検出した。柱間は梁行が $2.8$ m、桁行は $1.8+2.25+1.65$ mと $1.95+2.1+1.65$ mで不揃いであるが、一応桁行3間×梁行1間の建物とした。建物方向はN $25^{\circ}$  Eで、柱穴から南伊勢系の土師器鍋小片が出土している。

**S B24** (第38図) 調査区中央で検出した。柱間は梁行が $2.85$ mで、桁行が $1.8+1.95+1.5$ mと $2.0+1.85+1.35$ mで不揃いであるが、一応桁行3間×梁行1間の建物とした。建物方向はN $30^{\circ}$  Eで、柱穴から第5型式の山茶椀が出土している。

**S B28** (第39図) 調査区北側で検出した桁行2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN $18^{\circ}$  Eで、桁行が $1.65+1.8$ m、梁行は $1.5+1.8$ mである。柱穴から第6～7型式の山茶椀が出土している。

**S B22** (第39図) 調査区北側で検出した桁行2間×梁行1間の建物である。建物方向はN $24^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が $2.55$ mの等間、梁行が $1.8$ mである。柱穴から南伊勢系の土師器鍋と思われる小片が出土している。

**S B18** (第39図) 調査区西側で検出した。建物方向はN $25^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が $1.95+2.4$ m、梁行が $2.25$ mである。北側の柱穴が不足しているが、一応桁行2間×梁行1間の建物とした。柱穴から出土遺物はなく、S B27と同じ方向のため同時期と思われる。

**S B19** (第39図) 調査区南端で検出した桁行2間×梁行1間の建物である。建物方向はN $9^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が $1.5+2.1$ m、梁行が $2.1$ mである。柱穴

から第5型式の山茶椀が出土している。

**S B17** (第39図) 調査区西側で検出した桁行2間×梁行1間の建物である。建物方向はN $30^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が $1.8$ mの等間、梁行が $2.1$ mである。調査区西壁際で急激に落ち込み、建物が西へ延びていた可能性がある。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

**S B29** (第39図) 調査区の西側で検出した桁行2間×梁行1間の建物である。建物方向はN $23^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が $2.1+1.8$ m、梁行は $1.8$ mである。柱穴から山茶椀小片と南伊勢系鍋小片が出土している。

### b 井戸

**S E10** (第39図) 調査区の東側で検出した素掘りの井戸である。規模は、検出面で径約 $1.6$ m、底部で径約 $0.8$ m、深さ約 $1.8$ m。標高 $30.5$ m以下では湧水を確認した。埋土から第6型式の山茶椀、伊藤編年第2段階の南伊勢系の土師器鍋の小片が出土している。

### c 溝

**S D1** 調査区西側で検出した溝である。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。溝として番号を付与したが、2次調査B地区の遺構を含めて検討すると、畦畔の可能性がある。

**S D3** 調査区西側で検出した溝である。埋土から山茶椀小片が出土している。SD1同様、畦畔の可能性がある。

**S D7** 調査区中央で検出した溝である。埋土から第6～7型式の山茶椀が出土している。

## 2 遺物

### S K4 出土遺物（1）

1は北白川上層式1期の深鉢の口縁と思われる。

### 掘立柱建物出土遺物（2～3）

2はSB18の柱穴出土で、第6型式の山茶椀である。

3はSB24の柱穴出土で、第6型式の山茶椀である。

### S K13 出土遺物（4～5）

4～5は山茶椀で、第6型式のものである。

### S D7 出土遺物（6）

6は、第3型式の小椀である。

### ピット出土遺物（7～16）

7は、ロクロ成形の土師器皿で、風化が著しい。

8は、山皿で第6型式だろう。9～15は山茶椀である。9は第3型式、10は第4型式、11～12は第5型式、13は第6型式、14～15は第7型式だろう。15は、底部に墨書がある。16は青磁椀である。

## 第4節 第2次調査

1次調査区とB地区が隣接している。以下、B地区から報告する。

### 1 B地区

B地区では、掘立柱建物、溝を検出した。調査区西側では建物は存在せず、四角に巡る溝は現在の田以前の畦畔と考えられ、「T」で示した。

#### (1) 遺構

##### 鎌倉時代の遺構

###### a 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物は、調査区南端中央に集中して見られ、全体がわかる建物は存在しない。そのため、桁行、梁行が逆転している可能性がある。

**S B 135** (第41図) 調査区南端で検出した桁行4間×梁行2間以上の掘立柱建物である。建物方向はN14° Eで、柱間は桁行が2.1+2.1+2.1+2.7m、梁行は2.1mと1.9mで不揃いであるものの、主屋と考えられる。柱穴の掘形の埋土は灰黄褐色土。柱穴

#### 包含層出土遺物 (17～21)

17は第4型式の小椀である。18～21は山茶椀である。18～19は第6型式、20は第5か6型式、21は第7型式である。

#### 第2次調査

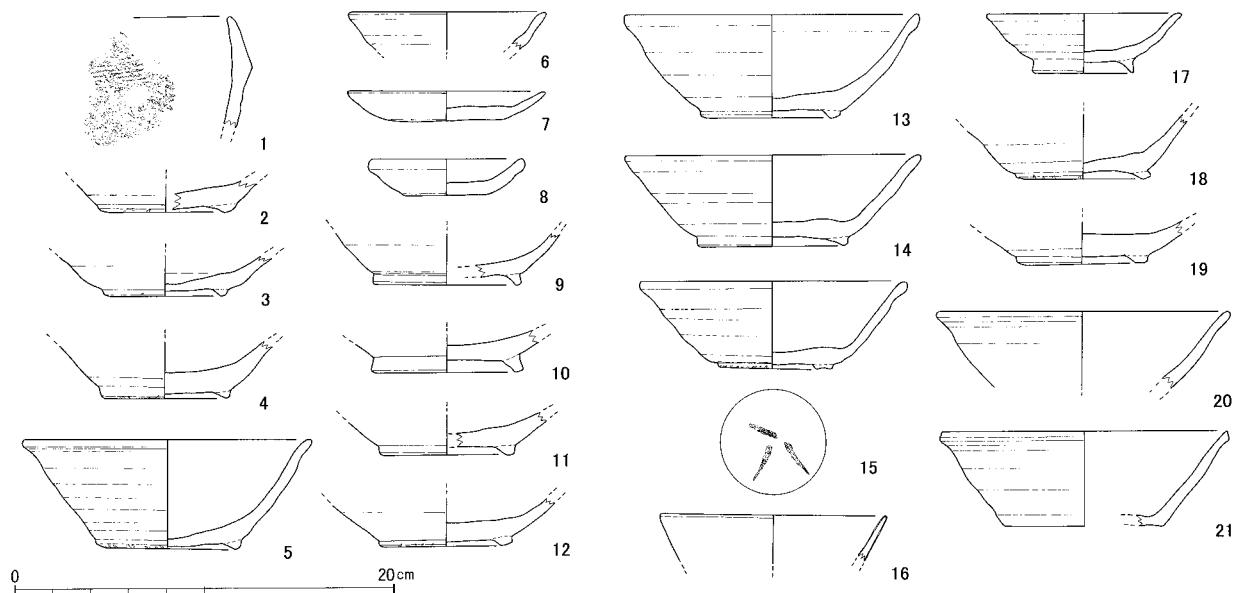
から第6型式の山茶椀が出土している。

**S B 132** (第41図) 調査区南端で検出した桁行2間以上×梁行2間の掘立柱建物である。建物方向はN16° Eで、柱間は桁行が1.8mの等間、梁行は2.1+1.8mである。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

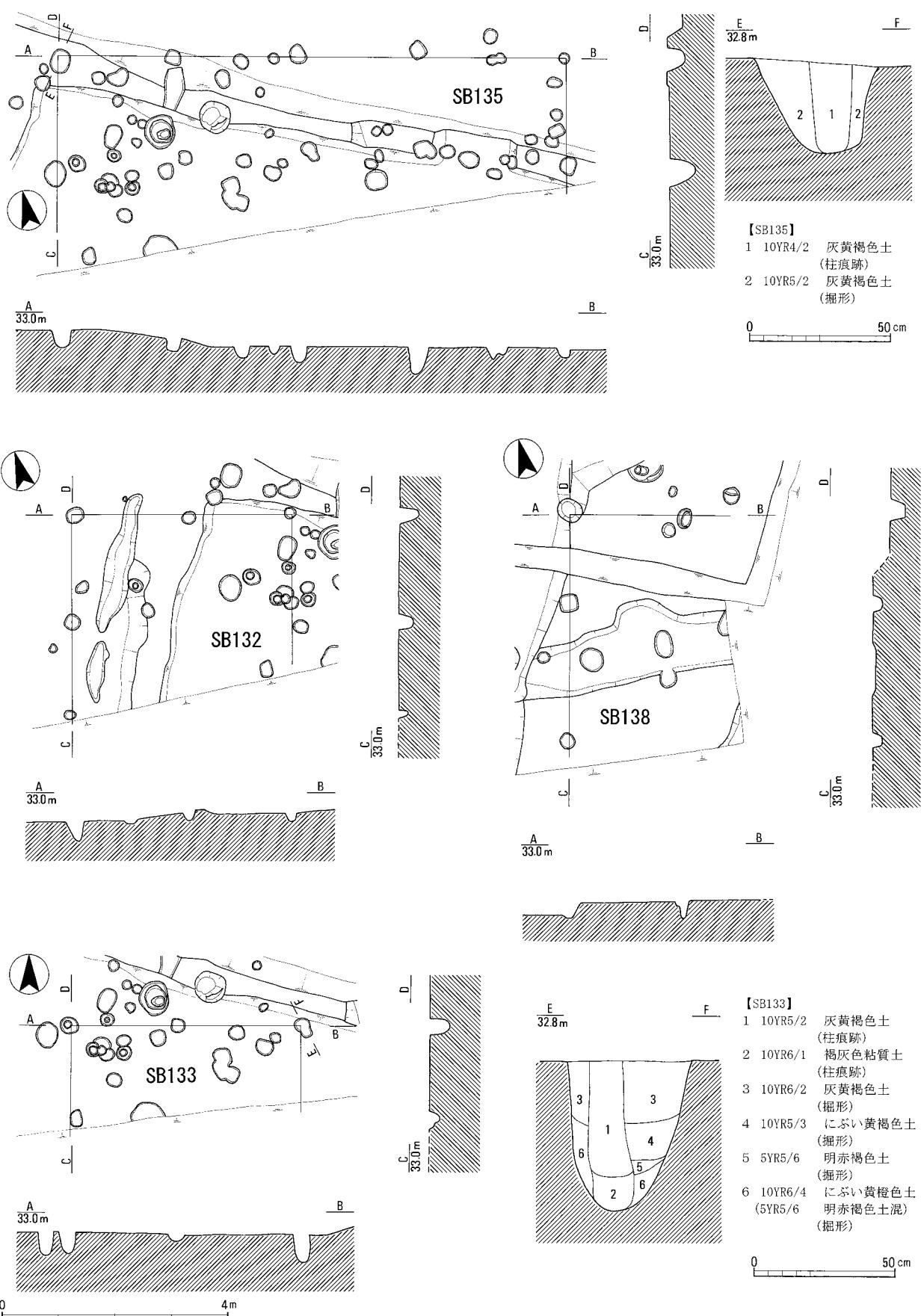
**S B 138** (第41図) 調査区東側で検出した桁行2間以上×梁行2間以上の建物と思われる。建物方向はN10° Eで、柱間は桁行が2.1m、梁行が1.6+2.4mである。遺物は出土していない。

**S B 133** (第41図) 調査区南端で検出した桁行1間以上×梁行2間の建物と思われる。建物方向はN10° Eで、柱間は桁行が1.65m、梁行が1.95+2.1mである。柱穴の掘形は灰黄褐色～にぶい黄褐色土。柱穴から第5型式の山茶椀が出土している。

**S A 134** (第42図) 調査区南端で2間分検出した1.8+1.65mの柱列と思われる。調査区際のため詳細は不明だが、柱穴から第6型式の山茶椀が出土し



第40図 出土遺物実測図 (1:4)



第41図 挖立柱建物実測図 (1 : 20、1 : 100)

ている。

S A136（第42図） 調査区南端で2間分検出した $1.5 + 1.35$ mの柱列と思われる。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

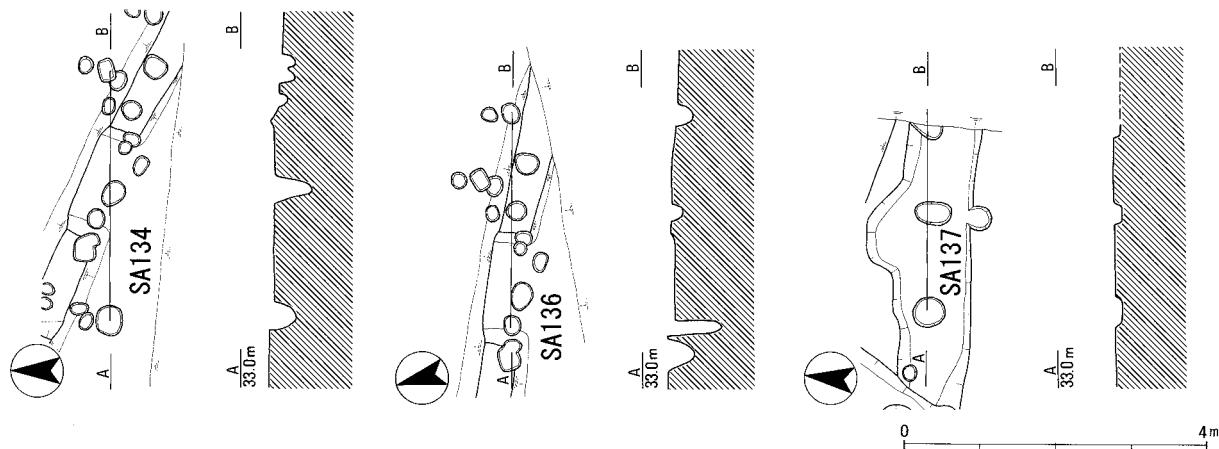
S A137（第42図） 調査区東端で2間分検出した $1.35 + 1.5$ mの柱列と思われる。遺物は出土していない。

### b 溝

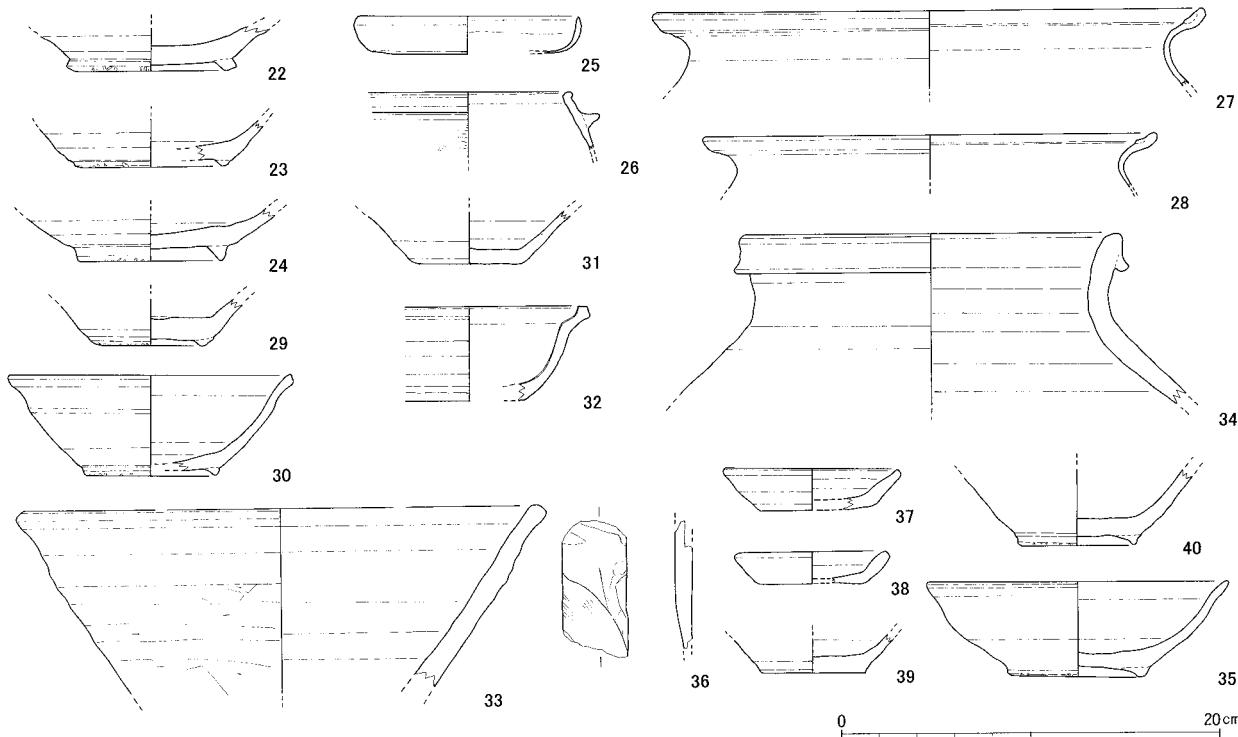
S D130 調査区東端からL字に曲がる溝である。

S D128より古い。溝の規模は、幅約1.5m、深さ約0.2mである。遺物は山茶椀第8型式までの時期であるが、1点のみ中野編年<sup>⑤</sup>9型式の常滑製品の玉縁口縁壺が出土している。

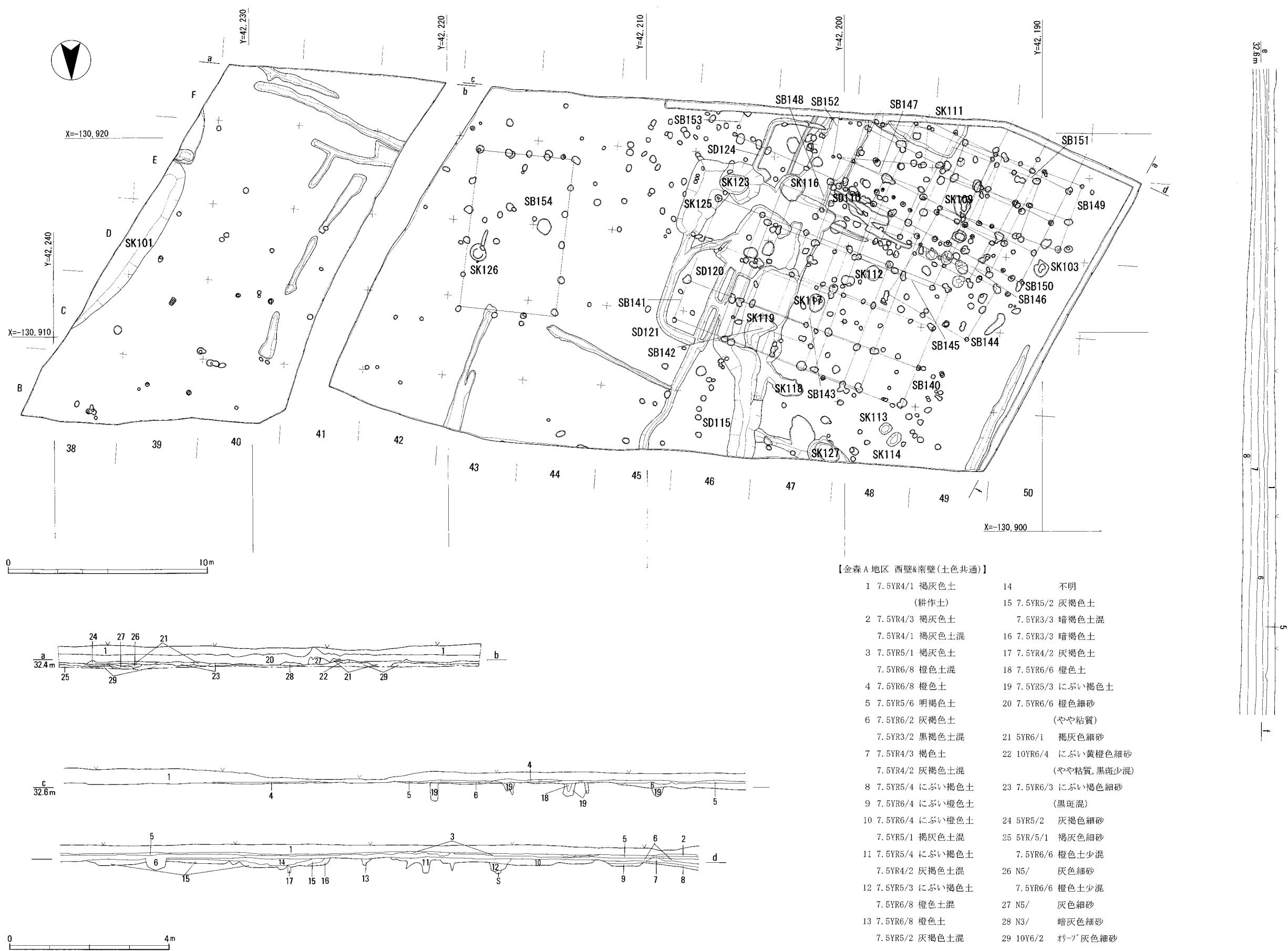
S D128 調査区東側で検出した溝である。S D130より新しい。溝の規模は、長さ約5.1m、約1~1.5m、深さ約0.2mである。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。



第42図 柱列実測図（1：100）



第43図 出土遺物実測図（1：4）



第44図 A地区遺構平面図 (1:200)・土層断面図 (1:100)

## (2) 遺物

### S D 128出土遺物 (22~23)

22~23は山茶椀で、22は第4型式、23は第6型式である。

### S D 130出土遺物 (25~34)

25~28は南伊勢系の土師器である。25は皿で剥離が著しい。26は羽釜で金子健一氏の分類<sup>⑥</sup>A 5類、27~28は鍋で第1段階b型式であろう。

29~31は山茶椀である。29は第7型式、30は第6型式、31は第8型式である。32は瀬戸美濃製品折縁深皿で、藤澤編年古瀬戸中Ⅲ期である。33は片口鉢で、第7型式である。口縁部の残存が約1/12のため、口径は不確定である。34は常滑製品の玉縁広口壺で9型式のものである。

### ピット出土遺物 (35)

35は山茶椀で、第5型式のものである。

### 包含層出土遺物 (24、36~40)

24は第5型式の山茶椀である。36は凝灰質泥岩製<sup>⑧</sup>の砥石である。37~38は山皿で、第6型式である。39~40は山茶椀で、39は第8型式、40は第6型式である。

## 2 A地区

### (1) 遺構

調査区は農道を挟んで1次調査区・B地区の東側にある。A地区からは、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、井戸、溝等を検出した。建物の方向や規模を考慮すると、B地区 S D 130より東側で区画が存在すると考えられる。

基本層序は、第44図第1層耕作土、第2~3層褐灰色土、第4層橙色土、第5層明褐色土、第6層灰褐色土（検出面）である。

#### ①平安時代の遺構

平安時代の遺構と考えられるのはS B 154のみである。

**S B 154 (第45図)** 調査区東側で検出した桁行5間×梁行3間の掘立柱建物である。建物方向はN 3° Eで、柱間は桁行が1.8+1.8+1.5+1.5+1.5m、梁行は1.35+1.8+1.65mと1.55+1.5+1.75mである。柱穴の掘形の埋土は褐色～暗褐色粘質土。柱穴から須恵器杯・甕片が出土している。

### ②鎌倉～室町時代の遺構

鎌倉～室町時代の遺構は、調査区西側に集中している。1次調査区とは、建物の規模等も異なり、S D 130より東に区画が存在すると考えられる。

#### a 掘立柱建物・柱列

**S B 140 (第46図)** 調査区北半部で検出した桁行5間×梁行3間の総柱建物である。建物の面積は79.3m<sup>2</sup>で、遺跡群内最大規模となる。建物方向はN 19° Eで、柱間は桁行が3.15+2.1+2.25+2.4+2.4m、梁行は2.1+2.1+2.25mである。S K 125より古い。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

**S B 150 (第46図)** 調査区南半部で検出した桁行5間×梁行4間以上の総柱建物で、南東隅土坑SK 111を伴う。建物方向はN 27° Eで、柱間は桁行が2.1+2.1+2.1+2.1+1.95m、梁行は1.5+1.8+1.8m、建物の面積は52.8m<sup>2</sup>以上である。柱穴の掘形の埋土は、暗褐色粘質土。実測遺物の須恵器壺（95）は、混入遺物である。S B 150の時期は山茶椀（50）第7型式、南伊勢系の土師器鍋第2段階の時期である。

S K 111は、S B 150の南東隅土坑である。調査区壁際のため規模は不明だが、深さは約0.15mである。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。

**S B 141 (第47図)** 調査区北半部で検出した桁行3間×梁行3間の総柱建物で建物内土坑を伴った可能性がある。建物方向はN 20° Eで、柱間は桁行が2.4mの等間、梁行は2.1+1.95+2.1mである。S B 145より新しい。柱穴の掘形の埋土は褐色～暗褐色粘質土で、10cm程の石が入っていた。柱穴から土師器皿（96）と第6型式の山茶椀（97）が出土している。

また、調査時の所見ではSD115としているが、周囲より一段低くなる。建物内土坑の可能性も残る。

**S B 149 (第47図)** 調査区南半部で検出した桁行3間×梁行2間以上の総柱建物である。建物方向はN 20° Eで、柱間は桁行が2.1mの等間、梁行は1.5+1.95mである。柱穴の掘形の埋土は暗褐色粘質土で、10cm程の石が入っていた。柱穴から第2段階の南伊勢系鍋と山茶椀片が出土している。

**S B 151 (第47図)** 調査区南半部で検出した桁行3間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN 25° Eで、柱間は桁行が1.8+1.8+1.65m、梁行は2.1

+2.25mである。柱穴から第6型式の山茶椀が出土している。

**S B145** (第48図) 調査区南端で検出した。柱間は梁行が2.1mの等間、桁行は2.9+2.7+1.5mと3.05+2.55+1.5mで不揃いであるが、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物とした。建物方向はN24°Eで、柱穴の掘形の埋土は褐色粘質土。柱穴から第7か8型式の山茶椀(101)が出土している。

**S B153** (第48図) 調査区南端で検出した桁行3間以上×梁行2間以上の建物と考えられる。建物方向はN24°Eで、柱間は桁行が2.1+2.1+1.8m、梁行は1.8mの等間である。柱穴の掘形の埋土は褐色～暗褐色粘質土である。柱穴から砥石(124)、第6型式の山茶椀が出土している。

**S B143** (第48図) 調査区中央部で検出した桁行3間×梁行1間の建物である。建物方向はN22°Eで、柱間は桁行が2.25+1.65+1.8m、梁行は2.9mである。柱穴の掘形の埋土は褐色～暗褐色粘質土である。柱穴から第2段階の南伊勢系の土師器鍋と第

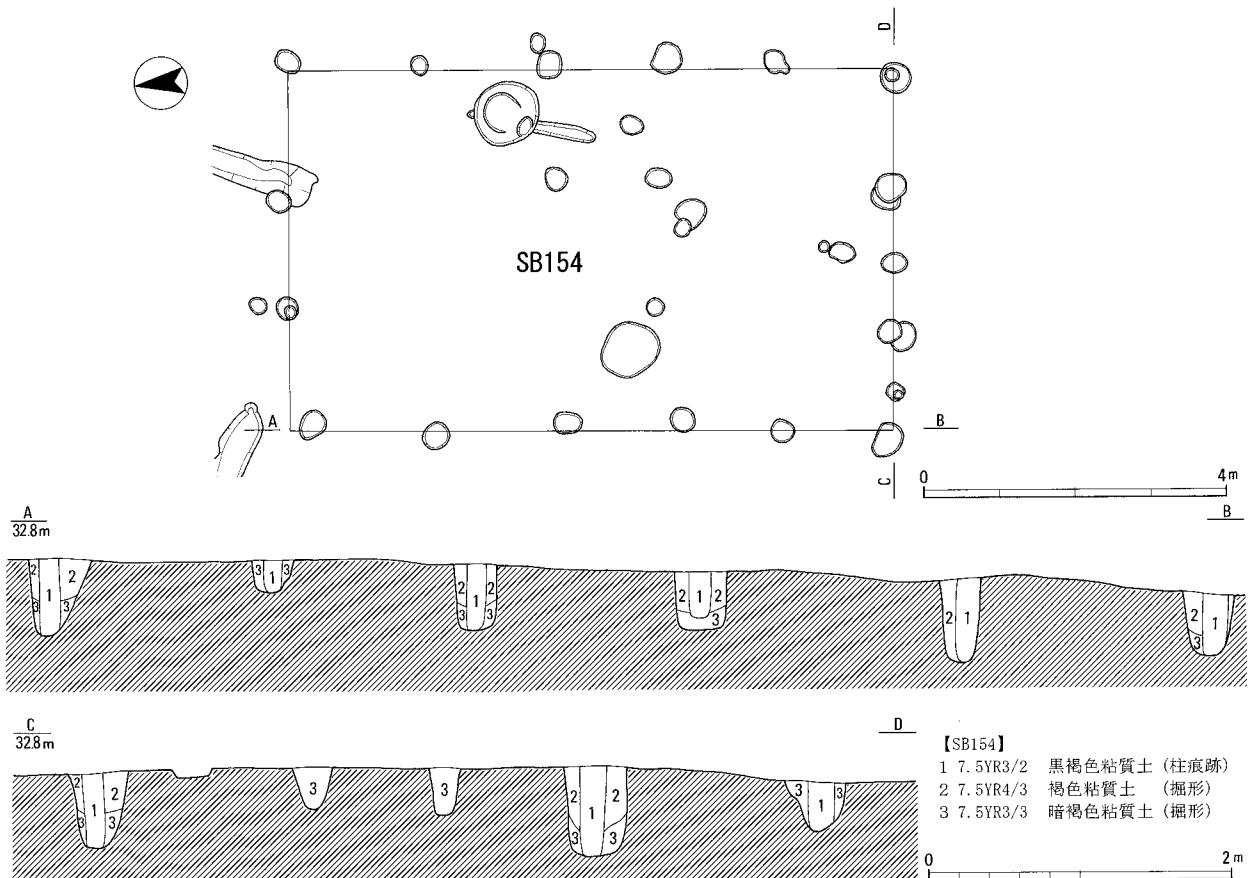
6型式の山茶椀が出土している。

**S B152** (第49図) 調査区南端で検出した桁行1間以上×梁行2間の建物と思われる。建物方向はN8°Eで、柱間は桁行が1.95m、梁行は2.3+2.15mである。柱穴から第7型式の山茶椀が出土している。

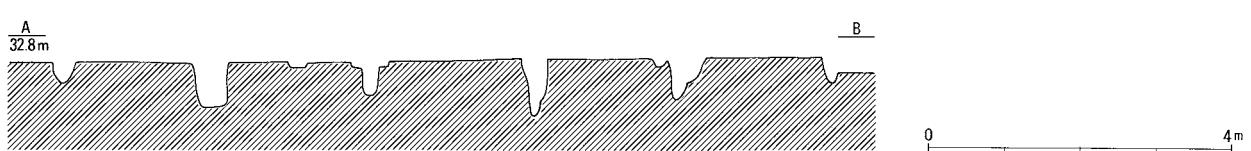
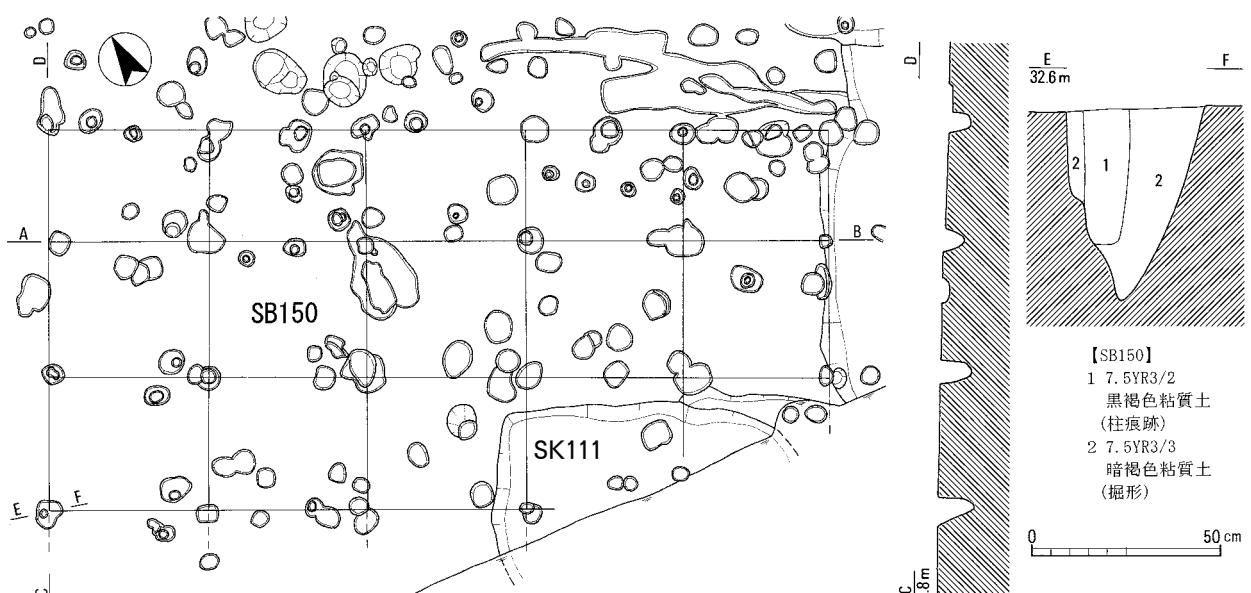
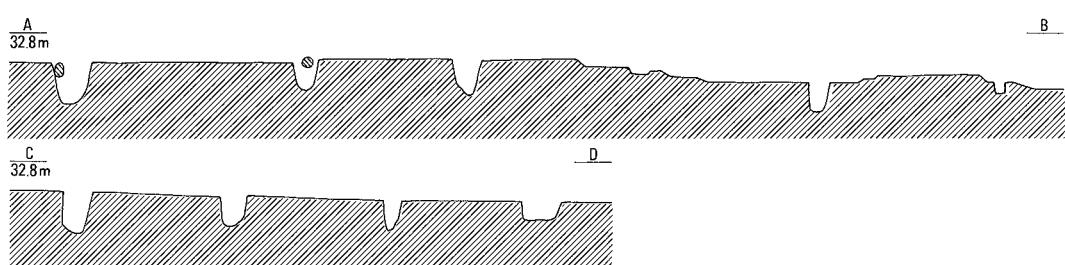
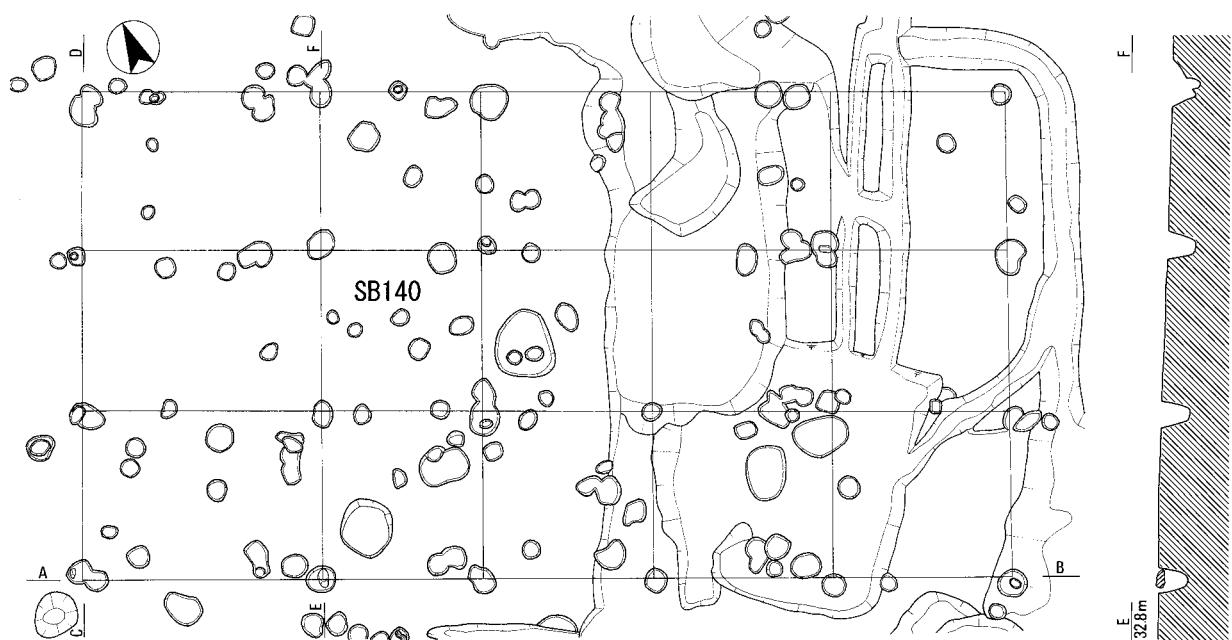
**S B144** (第49図) 調査区中央部で検出した。柱間は桁行が2.4+2.1mと2.25mの等間でやや不揃い、梁行1.8+1.2mで、一応2間×2間の建物とした。建物方向はN32°Eである。柱穴から第2段階の南伊勢系鍋が出土している。

**S B147** (第49図) 調査区中央部で検出した桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN20°Eで、柱間は桁行が2.8+1.5m、梁行が2.7mである。柱穴から第8型式の山茶椀が出土している。

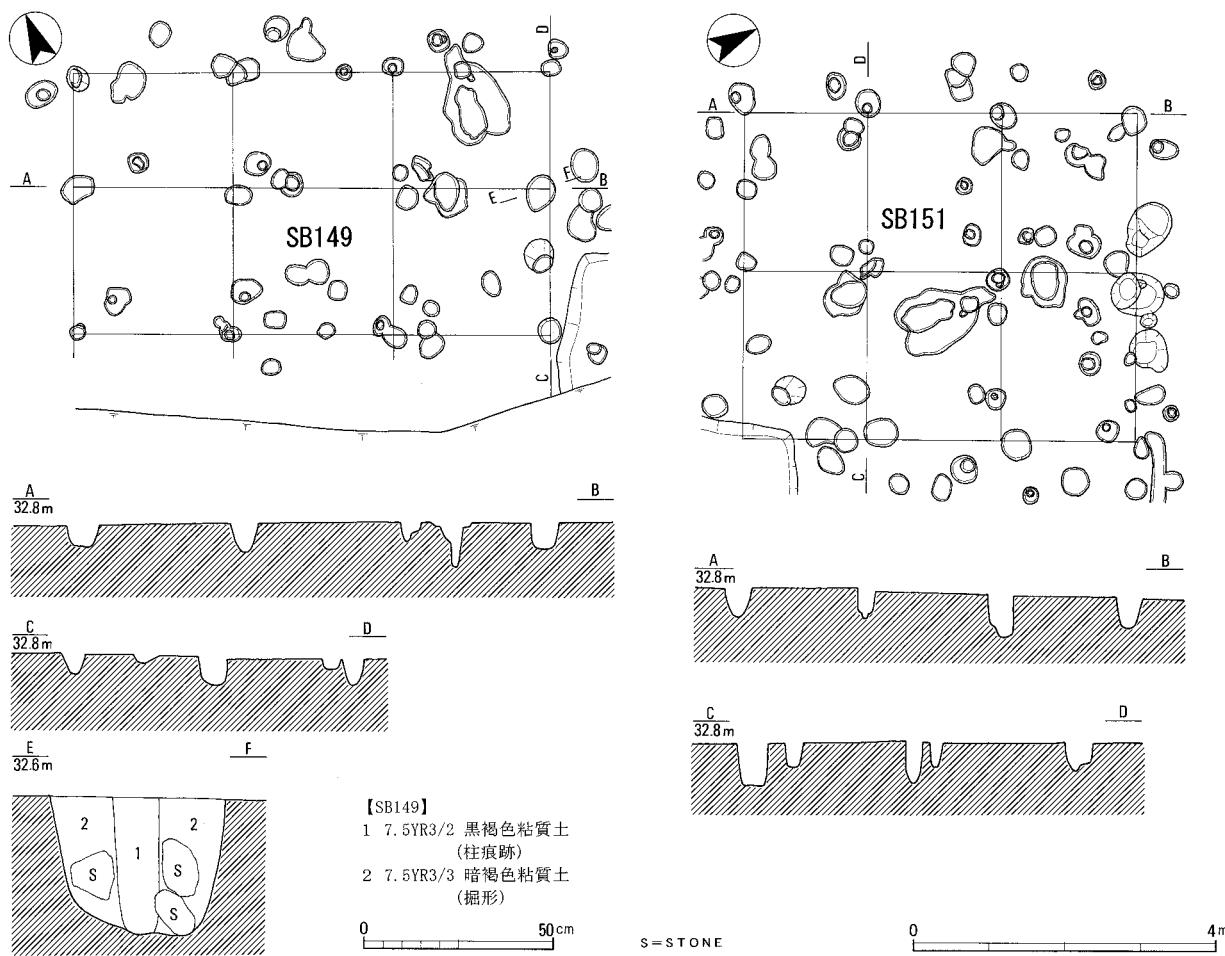
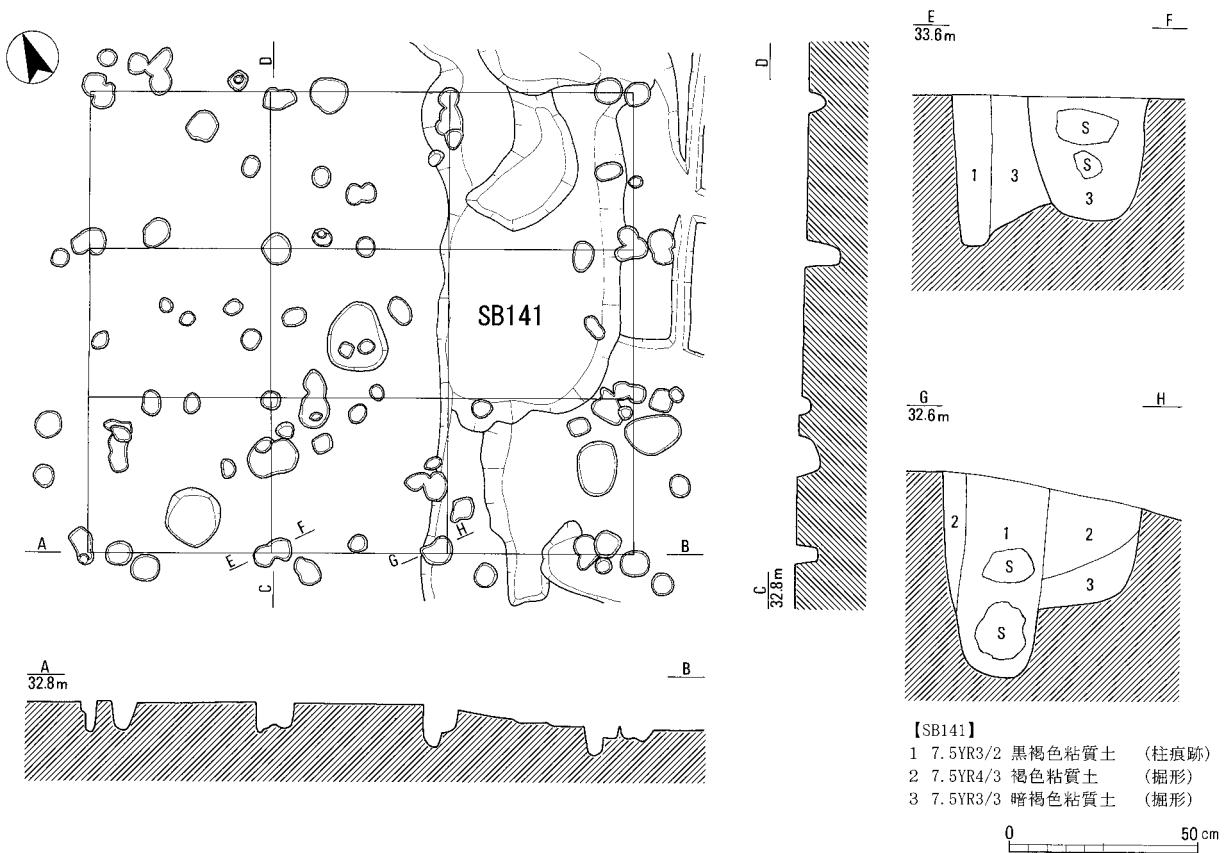
**S B142** (第49図) 調査区中央部で検出した。柱間は桁行が4.15m、梁行は2.8mで、桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN22°Eで、遺物は出土していない。S B143と同じ方向のため



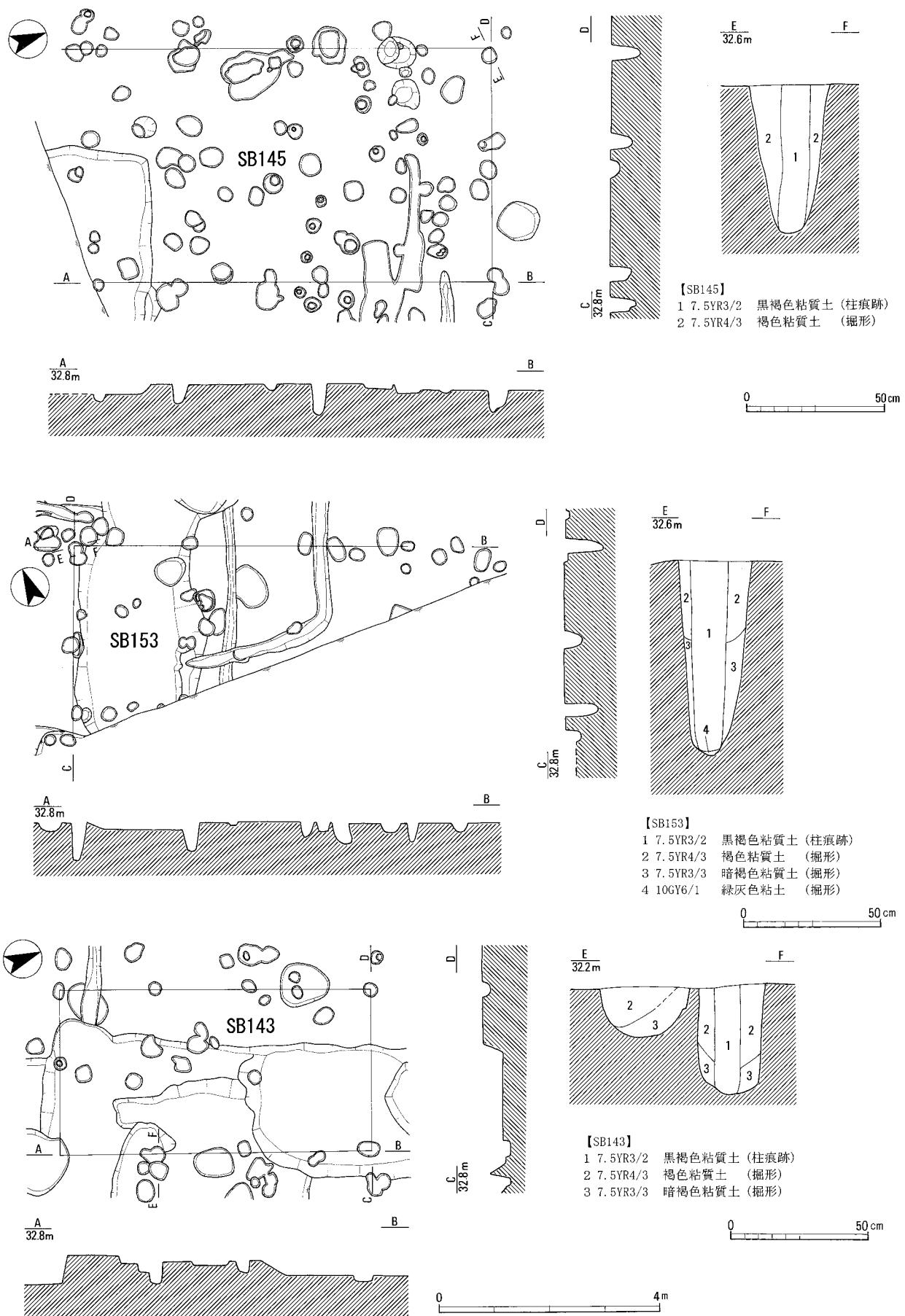
第45図 掘立柱建物実測図① (1:50、1:100)



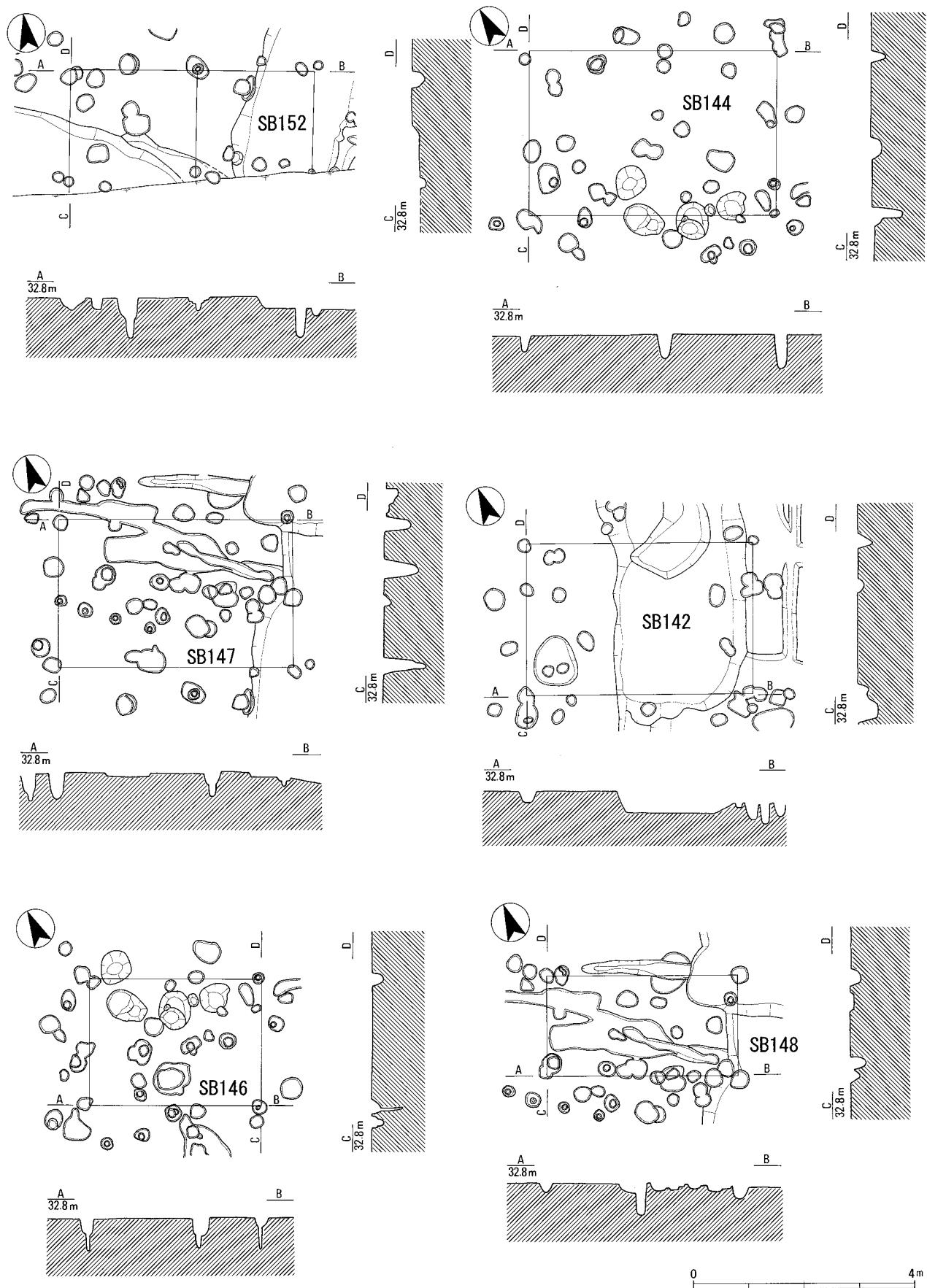
第46図 掘立柱建物実測図② (1 : 20、1 : 100)



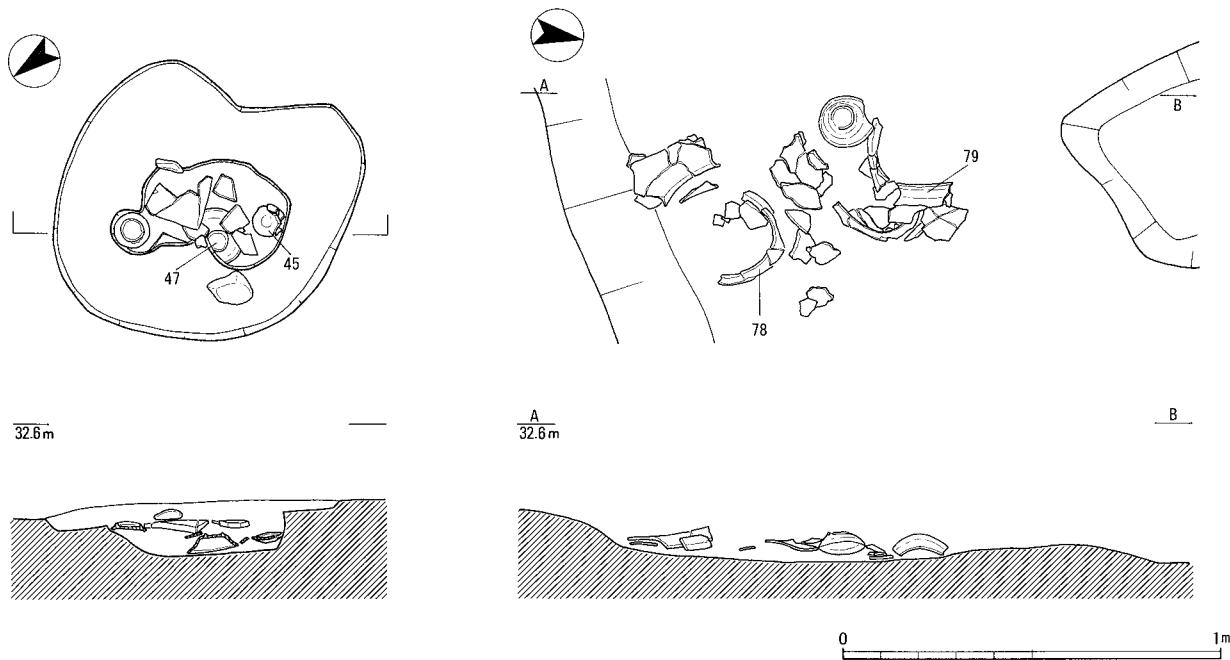
第47図 掘立柱建物実測図③ (1 : 20、1 : 100)



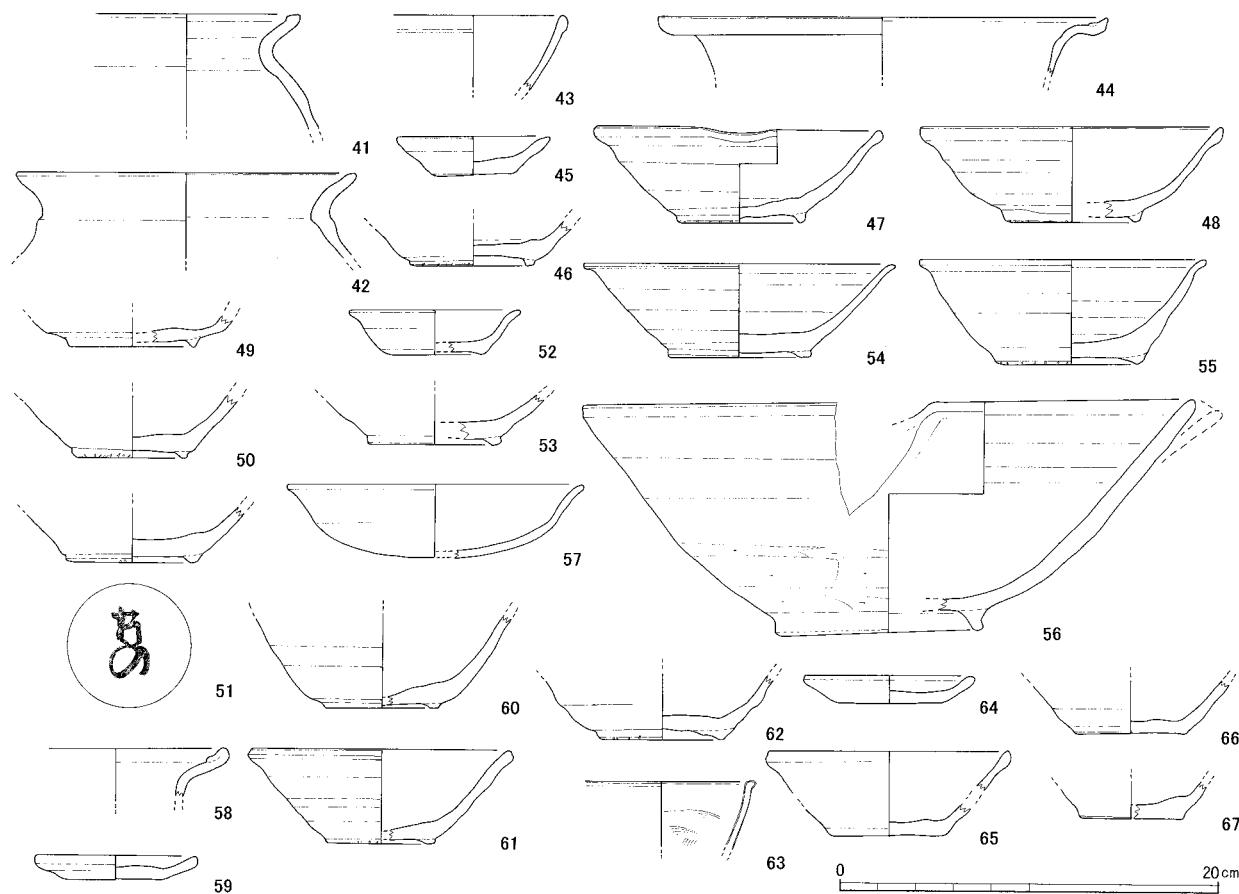
第48図 掘立柱建物実測図④ (1 : 20、1 : 100)



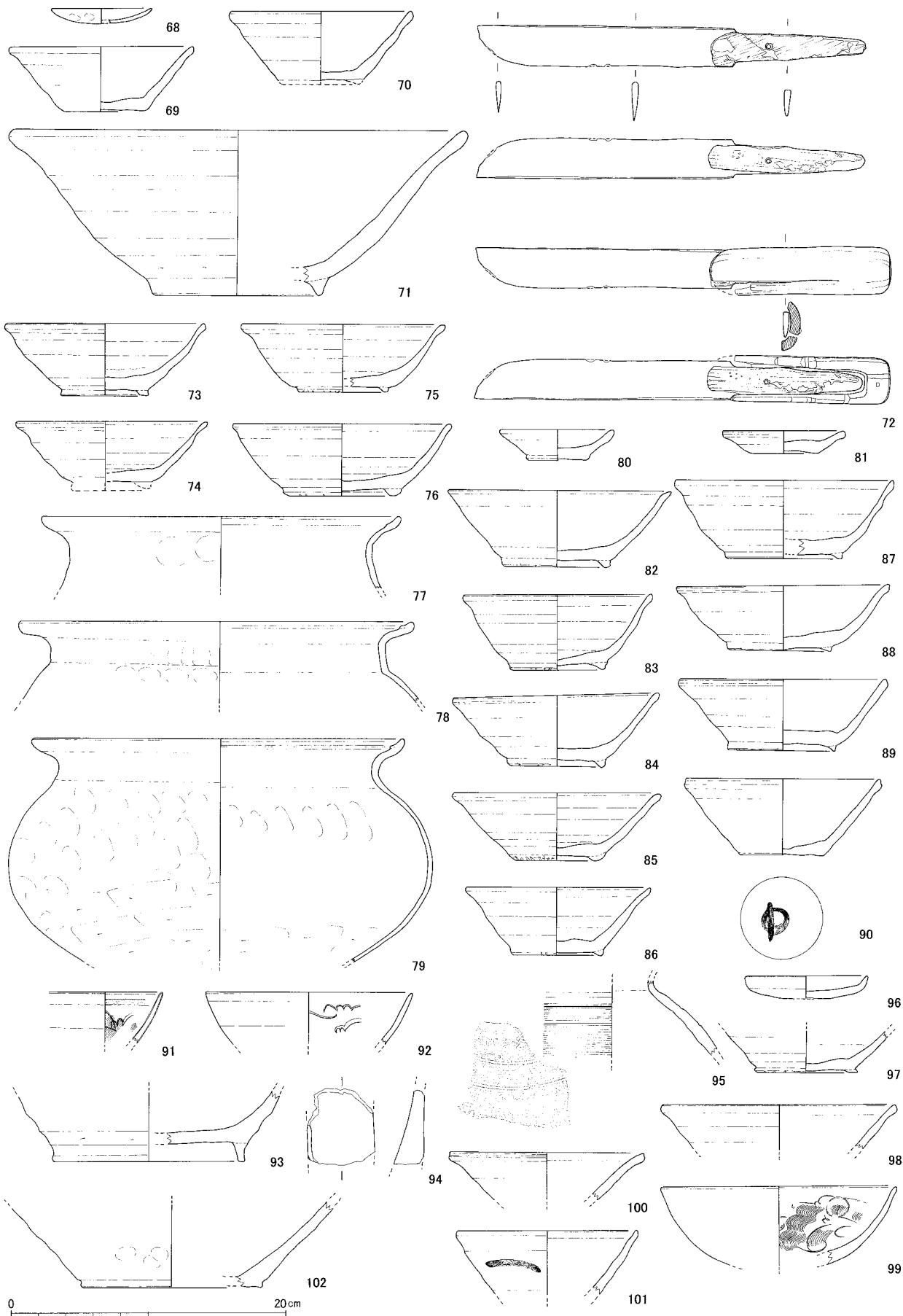
第49図 挖立柱建物実測図⑤ (1 : 100)



第50図 SK 103・SD 115実測図 (1 : 20)



第51図 出土遺物実測図① (1 : 4)



第52図 出土遺物実測図② (1 : 4)

同時期と思われる。

**S B 146** (第49図) 調査区中央部で検出した桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN $27^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が1.95+1.2m、梁行は2.25mである。遺物は出土していない。

**S B 148** (第49図) 調査区中央部で検出した桁行2間×梁行1間の建物と思われる。建物方向はN $23^{\circ}$  Eで、柱間は桁行が1.95+1.5m、梁行は1.8mである。柱穴から第7型式の山茶椀が出土している。

### b 土坑

**S K 103** (第50図) 調査区西側で検出した不整形な土坑である。規模は、長径約0.76m、短径約0.64m、深さ約0.15mである。埋土から第6型式の山茶椀(46・47)が出土している。

### c 井戸

**S E 116** 調査区南側で検出した素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出径約1.1m、深さ約0.6m。埋土から小刀(72)や第8型式の山茶椀(69)が出土している。

**S E 123** 調査区南側で検出した素掘りの井戸である。井戸の規模は、検出径1.8~2.1mで楕円形を呈する。西側に約0.3m凹んだ一段低い水汲み場のような場所がある。井戸の深さは約1.05m。埋土から第8か9型式の山茶椀(67)が出土している。

### d 溝

**S D 115** (第50図) 調査区中央部で検出した溝である。規模は幅約1.5m、深さ約0.45mである。埋土から第2段階の南伊勢系の土師器鍋(78・79)が出土している。S E 116、S K 119より新しい。

**S D 120** 調査区中央部で検出した溝である。幅約0.4~0.6m、深さ約0.1m程である。S D 121より古い。埋土から第6型式の山茶椀が出土している。S E 116と一連の遺構と考えられる。

**S D 121** 調査区中央部で検出した溝である。幅約0.5m、深さ約0.15m程である。S D 120より新しい。埋土から第6型式の山茶椀(73)が出土している。

S E 123、S K 125と一連のものと考えられ、C 44付近で屈曲して、S D 120で合流する。

## (2) 遺物

**S K 101** 出土遺物 (41~43) 41は南伊勢系の土師器甕で、(仮)A段階と思われる。42は土師器の甕で、

9世紀末~10世紀のもの。混入遺物である。43は白磁碗である。

**S K 103** 出土遺物 (44~48)

44は南伊勢系の土師器鍋で、第1段階b型式である。45は山皿で第5型式、46~48は第6型式の山茶椀である。

**S K 104** 出土遺物 (49)

49は第6型式の山茶椀であろう。

**S K 112** 出土遺物 (51)

51は第6型式の山茶椀で、底部に墨書がある。

**S K 117** 出土遺物 (52)

52は第5型式ぐらいの山皿であろう。

**S K 118** 出土遺物 (53)

53は第6型式の山茶椀である。

**S K 125** 出土遺物 (54~56)

54~55は山茶椀で、54は第5型式、55は第6型式で内面に煤が付着している。56は片口鉢で、第5型式である。

**S K 126** 出土遺物 (57)

57は土師器杯。9世紀末~10世紀のもので、S B 154と時期が近い可能性がある。混入遺物である。

**S K 127** 出土遺物 (58~63)

58は南伊勢系の土師器鍋で第1段階b型式である。59は山皿で第7型式、60~62は山茶椀である。60~61は第6型式、62は第7型式であろう。63は白磁碗である。

**S E 123** 出土遺物 (64~67)

64は山皿で第7型式、65~67は山茶椀である。65~66は第8型式、67は第8か9型式である。

**S E 116** 出土遺物 (68~72)

68は土師器皿である。69~70は山茶椀で、69は第8型式、70は高台が剥離し第7型式のものである。71は片口鉢で、第6型式である。72は鉄製品小刀である。刀の全長28.3cm、柄13.2cm、柄装着時の全長30.2cm、刀と柄の分割が可能である。

**S D 121** 出土遺物 (73)

73は第6型式の山茶椀である。

**S D 122** 出土遺物 (74~76)

74~76は第6型式の山茶椀である。74は高台が剥離している。

**S D 115** 出土遺物 (77~94)

77～79は南伊勢系の土師器鍋で第1段階b型式である。77は内外面ともに剥離のため調整が不明瞭である。

80～81は山皿で、80は第5型式、81は第6型式である。82～90は山茶椀で、82～84は第6型式、85～90は第7型式である。90は口縁部に煤が付着し、底部には墨書がある。円形と直線を組合せている。91～92は青磁椀で、同一個体である。93は片口鉢で第5型式、94はホルンフェルス製の砥石である。

#### S B 150出土遺物（50・95）

95は須恵器壺であろう。柱穴の混入遺物である。S B 150の時期は、南東隅土坑 S K 111出土遺物50、第7型式の山茶椀の時期に伴う。

#### S B 141出土遺物（96～99）

96は中北勢系の土師器皿である。97～98は山茶椀で第6型式、99は青磁椀で龍泉窯のものである。

#### S B 145出土遺物（100～101）

100～101は山茶椀で、100は第7型式である。101は第7か8型式で、体部に墨書があり左から右方向へ筆を運んでいる。

#### S B 152出土遺物（102）

102は常滑製品の甕の底部である。器壁の薄さから12世紀代のものであり、胎土のしまり具合から2か3型式のものと思われる。

#### S B 153出土遺物（124）

124はホルンフェルス製の砥石である。S B 153から出土しているが、遺構の時期には伴わない混入遺物である。

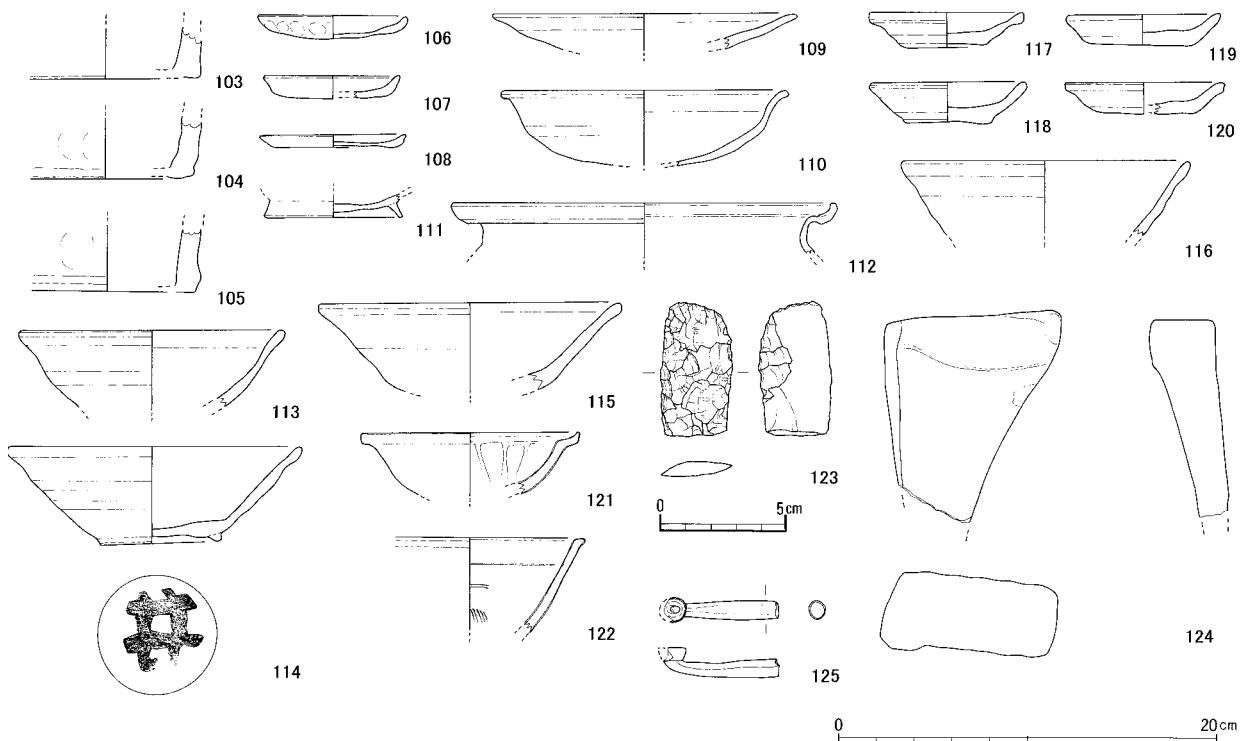
#### ピット出土遺物（103～117）

103～105は志摩式製塙土器、106～109は土師器皿でいずれも風化が著しい。106・108は南伊勢系で、107は中北勢系である。109はロクロ成形の土師器皿、110は土師器杯で9世紀末～10世紀のものである。111は黒色土器椀である。112は南伊勢系の土師器鍋で第1段階b型式だろう。

113～116は山茶椀で、第6型式だろう。114は底部に墨書があり、記号を書いたのであろうか。117は山皿で、第5型式である。

#### 包含層出土遺物（118～122）

118～120は山皿で、118は第5型式、119～120は



第53図 出土遺物実測図③ (123=1:3、1:4)

第6型式である。121は青磁で杯であろうか。122は白磁碗である。123はサヌカイト製で、完成品と考えるならば片面調整の削器。しかし、棄損後の尖頭

器を転用した可能性も残る。縄文時代草創期～中期までの所産で、風化が著しい。125はキセルである。

## 第5節 まとめ

金森遺跡では、縄文時代後期、平安時代、鎌倉～室町時代の遺構を確認した。主体を占めるのは、鎌倉時代の遺構である。

縄文時代の遺構は、陥し穴を4基確認した。平安

時代の遺構は掘立柱建物1棟に限られる。鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物31棟、土坑17基、井戸2基、溝10条からなる3箇所の区画を確認した。室町時代の遺構は、井戸1基、溝2条である。（酒井）

### [註]

- ①『亀山市埋蔵文化財分布地図』（亀山市教育委員会、1993年）
- ②AMS法の測定に関しては株式会社加速器研究所の協力を得てパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。測定結果は第8章の通りである。
- ③以下山皿・山茶椀は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）
- ④以下南伊勢系土師器鍋・羽釜は伊藤裕偉氏の編年により記述する。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）
- ⑤以下常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。以下常滑製品は中野晴久氏の編年により記述する。中野晴久「常滑・渥美」（『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年）

⑥金子健一「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第8輯（瀬戸市埋蔵文化財センター、2000年）

⑦以下古瀬戸製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下古瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」（『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年）

⑧石材については、愛知県埋蔵文化財センター堀木真美子氏のご教示を得た。

⑨浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要VI』（三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1990年）

⑩奥義次氏のご教示を得た。

遺構番号	調査時遺構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地区	時期	規模				備考 (切り合い: 古い→新しい)
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	
SD1	SD1	H13	1		B4～B5	鎌倉						畦畔の可能性あり
SK2	SK2	H13	1	第36図	B5・C5	縄文						畦畔の可能性あり
SD3	SD3	H13	1		B3～B5・C3～C4	鎌倉						畦畔の可能性あり
SK4	SK4	H13	1	第36図	C5	縄文						
SK5	SK5	H13	1	第36図	D4	縄文？						
SK6	SK6	H13	1	第36図	E4～E5・F4	縄文						
SD7	SD7	H13	1		F3～F6・G3～G4	鎌倉						
SD8	SD8	H13	1		G4～G5	鎌倉						畦畔の可能性あり
SK9	SK9	H13	1	第36図	E5～E6	縄文						
SE10	SK10	H13	1		H4	鎌倉						
11	11	H13	1									欠番
SK12	SK12	H13	1		D3～D4	鎌倉						
SK13	SK13	H13	1		I3～I4・J3～J4	鎌倉						
14	SK14	H13	1									SD128へ変更。欠番
15	SD15	H13	1									SD130へ変更。欠番
SK16	SK16	H13	1	第36図	G3～G4	縄文						
SB17		H13	1	第39図	A4～A5	鎌倉	2×1	3.60	2.10	7.56	30	
SB18		H13	1	第39図	D5～D6・E5～E6	鎌倉？	2×1	4.35	2.25	9.79	25	SB27と方向が同じ
SB19		H13	1	第39図	D5～D6・E5～E6	鎌倉	2×1	3.60	2.10	7.56	9	
SB20		H13	1	第38図	D3～D4・E3～E4・F3～F4・G3～G4	鎌倉？	4×1	9.40	2.40	22.56	17	SK16→SB20
SB21		H13	1	第38図	F3～F4・G3～G4・H3～H4	鎌倉	4×1	8.85	2.55	22.57	16	
SB22		H13	1	第39図	E3～E4・F3～F4	鎌倉？	2×1	5.10	1.80	9.18	24	
SB23		H13	1	第37図	F4～F6・G4～G6	鎌倉	3×2	5.55	4.50	24.98	11	SB23→SD7
SB24		H13	1	第38図	G4～G6・H4～H6	鎌倉	3×1	5.25	2.85	14.96	30	
SB25		H13	1	第37図	E4～E6・F4～F6・G4～G6	鎌倉	3×2	7.00	4.65	43.68	19	北側に2×1間の庇
SB26		H13	1	第37図	H3・I3	鎌倉	3×2	6.15	3.45	21.22	21	

第12表 遺構一覧表①

遺構番号	調査時遺構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地 区	時期	規 模				建物方向 (切り合い:古い→新しい)	
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )		
SB 27		H13	1		第38図	I3～I4	鎌倉?	3×1	5.70	2.80	15.96	25	
SB 28		H13	1		第39図	H3～H4・I3～I4	鎌倉	2×2	3.45	3.30	11.39	18	
SB 29		H13	1		第39図	A4～A5	鎌倉	2×1	3.90	1.80	7.02	23	
SK 101	SK 1	H14	2	A地区		C38～C39・D38～D39・E39	鎌倉						
102	SK 2	H14	2	A地区		E39・F39						欠番	
SK 103	SK 3	H14	2	A地区	第50図	D50	鎌倉						
SK 104	SK 4	H14	2	A地区		D49	鎌倉					SB144の柱穴	
SK 105	SK 5	H14	2	A地区		D49	鎌倉					SB151の柱穴	
SK 106	SK 6	H14	2	A地区		D49	鎌倉						
107	7	H14	2	A地区								欠番	
SK 108	SK 8	H14	2	A地区		D49	鎌倉					SD115→SK108	
SK 109	SK 9	H14	2	A地区		E49	平安?						
SD 110	SD 10	H14	2	A地区		E47～E48・D48	鎌倉						
SK 111	SK 11	H14	2	A地区		F48～F49	鎌倉					SB150の南東隅土坑	
SK 112	SK 12	H14	2	A地区		D48	鎌倉						
SK 113	SK 13	H14	2	A地区		B48	鎌倉						
SK 114	SK 14	H14	2	A地区		B48	鎌倉						
SD 115	SD 15	H14	2	A地区	第50図	B46～B47・C46～C47・D46～D47・E46～E47・F47～F48	鎌倉～室町					SE116→SD115 SK119→SD115	
SE 116	SK 16	H14	2	A地区		E47	鎌倉					SD120～SE116へ繋がる	
SK 117	SK 17	H14	2	A地区		D47	鎌倉						
SK 118	SK 18	H14	2	A地区		C47	鎌倉						
SK 119	SK 19	H14	2	A地区		C47	鎌倉					SK119→SD115	
SD 120	SD 20	H14	2	A地区		B45・C45～C46・D46	鎌倉					SD120→SD121	
SD 121	SD 21	H14	2	A地区		C45～C46・D45～D46	鎌倉					SD121～SK125～SE123へ繋がる	
122	SD 22	H14	2	A地区			鎌倉					SD120と同一遺構。欠番	
SE 123	SK 23	H14	2	A地区		E46	室町					SE116→SD115 SE116→SE123 SD121～SK125～SE123へ繋がる	
SD 124	SD 24	H14	2	A地区		E46・F46～F47	中世?					SD124→SE123	
SK 125	SK 25	H14	2	A地区		D45～D46・E45～E46	鎌倉					SB140→SK125 SK125→SE123 SK125→SD121	
SK 126	SK 26	H14	2	A地区		D43	鎌倉						
SK 127	SK 27	H14	2	A地区		B47～B48	鎌倉						
SD 128	SD 28	H14	2	B地区		H6・I6・E54・F54	鎌倉					SD130→SD128	
SD 129	SD 29	H14	2	B地区		F53～F55	鎌倉					畦畔か	
SD 130	SD 30	H14	2	B地区		H5～H6・I5・J2～J5・D57～D59・E54～E58	鎌倉					SD130→SD128	
131	SK 31	H14	2	B地区			鎌倉					畦畔か。欠番	
SB 132		H14	2	B地区	第41図	E58～E599・F58～F59	鎌倉	2≤×2	3.90≤	3.60	14.04≤	16	
SB 133		H14	2	B地区	第41図	F57～F58	鎌倉	1≤×2	1.65≤	4.05	6.68	10	
SA 134		H14	2	B地区	第42図	F56～F57	鎌倉		3.45				
SB 135		H14	2	B地区	第41図	E56～E58・F56～F58	鎌倉	4×2≤	9.00	2.10≤	18.90≤	14	
SA 136		H14	2	B地区	第42図	F56	鎌倉		2.85				
SA 137		H14	2	B地区	第42図	F53～F54	鎌倉?		2.85				
SB 138		H14	2	B地区	第41図	I5～I6・J5～J6・E53～E54・F53～F54	鎌倉?	2≤×2≤	2.10≤	4.05≤	8.51	10	SB133と方向が同じ
SB 140		H14	2	A地区	第46図	C45～C49・D46～D49・E46～E47	鎌倉	5×3	12.30	6.45	79.34	19	SB140→SK125
SB 141		H14	2	A地区	第47図	C46～C48・D46～D48・E46～E47	鎌倉	3×3	7.20	6.15	44.28	20	SB145→SB141
SB 142		H14	2	A地区	第49図	C46～C47・D46～D47	鎌倉?	2×1	4.15	2.80	11.62	22	SB143と方向が同じ
SB 143		H14	2	A地区	第48図	C47・D46～D47・E47	鎌倉	3×1	5.70	2.90	16.53	22	
SB 144		H14	2	A地区	第49図	C49・D48～D49・E48	鎌倉	2×2	4.50	3.00	13.50	32	
SB 145		H14	2	A地区	第48図	D48～D49・E48～E49・F48～F49	鎌倉	3×2	7.05	4.20	29.61	24	SB145→SB150
SB 146		H14	2	A地区	第49図	D48～D49・E48～E49	鎌倉?	2×1	3.15	2.25	7.09	27	SB150と方向が同じ
SB 147		H14	2	A地区	第49図	E47～E48・F47	鎌倉	2×1	4.35	2.70	11.75	20	
SB 148		H14	2	A地区	第49図	E47～E48	鎌倉	2×1	3.45	1.80	6.21	23	SB143とほぼ方向が同じ
SB 149		H14	2	A地区	第47図	E49～E50・F49～F50	鎌倉	3×2≤	6.30	3.45≤	21.74≤	20	
SB 150		H14	2	A地区	第46図	D49～D50・E47～E50・F48	鎌倉	5×4≤	10.35	5.10≤	52.79≤	27	SK111を伴う
SB 151		H14	2	A地区	第47図	D49・E48～E50・F49	鎌倉	3×2	5.25	4.35	22.84	25	
SB 152		H14	2	A地区	第49図	F47～F48	鎌倉	1≤×2	4.45≤	1.95	8.68≤	8	
SB 153		H14	2	A地区	第48図	E47・F46～F48	鎌倉	3≤×2≤	6.00≤	3.60≤	21.60≤	24	
SB 154		H14	2	A地区	第45図	C43～C44・D43～D44・E43～E44	平安	5×3	8.10	4.80	38.88	3	

第13表 遺構一覧表②

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
1 002-05	縄文土器 深鉢	1	c5	SK4	SK4(1)	—	小片	外:縄文、手 内:ナメ	粗 並	外:にぶい橙 内:橙			
2 004-05	陶器 山茶椀	1	d5	SB18	Pit2	底径7.1 2/12	底部 6/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白	ミガラ痕		
3 003-06	陶器 山茶椀	1	g5	SB24	Pit3	底径6.4 6/12	底部 6/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや粗 並	灰白	ミガラ痕		
4 001-02	陶器 山茶椀	1	j3	SK13	SK13	底径6.6～ 6.9 ほぼ完存	底部 6/12	外:口付、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナメ	やや粗 並	灰白	ミガラ痕		
5 001-01	陶器 山茶椀	1	j3	SK13	SK13	口径15.2 8/12	口縁部 3/12	外:ロクロナメ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白	ミガラ痕		
6 002-03	陶器 小椀	1	f4	SD7	SD7	口径10.4 3/12	口縁部 3/12	外:ロクロナメ 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白			
7 004-01	土師器 皿	1	g4	Pit4		口径10.4 6/12	口縁部 6/12	外:ロクロナメ、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	外:浅黄橙 内:にぶい黄橙	ロコ成形		
8 004-02	陶器 山皿	1	f5	Pit4		口径8.0 6/12	口縁部 6/12	外:ロクロナメ、糸切痕 内:ロクロナメ	やや粗 並	灰白			
9 004-04	陶器 山茶椀	1	f6	Pit2		底径7.8 底部 小片	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 良	灰白	内:自然釉			
10 003-05	陶器 山茶椀	1	g6	Pit3		底径7.9 底部 5/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 並	灰白				
11 004-03	陶器 山茶椀	1	f6	Pit2		底径7.1 底部 2/12	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 並	灰白	内:自然釉			
12 003-03	陶器 山茶椀	1	j3	Pit1		底径7.0～ 7.4 完存	底部 7.4	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白			
13 003-04	陶器 山茶椀	1	j3	Pit2		底径7.3～ 7.6 完存	底部 7.6	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白			
14 003-02	陶器 山茶椀	1	i3	Pit2		底径7.8 底部 完存	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:一方向付、ロクロナメ	やや密 並	灰白	内:自然釉			
15 003-01	陶器 山茶椀	1	i5	Pit1		口径14.0～ 14.3 口縁部 完存	口縁部 14.3	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:一方向付、ロクロナメ	やや密 並	灰白	底部墨書有 ミガラ痕 内:自然釉		
16 004-06	青磁 椀	1	i3	Pit8		口径12.0 口縁部 1/12	外:ロクロナメ 内:ロクロナメ	密 良	リ-ア 灰	外・内:施釉			
17 002-02	陶器 小椀	1	g4	包含層	検出中	底径5.4 底部 6/12	外:ロクロナメ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白	自然釉			
18 001-04	陶器 山茶椀	1	i3	包含層		底径7.1～ 7.4 11/12	底部 7.4	外:ロクロナメ、貼付高台、糸切痕 内:一方向付、ロクロナメ	やや粗 並	灰白	ミガラ痕		
19 001-03	陶器 山茶椀	1	i3	包含層		底径6.8～ 7.2 底部 完存	底部 7.2	外:ロクロナメ、貼付高台、糸切痕 内:ロクロナメ	やや粗 並	灰白	底部墨書有		
20 002-01	陶器 山茶椀	1	j3	包含層		口径15.5 口縁部 2/12	外:ロクロナメ 内:ロクロナメ	やや粗 並	灰白				
21 001-05	陶器 山茶椀	1	i4	包含層		口径15.3 口縁部 2/12	外:ロクロナメ、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 並	灰白	自然釉			
22 018-01	陶器 山茶椀	2	B地区 f54	SD128	SD28	底径7.9 底部 3/12	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 良	灰白	ミガラ痕			
23 018-02	陶器 山茶椀	2	B地区 f54	SD128	SD28	底径7.4 底部 4/12	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 良	灰白	ミガラ痕			
24 018-03	陶器 山茶椀	2	B地区 f55	SD129	SD29	底径7.4 底部 6/12	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 良	灰白	ミガラ痕 内:自然釉			
25 019-04	土師器 皿	2	B地区 d58	SD130	SD30	口径11.6 口縁部 2/12	外:ヨコナメ、ナメ 内:ナメ、ヨコナメ	やや粗 不良	灰白	南伊勢系			
26 019-03	土師器 羽釜	2	B地区 d58	SD130	SD30	—	口縁部 小片	外:ヨコナメ、ハケメ 内:ヨコナメ	粗 不良	にぶい黄橙	南伊勢系		
27 019-02	土師器 鍋	2	B地区 d59	SD130	SD30	口径28.8 口縁部 3/12	外:ヨコナメ、糸切痕 内:ヨコナメ	やや粗 不良	にぶい黄橙	南伊勢系 煤付着			
28 002-04	土師器 鍋	1	j3	SD130	SD15	口径24.0 口縁部 1/12	外:ヨコナメ 内:ヨコナメ	やや粗 並	外:灰褐 内:浅黄橙	南伊勢系			
29 018-06	陶器 山茶椀	2	B地区 d58	SD130	SD30	底径5.4 底部 完存	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 良	灰白	ミガラ痕			
30 018-07	陶器 山茶椀	2	B地区 d58	SD130	SD30	口径14.6 口縁部 2/12	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 良	灰白	ミガラ痕			
31 018-05	陶器 山茶椀	2	B地区 d58	SD130	SD30	底径5.4 底部 完存	外:ロクロナメ、糸切痕	やや密 良	灰白				
32 004-07	陶器 折縁深皿	1	h5	SD130	SD15	—	外:ロクロナメ 内:ロクロナメ	密 良	釉:灰色リ-ア 素地:灰白	瀬戸美濃、古瀬戸 中Ⅲ期、内:施釉			
33 018-04	陶器 鉢	2	B地区 d59	SD130	SD30	—	外:ロクロナメ、ロクロヌリ 内:ロクロナメ	やや密 良	灰白				
34 019-01	陶器 壺	2	B地区 d58	SD130	SD30	口径19.6 口縁部 1/12	外:ロクロナメ 内:ロクロナメ	やや密 良	外:暗赤褐 内:灰	常滑製品、9型式 外・内:自然釉			
35 020-04	陶器 山茶椀	2	B地区 f58	Pit10		底径6.7 底部 完存	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	密 良	灰白	内:自然釉			
36 020-06	石製品 砥石	2	B地区 e55	包含層		現存長6.8 現存幅3.3 現存厚0.9					凝灰質泥岩		
37 020-05	陶器 山皿	2	B地区 f57	包含層		口径9.1 口縁部 6/12	外:ロクロナメ、糸切後付 内:ロクロナメ	密 良	灰白				
38 020-01	陶器 山皿	2	B地区 f57	包含層	SK31	口径7.6 口縁部 3/12	外:ロクロナメ、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 良	灰白	外・内:自然釉			
39 020-03	陶器 山茶椀	2	B地区 f57	包含層	SK31	底径5.2 底部 完存	外:ロクロナメ、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 不良	灰白				
40 020-02	陶器 山茶椀	2	B地区 f57	包含層	SK31	底径6.0 底部 完存	外:ロクロナメ、貼付高台後付、糸切痕 内:ロクロナメ	やや密 良	灰白	内:自然釉			
41 012-01	土師器 甕	2	A地区	SK101	SK1	—	口縁部 小片	外:ヨコナメ、ナメ 内:ナメ、ヨコナメ	やや粗 やや良	灰白	南伊勢系		
42 012-02	土師器 甕	2	A地区	SK101	SK1	口径17.9 口縁部 小片	外:ヨコナメ、ナメ 内:ナメ、ヨコナメ	やや粗 並	外:灰黃褐 内:灰白				

第14表 出土遺物観察表①

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
43	012-03	白磁碗	2	A地区	SK101	SK1	—	口縁部 小片	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	良	灰白	外・内:施釉
44	012-04	土師器鍋	2	A地区	SK103	SK3	口径23.7	口縁部 1/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	並	外:にぶい黄橙 内:灰白	南伊勢系
45	014-07	陶器山皿	2	A地区	SK103	SK 3 No.6	口径8.0	口縁部 4/12	外:ロコナデ、糸切痕	やや密	良	灰白	内:自然釉
46	014-05	陶器山茶椀	2	A地区	SK103	SK 3 No.2	底径6.2	底部 完存	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕
47	014-06	陶器山茶椀	2	A地区	SK103	SK 3 No.5	口径14.9	口縁部 ほぼ完存	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕
48	012-05	陶器山茶椀	2	A地区	SK103	SK3	底径6.5	底部 3/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	やや良	外:灰白 内:灰黄	モガラ痕
49	012-06	陶器山茶椀	2	A地区	SK104	SK4	底径6.5	底部 3/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉
50	013-02	陶器山茶椀	2	A地区	SK111	SK11	底径5.6	底部 6/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	
51	016-03	陶器山茶椀	2	A地区	SK112	SK12	底径6.4	底部 完存	外:ロコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	底部墨書有 モガラ痕 内:自然釉
52	013-03	陶器山皿	2	A地区	SK117	SK17	口径8.8	口縁部 3/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:ロコナデ	密	良	灰白	
53	013-04	陶器山茶椀	2	A地区	SK118	SK18	底径6.9	底部 4/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:一方向 <sup>ハ</sup> 、ロコナデ	やや密	良	灰白	
54	003-01	陶器山茶椀	2	A地区	SK125	SK25	底径7.3	底部 完存	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	並	灰白	
55	003-02	陶器山茶椀	2	A地区	SK125	SK25	底径7.0	底部 ほぼ完存	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	並	灰白	モガラ痕 内:煤付着
56	004-01	陶器鉢	2	A地区	SK125	SK25	口径32.0	口縁部 11/12	外:ロコナデ、ロコナデリ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 内:ロコナデ	やや粗	並	自然釉:灰黄 素地:灰白	外・内:自然釉
57	013-08	土師器杯	2	A地区	SK126	SK26	口径15.4	口縁部 3/12	外:ナデ、オエ	やや密	並	外:浅黄橙 内:にぶい橙	風化大の為 調整不明
58	017-05	土師器鍋	2	A地区	SK127	SK27	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	粗	良	浅黄橙 にぶい黄橙	南伊勢系
59	017-01	陶器山皿	2	A地区	SK127	SK27	底径5.0	底部 6/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ヨコナデ	粗	良	灰白	
60	016-04	陶器山茶椀	2	A地区	SK127	SK27	底径5.8	底部 4/12	外:ロコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロコナデ	やや密	良	灰白	モガラ痕
61	016-05	陶器山茶椀	2	A地区	SK127	SK27	口径13.6	口縁部 2/12	外:ロコナデ、貼付高台、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	やや粗	良	灰白	モガラ痕
62	016-02	陶器山茶椀	2	A地区	SK127	SK27	底径6.1	底部 完存	外:ロコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロコナデ	粗	良	灰白 灰黄	モガラ痕
63	017-06	白磁碗	2	A地区	SK127	SK27	—	口縁部 小片	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	良	灰白	外・内:施釉
64	013-07	陶器山皿	2	A地区	SE123	SK23	口径8.8	口縁部 2/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	良	灰白	外:自然釉
65	013-06	陶器山茶椀	2	A地区	SE123	SK23	口径12.6	口縁部 2/12	外:ロコナデ 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	粗	良	灰白	外・内:自然釉
66	013-05	陶器山茶椀	2	A地区	SE123	SK23	底径5.8	底部 4/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	やや密	不良	灰白	
67	014-08	陶器山茶椀	2	A地区	SE123	SK23	底径5.5	底部 5/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	やや粗	良	灰白	
68	013-01	土師器皿	2	A地区	SE116	SK16	口径7.2	口縁部 4/12	外:ナデ、オエ	やや密	並	灰白	
69	012-07	陶器山茶椀	2	A地区	SE116	SK16	口径13.0	口縁部 2/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	粗	やや不良	灰白	高台剥離
70	012-08	陶器山茶椀	2	A地区	SE116	SK16	口径13.0	口縁部 3/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:一方向 <sup>ナ</sup> 、ロコナデ	粗	やや不良	灰白	モガラ痕 高台剥離
71	015-01	陶器鉢	2	A地区	SE116	SK16	口径32.7	口縁部 2/12	外:ロコナデ、ロコナデリ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 内:ロコナデ	やや粗	良	灰白	
72	001-01	鉄製品小刀	2	A地区	SE116	SK16	全長28.3 柄13.2 柄装着時30.2						
73	011-01	陶器山茶椀	2	A地区	SD121	SD21	口径14.3	口縁部 3/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	並	灰白	モガラ痕 内:自然釉
74	011-03	陶器山茶椀	2	A地区	SD122	SD22	口径13.7	口縁部 3/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 内:ロコナデ	やや粗	並	灰白	内:自然釉
75	011-04	陶器山茶椀	2	A地区	SD122	SD22	底径6.4	底部 4/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	並	灰白	モガラ痕
76	010-04	陶器山茶椀	2	A地区	SD122	SD22	底径7.7	底部 6/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	密	並	灰白	モガラ痕
77	010-01	土師器鍋	2	A地区	SD115	SD15	口径25.8	口縁部 2/12	外:ナデ、オエ	粗	並	橙	南伊勢系 剥離激しく調整不明
78	001-01	土師器鍋	2	A地区	SD115	SD15②	口径28.4	口縁部 完存	外:ヨコナデ、工具ナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	粗	やや良	にぶい黄橙 浅黄橙	南伊勢系
79	002-01	土師器鍋	2	A地区	SD115	SD15②	口径26.0～ 26.7	口縁部 一部欠	外:ヨコナデ、ナデ、オエ、ヘラケズリ 内:カズリ、ナデ、オエ、ヨコナデ	粗	やや良	浅黄橙 褐灰	南伊勢系
80	009-01	陶器山皿	2	A地区	SD115	SD15	口径8.0	口縁部 完存	外:ロコナデ、糸切痕 内:ロコナデ	密	良	灰白	
81	008-04	陶器山皿	2	A地区	SD115	SD15	口径8.8	口縁部 2/12	外:ロコナデ、糸切痕 内:ロコナデ	粗	良	灰白	
82	008-02	陶器山茶椀	2	A地区	SD115	SD15	口径16.0	口縁部 1/12	外:ロコナデ、貼付高台、糸切後手 <sup>ハ</sup>	密	良	灰白	モガラ痕
83	010-02	陶器山茶椀	2	A地区	SD115	SD15	口径13.5	口縁部 3/12	外:ロコナデ、貼付高台後手 <sup>ハ</sup> 、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	並	灰白	歪み有 モガラ痕
84	009-04	陶器山茶椀	2	A地区	SD115	SD15	口径14.8	口縁部 9/12	外:ロコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ロコナデ	やや粗	やや良	灰白	モガラ痕 内:自然釉

第15表 出土遺物観察表②

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
85	011-02	陶器 山茶椀	2	A地区 d47	SD115	SD15	底径5.8	底部 6/12	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	粗	並	灰白	ミガラ痕 内:自然釉
86	011-05	陶器 山茶椀	2	A地区 f47	SD115	SD15	口径13.3	口縁部 3/12	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	やや粗	並	灰白	ミガラ痕
87	010-03	陶器 山茶椀	2	A地区 d47	SD115	SD15	底径8.2	底部 5/12	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	やや粗	並	灰白	ミガラ痕 内:重ね焼痕有
88	009-02	陶器 山茶椀	2	A地区 e37	SD115	SD15	口径15.2	口縁部 4/12	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	やや粗	やや良	灰白	ミガラ痕 内:自然釉
89	009-03	陶器 山茶椀	2	A地区 e46	SD115	SD15	口径14.8	口縁部 9/12	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	やや粗	やや良	灰白	ミガラ痕
90	008-01	陶器 山茶椀	2	A地区 f47	SD115	SD15	底径6.0	底部 完存	外:ロコネ、糸切痕 内:ロコネ	やや粗	不良	灰白	底部墨書有 高台剥離 内:煤付着
91	011-06	青磁 椀	2	A地区 d47	SD115	SD15	—	口縁部 小片	外:ロコネ 内:ロコネ	密	並	釉:オーブ 灰	外:絵柄
92	009-05	青磁 椀	2	A地区 e47	SD115	SD15	口径14.9	口縁部 1/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	外・内:施釉 外:絵柄
93	008-03	陶器 鉢	2	A地区 d47	SD115	SD15	底径13.8	底部 3/12	外:ロコネ、ロコネ、貼付高台、糸切痕 内:ロコネ	粗	やや良	灰白	
94	008-05	石製品 砥石	2	A地区 b46	SD115	SD15	現存長5.5 現存幅4.9						ホルンフェルス
95	006-06	須恵器 壺	2	A地区 e49	SB150	Pit5	—	肩部片	外:ヨコゲ、サメ後沈線 内:オエ・工具げ	密	良	外:灰褐色、灰白 内:灰黄褐色	
96	017-03	土師器 皿	2	A地区 c47	SB141	Pit6	口径8.8	口縁部 6/12	外:ヨコゲ、ナデ 内:ナデ、ヨコゲ	やや密	良	浅黄橙 にぶい橙	中北勢系
97	005-01	陶器 山茶椀	2	A地区 e47	SB141	Pit5	底径7.2	底部 完存	外:ロコネ、貼付高台後げ、糸切痕 内:ロコネ	やや密	良	灰白	ミガラ痕
98	005-03	陶器 山茶椀	2	A地区 c47	SB141	Pit1	口径17.0	口縁部 2/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	
99	006-07	青磁 椀	2	A地区 c47	SB141	Pit1	口径17.0	口縁部 1/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	オーブ 灰	外:絵柄
100	005-04	陶器 山茶椀	2	A地区 e49	SB145	Pit6	口径14.0	口縁部 2/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	
101	005-07	陶器 山茶椀	2	A地区 e49	SB145	Pit6	口径13.0	口縁部 3/12	外:ロコネ 内:ロコネ	やや密	不良	灰白	外:自然釉 側面に墨書
102	006-05	陶器 甕	2	A地区 f48	SB152	Pit2	底径13.0	底部 2/12	外:ナデ、オエ 内:ナデ	密	良	外:褐灰 内:浅黄	常滑製品、2か3 型式、内:自然釉
103	014-02	製塩土器	2	A地区 f46	Pit2		—	小片	外:ナデ 内:ナデ	粗	並	橙	志摩式
104	014-01	製塩土器	2	A地区 e45	Pit1		—	小片	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	並	明赤褐	志摩式
105	014-03	製塩土器	2	A地区 f46	Pit5		—	小片	外:オエ・ナデ 内:ナデ	粗	並	橙	志摩式
106	017-02	土師器 皿	2	A地区 e48	Pit11		口径7.9	口縁部 6/12	外:ヨコゲ、オエ 内:ナデ、ヨコゲ	密	良	浅黄橙	南伊勢系
107	006-03	土師器 皿	2	A地区 c48	Pit1		口径7.0	口縁部 4/12	外:ヨコゲ、ナデ 内:ナデ、ヨコゲ	やや密	良	浅黄橙	中北勢系
108	017-04	土師器 皿	2	A地区 e48	Pit11		口径7.6	口縁部 6/12	外:ヨコゲ、オエ、ナデ 内:ナデ、ヨコゲ	密	良	浅黄橙	南伊勢系
109	006-01	土師器 皿	2	A地区 d39	Pit1		口径16.0	口縁部 2/12	外:ヨコゲ、ナデ 内:ナデ、ヨコゲ	密	良	浅黄橙	風化 ロクロ成形
110	006-02	土師器 杯	2	A地区 e49	Pit8		口径15.0	全体で 4/12	外:ヨコゲ、ナデ、オエ 内:ナデ、ヨコゲ	やや密	良	浅黄橙	風化著しい
111	014-04	黒色土器 椀	2	A地区 c49	Pit3		底径6.7~ 7.0	底部 ほぼ完存	外:貼付高台後げ、ナデ 内:ナメ	やや密	並	外:にぶい黄橙 内:黒	
112	006-04	土師器 鍋	2	A地区 e48	Pit6		口径20.0	口縁部 1/12	外:ヨコゲ、ナデ 内:ナデ、ヨコゲ	密	良	灰	南伊勢系
113	005-02	陶器 山茶椀	2	A地区 d46	Pit4		口径14.0	口縁部 3/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	
114	016-01	陶器 山茶椀	2	A地区 d47	Pit5		底径 6.1	底部 完存	外:ロコネ、貼付高台、糸切痕 内:ロコネ	粗	良	灰白	底部墨書有 ミガラ痕
115	005-06	陶器 山茶椀	2	A地区 d48	Pit2		口径16.0	口縁部 2/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	
116	005-05	陶器 山茶椀	2	A地区 e48	Pit7		口径15.0	口縁部 1/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	内:墨痕
117	005-08	陶器 山皿	2	A地区 d47	Pit2		口径8.0	口縁部 3/12	外:ロコネ、糸切痕 内:ロコネ	密	良	灰白	
118	015-02	陶器 山皿	2	A地区 d45	包含層		口径8.0	口縁部 完存	外:ロコネ、糸切痕 内:ロコネ	やや密	良	灰白	
119	015-03	陶器 山皿	2	A地区 c46	包含層		口径7.9	口縁部 8/12	外:ロコネ、糸切痕 内:ロコネ	やや密	良	灰白	内:自然釉
120	015-04	陶器 山皿	2	A地区 d46	包含層		口径8.3	口縁部 3/12	外:ロコネ、糸切痕 内:ロコネ	やや密	良	灰白	外:自然釉
121	015-06	青磁 杯?	2	A地区 e47	包含層		口径11.4	口縁部 2/12	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	釉:緑灰	外・内:施釉
122	015-05	白磁 椀	2	A地区 e47	包含層		—	口縁部 小片	外:ロコネ 内:ロコネ	密	良	灰白	外・内:施釉
123	029-07	削器? 尖頭器?	2	A地区 e45	包含層		長さ5.3 幅2.9 厚さ0.6 重さ10.81g						#カト
124	007-01	石製品 砥石	2	A地区 f46	Pit3		長さ0.3 幅9.0 厚み4.1						ホルンフェルス
125	015-07	銅製品 煙管	2	A地区 b44	包含層		長さ6.1 幅1.4						

第16表 出土遺物観察表③

# 第5章 嶋ノ前遺跡

## 第1節 立地

嶋ノ前遺跡は、三寺町嶋ノ前に東西100m、南北180mの範囲で広がる遺跡である。河岸段丘上に立地する。遺跡内の標高は30.36～35.74m、調査区内

の標高は約33.73～34.85mで、北へ向かって低くなる。現況は水田である。

(酒井)

## 第2節 調査の方法

遺跡の名称について 平成12年度の範囲確認調査の際に、仮称金森西遺跡とした。1次調査も金森西遺跡を踏襲し、調査終了後、小字名から嶋ノ前遺跡と改称した。

調査区の設定 今回の調査では、各調査区を4m四方の枠目で区切ることによって小地区を設定した。1次調査では、南から数字、西からアルファベットを付け、枠目の南西隅の交点をその地区の符号とした。2次調査では、北から数字、西からアルファベットを付け、枠目の北西隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は、調査区ごとに行い、国土座標軸とは無関係である。

表土除去 包含層より上位は、重機（バックホー）を用い、表土除去を行った。

検出・掘削 包含層及び遺構の検出・掘削は人力で行った。1次調査では、すべて柱穴を断ち割りしている。

遺構カード 小地区を単位として1/40を作成し、

略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物が出土した場合には、付与した遺構番号も記録した。

遺構番号の付与 遺構番号は、溝などの遺構は調査区ごとに1から、ピットについては小地区ごとに通し番号を付与した。今回報告にあたっては、1次調査では1から、2次調査では101から遺構番号を付与した。遺構番号の詳細なデータは、遺構一覧表（第18表）を参照されたい。

実測 調査区全体の遺構実測は、手描きにより1/20で平面図を作成した。また、遺物出土状況図については個別に1/10の実測図を作成した。

遺構写真 遺構写真は基本的に4×5インチ判もしくは6×9判、6×7判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助的に、35mm判白黒ネガ及びカラーリバーサルフィルムも使用した。

遺物写真 報告書掲載遺物から任意に選択し、ブロニーバンド白黒ネガで撮影した。

(酒井)

## 第3節 第1次調査

### 1 遺構

1次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・溝を検出した。遺構は、調査区南端で確認でき、検出面の大半は礫層で削平を受けている。また、北側は谷が入っている。

基本層序は、第54図第1層褐色砂質シルト（表土）、第3層橙色細砂質シルト、第5層灰褐色細砂質シルト（検出面）である。

#### 鎌倉時代の遺構

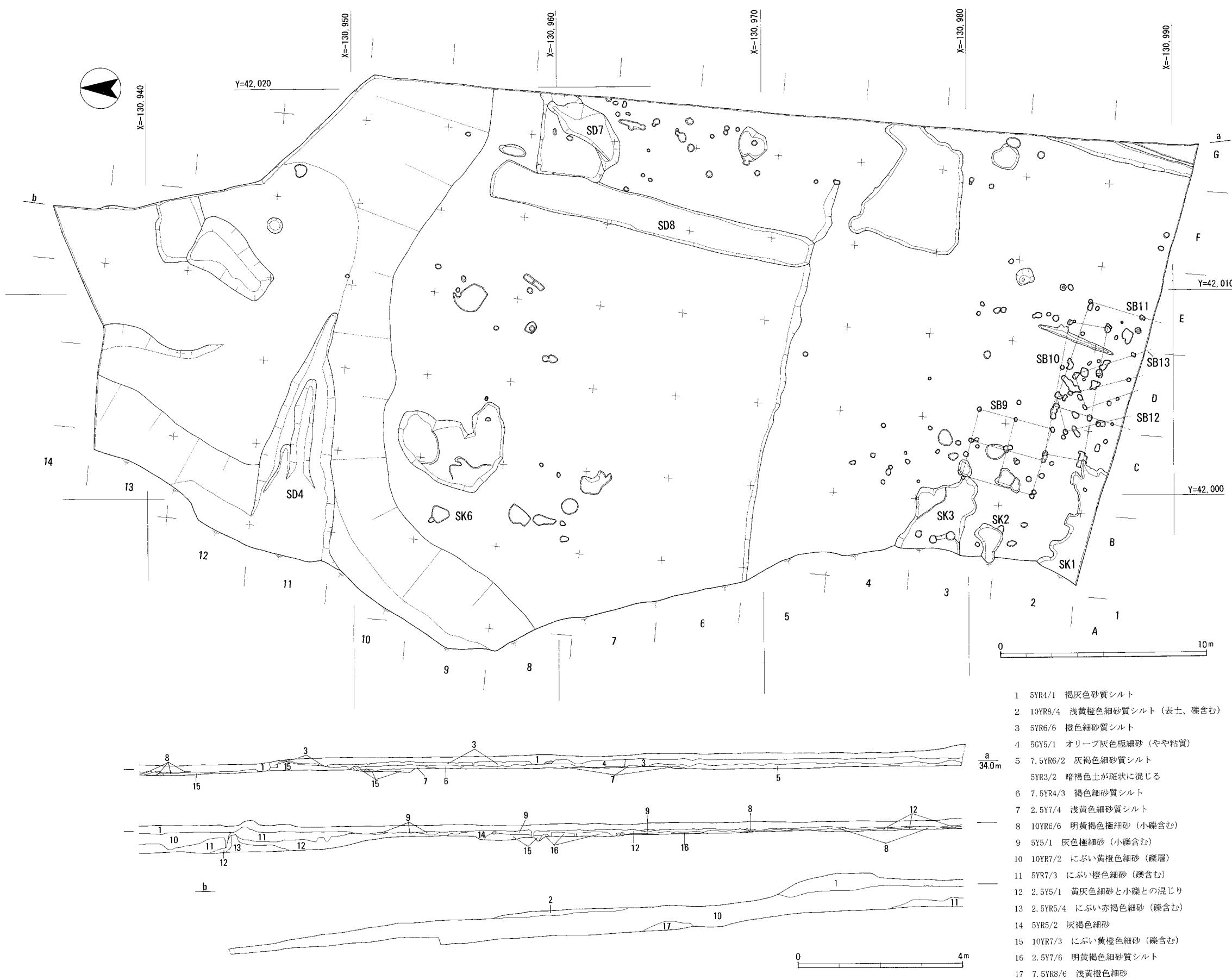
##### a 掘立柱建物

掘立柱建物は、3間×1間の建物と小規模な建物

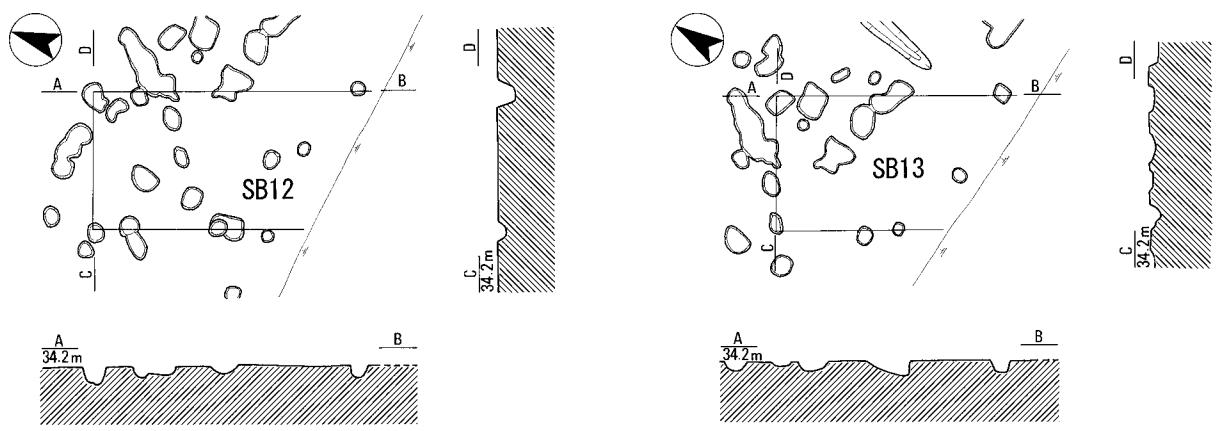
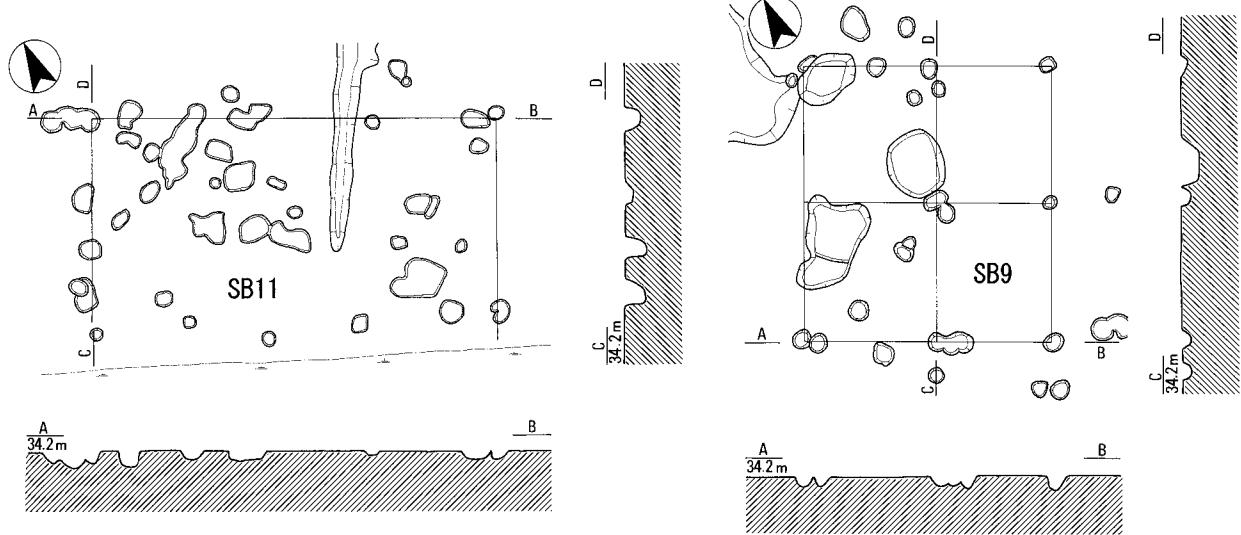
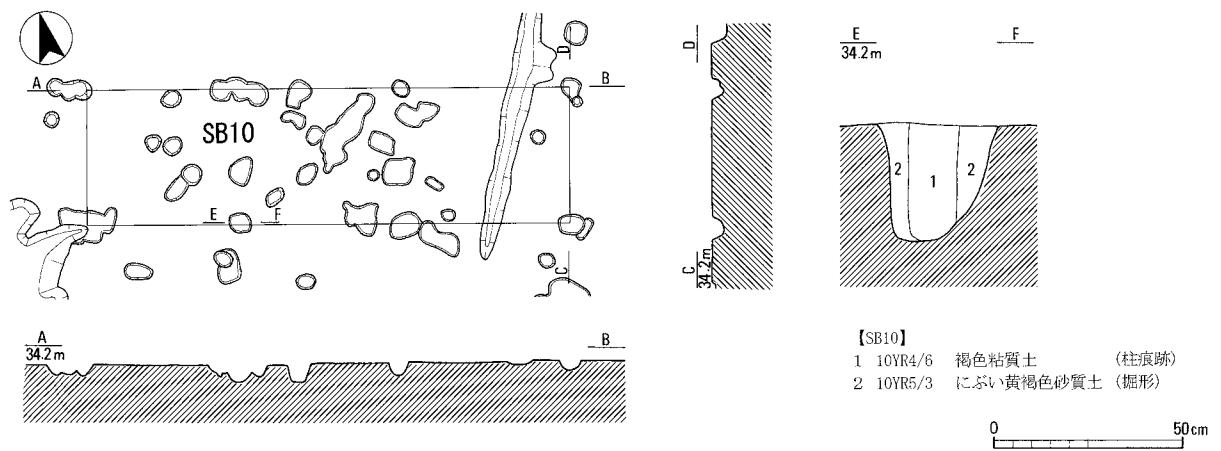
に分かれる。また、いずれの建物も遺物が出土していない。しかし、調査区内の出土遺物が鎌倉時代のものであるため、遺構の時期を鎌倉時代と判断し、報告する。

S B10（第55図） 調査区南端で検出した桁行3間×梁行1間の建物である。建物方向はN11°Eで、柱間は桁行が2.1+2.1+2.25m、梁行は1.8mである。柱穴の掘形の埋土は、にぶい黄褐色砂質土である。柱穴から須恵器甕小片が出土しているが混入遺物と思われ、建物の規模から鎌倉時代の遺構と判断した。

S B11（第55図） 調査区南端で検出した桁行3間×梁行2間以上と考えられる建物である。建物方向



第54図 1次調査区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



第55図 挖立柱建物実測図 (1 : 20、1 : 100)

はN19° Eで、柱間は桁行が2.1+1.65+1.65m、梁行は2.4mである。柱穴から遺物は出土していない。

**S B 9** (第55図) 調査区南端で検出した桁行2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向はN16° Eで、柱間は桁行が1.8+1.5m、梁行は1.8mの等間である。柱穴から遺物は出土していない。

**S B 12** (第55図) 調査区南端で検出した。柱間は桁行が1.8mの等間と1.65m (+調査区外) でやや不揃い、梁行は1.8mで、桁行2間以上×梁行1間と思われ、一応建物とした。建物方向はN12° Eで、柱穴から遺物は出土していない。

**S B 13** (第55図) 調査区南端で検出した桁行2間以上×梁行1間と思われる建物である。建物方向はN18° Eで、柱間は桁行が1.65+1.35m、梁行は1.8mである。柱穴から遺物は出土していない。

### b 土坑

**S K 1** 調査区南西隅で検出した不定形な土坑である。深さ約0.2m。埋土から山茶椀小片が出土している。

**S K 2** 調査区南西隅で検出した不定形な土坑である。規模は、長径1.9m以上、短径約0.6~1.3m、深さ約0.2mである。埋土から藤澤編年<sup>①</sup>第8型式の山茶椀(2)が出土している。

**S K 3** 調査区南西隅で検出した不定形な土坑である。深さ約0.15m。埋土から第6型式の山茶椀(3)が出土している。

### c 溝

**S D 4** 西へ向かって落ち込んでいく溝である。埋土から第6型式の片口鉢(11)が出土している。

## 1 遺構

2次調査では、上層と下層の2面で遺構を確認した。上層は、鎌倉時代の掘立柱建物・溝等を、下層では、縄文時代と思われる土坑を検出した。

基本層序は、第57図第1層耕作土、第2層暗青灰色砂、第9層明黄褐色土、第26層にぶい褐色土(上層検出面)、第27層黄褐色砂質土(下層検出面)となる。

### ①縄文時代の遺構(下層)

**S D 7** 調査区東端で検出した溝である。埋土から13~14世紀の常滑製品甕の底部<sup>②</sup>(14)が出土している。

**S D 8** 調査区東端で検出した溝である。埋土から第7型式の山茶椀が出土している。調査時の所見では、埋土の土質から近世以降の遺構もしくは搅乱の可能性がある。

## 2 遺物

### S K 2 出土遺物(1~2)

1~2は山茶椀である。1は、内面に重ね焼き痕が残り、第5型式、2は第8型式である。

### S K 3 出土遺物(3~5)

3~5は山茶椀で、3・5は第6型式、4は第5型式である。3は底部に墨書があり、記号のようなものがある。

### S D 4 出土遺物(6~11)

6は青磁碗である。7~10は山茶椀で、7・9は第5型式、8・10は第6型式である。11は片口鉢で、第6型式のものである。

### S D 7 出土遺物(12~14)

12~13は第6型式の山茶椀で、12は渥美産のものである。14は、常滑製品甕の底部で、13~14世紀頃のものである。

### ピット出土遺物(15)

15は、第6型式の山茶椀である。

### 包含層出土遺物(16)

16は第8か9型式の山茶椀で、底部に墨書がある。

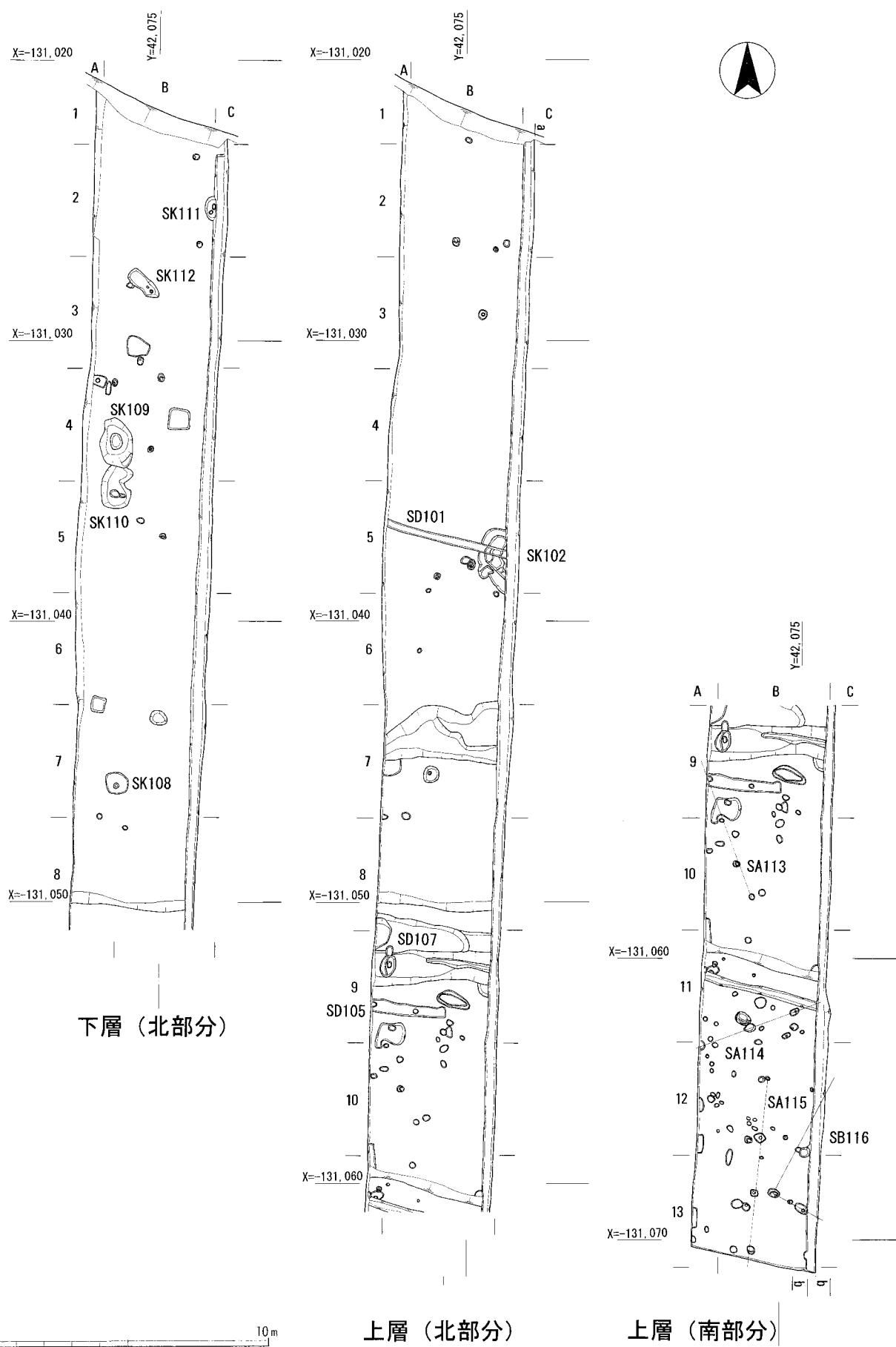
(酒井)

## 第4節 第2次調査

下層遺構は、地区杭6のラインより北側で検出した。7・8のラインでは、上層の溝を掘削後、SK108を検出した。本来、上層で取り扱うべきなのであるが、遺構埋土が北側で検出した土坑等と同じであったため、下層遺構として取り扱った。

また、下層遺構から遺物は出土しなかった。しかし、遺構埋土が金森遺跡1次調査で見つかった縄文時代の陥し穴の埋土と同じであつたため、縄文時代の遺構として報告する。

**S K 108** (第58図) 調査区中程で検出した土坑で



第56図 2次調査区遺構平面図 (1 : 200)

ある。規模は長径約0.8m、短径約0.75mで、深さ約0.3mである。土坑の底部に深さ約0.2m程の小穴があり、杭穴と考えられ、陥し穴と思われる。遺物は出土していない。

**S K109** 調査区北側で検出した土坑である。長径約1.7m、短径約1.15m、深さ約0.2mである。土坑の底部に深さ約0.15mの小穴があるが、陥し穴の杭穴と考えるには規模が大きい。遺物は出土していない。S K110より古い。

**S K110** 調査区北側で検出した土坑である。長径約1.5m、短径約1m、深さ約0.1mである。土坑の底部に深さ約0.05mの小穴が2個ある。陥し穴の杭穴と考えるには小穴が浅い。遺物は出土していない。S K109より新しい。

**S K111** 調査区北側東壁際で検出した土坑である。深さ約0.2mで、底部に深さ約0.05~0.1mの小穴が2個ある。陥し穴の杭穴と考えるには小穴が浅い。遺物は出土していない。

**S K112** 調査区北側で検出した土坑である。長径約1.3m、短径約0.5m、深さ約0.15mである。土坑の底部に深さ約0.05m程の小穴が2個ある。陥し穴の杭穴と考えるには浅い。遺物は出土していない。

(酒井)

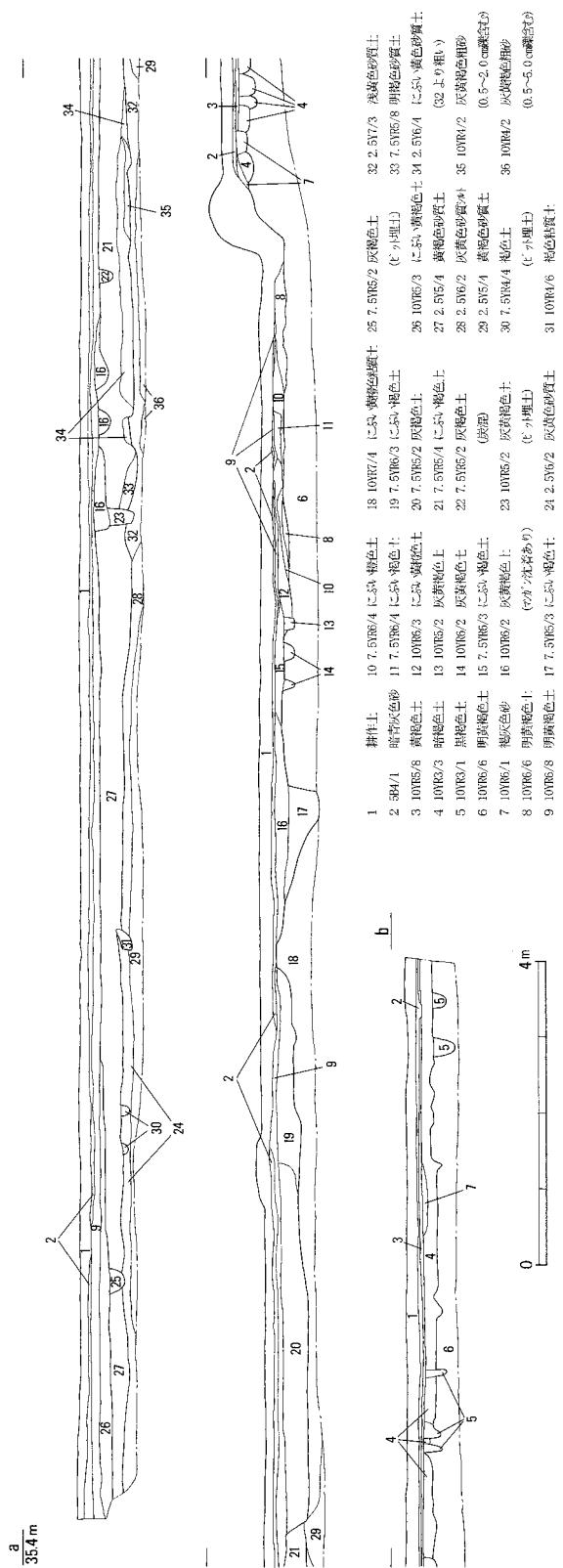
## ②鎌倉時代の遺構（上層）

### a 掘立柱建物・柱列

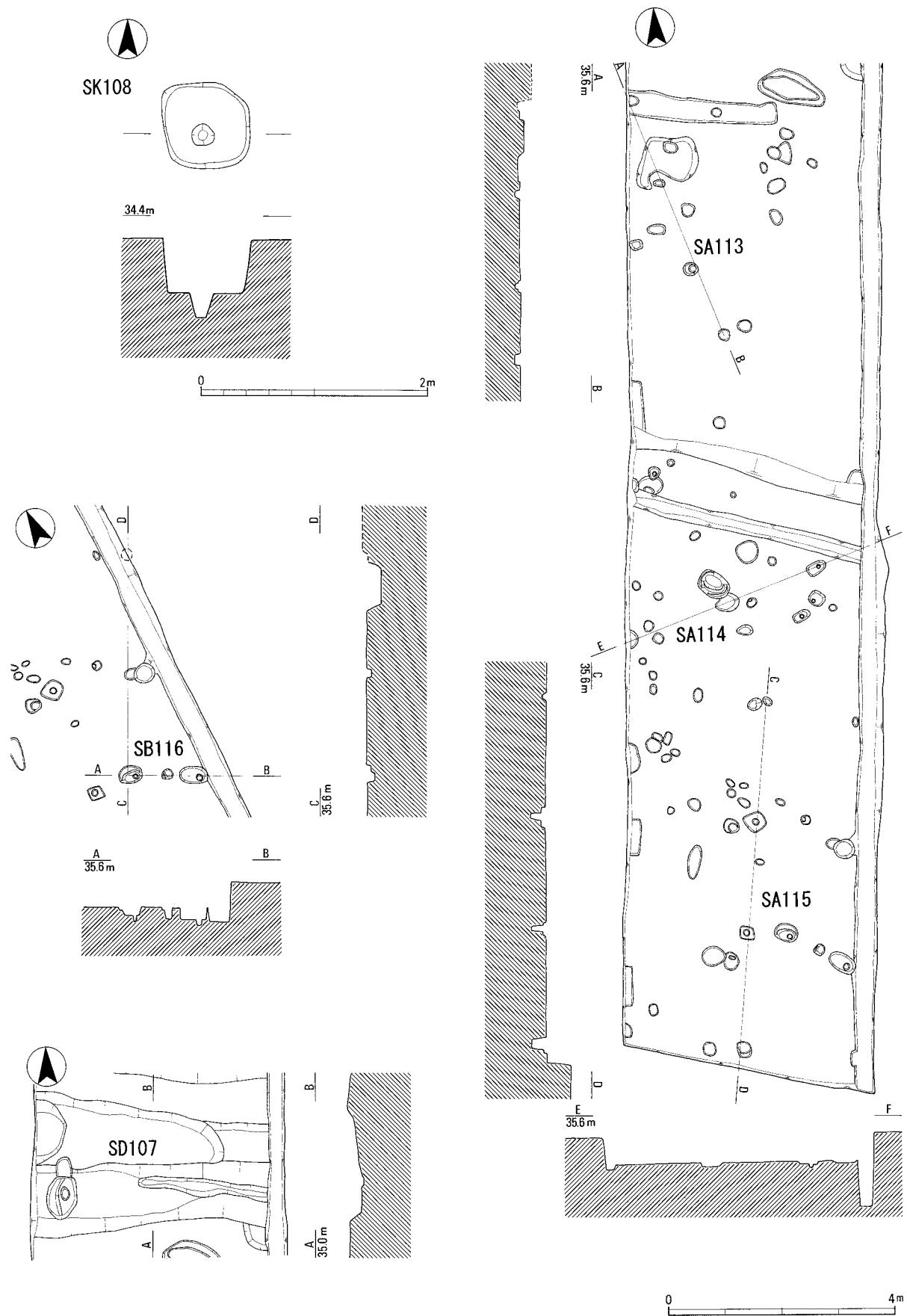
**S A113** (第58図) 調査区下段南端で検出した桁行3間以上の柱列である。柱間は南から1.35+1.55+1.55mで、調査区外北西へ続いているものと思われる。柱穴径は0.15~0.25mで、深さは0.07~0.11mと浅い。遺物は出土していない。

**S A114** (第58図) 調査区上段北端で検出した桁行2間以上の柱列である。柱間距離は、1.8mの等間で、東西ともに調査区外へ続くものと考えられる。柱穴径は0.2~0.4m、深さは0.06~0.11mと浅い。遺物は出土していない。

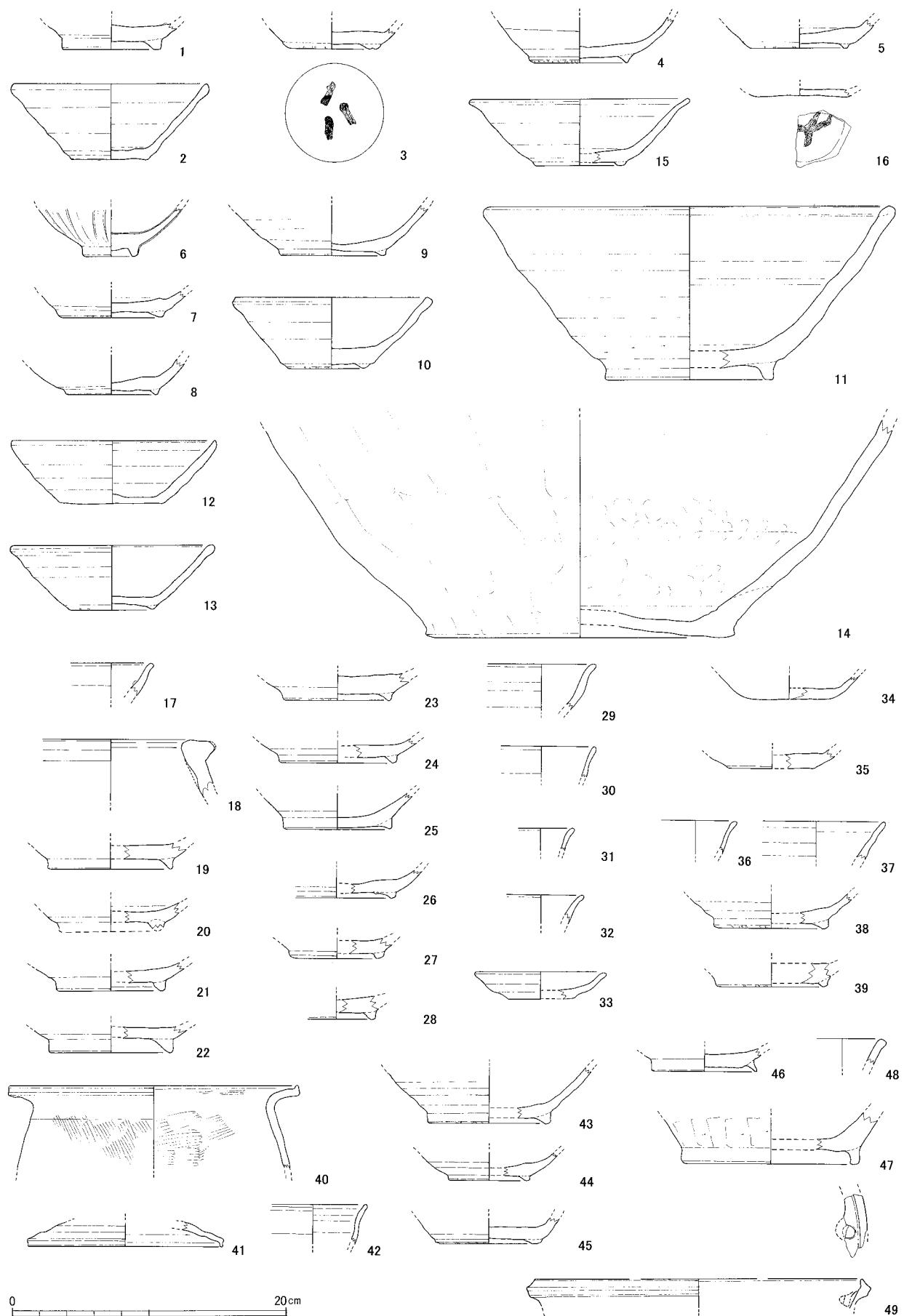
**S A115** (第58図) 調査区上段南端で検出した桁行3間以上の柱列である。柱間は北から2.1mの等間で、調査区外南へ続いているものと思われる。柱穴径は0.1~0.3m、深さは0.07~0.24mのものがある。柱穴からロクロ成形の土師器皿(33)が出土している。



第57図 2次調査区土層断面図 (1:100)



第58図 挖立柱建物・柱列・土坑・溝実測図 (1 : 50、1 : 100)



第59図 出土遺物実測図 (1 : 4)

**S B116** (第58図) 調査区上段南東部分で検出した桁行2間以上、梁行1間以上の側柱建物で、調査区外東に延びると考えられる。規模は、梁行1.2m以上、桁行4m以上となる。南北棟で、建物方向はN18°Eをとる。2次調査で想定される唯一の掘立柱建物である。柱間は梁行1.2m、桁行2mの等間を数えるが、梁は南東方向へ、桁は北東方向へと続くと考えられる。柱穴は径0.2~0.3mで、深さは、0.15~0.39mである。山茶椀(30)が出土している。

#### b 溝

**S D107** (第58図) 調査区下段南部分で検出した幅1.7~2.6mの溝である。調査区にはほぼ直交する形で検出され、東西とも調査区外へと続いている。第5型式の山茶椀(26)が出土している。(山口)

## 2 遺物

今回の調査では、中世の遺物を中心に土師器、山茶椀などが出土した。他に包含層遺物として、須恵器、片口鉢などがみられた。いずれも小片が多く、残存状態は悪い。量的にも少なく整理箱6箱程度であった。

#### S D103出土遺物 (17)

17は第5型式頃の山皿である。内面に重ね焼き痕が残る。

#### S D107出土遺物 (18~28)

18は清郷型鍋の口縁部である。内外面ともに磨耗

が激しい。19~28は、山茶椀の底部である。底部のみであり、第4~5型式のものであると考えられる。

#### S B116出土遺物 (29~30)

29~30は山茶椀の口縁部で、第5型式のものと考えられる。

#### S A115出土遺物 (31~32)

31~32は山茶椀の口縁部で、第5型式のものである。

#### ピット出土遺物 (33~39)

33~35はロクロ成形の土師器皿で、いずれも磨耗が激しい。36~39は山茶椀である。36は第4型式、37~38は第5型式、39は第6型式のものと考えられる。

#### 包含層出土遺物 (40~49)

40は土師器甕で、古代のものである。体部の内面に横ハケ(5本/cm)、外面に縦ハケ(5本/cm)を施し、口縁部を横ナデしている。41~42は須恵器で、41は杯蓋、42は椀である。43~45は山茶椀である。43~44は第5型式、45は第6型式のものと考えられる。46は灰釉陶器椀で、折戸53号窯式である。47は片口鉢で、第6型式のものである。48は瀬戸美濃製品で、藤澤編年古瀬戸後Ⅲ期の直円大皿である。<sup>③</sup>

49は中北勢系と思われる土師器の内耳鍋である。口縁部1/12弱の残存のため、口径は推定である。口縁部を横ナデし、外面に煤が付着している。内面は、縦方向に穿孔がある。

(山口・酒井)

## 第5節

嶋ノ前遺跡では、縄文時代と鎌倉時代の遺構を確認した。主体を占めるのは鎌倉時代の遺構である。縄文時代の遺構は、陥し穴が1基、土坑が4基で

#### [註]

①以下山皿・山茶椀は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)

②以下常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。以下常滑製品は中野晴久氏の編年により記述する。中野晴久「常滑・渥美」(『全国シンポジウム 中

## まとめ

ある。いずれも遺物は出土していない。

鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物6棟、土坑4基、溝5条である。

(酒井)

世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)

③以下、古瀬戸製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下古瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)

遺構番号	調査時遺構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地区	時期	規模				備考(切り合い:古い→新しい)
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	
SK1	SK1	H14	1	E地区		B1~B2・C1~C2	鎌倉					
SK2	SK2	H14	1	E地区		B2~B3	鎌倉					
SK3	SK3	H14	1	E地区		B3~B4・C3	鎌倉					
SD4	SD4	H14	1	E地区		A11・B11・C11・D11	鎌倉					
5	5	H14	1	E地区								
SK6	SK6	H14	1	E地区		B9	鎌倉					
SD7	SD7	H14	1	E地区		F7~F8・G7~G8	鎌倉					
SD8	SD8	H14	1	E地区		E5~E7・F5~F9	鎌倉					搅乱の可能性あり
SB9		H14	1	E地区	第55図	C2~C3・D2~D3	鎌倉?	2×2	3.30	3.60	11.88	16
SB10		H14	1	E地区	第55図	C1~C2・D1~D2・E1~E2	鎌倉?	3×1	6.45	1.8	11.61	11
SB11		H14	1	E地区	第55図	D1~D2・E1~E2	鎌倉?	3×1≤	5.40	2.40≤	12.96≤	19
SB12		H14	1	E地区	第55図	C2・D1~D2	鎌倉?	2≤×1	3.60≤	1.80	6.48≤	12
SB13		H14	1	E地区	第55図	D1~D2	鎌倉?	2≤×1	3.00≤	1.80	5.40≤	18
SD101	SD1	H15	2			A5・B5						搅乱
SK102	SK2	H15	2			B5						
103	SD3	H15	2									SK102と同一遺構。欠番
104	SD4	H15	2				鎌倉					SK103と同一遺構。欠番
SD105	SD5	H15	2			A9・B9	鎌倉??					
106	SD6	H15	2				鎌倉					SD107と同一遺構
SD107	SD7	H15	2		第58図	A8~A9・B8~B9	鎌倉					
SK108	SK8	H15	2		第58図	A7・B7	繩文?					
SK109	SK9	H15	2			A4・B4	繩文?					SK110→SK109
SK110	SK10	H15	2			A4~A5・B4~B5	繩文?					SK110→SK109
SK111	SK11	H15	2			B2・C2	繩文?					
SK112	SK12	H15	2			B3	鎌倉?					
SA113		H15	2		第58図	A9~A10・B10	鎌倉?		4.45			
SA114		H15	2		第58図	A11~A12・B11	鎌倉?		3.60			
SA115		H15	2		第58図	B12~B13	鎌倉		4.20			
SB116		H15	2		第58図	B12~B13	鎌倉	2≤×1≤	4.00≤	1.20≤	4.80≤	18

第17表 遺構一覧表

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時遺構番号	計測値(cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
1	003-06	陶器 山茶椀	1	b3	SK2	SK2	底径7.0	底部 完存	外:口ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	やや粗	良	灰白	内:自然釉、重ね焼痕、使用痕有
2	003-03	陶器 山茶椀	1	b3	SK2	SK2	底径5.5	底部 完存	外:ロナゲ、ナゲ、貼付高台後ゲ、糸切痕 内:ロナゲ	粗	やや不良	灰白	
3	003-04	陶器 山茶椀	1	b3	SK3	SK3	底径6.1	底部 完存	外:貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	良	やや粗	灰白	底部墨書き、モガラ痕 内:煤付着
4	002-01	陶器 山茶椀	1	b3	SK3	SK3	底径6.6	底部 完存	外:ヨコナゲ、ナゲ 内:ナゲ	やや粗	良	灰白	煤付着
5	002-02	陶器 山茶椀	1	b3	SK3	SK3	底径7.0	底部 9/12	外:ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	やや密	良	灰白	モガラ痕
6	004-02	青磁 椀	1	c11	SD4	SD4	底径3.7	底部 完存	外:ロナゲ、削出高台 内:ロナゲ	密	良	灰白	外・内:釉
7	002-06	陶器 山茶椀	1	b11	SD4	SD4	底径8.4	底部 完存	外:ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:一方向ナゲ、ロナゲ	密	良	灰白 灰黄	モガラ痕
8	002-04	陶器 山茶椀	1	c11	SD4	SD4	底径6.6	底部 11/12	外:ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	やや粗	良	灰白	モガラ痕
9	002-03	陶器 山茶椀	1	c11	SD4	SD4	底径7.5	底部 完存	外:ロナゲ、貼付高台後ゲ、糸切痕 内:ロナゲ	密	良	灰白	モガラ痕
10	002-05	陶器 山茶椀	1	b11	SD4	SD4	口径14.0	口縁部 3/12	外:ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	やや密	良	灰白	モガラ痕
11	004-03	陶器 鉢	1	c11	SD4	SD4	底径12.0	底部 4/12	外:ロナゲ、ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	粗	並	黄灰	
12	003-01	陶器 山茶椀	1	g8	SD7	SD7	口径14.7	口縁部 6/12	外:ロナゲ、糸切痕 内:ロナゲ	やや粗	良	灰白	
13	003-02	陶器 山茶椀	1	g8	SD7	SD7	口径14.6	口縁部 3/12	外:ロナゲ、貼付高台後ゲ、糸切痕 内:ロナゲ	やや粗	良	灰	モガラ痕
14	001-01	陶器 甕	1	g8	SD7	SD7	底径22.4	底径 4/12	外:工具ナゲ、ヨコナゲ、ナゲ 内:ナゲ	粗	良	灰	常滑製品 13~14世紀頃
15	004-01	陶器 山茶椀	1	d2	Pit1	Pit1	底径6.4	底部 3/12	外:ロナゲ、貼付高台、糸切痕 内:ロナゲ	粗	良	灰白	

第18表 出土遺物観察表①

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
16	003-05	陶器 山茶椀	1	b3	包含層		底部6.4	底部 3/12	外:糸切痕 内:匁口げ	やや粗	良	灰白	底部墨書
17	001-06	陶器 山皿	2	b5	SD103	SD3	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	外:灰黄 内:自然釉-ア-黄 重ね焼痕	
18	005-07	土師器 鍋	2	b9	SD107	SD7	—	口縁部 小片	外:ヨコナ- 内:ヨコナ-	粗	良	にぶい黄橙	清郷型 磨耗大
19	001-05	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径9.0	底部 3/12	外:貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白	
20	002-06	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径8.0	底部 1/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、匁口げ 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
21	002-01	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径7.6	底部 3/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白	内:自然釉
22	002-02	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径8.8	底部 2/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
23	002-05	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径8.0	底部 1/12	外:貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
24	001-03	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径8.0	底部 2/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白	
25	001-02	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径7.5	底部 3/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白	
26	001-04	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	—	底部 小片	外:匁口げ、貼付高台後げ 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
27	002-03	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD7	底径6.2	底部 3/12	外:貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
28	002-04	陶器 山茶椀	2	b9	SD107	SD6	—	底部 小片	外:貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白	
29	004-07	陶器 山茶椀	2	b13	SB116	Pit2	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	灰白	
30	005-06	陶器 山茶椀	2	b13	SB116	Pit5	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	灰白	
31	005-03	陶器 山茶椀	2	b12	SA115	Pit3	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	灰白	
32	005-04	陶器 山茶椀	2	b12	SA115	Pit3	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	灰白	
33	004-03	土師器 皿	2	b12	Pit	Pit	口径9.4	口縁部 2/12	外:ヨコナ-、ナ- 内:ナ-、ヨコナ-	やや粗	良	橙	匁口成形
34	003-07	土師器 皿	2	b5	Pit1	Pit1	底径6.0	底部 2/12	外:ナ-、糸切痕 内:ナ-	やや粗	良	にぶい橙 赤黄橙	匁口成形
35	003-08	土師器 皿	2	b12	Pit1	Pit1	底径6.0	底部 3/12	外:工具ナ-、糸切痕 内:ナ-	やや密	良	浅黄橙 にぶい橙	匁口成形
36	004-08	陶器 山茶椀	2	b5	Pit1	Pit1	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	暗灰黄 灰黄	
37	005-01	陶器 山茶椀	2	b11	Pit4	Pit4	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
38	003-05	陶器 山茶椀	2	b13	Pit4	Pit4	底径7.6	底部 2/12	外:匁口げ、貼付高台、糸切痕 内:匁口げ	やや密	良	灰白	モガラ痕
39	004-04	陶器 山茶椀	2	b12	Pit4	Pit4	底径7.6	底部 2/12	外:貼付高台、ナ- 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
40	004-01	土師器 甕	2	b12	包含層	包含層	口径21.0	口縁部 2/12	外:ヨコナ-、ナ- 内:ナ-、ヨコナ-	やや粗	良	浅黄橙	
41	004-02	須恵器 杯蓋	2	b11	包含層	包含層	口径14.2	口縁部 2/12	外:匁口げ 内:匁口げ	やや粗	良	灰白	
42	005-05	須恵器 椀	2	b4	包含層	包含層	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	やや密	良	灰 灰白	
43	003-01	陶器 山茶椀	2	b8	包含層	包含層	底径9.0	底部 4/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:匁口げ	粗	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉 重ね焼痕
44	003-06	陶器 山茶椀	2	b9	包含層	包含層	底径6.0	底部 1/12	外:匁口げ、貼付高台、糸切痕 内:匁口げ	やや密	良	灰白	
45	003-03	陶器 山茶椀	2	b8	包含層	包含層	底径7.0	底部 3/12	外:匁口げ、貼付高台後げ、糸切痕 内:一方向ナ-、匁口げ	やや粗	良	灰白	モガラ痕
46	003-04	灰釉陶器 椀	2	b11	包含層	包含層	底径7.6	底部 6/12	外:匁口げ、貼付高台、糸切痕 内:匁口げ	密	良	灰白、黄灰、 灰黄	
47	003-02	陶器 鉢	2	b5	包含層	包含層	底径12.4	底部 2/12	外:匁口げリ、貼付高台後げ 内:匁口げ	粗	良	灰白	内:自然釉
48	005-02	陶器 直線大皿	2	b3	包含層	包含層	—	口縁部 小片	外:匁口げ 内:匁口げ	やや密	良	灰白 浅黄	瀬戸美濃 古瀬戸後Ⅲ期
49	006-01	土師器 内耳鍋	2	b4	包含層	包含層	口径25.0	口縁部 1/12	外:匁口げ 内:匁口げ	密	良	橙	中北勢系?

第19表 出土遺物観察表②

# 第6章 地蔵前遺跡

## 第1節 立地

地蔵前遺跡は、中ノ川が開析した河岸段丘上に立地する。地蔵前遺跡が所在する亀山市三寺町付近の中ノ川は、南北両側を低丘陵に挟まれた谷筋を緩やかな蛇行を繰り返しながら東流する。この流域は、南北両丘陵から中ノ川に向かって延びる丘陵支尾根によっても小さく区画され、地蔵前遺跡を含む今回報告する遺跡群はいずれも左岸（南岸）側にあって、中ノ川を北限とする東西1.4km、南北0.3kmの小さな段丘斜面に立地する。ただし、地蔵前遺跡は、これら遺跡群のなかでは最も西側に離れて位置し、他の遺跡からは立地的に独立したあり方を示す。

地蔵前遺跡の立地場所の状況を具体的に述べると、巨視的には中ノ川南岸の開析面の南西隅に相当する

が、細かく見れば南側丘陵から派生した小支尾根から東側に張り出した台地頂部に位置している。そのため、地蔵前遺跡は、北・南・東の三方向からみれば4.1m～11.5mの比高差をもっていることになる。

地蔵前遺跡では北地区と南地区の2調査区が存在するが、このうち南地区は、台地頂部でも台地南端部で舌状の落ち際の部分となっており、トレンチ北側はほぼ平坦面を形成するものの、南半は南斜面を形成している。一方、北地区は、現況は台地端部までは最も近い東側で70mほどある平坦部に位置するが、現水田面の畦畔際の部分であり、水田形成以前は南側と東側に緩やかに落ちていく段斜面部分に相当していたものと思われる。

（穂積）

## 第2節 調査の方法

**調査区の設定** 三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を4m×4mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの1単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記は、通常グリッドの北西隅を表示の原点としている。今回の地蔵前遺跡の場合、施工工事の関係で調査対象個所が南北2地点存在し、南地区は面的な、北地区は国土座標の整数値方向からは大きくずれた細長い線的な調査区であった。そのため、調査区の設定は、面調査部分である南地区は国土座標の整数値を小地区表示の原点杭（小地区的西北隅杭）としたが、線的な調査区である北地区はトレンチの形状に合わせて小地区を設定し、遺構実測段階で国土座標の整数値を調査区の両端に付与し、調査区全体の国土座標上の位置を把握できるようにした。

**表土除去** 包含層より上位は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。

**検出・掘削** 表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。

**遺構カード** 小地区を単位として1/40で作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物が出土した場合には、付与した遺構番号も記録した。

**遺構番号の付与** 当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種別を超えた遺跡毎の通し番号を与える方式で、本遺跡においてもそれに従った。南調査区と北調査区も遺構番号は両調査区通しの遺構番号として付与している。なお、三重県の調査方式上致し方ないが、基本的に遺物遺構はその量や性格に関わらず一律に遺構番号が付与されるため、報告段階で不要と認めた遺構も番号が残る一方、重要性があっても遺物の出土がなければ現場レベルで遺構番号が付与されない場合も生じる。このため、本書においても、特に前者に関しては、遺構番号があっても必ずしも本文中で説明が加えられているわけではない。

**実測** 土層や、詳細な図化が必要と認められた遺構は、実測を行った。調査区土層は1/20、遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10の作図を基本とした。調査区全体の遺構実測も手描きとし、この場合は1/20作図とした。

**遺構写真撮影** 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助・メモ的に35mm判白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用した。

**遺物写真撮影** 報告書掲載遺物から任意に選択し、

プローニー判白黒ネガで撮影した

(穂積)

### 第3節 遺構

#### 1 北地区の遺構

##### a 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物・柱列は、東側と西側で3棟検出した。区画が2箇所存在すると考えられ、N19°~20° Eと建物方向をほぼ同じにしている。

S B28（第61図） 桁行3間以上×梁行1間以上と思われる掘立柱建物である。建物方向はN20° Eで、柱間は桁行が1.95+1.8+1.95m、梁行は1.5mである。柱穴から南伊勢系の土師器皿が出土している。

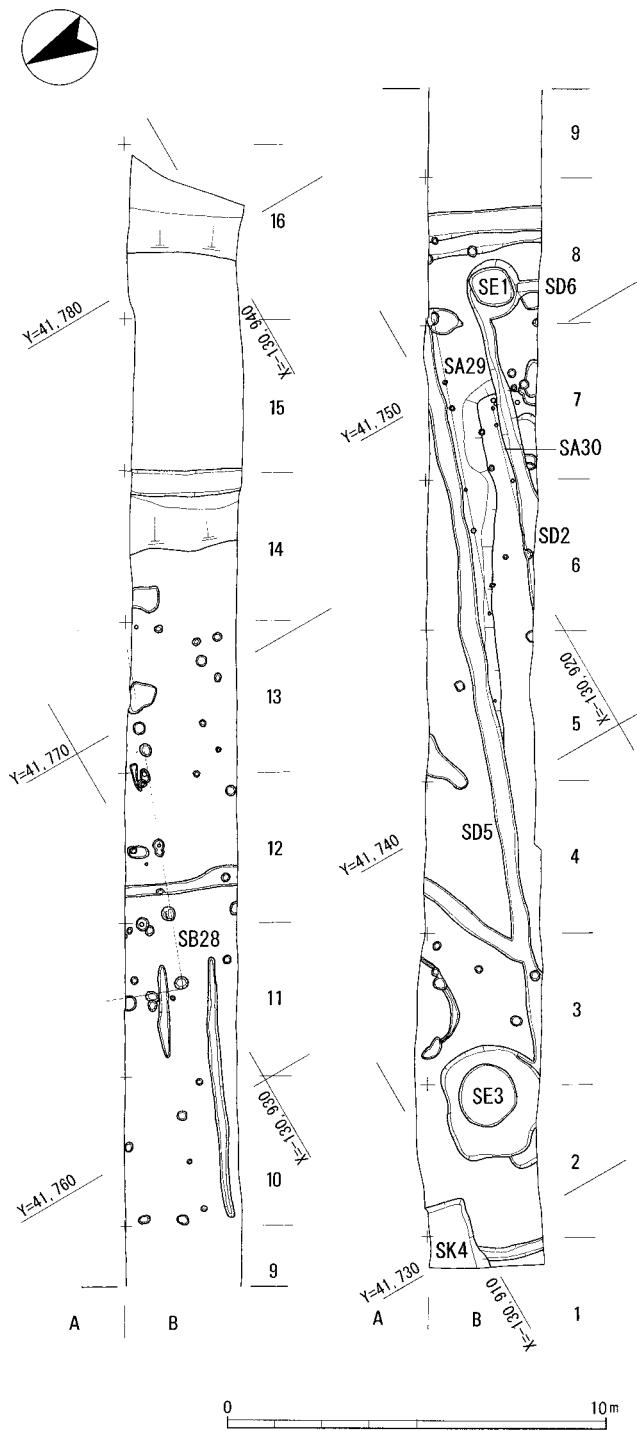
S A29（第61図） 4間分検出した柱列である。柱間は2.25+1.9+2.25+2.55mの柱列である。掘立柱建物になる可能性が高い。柱穴から藤澤編年第5～6型式と思われる山茶椀が出土している。

S A30（第61図） S A29の南側で2間分検出した柱列である。柱間は1.95mの等間で、柱穴から山茶椀小片が出土している。  
（酒井）

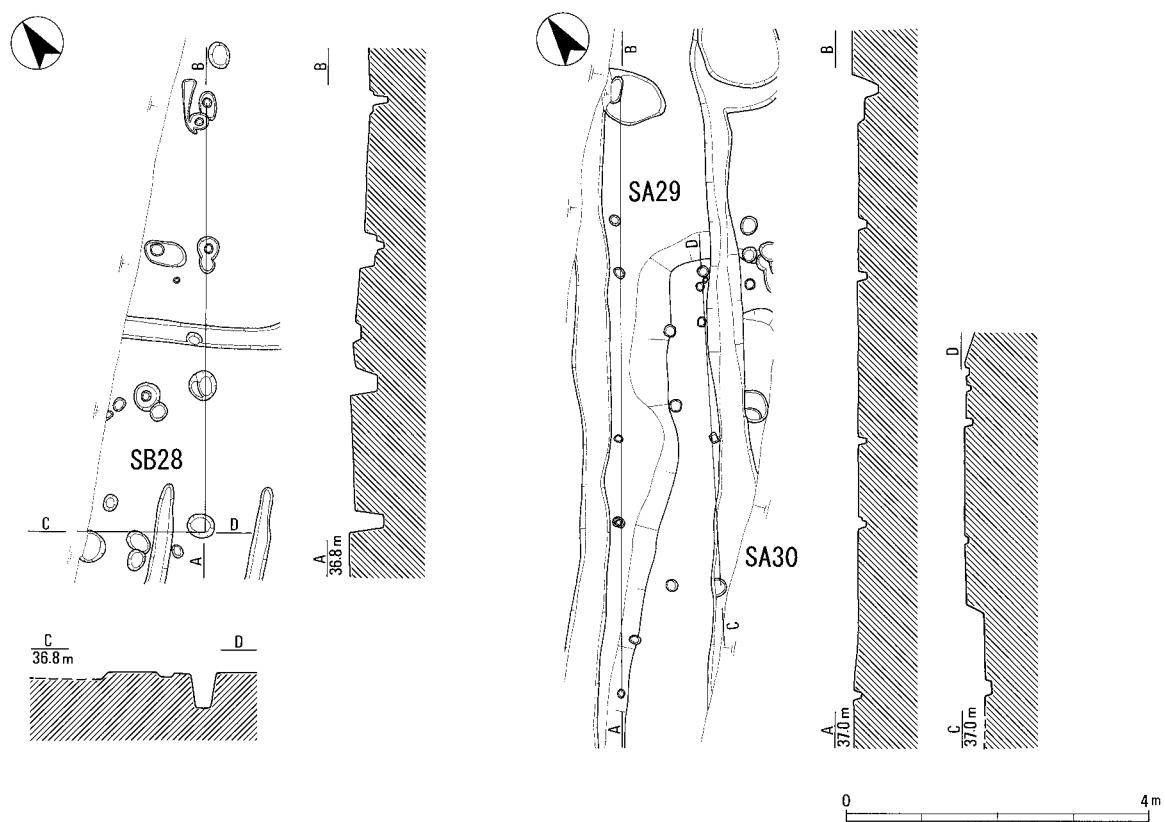
##### b 土坑・井戸

S E1 径1.5m、深さ1.4mの円形の素掘り井戸で、切り合ひ関係からS D2より新しい。検出面から30～40cmの遺構上部はやや抉れたような掘り込みをもつが、そこより下位はほぼ垂直に掘り込まれており、遺構上部の抉りは崩落によるものと判断される。従って、本来の形状は、ほぼ径1mの円形プランをもっていたものと判断した。検出当初は土坑として扱ったが、砂層まで掘り抜いていたことと出水があったことから最終的に素掘り井戸と判断した。埋土より山茶椀などの土器類や漆器椀が出土している。

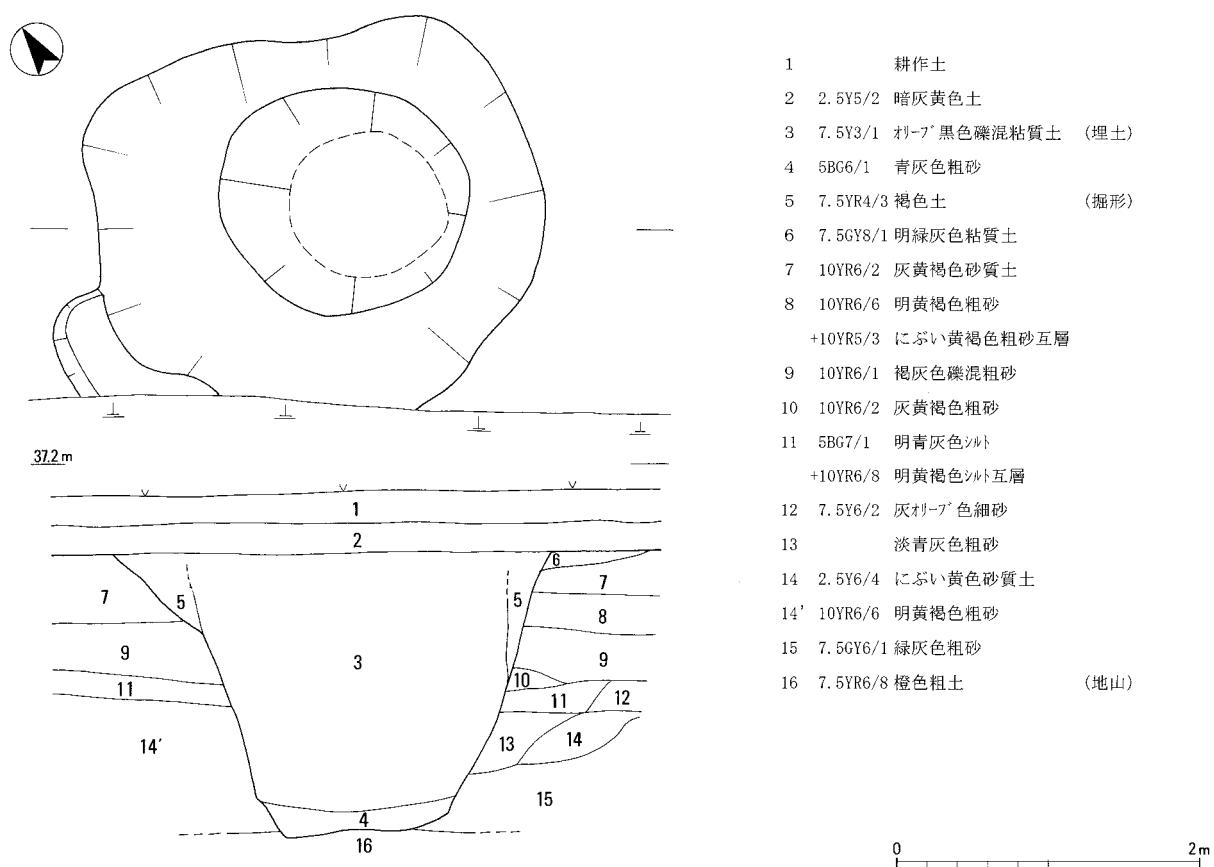
S E3（第62図） 検出面で径1.6m、深さ1.8m、底部で径1.1mを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土に大量の礫があり、また遺構上部には掘形の一部が確認できたことから、石組み井戸が崩れたものと判断した。従って、遺構上部はかなり崩壊していると判断され、本来の内法はもう少し小さかったものと思われる。最下層が湧出部となる粗砂で、それより上位は礫混粘質土の単層であった。なお、井戸の周囲は方形に一段掘り窪められており、水を汲む際の作業スペースだったものと思われる。埋土から



第60図 北地区遺構平面図（1：200）



第61図 掘立柱建物・柱列実測図 (1 : 100)



第62図 SE3 実測図 (1 : 50)

曲物破片（42～43）や中世前半の土器が出土しているが、曲物は原位置にはなかった。

**S K 4** 調査区の北隅で検出したため、遺構の南西隅のみを検出して全体形は不明であるが、確認部分を見る限り方形を呈した深さ23cm程の浅い土坑である。埋土から山茶椀（48）が出土した。

### C 溝

**S D 2** コーナー部分を S E 1 に切られているが、L字状に屈折する溝である。南北はほぼ 5 m 分が残存し、深さは最大で 50 cm を測る。調査地は西側へ向かって高くなっている地形であるが、ちょうどこの溝の屈折内側が西側に相当し、S D 2 は区画溝的な機能があったものと判断される。

**S D 5** 前述の S D 2 に大略平行して東側（S D 2 の屈折を基準にすると S D 2 の外側）を走る溝で、長さ 20 m 以上、幅 0.5 m 、深さ約 10 cm を測る。南側が調査区東壁外へ逃げていくため明確にはしえないが、南側にほぼ S D 5 に直交する方向の溝が存在しており、これらは一連のもので S D 2 同様に L 字状に屈折した溝であった可能性が残る。ただし、その場合、屈折角度がわずかながら鋭角になる。（穂積）

## 2 南地区の遺構

### a 掘立柱建物

南地区的掘立柱建物は、東側と西側にピットの集中があることから、大きく東西2箇所の宅営地があったと推定されるが、特に東側は何回か繰り返して占地されている。

**S B 20**（第64図） 東側で検出した桁行 4 間 × 梁行 2 間の掘立柱建物である。建物方向は N 26° E で、柱間は桁行が 2.55 + 2.1 + 2.4 + 2.4 m と 4.75 + 1.95 + 2.7 m 、梁行は 2.1 + 2.8 m と 2.4 + 2.55 m で、不揃いであるが、主屋クラスの建物と思われる。柱穴から遺物は出土していないが、S B 21 とほぼ方向が同じで、同時期と思われる。

**S B 21**（第64図） 東側で検出した桁行 3 間 × 梁行 2 間の掘立柱建物である。建物方向は N 27° E で、柱間は桁行が 1.5 + 2.25 + 2.25 m と 1.35 + 2.4 + 2.25 m でやや不揃い、梁行は 1.8 + 2.4 m である。S K 12 を切り、S K 10 に切られる。柱穴から第 6 型式の山茶椀が出土している。

**S B 25**（第64図） 東側で検出した桁行 3 間 × 梁行 2 間の総柱建物である。建物方向は N 21° E で、柱間は桁行が 1.95 + 1.95 + 1.8 m 、梁行は 2.25 + 1.95 m である。柱穴から土師器皿（80）が出土している。

**S B 19**（第65図） 西側で検出した。柱間は桁行が 2.55 + 3.05 m と 2.4 + 3.3 m で不揃い、梁行は 4.05 m で、一応建物とした。建物方向は N 22° E で、柱穴から南伊勢系の土師器鍋の小片が出土している。

**S B 22**（第65図） 東側で検出した桁行 2 間 × 梁行 2 間の掘立柱建物である。柱間は桁行が 2.8 + 2.45 m 、梁行は 2.1 + 1.95 m である。建物方向は N 28° E で、S B 21 とほぼ同じ。柱穴から土師器小片が出土している。

**S B 23**（第65図） 東側で検出した。柱間は梁行が 2.1 + 2.85 m 、桁行は 1.95 + 3.15 m で、一応 2 間 × 2 間の建物とした。建物方向は N 18° E で、柱穴から遺物は出土していない。S B 25 より古い建物である。

**S B 17**（第64図） 西側で検出した。柱間は桁行が 1.95 + 2.4 m と 2.1 m の等間、梁行は 1.8 + 2.1 m と 2.25 + 1.4 m で不揃いになり、やや台形を呈するが、桁行 2 間 × 梁行 2 間の建物と思われる。建物方向は N 16° E で、柱穴から第 6 型式の山茶椀が出土している。

**S B 18**（第66図） 西側で検出した。柱間は桁行が 2.1 + 1.95 + 1.65 m と 2.2 + 1.55 + 1.95 m の不揃い、梁行は 2.8 m であるが、桁行 3 間 × 梁行 1 間の建物とした。建物方向は N 22° E 。柱穴から出土遺物はなく、S B 19 と同じ方向である。

**S B 24**（第66図） 東側で検出した桁行 2 間 × 梁行 1 間の建物である。建物方向は N 13° E で、柱間は桁行が 2.1 + 1.95 m 、梁行は 2.1 m である。S K 12 より新しい。柱穴から南伊勢系の土師器羽釜（79）が出土している。

**S A 26**（第66図） 西側で 4 間分検出した 2.25 + 2.4 + 1.2 + 1.95 + 1.95 m の柱列である。南地区内で最も高台に位置している。柱穴から第 7 型式の山茶椀が出土している。

（酒井）

### b 土坑・井戸

**S E 9** 舌状台地の西側への落ち際に位置する径約 1.2 m 、深さ約 1.6 m を測る円形プランの素掘り井戸である。底面は径 30 cm の円形の浅い落ち込みがあり、

本来この部分に曲物が据えられていたのであろう。地形的には高台に立地するが、底面まで掘り抜くと少量ながら出水が存在した。

**S K10** 長径1.8m×短径1.3m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑である。切り合いから、S B22の構成柱穴に先行し、S B21の構成柱穴に後出する。

**S K11** 長径1.1m×短径0.8m、深さ30cmの長方形プランの土坑である。中世火葬穴を思わせるような規模と形状であるが、埋土に焼土等は含まれていなかった。ただし、釘と思われる鉄製品(67)の出土があり、箱状のものが納められていた可能性は捨てきれない。

**S K12** 長径2.6m×短径1.7m、深さ35cmの楕円形状の土坑で、擂鉢状の掘り込みをもつ。焼土等は含まれていない。

S K13 長径1.2m×短径1.1m、深さ73cmの隅丸円形の土坑である。切り合い関係からS B22の構成柱穴より前出する。

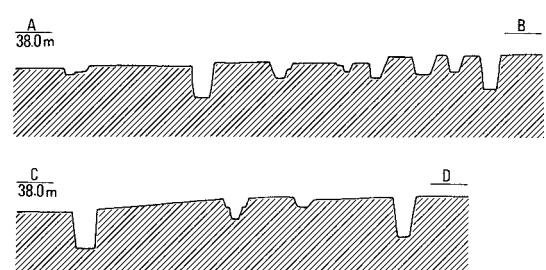
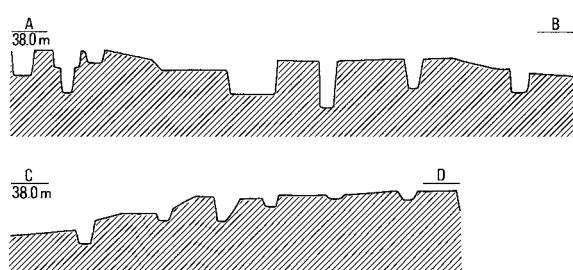
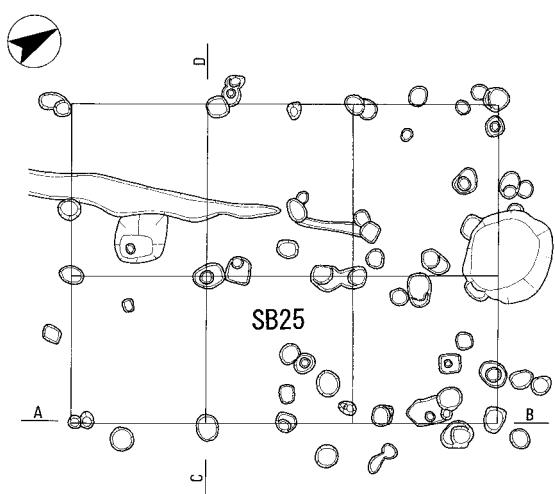
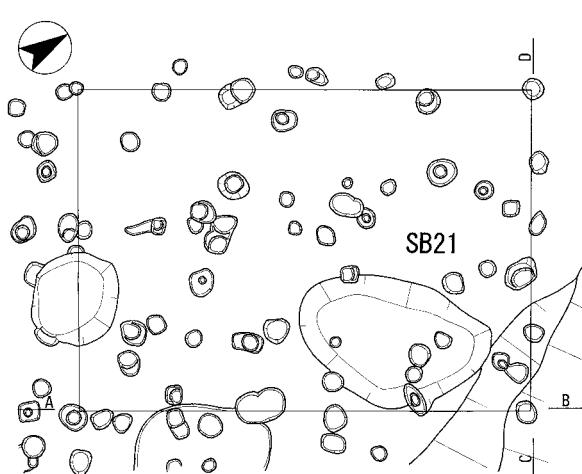
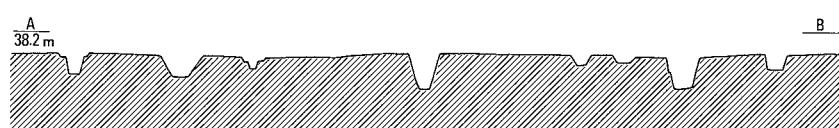
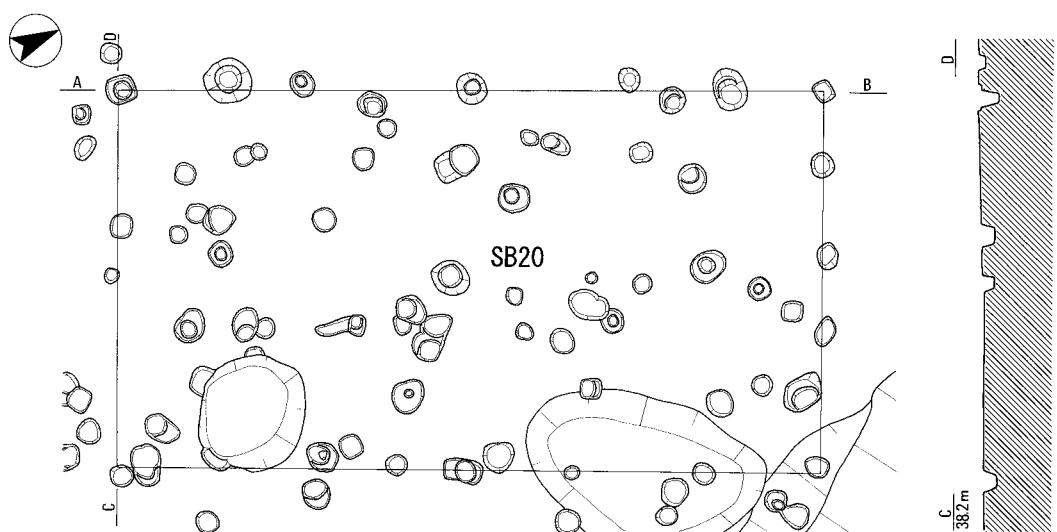
**S K14** 長径4.4m×短径1.8m、深さ30cmの略長方形の土坑である。ただし、埋土に締まりが乏しく、新しい時期の攪乱の可能性も残る。

c 溝・流路

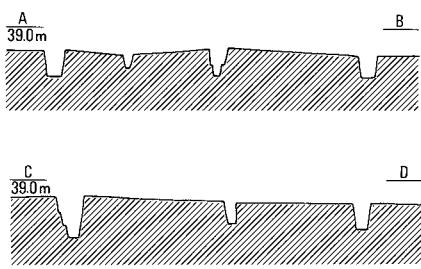
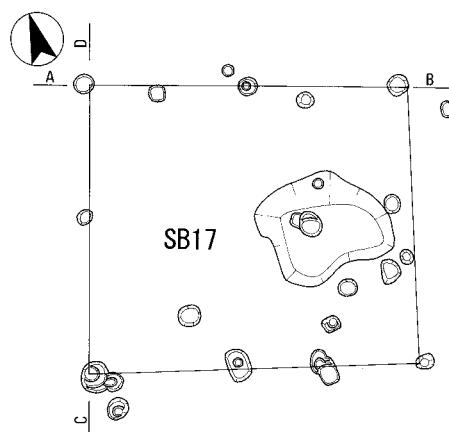
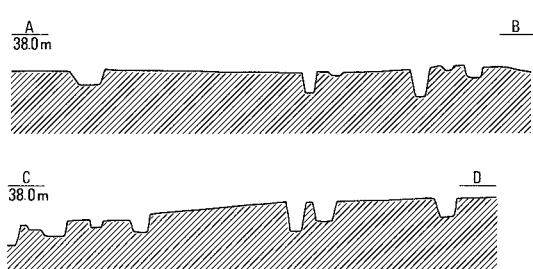
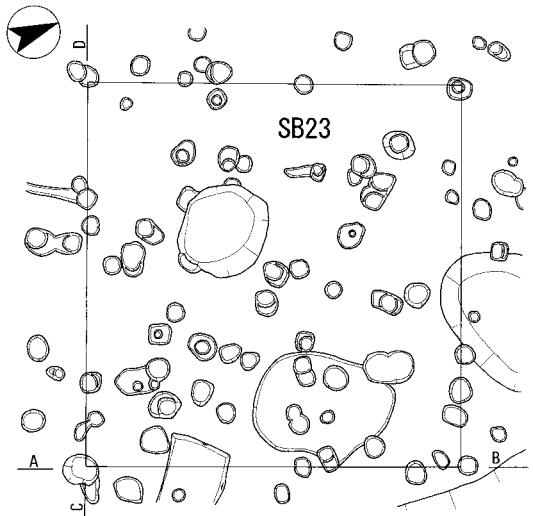
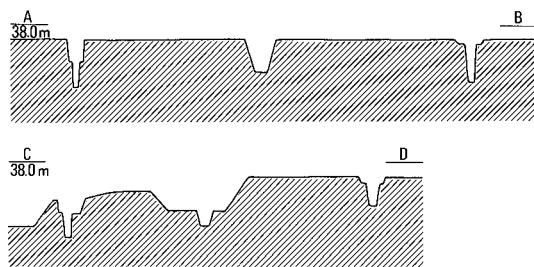
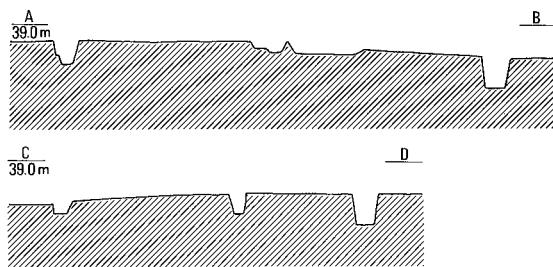
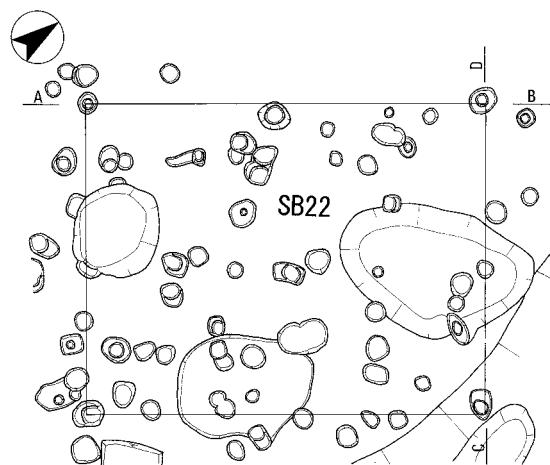
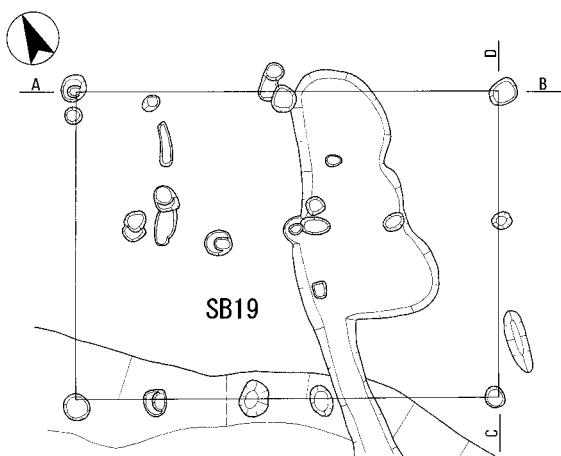
**S D 8** 調査区南隅で東北側から南西側に主軸をおく溝である。南側へ向かって落ちていく地形には沿



第63図 南地区遺構平面図（1：200）



第64図 挖立柱建物実測図① (1 : 100)



0 4m

第65図 掘立柱建物実測図② (1 : 100)

わず、地形に対してほぼ斜め方向に直線的に伸びているため、人工掘削による溝と判断される。ただし、途中からほぼ真南に地形に沿って派生する小支谷があり、こちらは自然形成による開析谷様の小流路と思われる。

**S D27** 出土遺物はないが、調査区の東側に存在する S B20~25やS B17~19の西側を画する溝のため、番号を付与した。幅0.5m、深さ0.05mで、長さ14.5m分が残存する。西側からの雨水がS B20などへ流

入させないための排水機能や、S B18などの西側の雨落ち溝としての性格も負っていた可能性がある。

#### d 不明遺構

**S Z7** トレンチの東隅に位置する落ち込みであるが、調査区際のため一部のみの検出にとどまり、性格は不明である。S D8から派生した小支谷によつて分断されている。

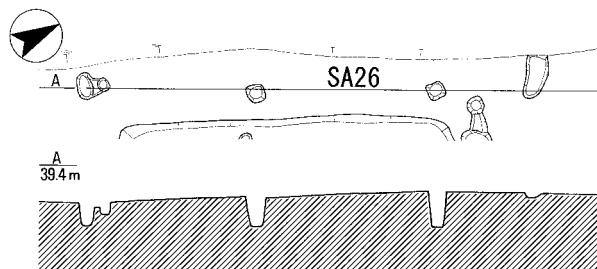
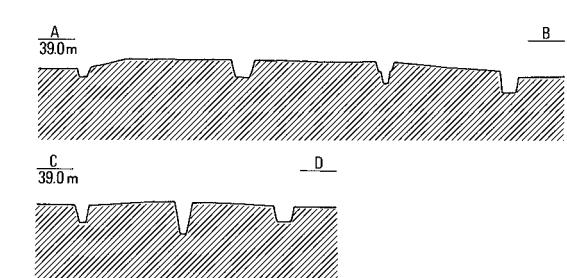
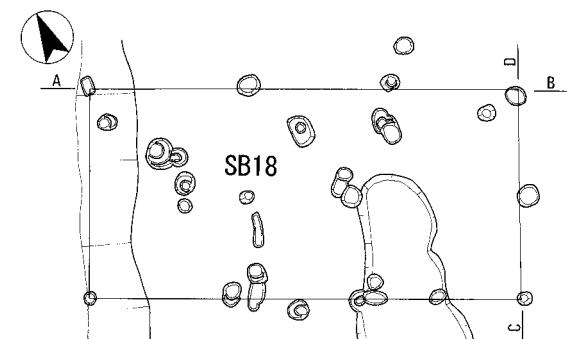
**S Z16** 西側が調査区外へ逃げるが、長径2.2m以上×短径0.5m以上の不定形を呈する。(穂積)

## 第4節 遺物

### 1 北地区出土の遺物

#### S E1 出土遺物 (1~20)

山茶椀(1~7)、陶器片口鉢(8)、土師器皿(9~19)、漆器椀(20)がある。1~2は第6型式、8は第7型式の知多・猿投系である。<sup>②</sup>3は第9型式、4~7は第8型式で瀬戸系である。3は体部と底部外面に「上」、5は底部外面に「上」、4は底部

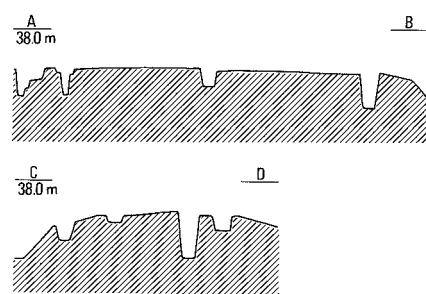
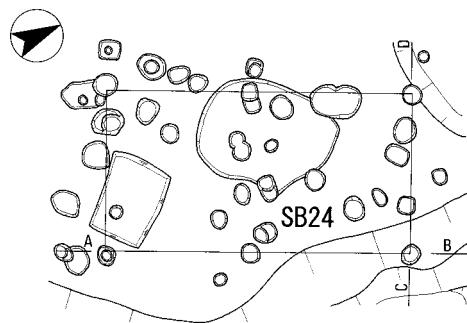


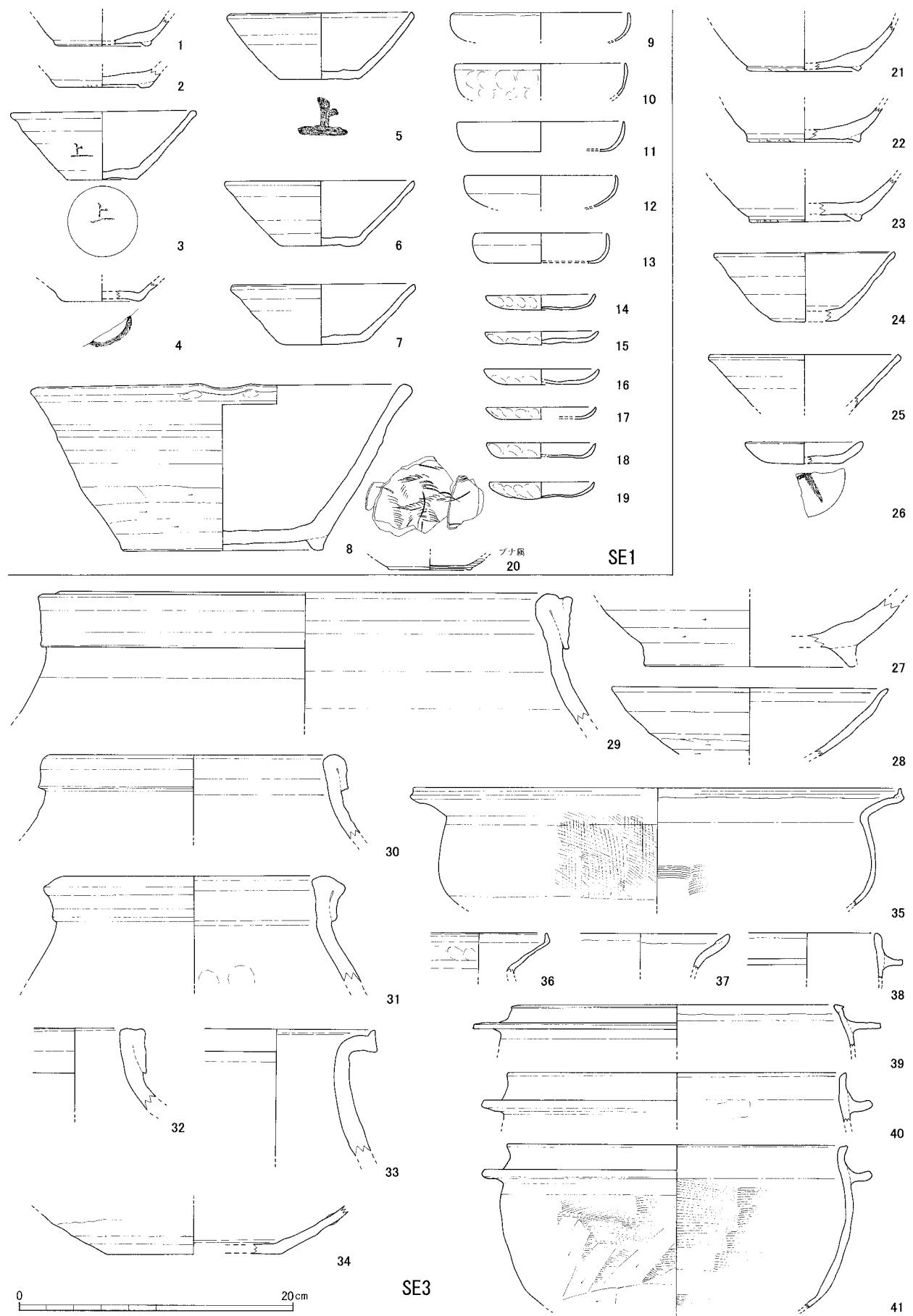
第66図 掘立柱建物・柱列実測図③ (1 : 10)

外面に「○」?の墨書が施されている。土師器皿はすべて南伊勢系で、14~19は法量の均質性が高い。20はブナ属製漆器椀で黒漆を塗布後、赤漆で絵を書いている。

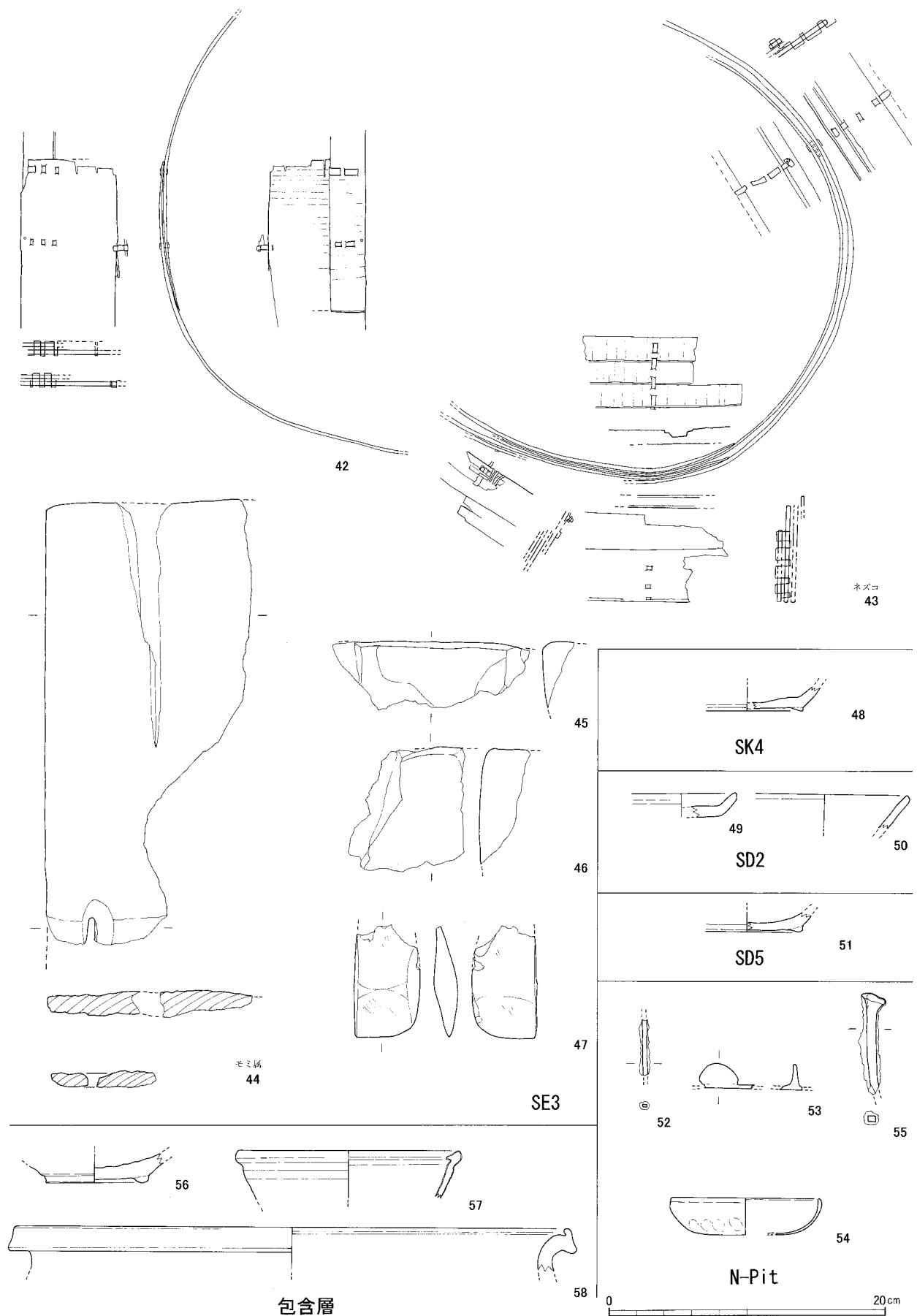
#### S E3 出土遺物 (21~47)

山茶椀(21~25)、山皿(26)、陶器片口鉢(27)、瀬戸美濃製品平椀(28)・盤類(34)、常滑製品甕(29~32~33)・玉縁壺(30~31)、土師器鍋(35~37)・羽





第67図 出土遺物実測図① (1 : 4)



第68図 出土遺物実測図② (1 : 4)

釜(38~41)、曲物(42~43)、板(44)、砥石(45~47)がある。21~23・26~27は第6型式、24~25は第9型式である。山茶椀と山皿は、25が瀬戸北部系である以外、知多・猿投系である。28は藤澤編年古瀬戸後Ⅲ期、34は古瀬戸後Ⅳ期古段階である。29~30は中野編年10型式、31~32は11型式、33は5型式である。<sup>⑤</sup>35~37は南伊勢系で、35~36は伊藤編年第4段階である。羽釜は、39のみ南伊勢系で、他は中北勢系である。曲物は同一個体で、樹皮による縫い目部分が残存し、ネズコ属製、44はモミ属製の板で追柾目である。45~47のうち、47は表面に使用痕が観察できることから砥石と思われるが、45~46は不明な部分も大きい。

#### S K 4 出土遺物 (48)

第6型式の知多・猿投系の山茶椀である。

#### S D 2 出土遺物 (49~50)

49は第6型式で瀬戸?系の山皿、50は第8か9型式、瀬戸系の山茶椀である。

#### S D 5 出土遺物 (51)

瀬戸・猿投系の山茶椀の底部で、第6型式である。

#### 北地区 A 12 ピット 1 出土遺物 (52~54)

52は鉄釘の破片、53は土師器茶釜形の蓋、54は南伊勢系の土師器皿である。鉄釘は断面方形を呈する。53は、薄手の身部に、これまた薄く摘み延ばした摘みが付く。54は、薄手で歪みが大きい。

#### 北地区 A 12 ピット 2 出土遺物 (55)

断面方形の鉄釘で、頭部も僅かに残る。

#### 北地区包含層出土遺物 (56~58)

山茶椀(56)、陶器鉢(57)、常滑製品甕(58)を図示した。56は第6型式で、本遺跡では珍しい渥美産である。57は美濃産片口鉢で登窯第9小期、58は5型式のものである。

## 2 南地区の遺物

#### S E 9 出土遺物 (59~65)

陶器花瓶(59)・徳利(60)・陶器蓋(61)・仏餉具(66)、土師器焙烙(62)、板材(63~65)があり、

土器類はいずれも近世の所産である。59は明治頃と思われる信楽産花瓶である。60は江戸後期の美濃産鋸釉徳利で、61は信楽産、66は19世紀前半のものである。板材はヒノキ製でいずれも薄手、追柾目気味であるため、同じ材から取られた可能性がある。

#### S K 11 出土遺物 (67)

鉄釘である。途中折れているのが後世の影響か、使用時に曲げられたものかどうかはわからない。

#### S K 12 出土遺物 (68~72)

いずれも山茶椀で第6型式と思われる。71が瀬戸系である以外は知多・猿投系である。71の底部外面には墨書があるが破片のため判読できない。

#### S K 14 出土遺物 (73~74)

73は第6型式の山茶椀で、高台が極めて低く知多・猿投系であろう。74は瀬戸美濃製品平底末広椀で古瀬戸中IかII期である。

#### S Z 7 or S D 8 出土遺物 (77~78)

77は瀬戸美濃製品の灰釉折縁深皿で、古瀬戸後IV期古段階。78は南伊勢系の土師器羽釜である。

#### S D 8 出土遺物 (75~76)

75は山茶椀で第6型式、瀬戸系であろうか。76は常滑製品広口壺の胴部で3~4型式のものである。

#### 南地区 S B 24 出土遺物 (79)

南伊勢系の羽釜口縁部小片である。

#### 南地区 S B 25 出土遺物 (80)

土師器皿である。口縁部小片のため、法量はやや不明瞭であるが、これも南伊勢系である。

#### 南地区 F 2 ピット 2 出土遺物 (81)

青磁碗である。蓮華文様等は確認できない。

#### 南地区 S A 26 出土遺物 (82~83)

82は、U字形に曲がった短冊状の鉄板である。用途はわからない。

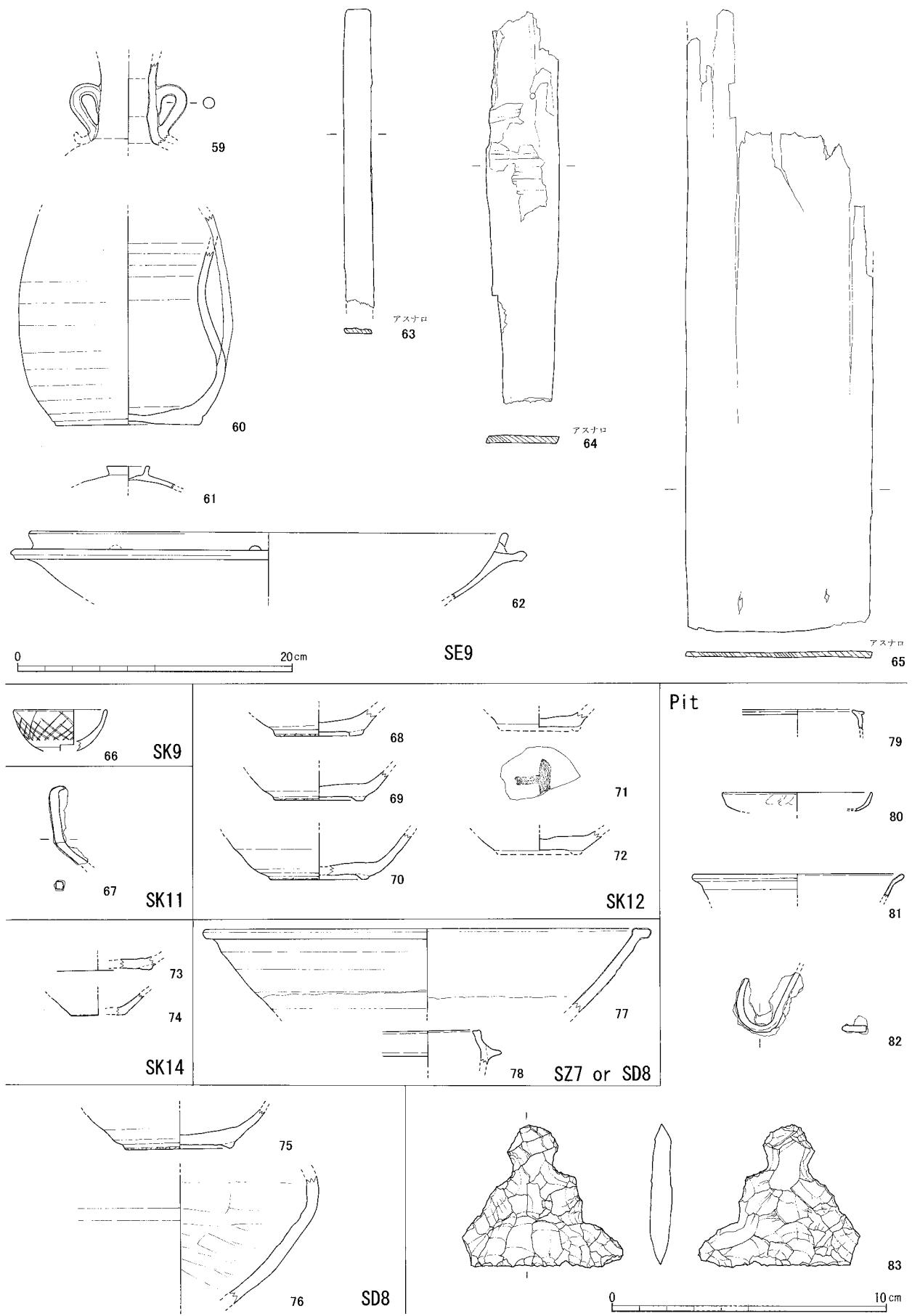
83は、安山岩質(サヌカイト?)の石匙である。三角形状の底辺部分を刃部とし、対面に摘み部分を作り出している。地蔵前遺跡からは明瞭な縄文土器の出土はないが、縄文時代の所産であろう。なお、83は混入遺物となる。

(穂積)

## 第5節 まとめ

地蔵前遺跡では、中世前期(鎌倉時代)と近世の遺構が確認できた。このうち、主体を占めるのは中

世前期の遺構で、調査区が狭いため不明な部分も大きいが掘立柱建物や井戸の存在などから屋敷地を中



第69図 出土遺物実測図③ (83=1:2、1:4)

心とした遺構であったと推定される。以下、地蔵前遺跡で確認した遺構と遺物をまとめておきたい。

## 1 遺構について

地蔵前遺跡の主たる時期の遺構は、鎌倉時代である。南北2つの調査区にまたがるが、遺物の上からは特に明瞭な差は認められず、基本的には同時期の所産として捉えられよう。

北地区は、線的なトレーニングのため全体形がわかる遺構も少なく、全体形を示しえないが、調査区の西半に区画溝と推定される幅30cmのL字状の溝(S D 2)をもち、その区画の外側に掘立柱建物とも考えられる柱列(S A 29、東外側)と井戸(S E 3、北西外側)を有する。S D 2の外側には平行して存在するS D 5がS D 2と同時存在とすれば2重溝ということになるが、東側がやや接近しすぎるため時期が異なる可能性も多い。S D 2の屈折の内側となる南側は、調査区外のため詳細不明だが、北地区的地形は南側が高くなっているため、溝内側に屋敷地の本体がある可能性がある。なお、S B 28の東側は、地形が落ちていくため地形的に周辺部とは区別されるが、溝や柵等の明瞭な区画施設は確認できなかった。

一方、南地区は北・東・南の三方が落ち込みとなる小さな舌状台地に遺構が立地する。掘立柱建物は、東西2箇所に占地されるが、東側のほうが重複が激しい。三方を台地地形によって区画されているため、掘立柱建物の周囲に全体を取り囲むような明瞭な区画溝は検出されなかった。

北地区と南地区の掘立柱建物は、大略、建物方向は一致するといってよい。したがって、途中、未調査部分も含むものの、南地区と北地区は一連の遺構である可能性が高い。

## 2 遺物について

ここでは、地蔵前遺跡の出土遺物のうち、最も出土量の多い鎌倉時代のものを中心にしておく。

〔註〕

①以下山皿・山茶碗は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)

②各種土器類の系統関係などは伊藤裕偉氏のご教示による

③以下、古瀬戸製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下古瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)

④以下常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。以下常滑製品は中野晴久氏の編年

### a 各土器の系統的組成

地蔵前遺跡の出土土器は、輸入陶磁である青磁・白磁類は出土数が極めて少なく、東海系の無釉陶器類と在地系の土師器類が主体を占め、この時期としてはごく通有の一般集落のあり様を示す。しかしながら、細かく見ると、例えば山茶碗をとっても、知多・猿投系のものから、瀬戸、さらにはごく少量ながら渥美系と推定されるものまでを含む。

そこで、実測図に示したものに限定してその組成を具体的に述べると、山茶碗では、知多・猿投系が57%、次いで瀬戸系が35%となり、この2产地で地蔵前遺跡出土山茶碗の大部分を占める。これ以外では、瀬戸北部系と渥美系が1点ずつ確認でき、百分率比ではともに4%となる。なお、別に山皿と山茶碗質の鉢が別途少量出土しており、これらも知多・猿投系と瀬戸系で組成を折半している。

陶器類のうち、大甕類は常滑で占められる。

土師器では、鍋と羽釜、それに土師皿が出土した。このうち、鍋と土師皿は全て南伊勢系であるのに対し、羽釜は南伊勢系と中北勢系が組成を折半する状況にあった。

### b 墨書き山茶碗について

地蔵前遺跡では、山茶碗で4点、山皿で1点、墨書きが確認できた。このうち、文字ないしは記号の判読可能なものは、3と5の「上」(3は底部外面だけでなく胴部外面にも存在)だけであるが、4は残存具合から「○」、また71は「上」の逆文字の可能性がある。

墨書きされた山茶碗の系統に注目すると、地蔵前遺跡の場合、山茶碗で墨書きが確認できるものはすべて瀬戸系の山茶碗で占められ、組成の半数以上を占める知多・猿投系では1点も確認できなかった。1点だけ出土した墨書き山皿(26)は知多系と推定されることから、山茶碗で瀬戸系にあって知多・猿投系に存在しなかったことは偶然の所産かもしれないが、一応記して、今後に注意を換しておきたい。(穂積)

により記述する。中野晴久「常滑・渥美」(『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年)

⑤以下南伊勢系土師器鍋・羽釜は伊藤裕偉氏の編年により記述する。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年)

⑥本来は、出土遺物全破片点数ないしは特定遺構出土の全破片点数から算して組成を出すべきであろうが、実測遺物の抽出は残存度を目安にして特段偏った抽出をしていないため、本書掲載の実測遺物(ほぼ抽出遺物の全点数に近い)でもほぼ同等の結果が得られると判断している

遺構番号	調査時構番号	調査年度	調査次数	地区名	図版番号	地 区	時期	規 模				建物方向 (切り合い:古い→新しい)
								間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	
SE 1	SK 1	H16	1	北		B8	鎌倉					
SD 2	SD 2	H16	1	北		B6~B8	鎌倉					
SE 3	SK 3	H16	1	北	第62図	B2~B3	室町					
SK 4	SK 4	H16	1	北		B1~B2	鎌倉					
SD 5	SD 5	H16	1	北		B3~B7						遺物なし
SD 6	SD 6	H16	1	北		B8	鎌倉					
SZ 7	SZ 7	H16	1	南		D8・E8	室町					
SD 8	SD 8	H16	1	南		D7・E8~F8	中世					
SE 9	SE 9	H16	1	南		G6	江戸					第1層黒褐色土(検出面~0.6m) 第2層黄褐色砂質土(~1.15m) 第3層灰黄色砂礫土(~1.6m)
SK10	SK10	H16	1	南		E6						遺物なし
SK11	SK11	H16	1	南		E6	室町					
SK12	SK12	H16	1	南		D6	鎌倉					SK12→SB21→SK10→ SB22 SK12→SB24
SK13	SK13	H16	1	南		E6	鎌倉					SK13→SB22
SK14	SK14	H16	1	南		F1~F2・G1~G2	鎌倉					搅乱の可能性あり
SD15	SD15	H16	1	南		E1						
SZ 16	SZ 16	H16	1	南		C1・D1						
SB17		H16	1	南	第65図	E2~E3・F2~F3	鎌倉	2×2	3.90	4.20	16.38	16
SB18		H16	1	南	第66図	F2~F3・G2~G3	鎌倉?	3×1	5.70	2.80	15.96	22
SB19		H16	1	南	第65図	F2~F3・G2~G3	鎌倉?	2×2	5.70	4.05	23.09	22
SB20		H16	1	南	第64図	D5~D6・E5~E6	鎌倉?	4×2	9.45	4.95	46.78	26
SB21		H16	1	南	第64図	D5~D6・E5~E6	鎌倉	3×2	6.00	4.20	25.20	27
SB22		H16	1	南	第65図	D5~D6・E5~E6	鎌倉	2×2	5.25	4.05	21.26	28
SB23		H16	1	南	第65図	D5~D6・E5~E6	鎌倉	2×2	5.10	4.95	25.25	18
SB24		H16	1	南	第66図	D6・E6	室町	2×1	4.05	2.10	8.51	13
SB25		H16	1	南	第64図	F5~F6・G5~G6	鎌倉	3×2	5.70	4.20	23.94	21
SA26		H16	1	南	第66図	C~G1	鎌倉		9.75			
SD27		H16	1	南		E~G5						遺物なし
SB28		H16	1	北	第61図	B11~B12	鎌倉	3≤×1≤	5.70≤	1.5≤	8.55≤	20
SA29		H16	1	北	第61図	B5~B7	鎌倉		8.95			
SA30		H16	1	北	第61図	B6~B7	鎌倉		3.90			

第20表 遺構一覧表

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時 遺構番号	計測値 (cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
1006-05	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径7.1 3/12	底部 外:貼付高台、糸切痕 内:回転けず	やや粗良	灰白				
2006-04	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径6.8 5/12	底部 外:貼付高台、糸切痕 内:ロカナデ	やや粗良	灰白				
3010-01	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径5.1 底部 完存	外:ロカナデ、糸切痕 内:ロカナデ	粗良	灰白		5ヶ所墨書有		
4007-02	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径5.6 4/12	底部 外:ロカナデ、糸切痕 内:ロカナデ	やや粗良	灰白				
5006-01	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径5.7 底部 完存	外:ロカナデ、糸切痕 内:一方向けず、ロカナデ	粗良	灰白		底部墨書有		
6006-02	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径5.6 7/12	底部 外:ロカナデ、糸切痕 内:一方向けず、ロカナデ	粗良	灰白		外:自然釉		
7006-03	陶器 山茶椀		N-a8	SE1	SK1	底径6.2 底部 完存	外:ロカナデ、糸切痕 内:一方向けず、ロカナデ	粗良	灰白				
8007-01	陶器 鉢		N-a8	SE1	SK1	口径27.8 口縁部 8/12	外:回転けず、ワズレ、貼付高台後けず 内:けず、回転けず	粗良	灰白				
9006-07	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径12.9 口縁部 3/12	外:ヨコけず・ナデ 内:ナデ・ヨコけず	やや密良	浅黄澄		南伊勢系		
1007-05	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径12.2 口縁部 3/12	外:ヨコけず・オサエ・ナデ 内:ナデ・ヨコけず	密良	浅黄澄		南伊勢系		
11006-08	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径14.2 口縁部 3/12	外:ヨコけず・ナデ 内:ナデ・ヨコけず	やや密良	浅黄澄		南伊勢系		
12006-09	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径11.0 口縁部 1/12	外:ヨコけず・ナデ 内:ナデ・ヨコけず	やや密良	灰白		南伊勢系		
13007-03	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径12.0 口縁部 3/12	外:ヨコけず・ナデ 内:ナデ・ヨコけず	やや密良	灰白		南伊勢系		
14009-06	土師器 小皿		N-a8	SE1	SK1	口径8.0 口縁部 8/12	外:ヨコけず・ナデ、オサエ 内:ナデ・ヨコけず	密良	にぶい黄澄		南伊勢系		
15009-05	土師器 小皿		N-a8	SE1	SK1	口径8.3 口縁部 2/12	外:ヨコけず・ナデ、オサエ 内:ナデ・ヨコけず	密良	にぶい黄澄		南伊勢系		
16009-04	土師器 小皿		N-a8	SE1	SK1	口径8.4 口縁部 4/12	外:ヨコけず・ナデ、オサエ 内:工具ナデ、ヨコけず	密良	灰白		南伊勢系		
17007-04	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径8.0 口縁部 4/12	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密良	灰白		南伊勢系		
18009-03	土師器 小皿		N-a8	SE1	SK1	口径8.0 口縁部 5/12	外:ヨコけず・ナデ、オサエ 内:ナデ・ヨコけず	密良	灰黄		南伊勢系		
19006-06	土師器 皿		N-a8	SE1	SK1	口径7.6 口縁部 5/12	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密良	灰白		南伊勢系		
20021-01	漆器 小椀		N-a8	SE1	SK1	底径6.0 底部 4/12	模様:赤漆					樹種:ブナ属	

第21表 出土遺物観察表①

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時遺構番号	計測値(cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
21	011-04	陶器 山茶椀		N-a2	SE3	SK3	底径8.4	底部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	ミガラ痕
22	011-05	陶器 山茶椀		N-a2	SE3	SK3	底径8.2	底部 3/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	ミガラ痕
23	010-05	陶器 山茶椀		N-a2	SE3	SK3	底径8.2	底部 4/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:ヨコナデ	やや粗	良	灰	ミガラ痕
24	012-04	陶器 山茶椀		N-a2	SE3	SK3	口径13.2	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	密	良	灰白	
25	018-01	陶器 山茶椀		N-a2	SE3	SK3	口径14.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	良	灰白	北部系
26	012-03	陶器 山皿		N-a2	SE3	SK3	口径8.6	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	
27	010-04	陶器 鉢		N-a2	SE3	SK3	底径15.4	底径 1/12	外:ヨコケズリ、貼付高台 内:ヨコナデ	やや粗	良	灰白	
28	013-01	陶器 平碗		N-a2	SE3	SK3	口径20.1	口縁部 2/12	外:ヨコケズリ	密	良	釉:灰白 素地:灰黄	瀬戸美濃、古瀬戸後 Ⅲ期、外・内:灰釉
29	011-01	陶器 甕		N-a2	SE3	SK3	口径39.0	口縁部 3/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	外:灰褐 内:ぶい赤褐	常滑製品、10型式 外・内:自然釉
30	011-02	陶器 玉縁壺		N-a2	SE3	SK3	口径22.6	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰赤	常滑製品、10型式 外・内:自然釉
31	012-01	陶器 甕		N-a2	SE3	SK3	口径22.0	口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	良	外:灰赤 内:ぶい黄橙	常滑製品、11型式 外:自然釉
32	011-03	陶器 甕		N-a2	SE3	SK3	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰赤	常滑製品 11型式
33	012-02	陶器 甕		N-a2	SE3	SK3	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	良	外:灰利-ア 内:黄灰	常滑製品 5型式
34	012-05	陶器 盤類		N-a2	SE3	SK3	底径12.6	底部 2/12	外:ヨコナデ、ヨコケズリ 内:ヨコナデ	密	良	灰白	瀬戸美濃、古瀬戸後 Ⅳ期古、外・内:灰釉
35	009-01	土師器 鍋		N-a2	SE3	SK3	口径35.9	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ハケ、ケズリ 内:工具ナデ、ヨコナデ	やや密	良	にぶい黄橙	南伊勢系
36	013-04	土師器 鍋		N-a2	SE3	SK3 中央穴	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、オエ、ハケ 内:ヨコナデ	密	-	外:にぶい黄橙 内:灰白	南伊勢系
37	008-04	土師器 鍋		N-a2	SE3	SK3	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	良	灰白	南伊勢系
38	008-03	土師器 羽釜		N-a2	SE3	SK3	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	良	灰白	中北勢系
39	013-03	土師器 羽釜		N-a2	SE3	SK3	口径24.2	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、貼付鍔、ハケ 内:ナデ、ヨコナデ	密	-	灰白	南伊勢系 煤付着
40	008-02	土師器 羽釜		N-a2	SE3	SK3	口径24.7	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、貼付鍔、 内:工具ナデ、ヨコナデ	やや密	良	にぶい黄橙	中北勢系
41	008-01	土師器 羽釜		N-a2	SE3	SK3	口径24.8	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、貼付鍔、ハケ、ケズリ 内:工具ナデ、ハケ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	中北勢系
42	004-01	木製品 曲物		N-a2	SE3	SK3	現存厚0.15		木の皮で綴る				樹種:ネズコ属
43	005-01	木製品 曲物		N-a2	SE3	SK3			籠がある				樹種:ネズコ属
44	002-01	木製品 板材		N-a2	SE3	SK3	現存長32.0 現存幅14.9 現存厚1.8						樹種:モミ属
45	014-01	石製品 砥石		N-a2	SE3	SK3	長さ(4.9) 幅(14.2) 厚さ(2.3) 重さ(160g)						46と同一固体か? 砂岩
46	014-02	石製品 砥石		N-a2	SE3	SK3	長さ(9.0) 幅(8.3) 厚さ(3.6) 重さ(290g)						45と同一固体か? 砂岩
47	014-03	石製品 砥石		N-a2	SE3	SK3	長さ(8.1) 幅(4.7) 厚さ(1.7) 重さ(75g)						
48	015-01	陶器 山茶椀		N-a2	SK4	SK4	-	底部 小片	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:一方向ナデ、ヨコナデ	やや密	良	灰白	
49	010-02	陶器 山皿		N-a7	SD2	SD2	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	密	良	灰白	
50	010-03	陶器 山茶椀		N-a7	SD2	SD2	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白	
51	015-02	陶器 山茶椀		N-a4	SD5	SD5	-	底部 小片	外:貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	やや密	-	灰白	
52	020-03	鉄製品 釘		N-a12	Pit1								
53	018-07	土師器 蓋		N-a12	Pit1		-	ツマ部 小片	外:ツマ貼付後ナデ 内:ナデ	密	-	橙	
54	018-04	土師器 皿		N-a12	Pit1		口径11.0	口縁部 6/12	外:ナデ、オエ 内:ナデ	密	-	灰白	南伊勢系 歪み大
55	020-02	鉄製品 釘		N-a12	Pit2	柱根							
56	019-02	陶器 山茶椀	N-a3 付近	包含層 排土			底径7.4	底部 8/12	外:ヨコナデ、貼付高台後ヨコナデ、糸切痕 内:ヨコナデ	密	良	灰白	
57	019-01	陶器 片口鉢	N-a4	包含層			口径16.4	口縁部 2/12		密	良	釉:浅黄	外・内:施釉 美濃、登窯第9小期
58	019-03	陶器 甕	N-a3 付近	包含層 排土			口径41.0	口縁部 1/12		密	良	外:にぶい赤褐 内:褐	常滑製品、5型式 外・内:自然釉
59	016-03	陶器 花瓶	S-g6	SE9	SE9 (第3層)	-	把手部 小片			密	良	釉:黒	外・内:施釉 信楽
60	016-01	陶器 鉄軸徳利	S-g6	SE9	SK9 (第1層) (第3層)	底径10.5	底径 9/12	外:ヨコナデ、ヨコケズリ 内:ヨコナデ	密	良	外:にぶい赤褐 内:灰白	外:鉄釉 美濃	
61	016-02	陶器 蓋	S-g6	SE9	SE9 (第2層)	底径3.1	底部 完存			密	良	釉:灰	外・内:施釉 信楽
62	009-02	土師器 焙烙	S-g6	SE9 第2・3層	SE9 (第2層) (第3層)	口径34.8	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、貼付鍔、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	良	灰白 灰	中北勢系	

第22表 出土遺物観察表②

報告番号	Rno.	器種等	調査次数	小地区	遺構名	調査時遺構番号	計測値(cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
63	003-02	木製品 板材		S-g6	SE9	SE9 (第3層)	現存長21.6 現存幅2.0 現存厚0.4						樹種:ヒノキ
64	003-01	木製品 板材		S-g6	SE9	SE9 (第3層)	現存長28.5 現存幅5.3 現存厚0.5 穴0.35×0.45						樹種:ヒノキ
65	001-01	木製品 板材		S-g6	SE9	SE9 (第3層)	現存長45.0 現存幅13.5 現存厚0.35						樹種:ヒノキ
66	016-04	磁器 仏龕具		S-g6	SE9	SK9 (第1層)	口径6.8 口縁部 4/12			密	良	灰白	瀬戸美濃 絵付
67	020-01	鉄製品 釘		S-e6	SK11	SK11							
68	017-04	陶器 山茶椀		S-d6	SK12	SK12	底径6.5 底部 6/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:口付	やや密	良	灰白	モガラ痕	
69	017-03	陶器 山茶椀		S-d6	SK12	SK12	底径6.6 底部 2/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:一方向付、口付	やや密	良	灰黄	モガラ痕	
70	017-02	陶器 山茶椀		S-d6	SK12	SK12	底径7.0 底部 3/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:口付	密	良	灰黄	内:墨痕	
71	017-06	陶器 山茶椀		S-d6	SK12	SK12	— 底部 小片	外:貼付高台後付、糸切痕 内:一方向付	やや密	良	淡黄	底部墨書	
72	017-05	陶器 山茶椀		S-d6	SK12	SK12	— 底部 小片	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:口付	やや密	良	灰白		
73	018-02	陶器 山茶椀		S-g2	SK14	SK14	— 底部 小片	外:貼付高台後付 内:口付	密	—	浅黄		
74	018-03	陶器 平底未施釉		S-g2	SK14	SK14	底径4.0 底部 3/12	外:口付、糸切痕	密	良	釉:浅黄 素地:灰白	古瀬戸中ⅠかⅡ期、外・内:施釉	
75	015-06	陶器 山茶椀		S-e8	SD8	SD8	底径8.0 9/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:口付	密	良	灰白	モガラ痕 内:自然釉	
76	015-05	陶器 広口壺		S-d7	SD8	SD8	— 小片	内:工具付	密	良	釉:灰褐 素地:灰黄褐	常滑製品、3~4型式 外:自然釉	
77	015-04	陶器 折線深皿		S-e8	SZ7or SD8	SZ7 SD8	口径32.6 口縁部 1/12	外:口付、内:口付	密	良	釉:リーフ黄 素地:浅黄	瀬戸美濃、古瀬戸 後Ⅳ期古、外:施釉	
78	015-03	土師器 羽釜		S-e8	SZ7or SD8	SZ7 SD8	— 鍔部 小片	外:ヨコナデ、貼付鍔後付 内:ヨコナデ	やや密	—	浅黄橙	南伊勢系	
79	018-05	土師器 羽釜		S-d6	SB24	Pit1	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	—	浅黄橙	南伊勢系	
80	018-06	土師器 皿		S-f6	SB25	Pit2	口径11.0 口縁部 1/12	外:ナデ、内:ナデ	密	—	外:にぶい黄橙 内:浅黄橙	南伊勢系	
81	018-08	青磁 椀		S-f2	Pit2		口径15.4 口縁部 1/12		密	良	釉:明緑灰	外・内:施釉	
82	020-04	鉄製品 不明		S-e1	SA26	Pit3							
83	014-04	石匙		S-g1	SA26	Pit2 柱根1	長さ5.1 幅(5.8) 厚さ0.8 重さ(17.97g)	一部欠損					#カット

第23表 出土遺物観察表③

報告番号	Rno.	器種等	遺跡名	小地区	調査時遺構番号	計測値(cm)	残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
1	001-04	土師器 皿	岩瀬古墳		試掘坑 No.63	口径8.0 口縁部 2/12	外:ナデ 内:ナデ	密	並	灰白		南伊勢系
2	001-08	土師器 皿	岩瀬古墳		試掘坑 No.60	口径10.8 口縁部 3/12	外:ナデ 内:ナデ	密	並	灰白		南伊勢系
3	001-05	土師器 皿	岩瀬古墳		試掘坑 No.33	口径12.6 口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	並	灰白		中北勢系
4	002-03	陶器 皿	岩瀬古墳		試掘坑 No.33	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	良	外:褐灰 内:暗灰		常滑製品 6a型式
5	003-03	土師器 羽釜	岩瀬古墳		試掘坑 No.27	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	並	外:橙 内:にぶい橙		中北勢系
6	003-02	土師器 皿	岩瀬古墳		試掘坑 No.20	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	並	外:灰黄褐 内:にぶい橙		南伊勢系
7	002-06	青磁 椀	岩瀬古墳		試掘坑 No.21	底径6.0 底部 3/12	外:削出高台、口付 内:口付	密	良	釉:明利ーブ灰 素地:にぶい黄		外・内:施釉
8	002-08	磁器 丸碗	岩瀬古墳		試掘坑 No.36	底径3.6 底部 4/12		密	良	灰白		肥前 外:施釉
9	001-02	陶器 山皿	岩瀬古墳	Cトレチ	試掘	口径7.5 口縁部 2/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:ナデ、ヨコナデ	密	良	灰白		
10	001-01	陶器 山茶椀	岩瀬古墳	Cトレチ	試掘	口径13.4 口縁部 2/12	外:口付、糸切痕 内:口付	やや密	良	灰白		
11	001-03	陶器 片口鉢	岩瀬古墳	Bトレチ	試掘	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、ナエ 内:ナデ	やや密	良	外:灰赤 内:褐灰		常滑製品 11型式
12	003-01	土師器 清郷型鍋	金森		試掘坑 No.152	口径29.0 口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	並	橙		
13	002-04	土師器 鍋	金森		試掘坑 No.89	口径24.0 口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	やや不良	外:にぶい黄橙 内:浅黄橙		南伊勢系、外:煤付着、 外・内:風化大
14	002-07	土師器 皿	金森		試掘坑 No.8	底径6.6 底部 6/12	外:口付、貼付高台後付、糸切痕 内:ナデ	密	並	灰黃		
15	001-09	陶器 山皿	嶋/前		試掘坑 No.123	口径8.7 口縁部 2/12	外:口付、糸切痕 内:口付	やや密	良	灰白		外・内:自然釉
16	001-07	土師器 皿	地蔵前		試掘坑 No.202	口径8.7 口縁部 5/12	外:ヨコナデ、ナデ、ナエ 内:ナデ、ヨコナデ	やや密	不良	浅黄橙		中北勢系
17	001-10	土師器 鍋	地蔵前		試掘坑 No.193	— 口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄橙		南伊勢系
18	002-02	陶器 山皿	地蔵前		試掘坑 No.193	口径8.6 口縁部 2/12	外:ヨコナデ、糸切痕 内:口付	やや密	良	灰白		外:自然釉
19	001-06	土師器 皿	その他		試掘坑 No.65	口径9.0 口縁部 2/12	外:ナエ、ナデ 内:ナエ、ナデ	密	並	灰白		南伊勢系
20	002-01	陶器 椀	その他		試掘坑 No.87	底径6.0 底部 6/12	外:ヨコナデ、貼付高台、糸切痕 内:口付	密	良	灰白		内:施釉 美濃産
21	002-05	陶器 椀	その他		試掘坑 No.23	底径5.5 底部 6/12	外:ヨコナデ、削出高台 内:ヨコナデ	密	良	釉:にぶい赤褐 素地:灰白		外・内:施釉 登窯第5か6小期

第24表 出土遺物観察表（範囲確認調査）

## 第7章 範囲確認調査出土遺物

### 岩瀬遺跡出土遺物（1～11）

1～2は、南伊勢系の土師器皿、3は中北勢系の土師器皿である。4は中野編年<sup>①</sup>6a型式の常滑製品甕である。5は中北勢系土師器羽釜で、1箇所焼成前穿孔が残る。16世紀のものである。6は南伊勢系の土師器鍋で、伊藤編年第4段階bかc型式である。7は青磁碗、8は肥前産碗である。9は山皿で、藤澤編年第6型式、10は山茶碗で第9型式である。11は常滑製品片口鉢で11型式である。

### 金森遺跡出土遺物（12～14）

12は清郷型鍋、13は南伊勢系の土師器鍋第2段階

#### 〔註〕

①以下常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。以下常滑製品は中野晴久氏の編年により記述する。中野晴久「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005

②以下南伊勢系土師器鍋・羽釜は伊藤裕偉氏の編年により記述する。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）

③以下山皿・山茶碗は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐

b型式のものである。14は軟質の須恵器である。

### 鳴ノ前遺跡出土遺物（15）

15は山皿で第5型式であろう。

### 地蔵前遺跡出土遺物（16～18）

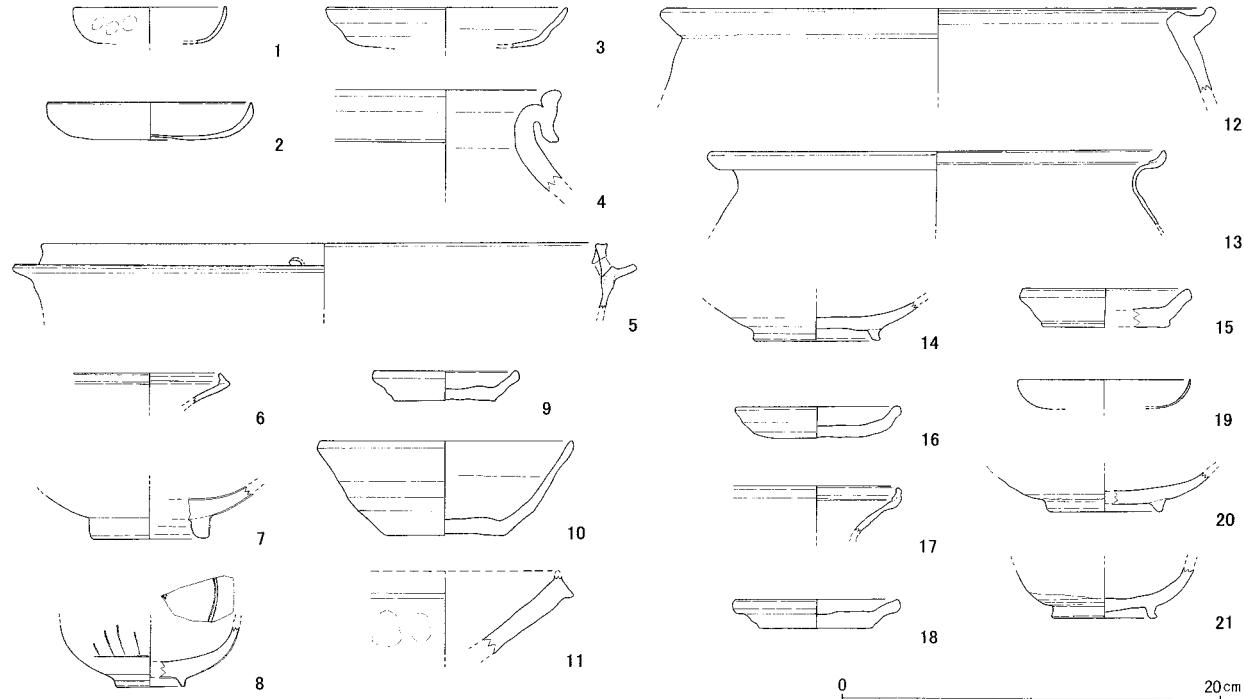
16は器壁が厚く、中北勢系の土師器皿で12世紀後半頃である。17は南伊勢系の土師器鍋で第4段階cなしはd型式であろう。18は山皿で第6型式である。

### その他出土遺物（19～21）

19は南伊勢系の土師器皿である。20は美濃産摺絵皿で登窯第5か6小期、21は瀬戸美濃製品碗で登窯第5か6小期のものである。（酒井）

「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）

④以下登窯製品については、全点にわたり愛知学院大学藤澤良祐氏に実見の上、ご教示を得た。以下登窯製品は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VI』（瀬戸市歴史民族資料館、1987年）、藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VII』（瀬戸市歴史民族資料館、1988年）、藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VIII』（瀬戸市歴史民族資料館、1989年）



第70図 出土遺物実測図（1：4）

# 第8章 金森遺跡放射性炭素年代測定

北脇達也（パリノ・サーヴェイ株式会社）

## 第1節 はじめに

三重県亀山市三寺町に所在する金森遺跡は、中ノ川右岸の河岸段丘上に立地する。発掘調査の結果、縄文時代の陥し穴、中世の掘立柱建物・溝・井戸・柱穴等の遺構が確認されている。今回の分析調査は、

## 第2節 試料

放射性炭素年代測定を行う試料は、SK2から3点、SK4から4点、SK6から3点、SK9から2点、SK16から2点、合計14点が採取されている。これらは、No.1～14まで通し番号が付されている。SK4から採取されたNo.4・6は、炭化物量が極めて少ないた

## 第3節 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年

## 第4節 結果

結果を第25表に示す。測定の結果、SK2では、No.1で $4060 \pm 50$ BP、No.2で $3830 \pm 40$ BP、No.3で $4320 \pm 50$ BPの補正年代値が得られる。SK4では、No.4で $3590 \pm 50$ BP、No.5で $3160 \pm 60$ BP、No.6で $4130 \pm 50$ BP、No.7で $3850 \pm 50$ BPの補正年代値が得られる。SK6では、No.8で $3760 \pm 50$ BP、No.9で $3890 \pm 50$ BP、No.10で $4070 \pm 30$ 、No.11で $3970 \pm 40$ 、No.12で $5750 \pm 40$ 、No.13で $3970 \pm 30$ 、No.14で $4200 \pm 40$ の補正

## 第5節 考察

金森遺跡における放射性炭素年代測定は、補正年代値の一覧を第71図に示す。今回の補正年代値は、ほとんどの遺構において4000BP前後の値を示し、遺構の年代値とも比較的近似した値を示した。

SK2では、補正年代で $3830 \sim 4320$ BP、測定年代で $3880 \sim 4340$ BPの年代値が得られている。この測定年代値は、各地の土器編年と放射性炭素年代測定の対応関係について調べたキーリ・武藤<sup>③</sup>や谷口<sup>④</sup>の調査結果と比較すれば、縄文時代中期後半～後期前半頃の土器と対応する年代観となる。よって、本遺構は、縄文時代中期後半～後期前半頃に構築された

検出された遺構から出土した炭化材について、加速器による放射性炭素年代測定(AMS法)を実施し、遺構の年代観に関する情報を得る。

## 第1節 はじめに

め、年代測定を実施しない。その代わりとして、SK4より採取されたサンプル1・2（以降No.4・6とする）から、その内部に認められる炭化物を抽出して年代測定2点を行う。これらの遺構は、いずれも縄文時代に帰属する可能性が考えられている。

## 分析方法

較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4<sup>①</sup>を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

## 結果

年代値が得られる。

放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や測定の前提条件である大気中の $^{14}\text{C}$ の濃度が過去において一定でなかったことから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。そのため、年輪年代による暦年代既知の年輪の材について放射性炭素年代測定を実施することにより、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線<sup>②</sup>が作られている。

## 考察

可能性がある。

SK4では、補正年代で $3160 \sim 4130$ BP、測定年代で $3120 \sim 4090$ BPの年代値が得られており、土層2層から採取されたNo.5が最も新しく、3層から採取されたNo.6が最も古い。これらの値は、縄文時代後期頃に相当する年代観である。なお、測定値の年代幅が大きいが、これは遺構が埋積していく際に異なる時代の炭素を取り込んでいることを反映している可能性がある。したがって、本遺構が構築されたのは、発掘調査所見と調和的である。

SK6の補正年代値は、No.8が $3760 \pm 50$ BP、No.9

が3890±50BPを示した。今回測定したPit2のNo.10は4080±40BPを示した。関東・中部地方における縄文時代の14C年代値は、縄文時代中期が4800~4050BP、縄文時代晩期が4050~3000BPに集中する傾向が確認されている。この結果と比較すると、本遺構における補正年代値は縄文時代中期末から縄文時代後期初頭に比定されることになる。

SK9の補正年代値は、No.11が3990±40BPと他の遺構と同様な値を示したが、No.12については5760±40BPと測定試料の中で最も古い年代値を示した。この年代値は、谷口の縄文時代の年代値の傾向と比較すると、縄文時代前期に比定されることになる。

No.12の年代値については、試料が採取された堆積  
[註]

①Stiver, M., Long, A., Kra, R.,(eds) (1993)Calibration 1993. Radiocarbon, 35, 1-22.

②前掲註①に同じ

③キーリ C.T.・武藤康弘 (1982) 縄文時代の年代. 加藤晋平・小

物の由来を考慮した評価が必要である。

SK16の補正年代値は、No.13が3990±40BP、No.14が4080±40BPを示した。上記したSK6の年代値と近似した値となっている。谷口の縄文時代の年代値の傾向と比較すると、縄文時代中期末から縄文時代後期初頭に比定されることになる。

以上、金森遺跡で確認された土坑堆積物中の炭化物の年代測定結果は、概ね縄文時代中期後半から縄文時代後期前半の年代観を示した。これらの年代観については、今後、試料採取層位の層位学的な検討を加え、さらに考古学的な発掘調査の所見を含めて、総合的に検討を行う必要があると思われる。

林達雄・藤本強編「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣出版株式会社.

④谷口康浩,2001,縄文時代遺跡の年代.季刊考古学77,特集年代と产地の考古学,株式会社雄山閣,17-21.

番号	遺構	試料	質	樹種	同位体	補正年代	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	測定年代	測定番号	備考
No.1	SK2	①	炭化物		4060 ± 50	-28.81 ± 1.43	4120 ± 40	IAAA-30491		微量
No.2		Pit1	炭化物	アカガシ亜属	3830 ± 40	-28.39 ± 1.13	3880 ± 40	IAAA-30492		
No.3		Pit2	炭化物	アカガシ亜属	4320 ± 50	-25.85 ± 1.63	4340 ± 40	IAAA-30493		
No.5	SK4	土層2層	炭化物	アカガシ亜属	3160 ± 60	-23.05 ± 2.32	3120 ± 40	IAAA-30495		
No.7		④	炭化物	広葉樹	3850 ± 50	-28.77 ± 1.44	3910 ± 50	IAAA-30497		
No.4		サンプル①	炭化物	ヤブツバキ	3590 ± 50	-20.87 ± 1.51	3520 ± 40	IAAA-30494		
No.6		サンプル②	炭化物	広葉樹	4130 ± 50	-22.26 ± 1.11	4090 ± 50	IAAA-30496		
No.8	SK6	②	炭化物	アカガシ亜属	3760 ± 50	-32.66 ± 1.49	3910 ± 50	IAAA-30498		
No.9		③	炭化物	アカガシ亜属	3890 ± 50	-25.67 ± 1.03	3900 ± 50	IAAA-30499		
No.10	SK6	Pit2	炭化材	コナラ属	4080 ± 40	-24.22 ± 0.98	4070 ± 30	IAAA-31345		
No.11	SK9		炭化材	広葉樹	3990 ± 40	-23.50 ± 0.86	3970 ± 40	IAAA-31346		
No.12	SK9		炭化材	不明	5760 ± 40	-23.98 ± 1.13	5750 ± 40	IAAA-31347		
No.13	SK16		炭化材	広葉樹	3960 ± 40	-25.81 ± 1.07	3970 ± 30	IAAA-31348		
No.14	SK16		炭化材	不明	4080 ± 40	-32.25 ± 0.83	4200 ± 40	IAAA-31349		

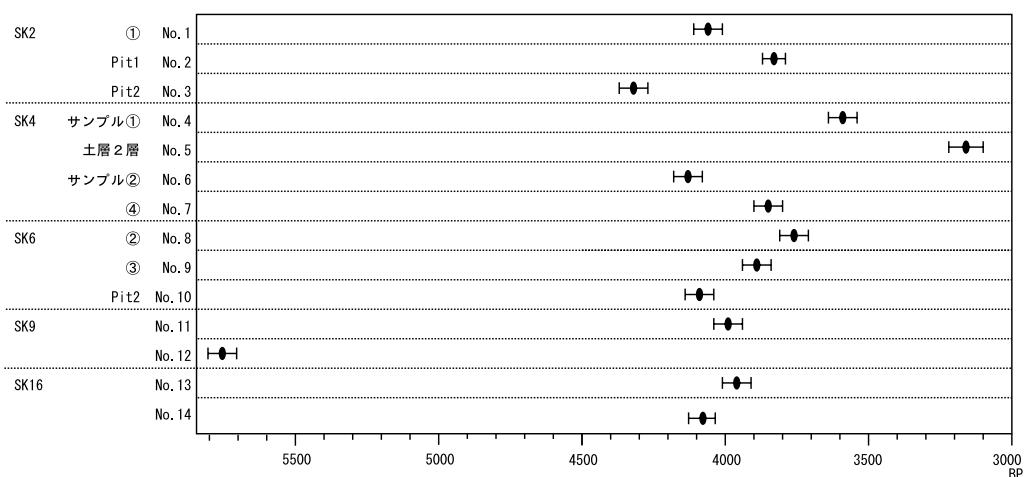
注1)年代値：1950年を基点とした値。

注2)半減期：LIBBYの半減期5568年を使用。

注3)誤差：標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代。

注4)  $\delta^{13}\text{C}$  : 試料炭素の13C/12C原子比を加速器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値。

第25表 放射性炭素年代測定結果一覧表



第71図 補正年代値の分布

# 第9章 地蔵前遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）

## 第1節 はじめに

ここでは、中世前期の遺構SE1から出土した漆器椀、中世後期の遺構SE3・SE9・SE105から出土した板・板材・曲物・杭、合計7点の樹種同定結果を報告する。

当遺跡は亀山市三寺町に所在し、中ノ川右岸の標高

## 第2節 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥き取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永

## 第3節 結果

同定結果の一覧を、第26表にまとめた。

樹種同定No.1の漆器椀はブナ属であり、木胎樹種としてよく利用されている樹種であった。

樹種同定No.2の2枚の板は接合しないが元は1枚板が割れた破片のようであり、2枚とも一部分が火を受け炭化し、樹種も同一でモミ属であった。

樹種同定No.4・5・6の板材は、異なる板材であるが、樹種はすべてアスナロであった。

樹種同定No.7の芯持ち丸木の杭材は、アカマツである。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の組織写真を提示した。

(1)モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c(樹種同定No.2 R002-01-2)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において細胞壁に数珠状肥厚が見られ、分野壁孔は小型、1分野に3個前後ある。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帶上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

(2)アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 2a-2c(樹種同定No.7)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその

36m前後の山麓に立地している。中世の山間部ではどのような樹種利用がなされていたのかを記録する目的で、出土木製品の樹種同定が実施された。

## 試料と方法

久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40~400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

## 結果

内壁には先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顯著であることからアカマツと同定される。

アカマツは暖帯から温帯下部の開けた日の良く当たる所に生育し、人里近くには普通に見られる。材は丈夫で耐水性に優れる。

(3)ネズコ(クロベ) *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 図版2 3a・3c(樹種同定No.3)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材の移行は急で、晩材部の仮道管は肥厚が目立つ。分野壁孔の孔口はやや大きいヒノキ型や小型のスギ型、1分野に2~4個あり、ヒノキより分野の壁孔数が多い傾向が見られた。以上の観察結果からクロベと判断した。

ネズコ(クロベ)は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

(4)アスナロ *Thujopsis dolabrata* sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版2 4a-4c(樹種同定No.6) 5a・5c(樹種同定No.4) 6c(樹種同定No.5)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の量は少なく、晩材の仮道管壁の肥厚はあまり厚くはない。分野壁孔は小型、孔口は細く小さく開孔、1分野に2~5個が雛然と配置している。

アスナロは日本特産の1属1種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用である。

(5)ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2 7a-7c(樹種同定No.1)

丸みをおびた小型の管孔が密在し、径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状～階段状、穿孔は単穿孔、内腔に水平や弧状のチロースが発達している。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと細胞幅が広く背の高い広放射組織がある。

#### 第4節 考察

漆器木胎はブナ属であり、本地師により生産・流通していたものであったことが判る。曲物はネズコ、板・板材はモミ属とアスナロ、杭はアカマツであり、すべて針葉樹材であった。中世では針葉樹材の利用が多いことは、一般的に知られているが、当遺跡においても同様であることが判った。

県内には木材の主要な針葉樹：スギ・ヒノキ・ネズコ・アスナロ・マツ属・モミ属は分布している。今回の樹種

[註]

①山田昌久「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材か

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。果実は食用となり、材も建築材から漆器まで用途が広い。

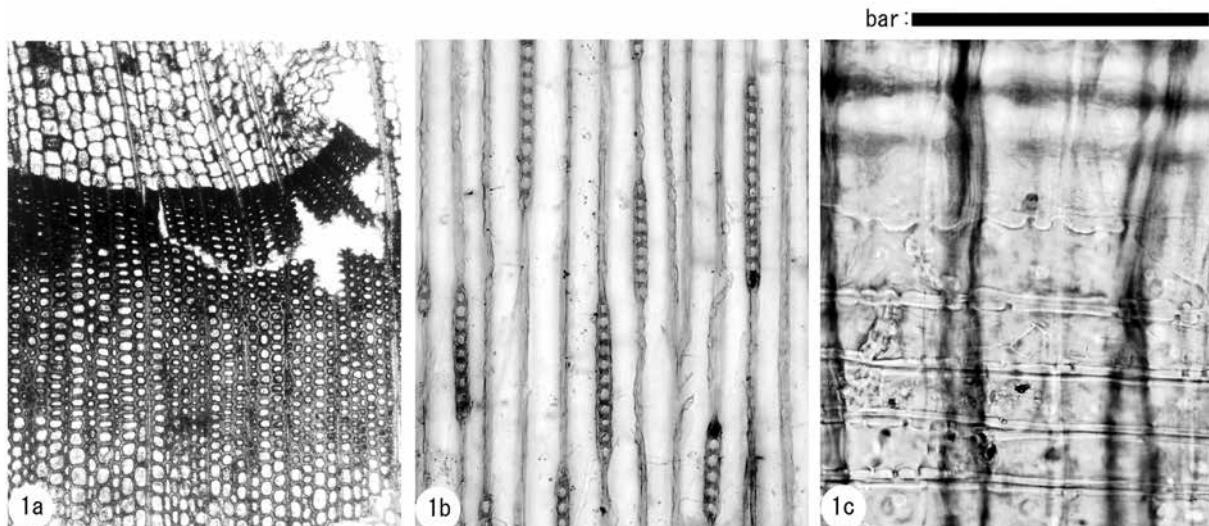
#### 考察

同定試料からは、一般的にも県内でも利用の多いヒノキやスギは検出されず、ヒノキ科ではネズコとアスナロが検出された。スギやヒノキが検出されなかったのは出土試料が少ないとによる確率的な理由であるのか、当遺跡が山麓の小集落であることによるのか、現時点では不明である。今後、様々な立地における中世の樹種利用の実態が集積される必要があると思われる。

ら見た人間」(『植物関係史 1-242 植生史研究 特別第1号』1993年)

報告書No.	樹種同定 遺物No.	出土遺物	R No.	遺構	樹種	備考	木取り	時期
20	1	漆椀	006-01	SE1	ブナ属	赤蒔絵		中世前期
44	2	板	002-01-1	SE3	モミ属	短い方、一部炭化	追柾目	中世後期
		板	002-01-2	SE3	モミ属	長い方、一部炭化	追柾目	中世後期
43	3	曲物	005-01	SE3	ネズコ		柾目	中世後期
64	4	板材	003-01	SE9	アスナロ		板目	江戸時代
63	5	板材	003-02	SE9	アスナロ		追板目	江戸時代
65	6	板材	001-01	SE9	アスナロ		板目～追板目	江戸時代
181	7	杭	004-01	SE105	アカマツ	岩瀬(2次)	芯持ち丸木	中世後期

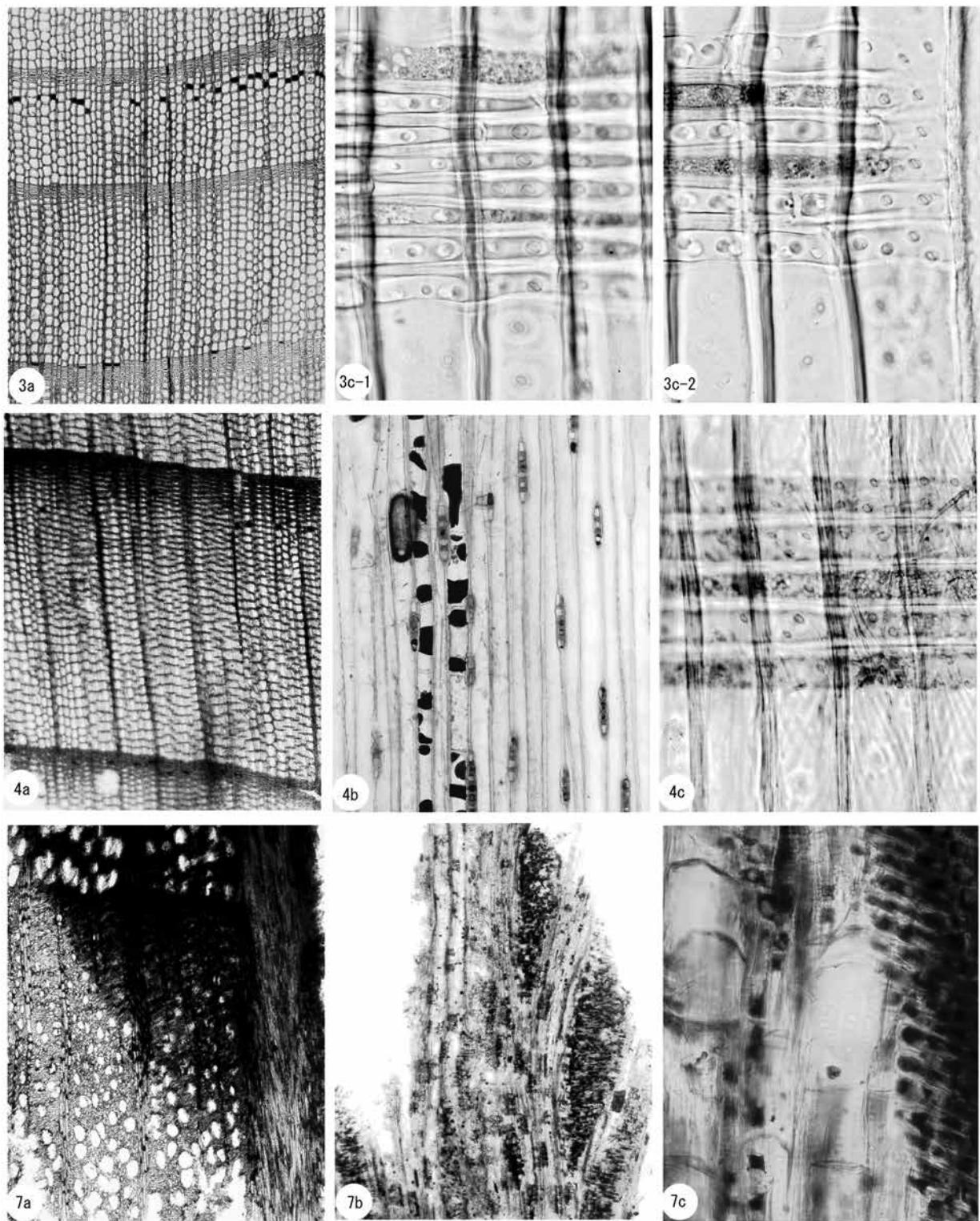
第26表 樹種同定結果一覧表



図版1 地蔵前遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c:モミ属(樹種同定No.2 R002-01-2) a:横断面 b:接線断面 c:放射断面  
bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

bar : —



図版2 地蔵前遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真(2)

3a・3c: ネズコ (樹種同定No.3) 4a-4c: アスナロ (樹種同定No.6) 7a-7c: ブナ属 (樹種同定No.1)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar:a=1.0mm, b=0.4mm, 4c=0.1mm, 7c:0.2mm.

# 第10章 結語

## 第1節 遺構について

三寺地内遺跡群の時期ごとの様相についてまとめ  
る。

### (1) I期

- ①時期 繩文時代中期～後期
- ②遺構 岩瀬遺跡で埋設土器1基、金森遺跡で陥し穴3基、土坑2基、嶋ノ前遺跡で土坑を4基確認した。縄文時代前半と考えられる石鏃、削器か尖頭器、石匙が出土している。

### (2) II期

- ①時期 9世紀～10世紀
- ②遺構 岩瀬遺跡で土坑1基、金森遺跡で掘立柱建物1棟を確認した。

### (3) III期（第72・73図）

- ①時期 12世紀後葉～16世紀前葉
- ②遺構 岩瀬遺跡では、掘立柱建物、井戸からなる5箇所の区画と溝開いを持つ区画を4箇所確認した。また、範囲確認調査で、C・F地区、D地区の周辺にまとまって溝やピットを確認した。

金森遺跡では、溝開いを持つ3箇所の区画を確認した。また、範囲確認調査で、調査区の周辺に溝やピットを確認した。

嶋ノ前遺跡では、2箇所の区画を確認し、範囲確認調査で、調査区の周辺に溝やピットを確認した。

地蔵前遺跡では、1箇所の区画と溝開いを持つ3箇所の区画を確認した。また、範囲確認調査で、調査区の周辺に溝、ピットなどを確認した。

### (4) IV期

- ①時期 18世紀～19世紀
- ②遺構 地蔵前遺跡で井戸を1基確認した。

### (5) 全体のまとめ

当遺跡群の時期ごとの様相を見ると、I～IV期となる。各時期のまとめは以下の通りである。

I期は、陥し穴や石器の出土から狩猟・解体の場であったことは確実である。また、埋設土器を確認しているため、周辺に集落が存在した可能性がある。

I期以降II期以前は、遺構を確認していない。また、古墳時代の須恵器を出土しているものの少なく、明確な活動が確認できない時期である。

II期は、当遺跡群に居住を開始した時期である。しかし、掘立柱建物が1棟しか確認できることや、遺物の時期が限られている点から、一時期限りで定住するには至らなかったと言える。

III期は、遺構、遺物とともに多く、遺跡群の画期の時期である。当遺跡群で、本格的に活動が営まれ、屋敷地と思われる区画を18箇所確認した。さらに範囲確認調査の結果から、区画は7箇所に集中する。そして、区画は12世紀後葉から13世紀後葉に出現し、区画の大半は、12世紀後葉に居住を開始する。また、12世紀後葉から13世紀中葉までが遺構・遺物ともに最盛期となり、区画の大半で最盛期を迎える（第73図参照）。そして、区画は溝開いを持つものと持たないものに分かれ、両者の新旧関係や階層差は不明である。そして13世紀後葉以降も、同じ区画内に掘立柱建物や井戸が確認でき、15世紀後葉から16世紀前葉に廃絶を迎えるまで同一区画による居住が継続される。

IV期になると、地蔵前遺跡で井戸1基のみで、遺跡内は、居住域ではなく、現在のような田園風景が広がっていたと思われる。

（酒井）

## 第2節 遺物について

### (1) 土器の組成について

出土遺物の組成を知り、かつ中ノ川流域の組成状況を知るために、金森遺跡の古代末～中世前期の遺物を抽出して計測した。金森遺跡は、掘立柱建物、井戸などからなる3箇所の区画を確認し、出土遺物

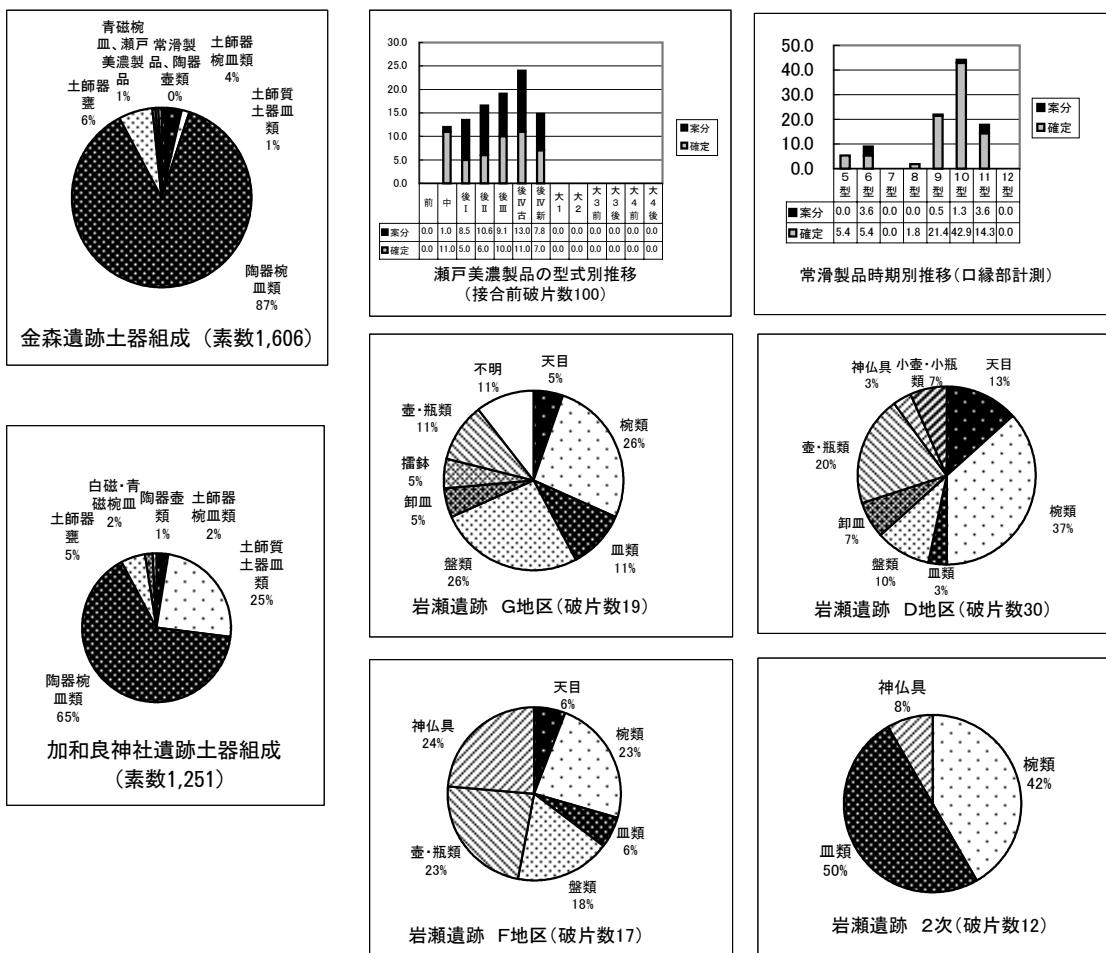
が多いため対象とした。また、比較資料として当遺跡群から約4km東に所在し、同じ旧奄芸群内にある加和良神社遺跡<sup>①</sup>をあげる。加和良神社遺跡は、掘立柱建物を12棟確認しているが、区画は明確ではない。また、加和良神社遺跡は11世紀中葉に開始し、



第72図 三寺地内遺跡群中世遺構モデル図 (1 : 3,000)

遺跡名	地区名	時期																	
		1150	1200	1250	1300	1350	1400	1450	1480	1530	1560	1590	1610	*山●=山茶柄第●型式、前=古瀬戸前期、大●=大窯●段階と略す					
岩瀬遺跡	山3	山4	山5	山6	山7	山8	山9	山10	山11	大1	大2	大3	大4						
		前 I	前 II	前 III	前 IV	中 I	中 II	中 III	中 IV	後 I	後 II	後 III	後 IV	古	後 IV 新	前半	後半	前半	後半
G地区		SE6	SK10			SE5	SB15			SK4									
F地区			SK44	SB45	SD42					SD33-36-34	SD38								
C地区		SB37	SB45	SD51															
D地区		SB52	SD51			SB78	SE65	SA86		SB90	SE71	SD63	SD64						
	2次			SB61-62	SB80-89	SB107-109-115	SB112		SB108		SE105								
金森遺跡	1次	SB19-24-25	SB17-23	SB28	SE10		SD128-130												
B地区		SA134-136	SB133	SB132-135			SD128-130												
A地区		SB140	SD120-121	SB145	SB141-150	SB115	SE116	SB151-153	SB144-148-149-152	SB147	SE123								
嶋ノ前遺跡	1次	SK3	SD4-7	SD8	SK2														
	2次	SD103-106	SB116	SA115															
地蔵前遺跡	北地区	SA29	SD5		SD2 SE1		SE3												
南地区		SK12	SB21	SB22	SB17	SA26				SD7-SD8									

第73図 三寺地内遺跡群中世存続期間



第74図 出土遺物グラフ

11世紀中葉～12世紀前葉と12世紀後葉～13世紀後葉の2回ピークがあり、14世紀後葉まで遺物が出土している。

金森遺跡は、12世紀後葉に出現し、12世紀後葉～13世紀後葉がピークである。遺物は、14世紀後葉まで出土している。

計測方法は、口縁部、底部の完存している状態を「12」とし、その残存を計測する方法（口縁部計測法）を用いた。口縁部か底部の採用数値は、器種によって残存率が異なり、数値の高い方が実数に近いと判断し、採用した。今回、土師質土器皿、灰釉陶器椀、山茶椀は底部を採用した。また、計測した器種の分類は伊藤裕偉氏の分類による。<sup>②</sup>

計測の結果、金森遺跡では陶器椀皿類が87%と突出し、土師器甕が6%を占めた。加和良神社遺跡では、陶器椀皿類が65%を、土師質土器（いわゆる口クロ成形の土師器）皿類が25%を占めた。（第74図参照）

両遺跡を比較すると、陶器椀皿類と土師質土器皿類の占める割合が異なるが、その他の器種の組成比率はほぼ変わらない。また、陶器椀皿類と土師質土器皿類を合わせるとほぼ同じ比率になる。

以上のことから、土師質土器の比率の違いは、遺跡の開始時期によるものと考えられる。すなわち、加和良神社遺跡に見られる最初のピーク（11世紀中葉～12世紀前葉）は、土師質土器の比率が高くなり、金森遺跡で見られる次のピーク（12世紀後葉～13世紀後葉）では、陶器椀皿類の比率が高くなる。つまり、12世紀中葉～後葉に中ノ川流域における土器組成の画期があると考えられる。

## （2）瀬戸美濃製品について

中世後期における遺跡内の消長と組成から各調査区の特性を知るために、瀬戸美濃製品を全点抽出し、接合前破片数による計測を行った。なお、破片数のため個体数は現していない。今回、破片数を採用したのは、瀬戸美濃製品は器種が多く、口縁部計測では、壺・瓶類などの体部が残存しやすい器種が出土していても数値上反映されないからである。また、計測した器種の編年・分類は、藤澤良祐氏の編年・分類によって集計した。<sup>③</sup>

瀬戸美濃製品の時期は、古瀬戸中期～後IV期新段

階までである。各遺跡の1000m<sup>2</sup>あたりの出土点数は、岩瀬遺跡で39点、金森遺跡で4点、嶋ノ前遺跡で0.07点、地蔵前遺跡で12点である。遺跡群としての平均は、17点である。16世紀前葉まで継続する遺構が多い岩瀬遺跡で最も多く出土し、全体の83%を占める。

次に、出土点数の多い岩瀬遺跡内で各地区の組成及び特性をみていく。

G地区は、神仏具を除くほとんどの器種が出土し、遺構は、2箇所の区画を確認している。

F地区は、壺や花瓶・香炉が約半数を占める。遺構は、調査区際の掘立柱建物1棟と溝を確認し、裕福な場所に隣接する場であったと考えられる。

D地区は、唯一小壺・小瓶類が出土している。組成の比率は異なるものの、G地区と同様にほとんどの器種が出土している。遺構は、4箇所の溝囲いを持つ区画を確認している。D地区は、G地区同様区画が存在するが、壺・瓶類の出土が多く、G地区よりは裕福な場所であったと考えられる。

2次調査区は、椀類、皿類、香炉と選択された器種のみが出土している。遺構は、掘立柱建物や井戸を確認している。丘陵を切り開き、高所に位置し、最も裕福な場所であったと考えられる。

以上のように、瀬戸美濃製品の組成から2次調査区が最も裕福な場所であり、次いでF地区、D地区、G地区という結果を得た。そして、瀬戸美濃製品の組成の差から、各地区において階層差が存在すると考えられる。

## （3）常滑製品について

常滑製品から見た遺跡の消長と組成を知るために、口縁部を全点抽出し、計測を行った。口縁部計測を採用したのは、常滑製品は口縁部以外では時期が捉え難いこと、口縁部計測の方がより実体に近い数値を得られるからである。

計測の結果、中野編年<sup>④</sup>5型式以降が出土し、9型式以降出土量が増加、11型式までが確認できるという結果を得た。しかし、当遺跡群で常滑製品が出土するのは、2～3型式の甕（金森遺跡遺物102参照）以降であることは留意すべきである。そして組成は、片口鉢が50%、甕が34%、壺が16%となる。これを時期別に見ると、6型式までは甕と壺が、8

型式以降は片口鉢が出土し始め、9型式以降は甕、壺、片口鉢が出土する。

以上のことから、常滑製品の時期と組成の状況から、当遺跡群への甕や壺の搬入は2～3型式の製品に始まり、6型式で一度途絶える。そして8型式以降、片口鉢の搬入とともに、甕と壺が再度搬入される状況が窺える。

#### (4) 岩瀬遺跡 S E 105出土遺物について

岩瀬遺跡のS E 105は、南伊勢系・中北勢系の土師器、山茶椀、瀬戸美濃製品、常滑製品が一括して出土している。出土遺物は以下の通りである。

南伊勢系土師器は、<sup>⑤</sup>南伊勢中世IVa期の小皿3点、皿4点、<sup>⑥</sup>伊藤編年第3段階b型式の鍋2点、第4段階b型式の鍋1点、茶釜形1点、第4段階併行期の羽釜が1点出土している。

中北勢系土師器は、<sup>⑦</sup>15世紀後半頃の羽釜が1点出土している。

山茶椀は藤澤編年第5型式のものが1点、第10型

式のものが2点出土している。

<sup>⑧</sup>瀬戸美濃製品は、藤澤編年古瀬戸後I期の縁釉小皿1点、後IV期の平椀が2点出土している。

常滑製品は、中野編年10型式の片口鉢が1点、9か10型式の片口鉢が2点出土している。

また、これらは基本的には土層断面図第8層（第31図、第10表参照）からの出土である。しかし、153、160、164、167、170、171は、層序が異なり一括性に欠けるため対象から外す。

以上のことから、土師器については、南伊勢中世IVa期にあたる。また、中北勢系の羽釜は、出現期に近い15世紀後半頃の資料と考えられる。陶器については、山茶椀第10型式、瀬戸美濃製品古瀬戸後IV期、常滑製品10型式と15世紀後半の共伴資料である。よって、S E 105出土遺物は、一部混入遺物が存在するものの、15世紀後半の良好な一括資料であるといえる。

（酒井）

### 第3節 総括

今回の発掘調査で、三寺地内遺跡群の鎌倉～室町時代を中心とした様相を探ることができた。遺構、遺物の両方から当遺跡群についてまとめる。

遺構について、三寺地内遺跡群は、12世紀後葉から13世紀中葉を最盛期として12世紀後葉～16世紀前葉まで続く集落遺跡である。県内の中世集落遺跡は、14世紀代はよくわからないという状況にある中で、遺構は薄いものの、14世紀の様相が窺える遺跡である。また、16世紀前葉まで同一の区画内で居住が継続されるのが特徴である。そして、屋敷地群は概ね7箇所にまとまる。

三寺地内遺跡群は12世紀後葉～16世紀前葉の集落遺跡で、集村でもなく散村でもない、平面的にはモ

[註]

①伊藤裕偉「VI 加和良神社遺跡・加和良3号墳～古墳と古代・中世集落～」『鈴鹿市中ノ川流域の考古資料 研究紀要第15－2号』（三重県埋蔵文化財センター、2006年）

②前掲①と同じ。

③『横地域跡総合調査報告書 資料編』（静岡県菊川町教育委員会、2000年）

藤澤良祐「瀬戸美濃と志戸呂・初山」（『陶磁器から見る静岡県の中世社会資料集発表要旨・論考編』菊川シンポジウム実行委員会、2005年）

④中野晴久「常滑・渥美」（『全国シンポジウム 中世窯業の諸相

ザイク状の景観を呈していたと考えられる。

遺物については、良好な一括資料を得るとともに、以下のような状況を確認した。南伊勢系の土師器皿は15世紀代まで、鍋は第4段階d型式までを確認した。中北勢系土師器に関してはよくわからないのが実情である。陶器に関しては、瀬戸美濃製品は古瀬戸後IV期まで、常滑製品は11型式まで出土している。

以上のような遺物の状況から、南伊勢系土師器皿と瀬戸美濃製品は15世紀代までのものでやや古く、南伊勢系の土師器鍋や常滑製品は16世紀前葉までのもので新しい時期のものまでを確認した。（酒井）

～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年）

⑤伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』2004年）

⑥以下南伊勢系土師器鍋・羽釜は伊藤裕偉氏の編年により記述する。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年）

⑦伊藤裕偉氏のご教示による。

⑧藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」（『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』2005年）

# 写 真 図 版





G地区 全景 (SB24.SA25) (北西から)



SB12・14・19・22完掘状況 (西から)



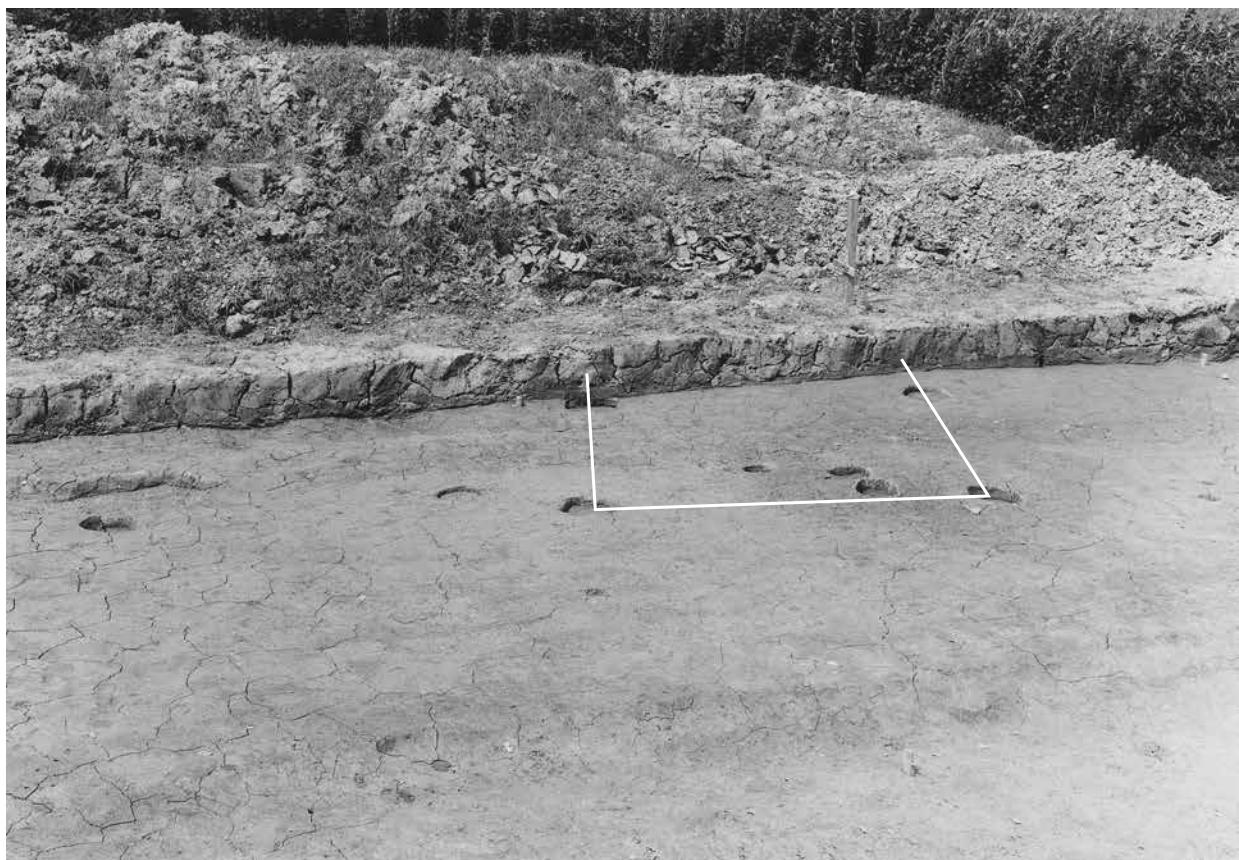
SK 4 出土状況（西から）



F 地区 全景 (SB45) (西から)



C地区 全景（西から）



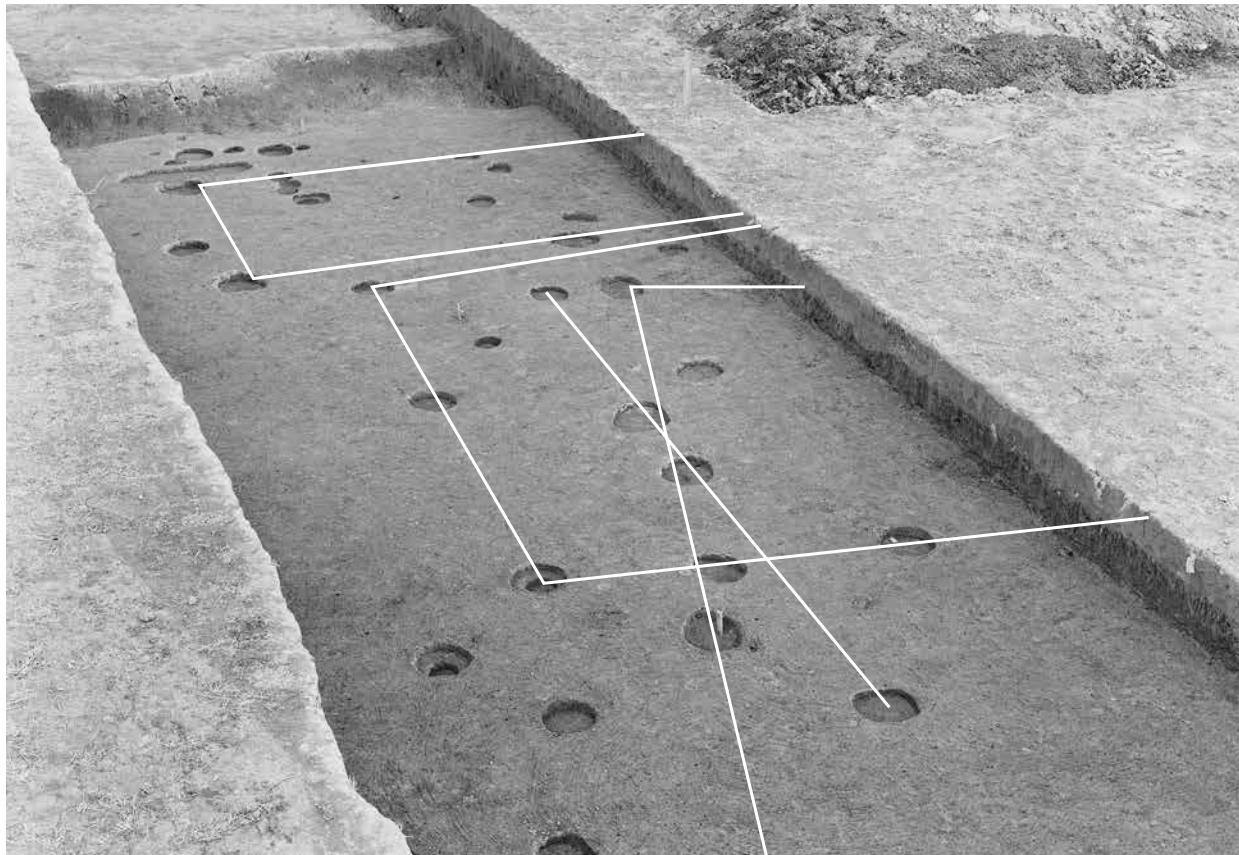
SB52 完掘状況（南から）



D地区 全景 (SB74・80) (西から)



D地区 全景 (SA93、SB94) (東から)



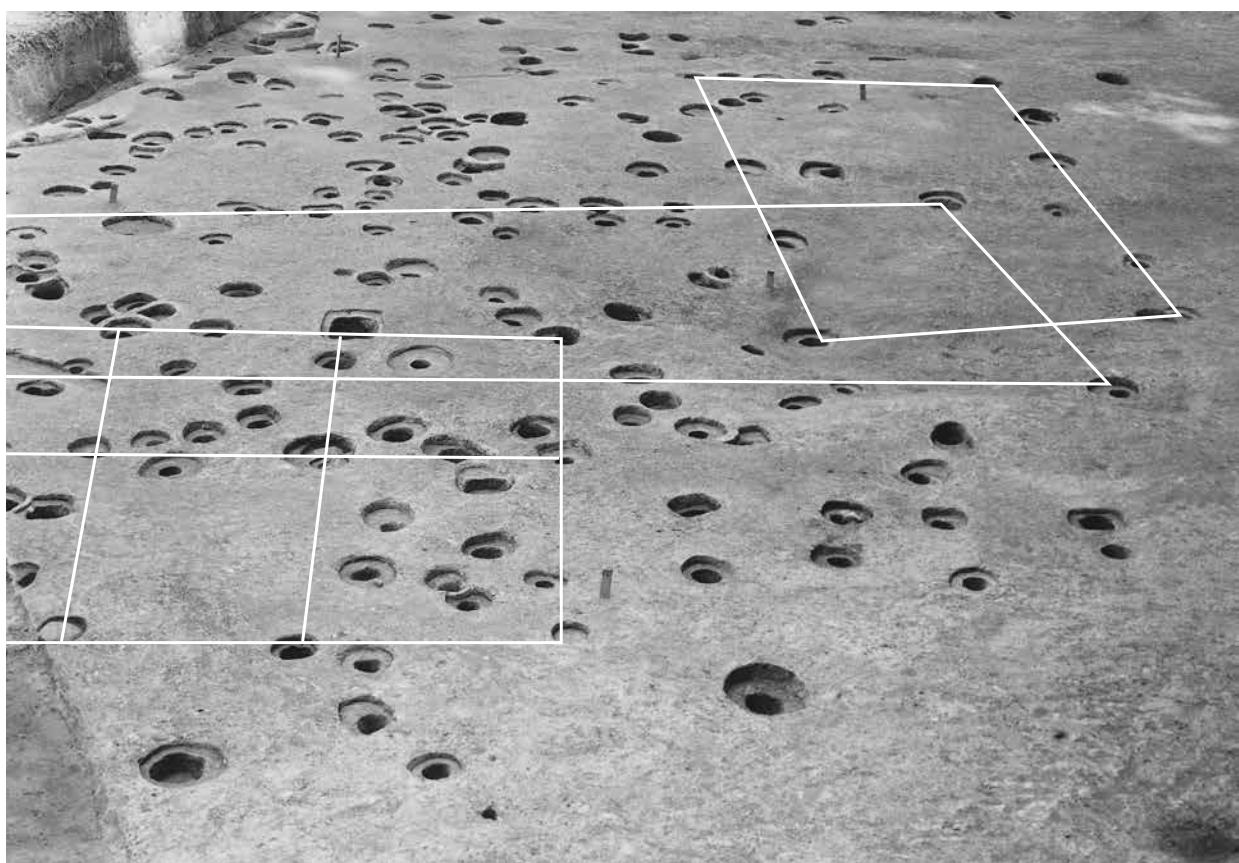
SB84・85・87、SA86 完掘状況（北から）



SA93、SB94 完掘状況（北から）



2次調査区 全景（南から）



SB106・109・110 完掘状況（南から）



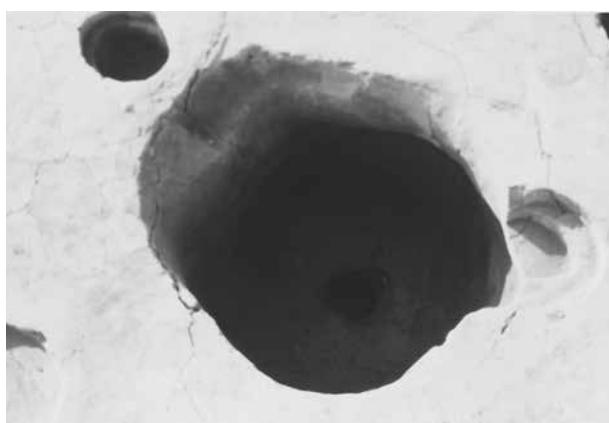
1次調査区 全景（東から）



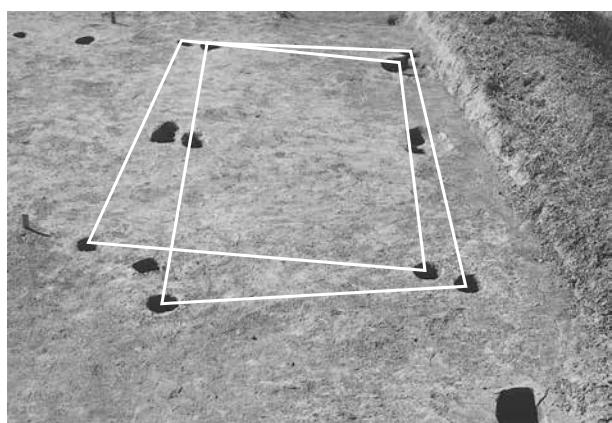
SK2 完掘状況（東から）



SK4 完掘状況（東から）



SK16 完掘状況（東から）



SK17・29 完掘状況（北から）



SB26・27 完掘状況（北から）



SB20・25 完掘状況（北から）



B地区 全景（西から）



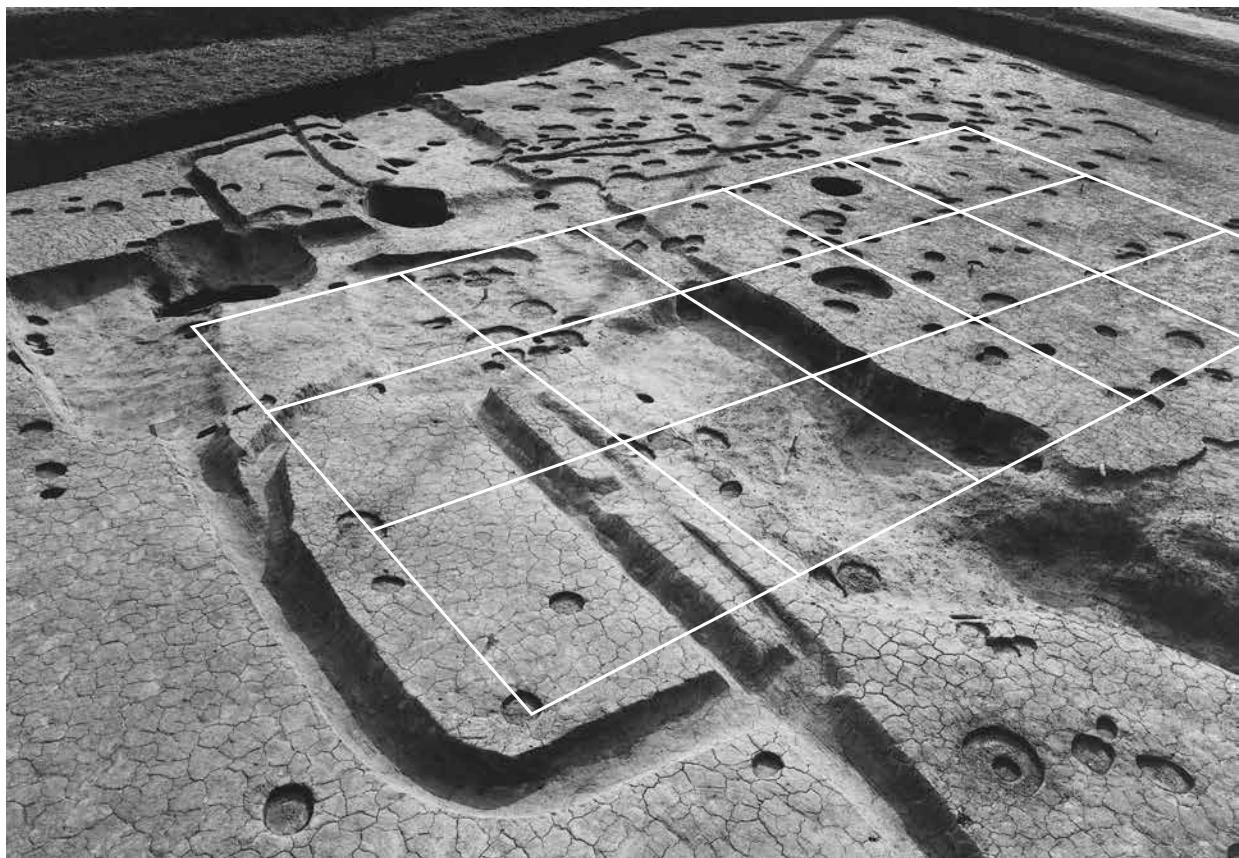
SB132・133・135、SA134 完掘状況（南から）



A地区 全景（西から）



A地区 全景（南から）



SB140 完掘状況（北から）



SB150、SK111 完掘状況（東から）



SB154 完掘状況（北から）



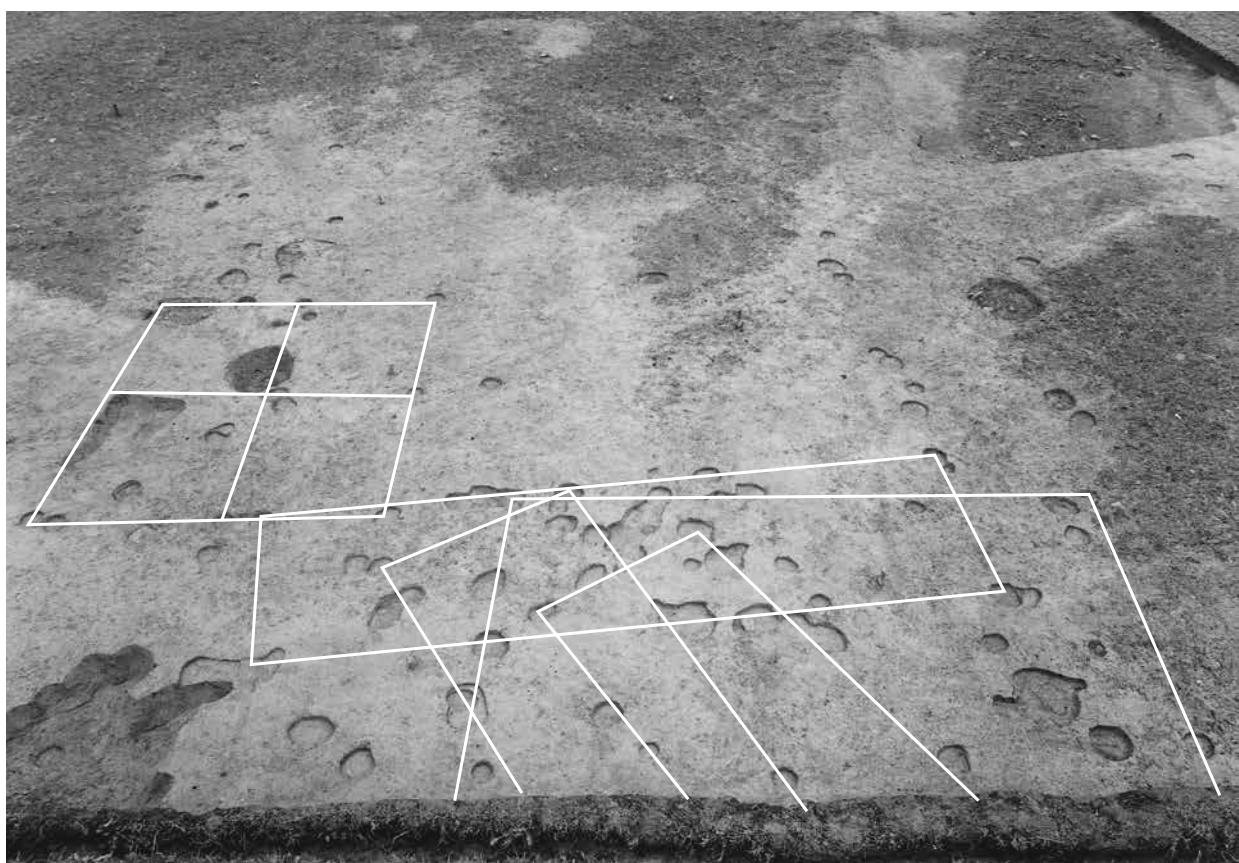
SE123



SD115 出土状況（西から）



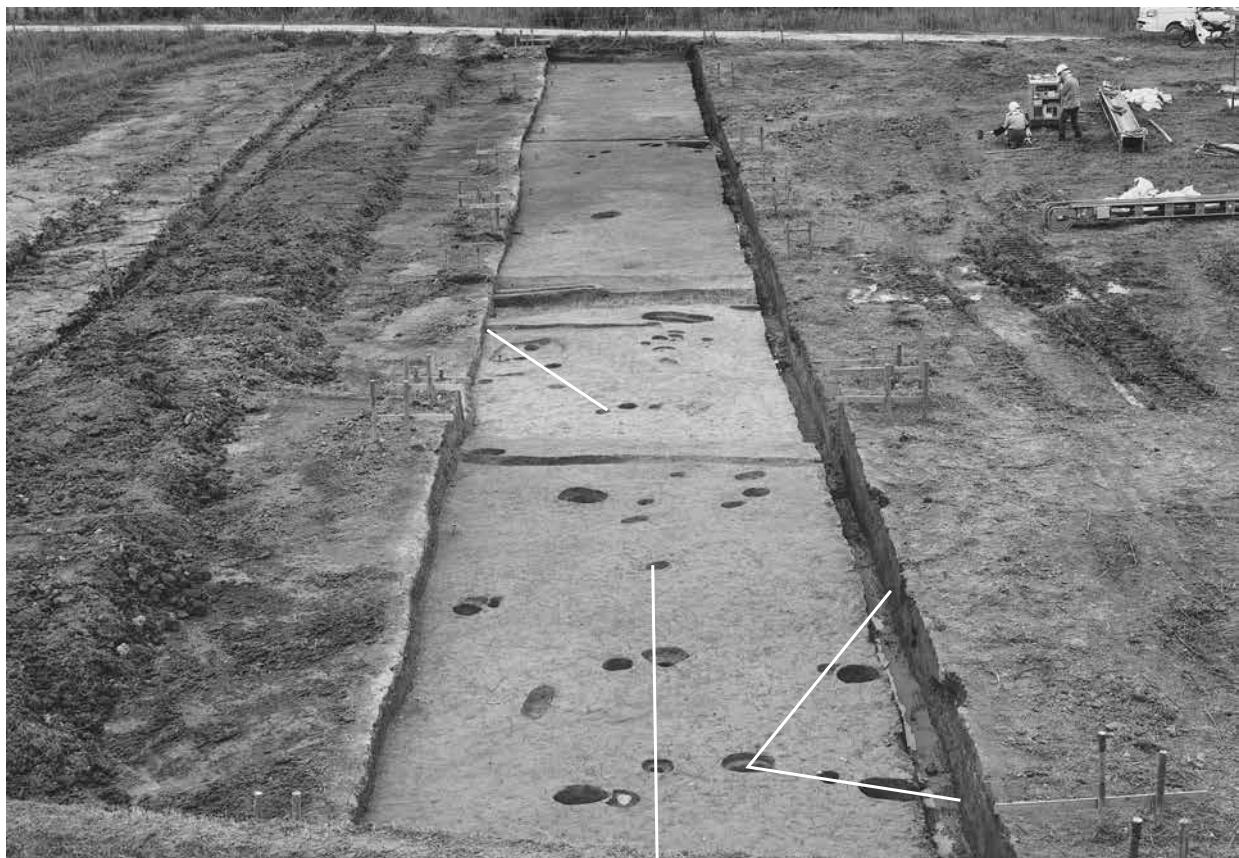
1次調査区 全景（南から）



SB 9・10・11・12・13 完掘状況（南から）

図版14

鳴ノ前遺跡



2次調査区 上層全景 (SA113・115、SB116) (南から)



2次調査区 下層全景 (南から)



北地区 全景（北から）



北地区 全景（東から）



ほ場整備完成後 金森・岩瀬遺跡を望む（西から）



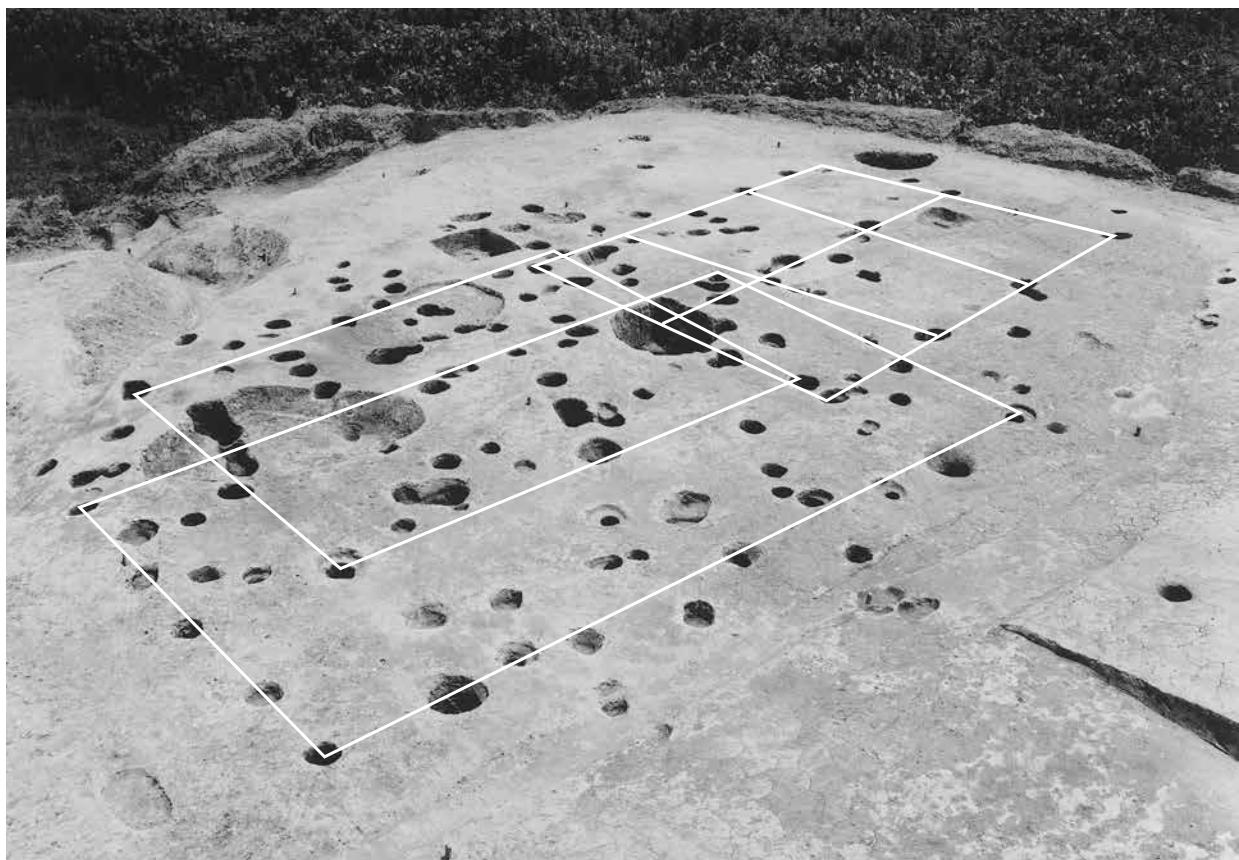
ほ場整備完成後 地蔵前遺跡を望む（東から）

図版16

地蔵前遺跡



南地区 全景 (SB17・18・19) (西から)



SB20・22・25 完掘状況 (北西から)

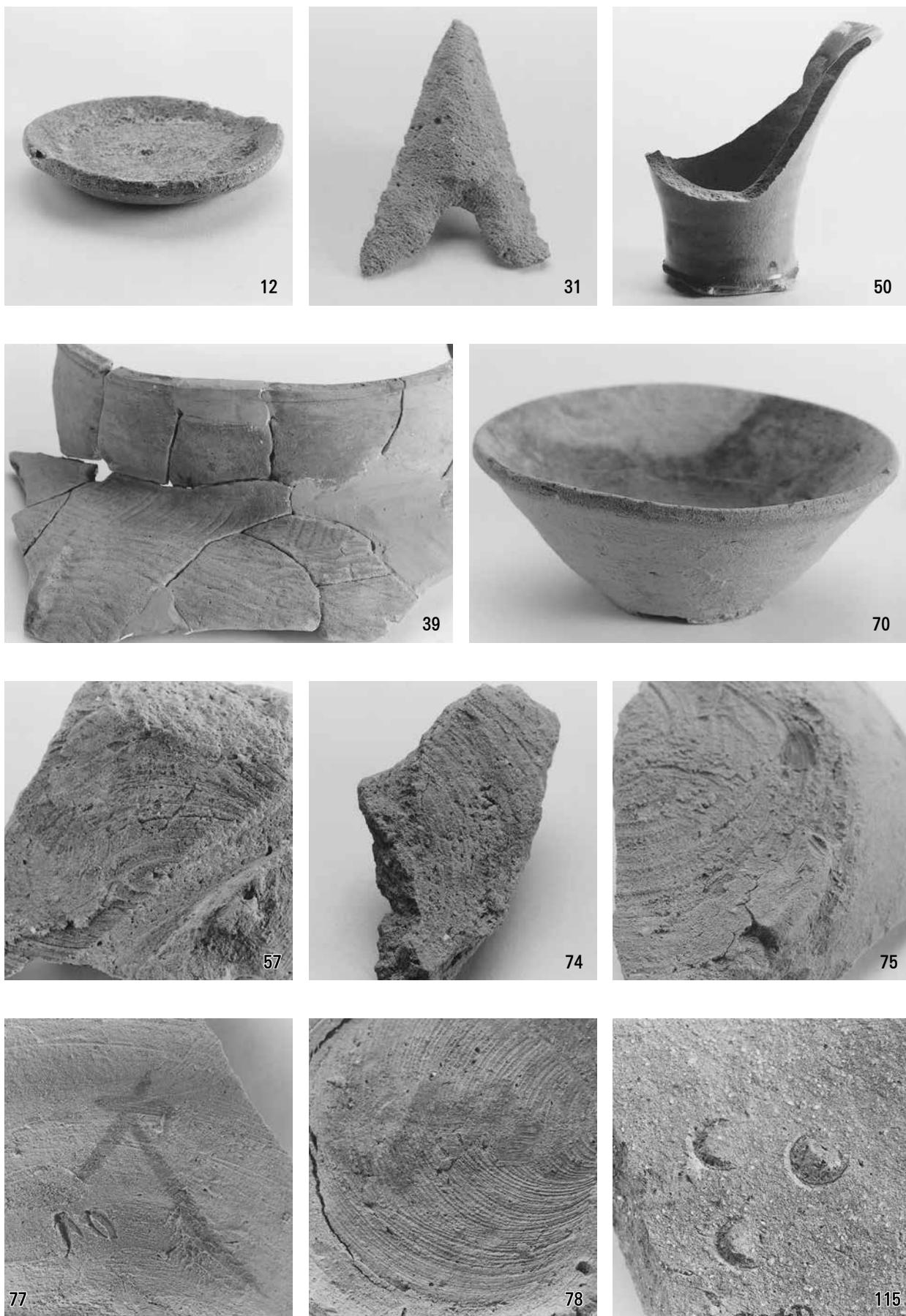


SK 4 出土遺物



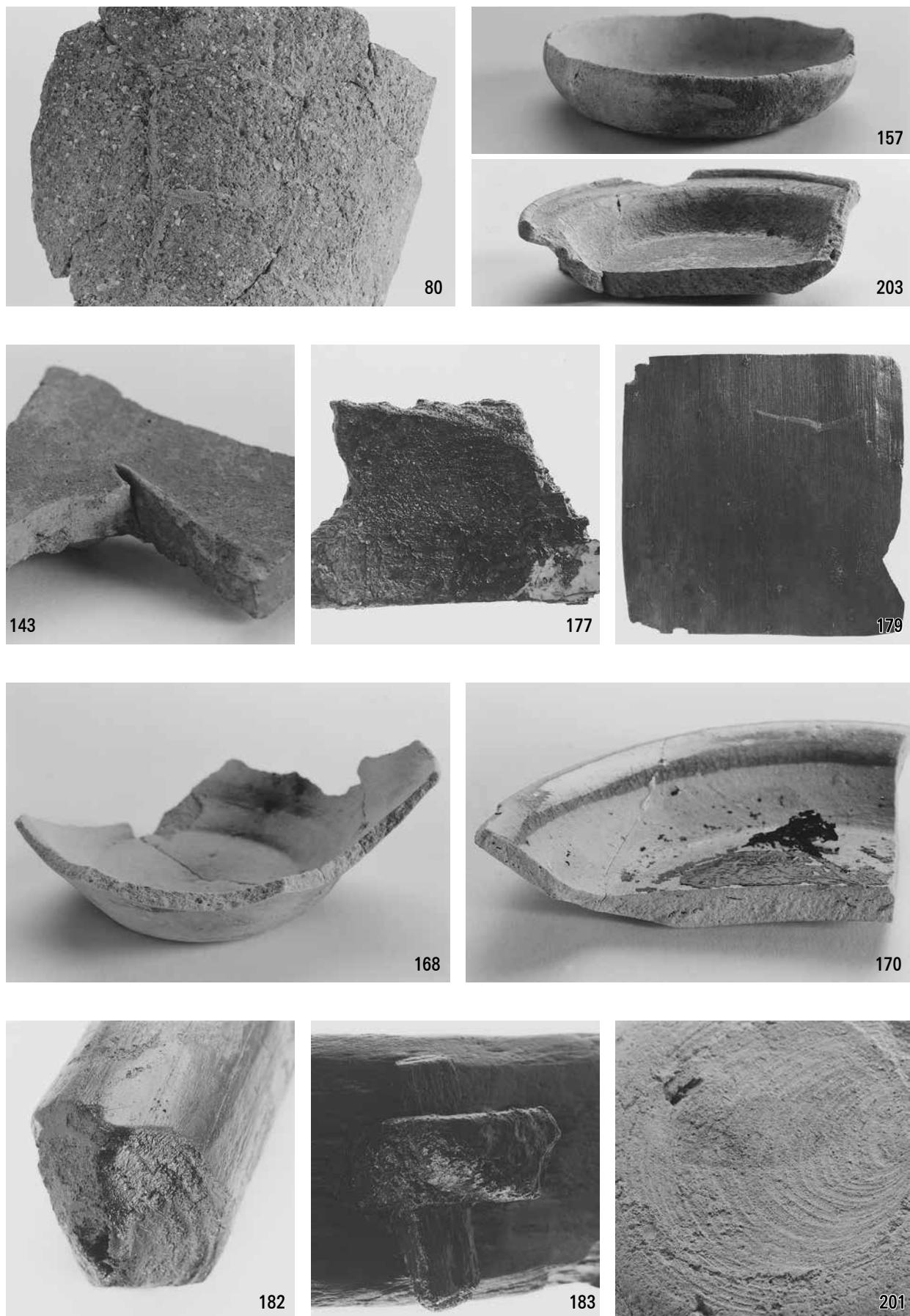
SE105出土遺物

図版18



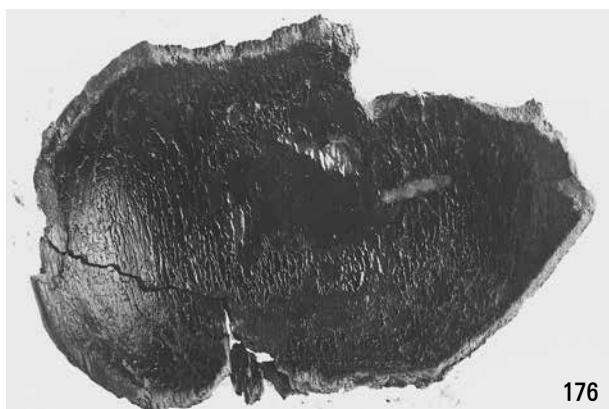
岩瀬遺跡出土遺物

図版19

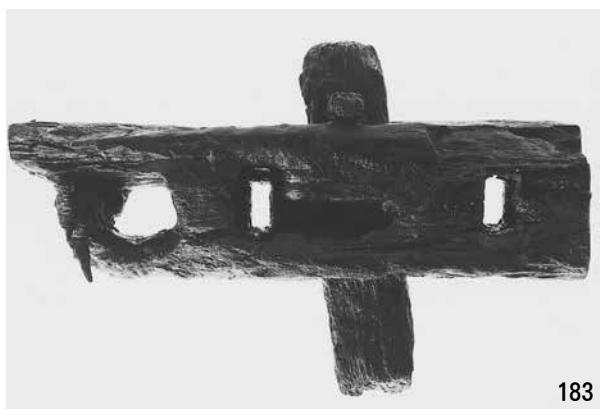


岩瀬遺跡出土遺物

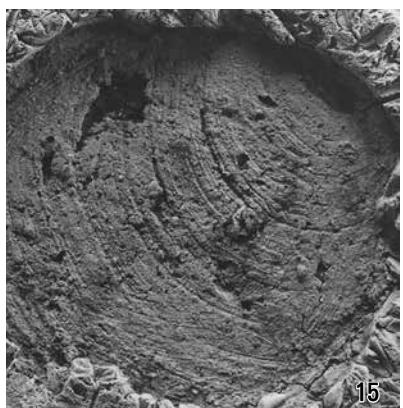
図版20



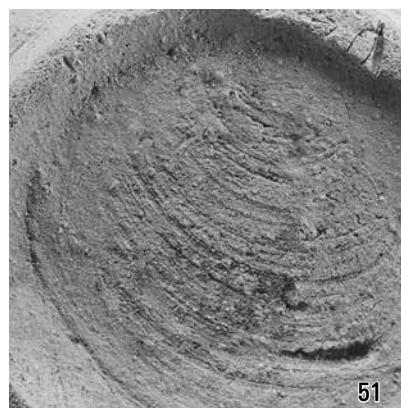
176



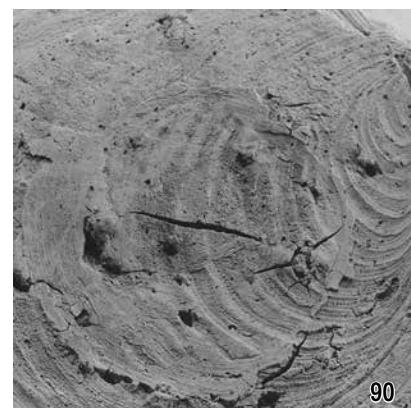
183



15



47



51

90



55



56



56



79

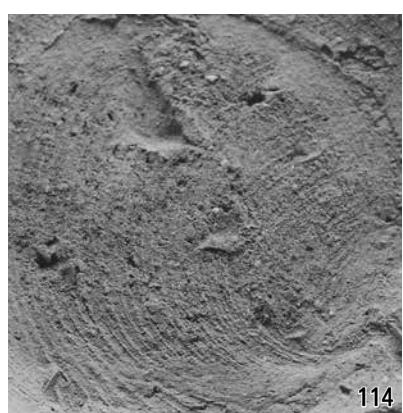
岩瀬・金森遺跡出土遺物



72



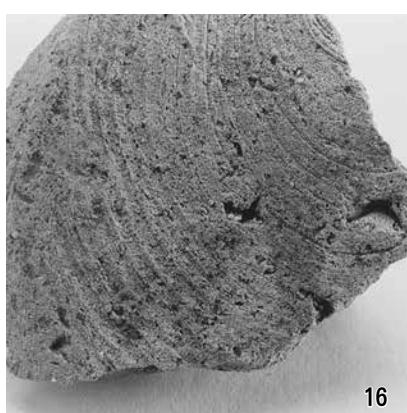
72



114



3



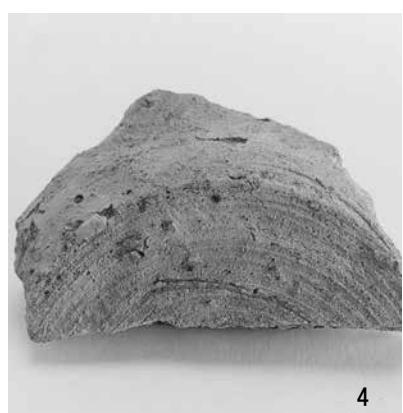
16



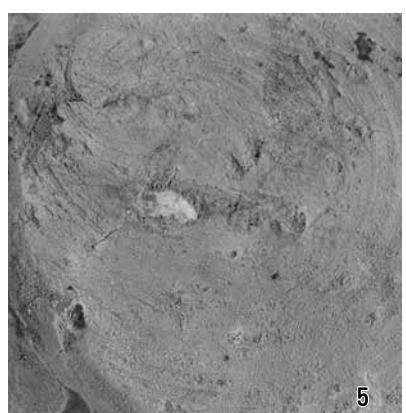
6



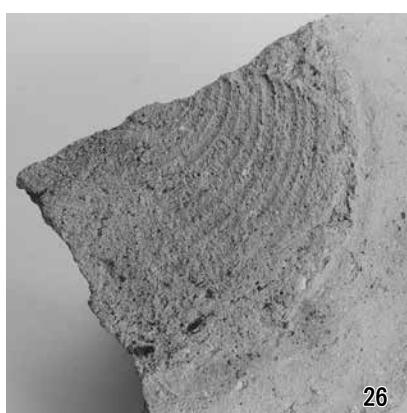
14



4



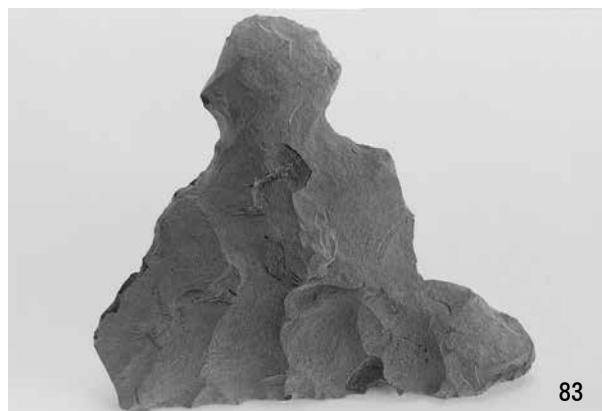
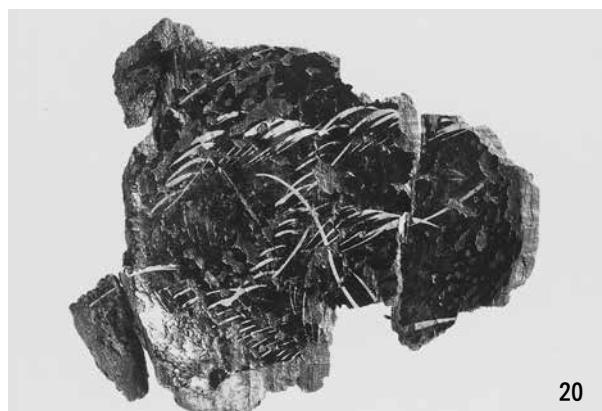
5



26

金森・鳴ノ前・地蔵前遺跡出土遺物

図版22



地蔵前遺跡出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	みつでらちないいせきぐんはつくつちょうさほうこく						
書名	三寺地内遺跡群発掘調査報告						
副書名	岩瀬遺跡・金森遺跡・嶋ノ前遺跡・地蔵前遺跡						
卷次	268						
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号							
編著者名	(執筆)五十棲孝子、酒井巳紀子、竹田憲治、萩原義彦、穂積裕昌、水谷隆広、山口聰嗣、植田弥生、北脇達也(遺物写真)酒井巳紀子(編集)酒井巳紀子						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL. 0596-52-1732						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	東 緯 (世界測地系)	北 緯 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
いわせいせき 岩瀬遺跡	かめやましみつでらちょう 亀山市三寺町	24210	136° 27' 34"	34° 49' 20"	20020710～ 20021209 20030722～ 20020916	1,407 m <sup>2</sup> 420 m <sup>2</sup>	経営体育 成基盤整 備事業
かなもりいせき 金森遺跡	かめやましみつでらちょう 亀山市三寺町	24210	136° 27' 30"	34° 49' 20"	20020110～ 20020314 20020731～ 20021209	440 m <sup>2</sup> 1,084 m <sup>2</sup>	
しまのまえいせき 嶋ノ前遺跡	かめやましみつでらちょう 亀山市三寺町	24210	136° 27' 24"	34° 49' 16"	20020819～ 20021113 20030722～ 200309915	1,032 m <sup>2</sup> 330 m <sup>2</sup>	
じぞうまえいせき 地蔵前遺跡	かめやましみつでらちょう 亀山市三寺町	24210	136° 27' 16"	34° 49' 19"	20040521～ 20040723	729 m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
岩瀬遺跡	集落跡	縄文 鎌倉～室町	埋設土器 掘立柱建物・井戸・溝など		土師器・陶器・磁器		
金森遺跡	集落跡	縄文 鎌倉～室町	陥し穴 掘立柱建物・井戸・など		縄文土器・土師器・陶器		
嶋ノ前遺跡	集落跡	縄文 鎌倉～室町	陥し穴 掘立柱建物・土坑・溝など		土師器・陶器		
地蔵前遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	掘立柱建物・井戸・溝など		土師器・陶器・磁器		
要約	<p>三寺地内遺跡群は、岩瀬・金森・嶋ノ前・地蔵前遺跡からなり、三重県亀山市三寺町に所在する遺跡である。経営体育成整備事業に伴って、4度にわたり発掘調査が行われ、鎌倉～室町時代を中心とする遺構を確認した。</p> <p>縄文時代は、埋設土器や陥し穴を確認し、当地は狩猟活動が行われていた。平安時代になると、掘立柱建物を確認しているものの一時的なものであった。鎌倉時代になると当遺跡群の画期となる時期である。区画で囲まれた屋敷地に掘立柱建物、井戸などが12世紀後葉頃に出現する。そして、出現以降廃絶する15世紀後葉から16世紀前葉まで同一画区内で居住が継続される。江戸時代になると井戸だけになり、現在のような田園風景が広がっていたと思われる。</p>						

---

---

三重県埋蔵文化財調査報告268

## 三寺地内遺跡群発掘調査報告

～岩瀬遺跡・金森遺跡・嶋ノ前遺跡・地蔵前遺跡～

2006(平成18)年3月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 共栄堂印刷株式会社

---

